三芳町

町東部遺跡群

発掘調査報告書

埼玉県入間郡三芳町教育委員会　1983．3

はじめに

三芳町教育委員会
教育長　岡村　顕

三芳町には、県指定有形民俗文化財「竹間沢車人形」、県指定旧跡「三富開拓地割遺跡」を始め、多くの文化財が残されています。こうした多くの文化財は、私たちに三芳町を切り開いてきた先人達の努力を学ばせてくれるものであり、三芳町の歴史の証言者たちであって、大切に保護していかねばならないものと考えます。

さて、埋蔵文化財もまた、こうした大切な文化財の一つであります。三芳町には30ヶ所を数える埋蔵文化財の包蔵地、すなわち遺跡が存在しますが、これらのほとんどは町の東部に集中しています。この地区は交通の便に恵まれていることもあって、住宅等の建設が多くおこわなれている地域でもあります。こうした開発に先き立ち、遺跡を保護していくことも文化財保護の大事な仕事であります。

ここに、刊行する三芳町町東部遺跡群の発掘調査報告書は、遺跡保護の一環として、開発に先き立ち、記録保存のために発掘調査した成果をまとめあげたものです。土中に埋もれた三芳町の原始・古代の先人達の生活跡が本書に記録されております。これらの事実は、現代に生活する私たちに多くのことを教えてくれるに違いありません。本書を御覧になる方々に少しでも先人達の知恵や努力の跡を知っていただけたら幸いに思います。

なお、三芳町町東部遺跡群の発掘調査に当っては、開発者・地主の皆様を始め多くの方々にご協力いただきました。心よりお礼申し上げまして、本書の刊行のあいさつといたします。

昭和58年3月

例　　言

1．本書は、埼玉県入間郡三芳町に所在する三芳町東部遺跡群の発掘調査報告書である。三芳町教育委員会が主体となり、国庫補助・県費補助事業として昭和53年度から昭和57年度までの５ケ年をかけて調査した成果のまとめである。

2．本報告書作成ならびに発掘調査を本事業の一環として昭和57年度に実施したが、昭和57年度は国庫補助事業「三芳町東部遺跡群発掘調査事業」として総額3,000,000円（国庫1,500,000円・県費750,000円）で実施したものである。

3．本書の編集は松本富雄が中心となり、これを望月精司が手伝った。

4．本書の執筆は文末に記した通りである。

5．本書の図版作成は望月精司、菅谷みのぶ、竹内宇哲、渡辺謙、柳戸信吾、吹野富美夫、下角圭司、樫田誠が行なったが、これに柳川純子、高橋淳子、杉山輝子が加わった。

6．本書の写真は松本富雄が主に当った。

8．本書を作成するに当たり以下の方々に御教授・御指導を賜った。記して感謝の意にかえさせていただく。

会田明、浅野春樹、荒井幹夫、有吉重蔵、飯田充明、池上悟、磯崎一、井上尚明、柿沼幹夫、金井塚良一、栗原文蔵、小出輝雄、河野喜映、小渕良樹、駒宮史郎、佐々木保俊、笹森健一、塩野博、斯波治、杉崎良樹、諏訪間順、高橋敦、高橋一夫、田代隆、田中英司、提　隆、坪田幹男、中村倉司、中村喜代重、日塔和好、服部敬史、福田健司、松井政信、渡辺久生

目　　次

はじめに
例　言
目　次
図版目次

I　序　　章 …… 1
1．三芳町東部遺跡群について …… 1
2．三芳町東部遺跡群付近の位置と環境 …… 2
1）地理的位置 …… 2
2）考古学的環境 …… 3
3．年度ごとの調査と組織・参加者 …… 7
1）年度ごとの調査 …… 7
2）調査組織と参加者 …… 9
II　各遺跡の調査 …… 10
1．調査の概要 …… 11
2．新開遺跡 Fb 区の調査 …… 12
1）遺　構 …… 12
2）遺　物 …… 12
a．石　器 …… 12
b．剥片・剥離技術 …… 13
3．新開遺跡 Gd 区の調査 …… 20
1）遺　構 …… 20
a．包含層 …… 20
b．ピット群 …… 20
c．土　壙 …… 22
d．　溝 …… 23
2）遺　物 …… 23
a．須恵器坏 …… 23
b．須恵器甕 …… 24
c．瓦 …… 24
d．土師器甕 …… 25
e．縄文土器 …… 27
f．石　器 …… 27

4．新開遺跡 Ra 区の調査 …… 30
1) 遺　構 …… 30
2) 遺　物 …… 30
a．須恵器坏 …… 30
b．瓦 …… 32
5．新開遺跡 Sa 区の調査 …… 33
1) 遺　構 …… 33
2) 遺　物 …… 33
6．新開遺跡 Sb 区の調査 …… 35
1) 層　位 …… 35
2) 遺　構 …… 40
a．1号土器焼成窯（新開3号窯） …… 40
b．灰層と灰原 …… 41
c．2号土器焼成窯（新開4号窯） …… 46
d．土壙（1号・2号土壙） …… 47
e．ピット群 …… 47
3) 遺　物 …… 51
a．遺物概括 …… 51
b．坏 …… 52
c．須恵器壺・甕 …… 54
d．土師器甕 …… 54
e．瓦 …… 55
f．その他の遺物 …… 56
g．縄文時代の石器 …… 72
h．遺物観察表 …… 73
7．浅間後B遺跡の調査 …… 100
1) 遺　物 …… 100
8．本村北遺跡の調査 …… 102
1) 遺　構 …… 102
a．縄文時代遺物包含層 …… 102
b．縄文時代土壙 …… 102
c．1号住居跡 …… 104
d．2号住居跡 …… 104
e．3号住居跡 …… 105
f．土器焼成窯（本村北1号窯） …… 106

2) 遺　物 …… 112
a．縄文時代の土壙出土土器 …… 112
b．縄文時代の包含層出土土器 …… 112
c．縄文時代の包含層出土石器 …… 114
d．古墳時代・奈良時代・平安時代の土器 …… 115
9．俣埜第2遺跡の調査 …… 129
1) 発掘調査 …… 129
2) 遺物 …… 129
10．俣埜遺跡C地点の調査 …… 131
1) 遺　構 …… 132
a．土　壙 …… 132
b．溝状遺構 …… 132
c．先土器時代の遺構 …… 133
2) 遺　物 …… 135
a．先土器時代の石器 …… 135
写真図版

図　版　目　次

第 1 図　周辺の地形と遺跡(1/50,000) …… 4
第 2 図　三芳町東部の遺跡と発掘地点 …… 6
第 3 図　新開遺跡 Fb 区礫・石器分布図(1/200) …… 14
第 4 図　新開遺跡 Fb 区ユニット想定図(1/200) …… 15
第 5 図　ユニット実測図(1/40) …… 16
第 6 図　新開遺跡 Fb 区出土石器器種別分布図(上)
Fb 区材質別分布図(下) …… 17
第 7 図　新開遺跡 Fb 区出土石器図(1)(1/3) …… 18
第 8 図　新開遺跡 Fb 区出土石器図(2)(1/3) …… 19
第 9 図　新開遺跡 Gd 区全測図(1/200) …… 20
第 10 図　新開遺跡 Gd 区包含層出土遺物分布図
(1/200) …… 20
第 11 図　新開遺跡 Gd 区の土壙(L. N. 38)
全測図(1/20) …… 22
第 12 図　新開遺跡 Gd 区出土須恵器坏実測図(1/3) … 25
第 13 図　新開遺跡 Gd 区出土須恵器甕(1/4) …… 26
第 14 図　新開遺跡 Gd 区出土瓦実測図(1/4) …… 26
第 15 図　新開遺跡 Gd 区出土土師器実測図(1/4) …… 26
第 16 図　新開遺跡 Gd 区出土縄文土器実測図(1/3) … 28
第 17 図　新開遺跡 Gd 区出土石器実測図 …… 29
第 18 図　新開遺跡 Ra 区全測図(1/200) …… 31
第 19 図　新開遺跡 Ra 区出土の須恵器坏(1/3) …… 32
第 20 図　新開遺跡 Ra 区出土の瓦(1/4) …… 32
第 21 図　新開遺跡 Sa 区全測図(1/200) …… 34
第 22 図　新開遺跡 Sa 区土層図(1/60) …… 34
第 23 図　新開遺跡 Sa 区出土土器(1/3) …… 34
第 24 図　新開遺跡 Sb 区全測図(1/200) …… 36
第 25 図　新開遺跡 Sb 区全測図と灰層・漆黒色土層
およびセクションの位置(1/200) …… 38
第 26 図　新開遺跡 Sb 区土層図(1/80) …… 39
第 27 図　新開遺跡 Sb 区 1 号土器焼成窯全測図(1/40) 42
第 28 図　新開遺跡 Sb 区 1 号土器焼成窯土層(1/20) … 43
第 29 図　新開遺跡 Sb 区 1 号土器焼成窯覆土中の
遺物全測図(1/40) …… 44
第 30 図　新開遺跡 Sb 区 1 号土器焼成遺構最終次
(左)・第 3 次(右)窯床出土遺物全測図(1/4) 45
第 31 図　新開遺跡 Sb 区遺物出土状況図 …… 46
第 32 図　新開遺跡 Sb 区 2 号土器焼成遺構全測図
(1/20) …… 48
第 33 図　新開遺跡 Sb 区 1 号・2 号土壙全測図(1/20) 49
第 34 図　新開遺跡 Sb 区ピット 1 全測図(1/20) …… 50
第 35 図　新開遺跡 Sb 区須恵器坏実測図(1)(1/3) …… 57

第 36 図　新開遺跡 Sb 区須恵器坏実測図(2)(1/3) …… 58
第 37 図　新開遺跡 Sb 区須恵器坏実測図(3)(1/3) …… 59
第 38 図　新開遺跡 Sb 区須恵器坏実測図(4)(1/3) …… 60
第 39 図　新開遺跡 Sb 区 2 号窯出土遺物実測図
(1)(1/3) …… 61
第 40 図　新開遺跡 Sb 区 2 号窯出土遺物実測図
(2)(1/3) …… 62
第 41 図　新開遺跡 Sb 区須恵器甕(1)(1/4) …… 63
第 42 図　新開遺跡 Sb 区須恵器甕・土師器甕実測図
(2)(1/4) …… 64
第 43 図　新開遺跡 Sb 区瓦実測図(1)(1/4) …… 65
第 44 図　新開遺跡 Sb 区瓦実測図(2)(1/4) …… 66
第 45 図　新開遺跡 Sb 区瓦実測図(3)(1/4) …… 67
第 46 図　新開遺跡 Sb 区瓦実測図(4)(1/4) …… 68
第 47 図　新開遺跡 Sb 区瓦実測図(5)(1/4) …… 69
第 48 図　新開遺跡 Sb 区瓦実測図(6)(1/4) …… 70
第 49 図　新開遺跡 Sb 区その他の遺物実測図
(1)(1/3) …… 71
第 50 図　新開遺跡 Sb 区その他の遺物実測図
(2)(1/2) …… 72
第 51 図　新開遺跡 Sb 区石斧実測図(3/5) …… 72
第 52 図　浅間後 B 遺跡全測図(1/200) ……101
第 53 図　浅間後 B 遺跡出土遺物実測図(1/3) ……101
第 54 図　本村北遺跡全測図(1/200) ……102
第 55 図　本村北遺跡縄文時代土壙(1/30) ……103
第 56 図　本村北遺跡 1 号住居跡全測図(1/60) ……107
第 57 図　本村北遺跡 1 号住居跡カマド全測図(1/30) …107
第 58 図　本村北遺跡 2 号住居跡全測図(1/60) ……108
第 59 図　本村北遺跡 2 号住居跡カマド全測図(1/30) …108
第 60 図　本村北遺跡 3 号住居跡全測図(1/60) ……109
第 61 図　本村北遺跡 3 号住居跡カマド全測図(1/30) …110
第 62 図　本村北遺跡 3 号住居跡内炭化材・
遺物分布図(1/60) ……111
第 63 図　本村北遺跡土器焼成窯実測図(1/20) ……112
第 64 図　本村北遺跡出土の縄文土器(1)(1/3) ……116
第 65 図　本村北遺跡出土の縄文土器(2)(1/3) ……117
第 66 図　本村北遺跡出土の縄文土器(3)(1/4) ……118
第 67 図　本村北遺跡出土の石器(1/5・3/5) ……118
第 68 図　本村北遺跡 3 号住居跡出土遺物実測図
(1)(1/4) ……124
第 69 図　本村北遺跡 3 号住居跡出土遺物実測図
(2)(1/3・1/4) ……125
第 70 図　本村北遺跡 2 号住居跡出土遺物実測図
(1/3・1/4) ……126
第 71 図　本村北遺跡 1 号住居跡出土遺物実測図
(1)(1/3・1/4) ……127
第 72 図　本村北遺跡土器焼成窯
(L. N. 04)出土遺物実測図(1/3) ……128
第 73 図　俣埜第 2 遺跡全測図(1/200) ……130
第 74 図　俣埜遺跡 C 地点全測図(1/200) ……132
第 75 図　俣埜遺跡 C 地点土壙全測図(1/30) ……133
第 76 図　俣埜遺跡 C 地点溝状遺構(1/80) ……134
第 77 図　俣埜遺跡C地点先土器時代の石器分布図(左)と
土層図 (右)(1/60) ……136
第 78 図　俣埜遺跡C地点先土器時代炭化物分布図
(1/60) ……138
第 79 図　俣埜遺跡C地点先土器時代の石器実測図
(1)(1/1) ……139
第 80 図　俣埜遺跡C地点先土器時代の石器実測図
(2)(1/1) ……140
第 81 図　俣埜遺跡C地点先土器時代の石器実測図
(3)(1/1) ……141
第 82 図　俣埜遺跡C地点先土器時代の石器実測図
(4)(1/1) ……142
第 83 図　俣埜遺跡C地点先土器時代の石器実測図
(5)(1/1) ……143

Ⅰ　序　　章

1．三芳町東部遺跡群について

三芳町は埼玉県南部の荒川右岸に所在し、遠く多摩や秩父の山並みを見晴るかす平野地帯である。地質的には西方約50kmの多摩山塊の山裾の青梅市付近から扇状に広がる洪積世の武蔵野台地の北東縁辺部付近に位置し、そのほとんどが高燥な関東ローム層に覆われている。

三芳町の西部域はほとんど平坦な関東ローム層の台地である。江戸時代・元禄年間に川越城城主となった側用人・柳沢吉保の命によって開拓された、武蔵野の畑地開拓で名に負う「旧跡三富開拓地割遺跡」の存在する地帯である。ここはいまなお雑木林と畑地が当時のまま整然と残され武蔵野の面影をしのばせている。しかし、町の東部に川越街道が貫通し、町の東隣の富士見市には東部東上線が走行し鶴瀬、みずほ台の２つの乗降駅があり、いずれの交通路を使っても都心にわずか30分で通うことができるという便利さからであろうか、近年は人口の増加が著しい。

さて、三芳町の埋蔵文化財は30ケ所に所在するが、これらのほとんどは町東部に集中する。これは町東部地域が、武蔵野台地の縁辺により近く、柳瀬川をはじめ東隣の富士見市方面へ伸びる数条の小谷が開析されているためである。しかしこれらの埋蔵文化財は前述したとおり、町東部地区が市街化の様を呈しつつあるなかで、破壊の危機にさらされてきている。既にそのうちの一部分は住宅開発によって煙滅したものもある。三芳町ではこうした状況に対処すべく、文化財保護法の改正後とくに昭和51年度以降埋蔵文化財の保護とりわけ記録保存のための発掘調査に力を注いできた。しかし、このような発掘調査は蚕食的、個別的な調査であり、充分に遺跡の性格等を理解し得なかったり、正確な記録保存ができ得ぬことが多かった。また開発者との間に調査に係る費用、期間について問題が生じることがしばしばであった。

昭和53年度になって、こうした問題点を解消すべく県文化財保護課の指導をうけて国庫補助事業・町東部遺跡群発掘調査事業を計画・実施することとなり、個人的な開発については問題が解消されるようになってきた。

国庫補助事業・町東部遺跡群発掘調査事業は、以上の如く蚕食的・個別的な開発に対処すべく実施された事業であり、開発に先立ち計画的に埋蔵文化財の調査を実施しようとしたものであるが、本書に掲載した調査報告は昭和53年度から昭和57年度の5ケ年に亘り実施してきた当事業の成果である。

2．三芳町東部遺跡群付近の位置と環境

1）　地理的位置

三芳町を地形的に見ると、武蔵野台地の北東縁辺に近い部分に位置している。武蔵野台地は青梅市（標高180m・三芳町から西へ50km）付近を扇頂として、その東方に向かって緩傾斜をもって扇状にひろがる多摩川の形成した洪積台地であり、台地の東端は標高約20m で、その東方の沖積地に向かっていくつかの谷が形成されており、急崖をなしている。

三芳町は上述のとおりこの武蔵野台地の北東縁辺部付近に位置しているが、町の西部域はほとんど平坦な地形を呈しており、町の東部域にはその東方の沖積地（荒川・新河岸川を流す沖積地）に向かう谷がいくつか形成されている。町内にはこうした谷が５本存在する。これらはみな西から東へ向かっている。

町の南側から見ていくと、まず新座市・志木市とを大きく割する多摩川の名残川と言われる柳瀬川が谷を形成している。

次に通称唐沢堀と呼ばれる堀割を流す谷が大字竹間沢と大字藤久保の間に形成されている。この谷は川越街道付近に谷頭をもち、かつてはこの付近に湧水があったときくが、現在は工場が建設され埋め立てられてしまっている。この唐沢堀を流す谷は三芳町内では台地との比高を５ｍ程のゆるやかな傾斜で開析し、富士見市八ケ上付近（東武東上線みずほ台駅・鶴瀬駅の中間）で江川を流す谷に合流していく。

次はこの唐沢堀の谷と合流する江川を流す谷である。この谷は大字藤久保のほぼ中央部の字俣埜を谷頭として東方へのびる。俣埜の谷頭にはかつて湧水があり、これが江川の湧水源となっている。その湧水によって池が形成されていたが、しかし今は住宅建設によって埋め立てが行なわれ、湧水は暗渠として下流へ向かっている。この江川の谷は前述の唐沢堀の谷を富士見市関沢字八ケ上で合流し、谷幅をひろげて富士見市水子字打越付近で沖積地にそそぐ。

藤久保浅間付近の富士見市との境界付近にもゆるやかな谷が存在するが、この谷は町内にはほとんど入りこんでいない。

最後に三芳町の北側の大井町とを割する付近にゆるい谷が形成されている。これは地形的に武蔵野台地の特徴としてとらえられる末無川の１つである砂川を流す谷である。砂川は狭山丘陵から発生するが、この付近までは伸びておらず、所沢市中富付近で川は消えてしまう。砂川は三芳町付近では、付近の雨水を流すため掘割としてあるのみである。

以上の如く三芳町には武蔵野台地を開析する５つの谷が形成されているが、柳瀬川を別として、他の４つの谷はいずれもゆるやかな開析である。しかし、これらの谷が伸びる富士見市付近では、谷は谷底を深くし、台地に急崖をなし、沖積地へそそぐ。

2)　考古学的環境

さて次に、三芳町の埋蔵文化財の状態について述べておこう。三芳町には約30ケ所の遺跡が知られている。このうちの1ケ所は旧跡三富開拓地割遺跡であり、江戸時代中期の武蔵野台地開拓の名残りをとどめている。あとのすべては原始・古代の遺跡である。原始・古代の遺跡はほとんど谷をのぞむ台地上にあり、その谷が三芳町の東部から発生するため遺跡も東部に集中する。

前述の谷に沿って遺跡をみてみよう。

柳瀬川を流す谷を臨む台地上には町内でも遺跡の数は夥しい。ほとんど遺跡といってもよいであろう。谷の上流から古井戸山遺跡(8)、本村南遺跡(30)、本村北遺跡(7)、北側遺跡(5)と続く。本村南遺跡はかつて農家の庭先からこの付近では古く位置付けられる弥生式土器が出土したことで知られているが、このほかに縄文前期・平安時代の遺物が拾われたり、中世の館城跡の可能性を示す小名等も残るところである。本村北遺跡は今回報告とするが、縄文前期・古墳時代・奈良時代・平安時代の複合遺跡である。北側遺跡からは、縄文時代中期の土器片が多く拾われる。柳瀬川をさらに下ると富士見市となるが、富士見市域に入っても連綿と遺跡は続き、南通遺跡・北通遺跡等には、区画整理事業等により大規模な調査が実施されている。

唐沢掘りを流す谷には、新開遺跡(4)、三芳唐沢遺跡(3)がある。新開遺跡は、昭和51年から調査がすすめられ先土器時代の4層を中心とした多くの礫群等が発掘されたり、平安時代の須恵器生産のための窯業遺構等が発見された遺跡である。本事業においても先土器時代の遺構、平安時代の遺構等が報告されている。三芳唐沢遺跡は新開遺跡と谷を挟んだ対岸に位置し、一部は昭和53年に学校建設のため発掘がおこなわれた。先土器時代の遺構と縄文時代早期の遺構が確認されている。

江川の水源である俣埜付近には、6ケ所に遺跡が確認されている。しかし、谷の北側、すなわち谷を南側にみる台地の遺跡は住宅建設等によってほとんど性格を知り得ない状態にある。俣埜遺跡(2)は昭和52年に一部分が調査され、先土器時代・縄文時代・平安時代の遺構が確認されている。また昭和56年にも一部が調査され、昭和57年に調査された地域（俣埜遺跡Ｃ地点）は、本書でも報告するが、6層の先土器時代のユニットと縄文時代のトラップピットが検出された。また藤久保東遺跡(9)は水源の俣埜の湧水からゆるやかにのびた支谷の谷頭付近にあり先土器時代の石器が発見されており、俣埜第2遺跡(10)にも町東部遺跡群発掘調査事業により調査のメスが入れられている。

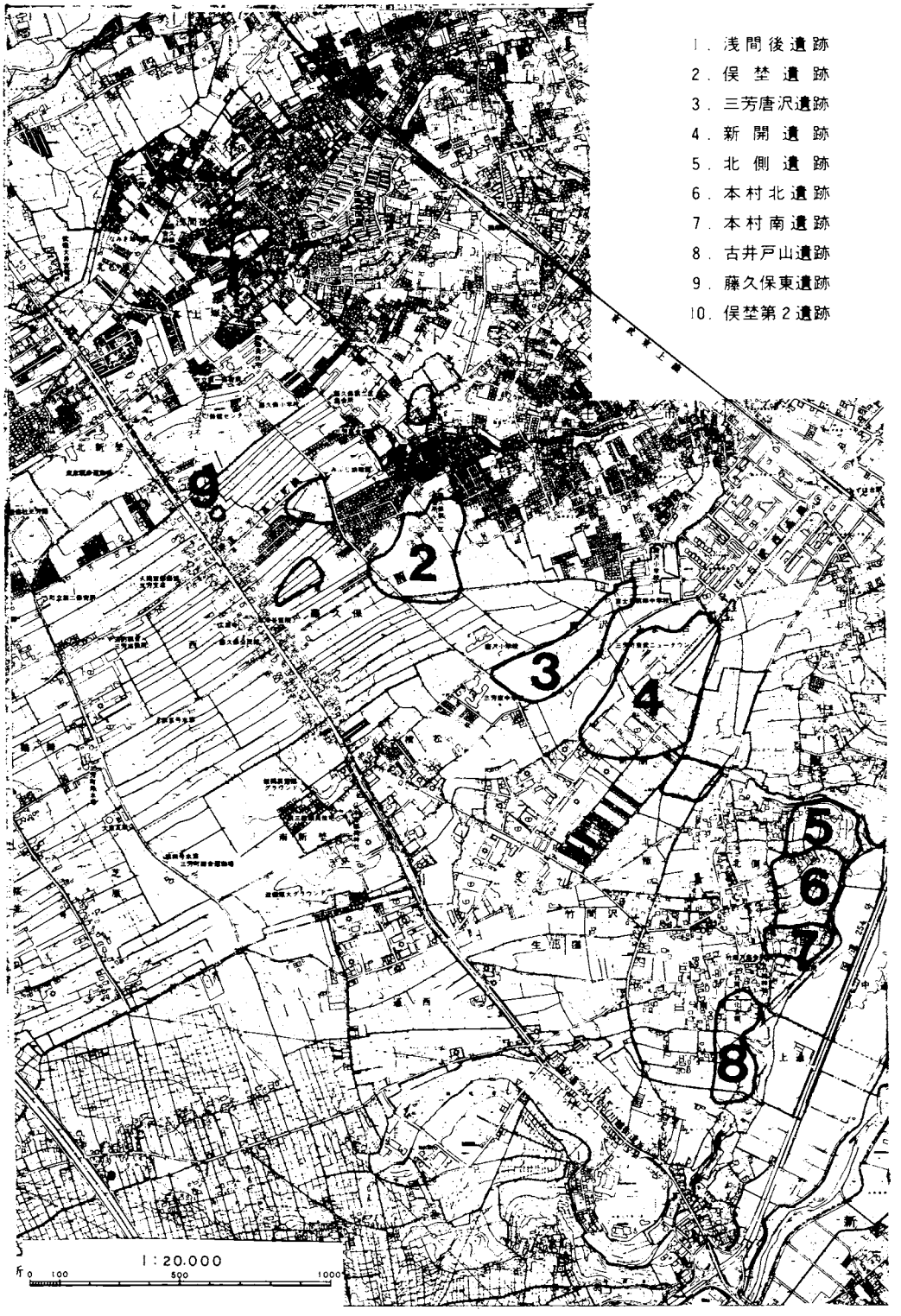
藤久保の浅間後には富士見市側に存在する谷に面して浅間後遺跡(1)が存在する。この付近も住宅開発がすすんでおり、遺跡は一部分に残る程度である。昭和52年に2区画を試掘調査し、町東部遺跡群の事業でも一区画を発掘調査しているが、遺構の発見はなく、遺物もわずかであった。

第2図には示されていないが砂川の形成する谷に面した台地からも縄文片等の拾われる遺跡が存在する。

※本文は第2図を参照。ただし第2図には本村南遺跡の位置は示されていない。本村南遺跡は第2図の7と8の間になる。第1図の30の遺跡がこれに当る。

第１図　周辺の地形と遺跡（1/75,000）

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代						弥生			古墳時代			奈良	平安	中世	備考
				草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	中期	後期	末～初	前	中	後				
1	新開遺跡	三芳町	○														○		
2	八ケ上遺跡	富士見市	○	○	○	○	○	○											
3	栗谷津遺跡	〃	○	○	○		○				○						○		
4	打越遺跡	〃	○		○	○	○	○	○		○	○	○		○		○	○	
5	小仙波貝塚	川越市				○													
6	上福岡貝塚	上福岡市				○													
7	川崎貝塚					○													
8	水子大応寺前貝塚	富士見市				○					○		○				○		
9	山室遺跡	〃	○		○	○	○										○		
10	貝塚山遺跡	〃	○	○	○	○													
11	殿山遺跡	〃	○	○		○											○		
12	御庵遺跡	〃			○	○											○		
13	北通り遺跡	〃	○		○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	
14	南通り遺跡	〃	○		○	○	○			○	○	○	○				○		
15	本村北遺跡	三芳町		○	○	○									○	○	○		
16	古井戸山遺跡	〃	○	○	○	○	○						○						
17	羽沢遺跡	富士見市	○		○		○										○		
18	唐沢遺跡	〃	○	○			○												
19	八ケ遺跡	上福岡市				○	○										○		
20	俣埜遺跡	三芳町	○				○	○									○		
21	内畑遺跡	新座市				○	○												
22	西原大塚遺跡	志木市					○			○									
23	嵯峨山遺跡	新座市	○	○			○												
24	池田遺跡	〃	○			○	○												
25	泉水山遺跡	朝霞市	○				○				○								
26	関沢遺跡	富士見市			○	○	○	○											
27	本目遺跡	〃	○				○	○					○				○		
28	性蓮寺裏遺跡	〃							○								○		
29	新座遺跡	新座市					○				○								
30	本村南遺跡	三芳町								○									元の遺跡名・竹間沢遺跡
31	針ケ谷北通り遺跡	富士見市	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○				○		
32	東台遺跡	〃				○	○	○	○		○	○	○				○		
33	川崎遺跡	上福岡市				○	○	○					○	○	○	○	○	○	
34	川崎横穴墓	〃													○				
35	滝ノ城横穴墓群	所沢市													○				
36	難波田氏の館跡	富士見市																○	
37	市場坂遺跡	新座市	○	○	○		○												
38	膝折宿遺跡	朝霞市	○																
39	宮脇遺跡	富士見市				○	○									○	○		
40	黒貝戸遺跡	〃				○										○	○		
41	谷津遺跡	〃			○	○	○										○	○	
42	北別所遺跡	〃			○		○										○		
43	滝遺跡	上福岡市										○			○	○	○		
44	松ノ木遺跡	富士見市	○				○										○		
45	藤久保東遺跡	三芳町	○																
46	西松原遺跡	富士見市	○		○														
47	中道遺跡	朝霞市	○																
48	三芳唐沢遺跡	三芳町	○																



第２図　三芳町東部の遺跡と発掘地点

3．年度ごとの調査と組織・参加者

1）　年度ごとの調査

町東部遺跡群の発掘調査は、昭和53年度から昭和57年度までの５ケ年間実施されてきたが、この間に５遺跡９地区の調査が実施された。年度ごとに整理すると以下の如くなる。

昭和53年度

1．新開遺跡 Gd 区の調査

地　　番：　三芳町大字竹間沢字新開474
開 発 者：
面　　積：　691.61㎡
期　　間：　昭和53年７月９日～９月27日
発掘通知：　昭和53年８月12日　三芳教発第1345号
発 掘 届：　　昭和53年７月14日

2．新開遺跡 Fb 区の調査

地　　番：　三芳町大字竹間沢字新開486
開 発 者：
面　　積：　513.6㎡
期　　間：　昭和53年11月18日～12月27日
発掘通知：　昭和53年11月７日　三芳教発第1066－２号
発 掘 届：　　昭和53年11月１日
※本調査区は発掘通知には新開遺跡とのみしたが、報告書において新開遺跡 Fb 区と改めた。

昭和54年度

3．新開遺跡 Ra 区

地　　番：　三芳町大字竹間沢字新開358－１
開 発 者：
面　　積：　480㎡
期　　間：　昭和54年９月17日～９月24日
発掘通知：　昭和54年９月17日　三芳教発第1632号
発 掘 届：　　昭和54年９月８日

4．浅間後B遺跡の調査

地　　番：　三芳町藤久保88－3

開 発 者：

面　　積：　270㎡

期　　間：　昭和55年1月21日～1月23日

発掘通知：　昭和55年1月19日，三芳教発第105号

発 掘 届：　　昭和55年1月12日

昭和55年度

5．新開遺跡Sa区の調査

地　　番：　三芳町大字竹間沢字新開355

開 発 者：

面　　積：　430㎡

期　　間：　昭和55年8月7日～8月17日

発掘通知：　昭和55年8月4日，三芳教発第1921号

発 掘 届：　　昭和55年7月26日

6．木村北遺跡の調査

地　　番：　三芳町大字竹間沢字北側790番地

開 発 者：

面　　積：　1200㎡

期　　間：　昭和55年9月15日～11月17日

発掘通知：　昭和55年9月3日，三芳教発第2153号

発 掘 届：　　昭和55年9月13日

昭和56年度

7．俣埜B遺跡

地　　番：　三芳町藤久保311－15

開 発 者：

面　　積：　66.49㎡

期　　間：　昭和56年7月23日～7月30日

発掘通知：　昭和56年7月22日，三芳教発第1973号

発 掘 届：　　昭和56年7月13日

8．新開遺跡Sb区の調査

地　　番：　三芳町大字竹間沢字新開354－1

開 発 者：

面　　積：　500㎡

期　　間：　昭和56年12月10～昭和57年2月28日

発掘通知：　昭和56年12月7日，三芳教発第3180号

発 掘 届：　　昭和56年12月8日

昭和57年度

9．俣埜遺跡C地点

地　　番：　三芳町大字藤久保東700－1

開 発 者：

面　　積：　992.20㎡

期　　間：　昭和57年9月7日～昭和57年10月17日

発掘通知：　昭和57年9月　日，三芳教発第　　号

発 掘 届：　　昭和57年9月6日

2)調査組織と参加者

調査組織

調査主体者　三芳町教育委員会

教育長　岡田芳之助（昭和57年10月まで）

同　　岡村　顕　（昭和57年11月より）

調査事務局　森田不二夫（三芳町教育委員会社会教育課課長：昭和55年5月より）

高橋　昭夫（　　〃　　：昭和55年5月まで）

石子　正明（　　〃　　係長）

調査担当者　松本　富雄（　　〃　　主事）

参加者

昭和53年度発掘調査、整理作業参加者

青木規之・岡田顕彦・遠藤了一・秋元功二・今川勉・尾形一実・岩本浩明・伊藤政久・伊藤昌宏・大山和雄・小川昭夫・岡田勝美・大沢昌己・伊藤勇・井口崇・栗野徹・池上弘子・石川芳子・石川多

美江・太田政江飯田友子・猪島恵子・小田原守・岩本秀子・上村茂太・金子洋司・古賀誠二・北口敬三郎・加茂幸雄・木村和弘・草野達郎・小谷野義行・窪田成男・加藤保浩・小林伴輪・小泉満子・川本節子・小松桂子・栗山陽子・無木博・近藤あつ子・島田能法・斎藤浩・関根正一・清水正・佐藤昭彦・式守広之・下島やよい・鈴木薫・清水啓子・鈴木富士子・斎藤満士・島村弘子・清水和子・塩野寿子・鈴木美智子・末武佐加恵・辻人志・田野崎秀仁・田村裕之・竹野喜一・田中郁夫・田畑文雄・田崎光浩・田代隆・高島明美・高島真由美・滝口正・高橋規・夏見肇・根岸利夫・野田安平・長瀬英三・中村英昭・新井田義人・中西秀夫・西村知子・長島雄一・永安幸子・忽滑谷昌弘・保坂一也・蛭田テル子・原田啓子・長谷川悟・村上忠春・松野康史・松井正純・松岡輝典・毛利敬・真岡美明・前田弘一・溝口靖・吉田明・吉田喜与治・吉田洋・柳川純子・柳沼賢一・吉田英子・渡部茂子

昭和54年度発掘調査・整理作業参加者

秋元功二・池上弘子・猪島恵子・飯塚雅子・岩本秀子・長田光江・金子記美代・川本節子・菊池幸雄・駒見和夫・小松桂子・河野良江・小柳和宏・小谷野義行・斉藤明子・斉藤勝紀・斉藤満士・沢田龍哉・塩野寿子・島村弘子・清水武彦・末武佐加恵・鈴木恵司・鈴木美智子・関根正一・瀬戸口宏司・武田恒男・高橋規・高畦和子・田中郁夫・田中キミ子・田野崎秀仁・田畑文雄・戸井幸忠・長峰光雄・原田啓子・福田秀子・蛭田テル子・本勝定子・間宮一則・三浦浩子・溝口靖・宮田定子・宮寺貞夫・百浦和子・柳沼篇治・柳川純子

昭和55年度発掘調査・整理作業参加者

新井浩之・新屋雅明・岩本秀子・加藤勉・金子喜則・古寺優一・小松桂子・駒見和夫・小柳和宏・小谷野義行・斎藤勝紀・沢田龍哉・清水武彦・鈴木美智子・武田恒男・田野崎秀仁・高橋佳容子・蛭田テル子・宮寺貞夫・柳川純子

昭和56年度発掘調査・整理作業参加者

伊東淳・井砂トシ子・岩本秀子・宇治川徳三・碓井千代野・尾形則敏・大内武則・小野沢円治・笠原知晴・片平雅俊・樫田誠・加藤祐蔵・岸本徹・黒瀬浩二・小島義雄・小松桂子・坂井梅吉・斎藤繁信・柴田菊治・杉浦俊雄・鈴木美智子・高橋緑・高橋進・高橋ひろみ・竹内宇哲・田畑文雄・照井年弘・蛭田テル子・望月精司・八島浩一・柳川純子・柳戸信吾・吉沢敏・吉村尚久・渡辺謙

昭和57年度発掘調査・整理作業参加者

阿部重男・新屋雅明・井砂トシ子・井上松蔵・大谷又四郎・樫田　誠・小早川虎之助・三枝スミノ・下角圭司・菅谷みのぶ・菅原ヤエ子・杉山輝子・高橋淳子・竹内宇哲・寺山大安・新島喜久雄・吹野富美夫・望月精司・柳川純子・柳戸信吾・吉沢　敏・渡辺　謙

II　各遺跡の調査

1．概　括

三芳町東部遺跡群の発掘調査は昭和53年度から昭和57年度の５ケ年に亘り実施してきた事業であるが、この間に５遺跡９地点の発掘調査が実施された。各遺跡の成果を本章で詳しく述べるが、その前に各調査の概要をここでは述べておくことにする。

９度に亘る調査のうち、５回は新開遺跡の調査であったが、これは新開遺跡の所在地付近で区画整理を実施していたために個人的開発が多かったものである。新開遺跡の調査では、先土器時代のユニット（Fb区）、平安時代の土器焼成窯２基、遺物包含層、ピット群（Gd・Sb・Ra区）等が検出された。次いで調査が多かったのは俣埜遺跡である。俣埜遺跡は、江川の湧水源を取り囲むような台地に立地する遺跡であるが、江川の南側の遺跡を俣埜遺跡、江川の北側の台地を俣埜Ｂ遺跡と呼んでいるが、俣埜遺跡で１回の、俣埜Ｂ遺跡で１回の発掘調査が本事業で実施された。俣埜遺跡からは６層の石器ユニットが検出された（Ｃ地点）。本村北遺跡は柳瀬川を見下す左岸台地上に立地するが、縄文前期の包含層・土壙、古墳時代の住居跡、奈良時代の住居跡、平安時代の住居跡・土器焼成遺構等が検出された。浅間後Ｂ遺跡からは、平安時代・縄文時代の遺物が数十片検出されたにとどまった。

遺跡	調査年月日	主な調査内容	備考
新開遺跡Fb区	昭和53年11月18日 ～　53年12月17日	先土器時代４層下部の石器・礫をともなうユニット１を検出。	
新開遺跡Gd区	昭和53年７月９日 ～　53年９月27日	平安時代の遺物包含層とピット群と土壙を検出。	隣接するGc区では工房跡が検出されている。
新開遺跡Ra区	昭和54年９月17日 ～　54年９月24日	平安時代の遺物とピット群を検出。	畑地であり保存状態悪し。
新開遺跡Sa区	昭和55年８月７日 ～　55年８月17日	平安時代の遺物検出。	
新開遺跡Sb区	昭和56年12月10日 ～　57年２月28日	平安時代の土器焼成窯２基、ピット２基を検出。	土器焼成窯は新開遺跡では、これで計４基。
浅間後Ｂ遺跡	昭和55年１月21日 ～　55年１月23日	縄文中期土器片、平安時代遺物を検出。	
本村北遺跡	昭和　年　月　日 ～　年　月　日	縄文時代早期・草創期の遺物、縄文時代前期の遺物包含層・古墳時代・奈良時代・平安時代の住居跡各１軒ずつ。平安時代土器焼成遺構１基。	
俣埜第２遺跡	昭和56年７月23日 ～　56年７月30日	縄文時代の土器片。	
俣埜遺跡Ｃ地点	昭和57年９月７日 ～　57年10月17日	縄文時代土壙１基、先土器時代６層の石器・炭化物をともなうユニット１を検出。	

表　三芳町東部遺跡群発掘調査一覧

2．新開遺跡 Fb 区の調査

新開遺跡 Fb 区とした地区は第３図にもある様に、新開遺跡の中で舌状に突出した台地の東基部付近に位置する。舌状に突出した台地の舌端部付近から東側基部付近にかけては先土器時代の遺構が拡がるが（新開遺跡Ⅰ・Ⅱ掲載）、Fb 区においても礫・礫群、礫群（礫ユニット）に共伴する石器ユニットが検出された。ここで報告する Fb 区はかつて、新開遺跡Ⅰにおいて、他の先土器時代の遺構との関連から掲載したことがあるが、礫・礫群（礫ユニット）の図と出土石器組成表のユニット名に誤りがある。ここで再度掲載するに当たり、図の訂正をしておいた。

1） 遺　構

Fb 区には第46図に示した様にグリットが設定され発掘調査が実施された。その結果、Fb03区で礫１点（P－19）と Fb08区に礫群（P－20）が確認された。

礫ユニット P－19は単独１点のみの礫が出土したにすぎなく、炭化物や石器は調査グリットを拡張したが確認することができなかった。

礫ユニット P－20は散在的に拡がる礫群で６ m× 8 m にひろがる。炭化物は充分な調査を行ないきれていないが、散在する礫群の中心部付近にひろがる（C－25）。石器はこの礫群からは５点出土しており、その内訳はスクレイパー１点、使用痕を有する剝片１点、剝片３点、砕片１点であった（T－14）。

2） 遺　物

a．石器（第７図・第８図）

スクレイパー（１）

幅広のほぼ円形を呈した剝片を素材としている。刃部は主要剝離面側に作出されており、石器表面は、図では右側にきている。製作にあたってのプロセスは比較的複雑である。先ず素材である剝片を剝離した後、その大きな打面部に素材表面側から入念な打面調整を行なっている。恐らく、大きく残った打面を除去するとともに素材を薄く仕上げる意図をもっていたと考えられる。しかし、剝離されたのは素材表面上の大きな剝離痕をほぼ半分に切る剝片のみである。この剝離で素材の打面部は完全に除去されている。これらのプロセスを経て刃部を作出している。刃部は石器表面上右側縁の一部を除きほぼ全周の$\frac{2}{3}$に加工を施している。折断面を有するが欠損である。安山岩。

使用痕を有する剝片（２）

横長の剝片を用いており、打面は２㎜程度と極めて小さい。打面から連続して横に広がっている細かい調整痕は石核の頭部調整剝離と考えられる。剝片の底面に一条の細いファシットを有するが、意図的なものとは考え難い。黒曜石。

剝片（3～5）

3は不定形な縦長剝片である。表面上には多方向からの剝離痕が認められる。剝離角は非常に鈍角である。凝灰岩。

4は部厚な縦長剝片であるが、大きく残っている自然面は若干赤化しており、焼礫を石核とした唯一の例である。表面にはネガティブな剝離面を持つが下半部は判然とせず、恐らく受熱によるひび割れの部分であろう。打面は平坦な剝離面である。表面左側に横長の剝離痕が認められ、下端にも数回の剝離が認められる。本剝片自体を石器とする目的的な加工とは思えない。石核として考え得る可能性がある。所々にひび割れを有している。安山岩。

5は部厚な大形の剝片である。打面は平坦な剝離面であるが、他に異なる打面が僅かではあるが2つ残存している。剝片剝離技術がある程度把握できる（b参照）。凝灰岩。

b．剝片剝離技術

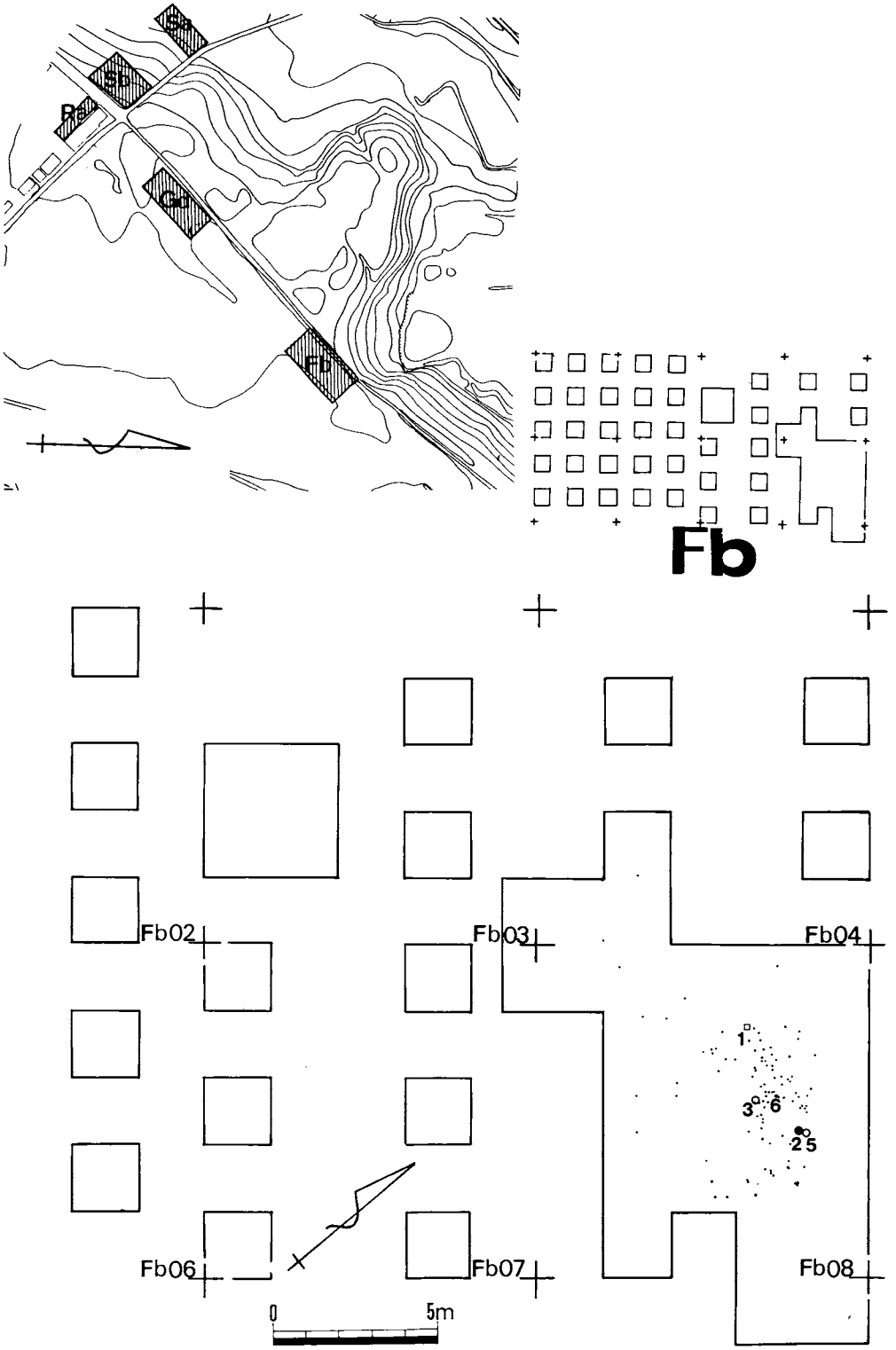
本区においては接合資料は認められないが、5の剝片からある程度の剝離技術が抽出できるため以下に述べる。

5′図において縦線で示した剝離痕から仮想打面(A)を設定すると、打面(A)からほぼ90度の打面転位を行い打面Bを作出して横線で示した一連の剝離を行なったことが理解される。次に打面再生によって打面Cを作出し斜線で示した剝離を行ったと考えられる。さらに打面再生及び打面調整により打面Cを殆んど除去し、本剝片を剝離している。つまり単に打面を転位し、その新たな打面で剝離作業が終止し次々と転位してゆくのではなく、その位置である程度ひんぱんな打面再生を行ない、剝片剝離作業が進められたと理解されるのである。

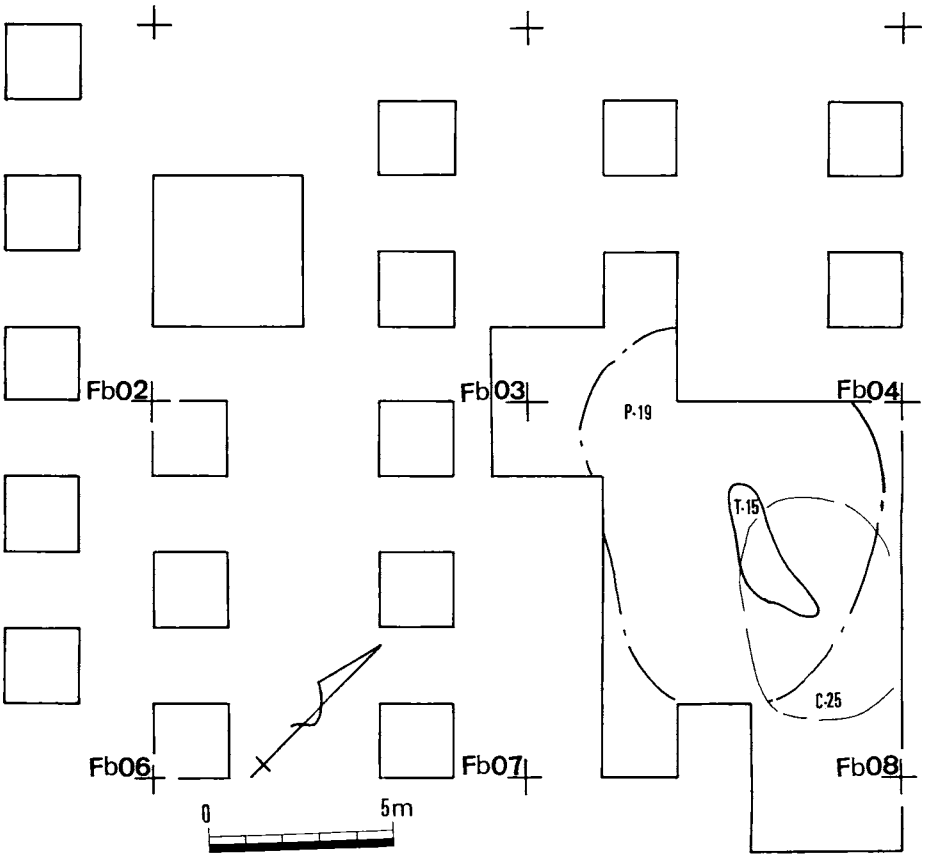
（三宅敦気・諏訪間順・樫田誠）

ユニット	石質	ナイフ形石器	切出形石器	スクレイパー	ドリル	グレイバー	鋸歯状石器	加工痕を有する石器	使用痕を有する石器	石器小計	剝片	砕片	剝片砕片小計	石核	合計
T－14	黒曜石A類														
	黒曜石B類														
	黒曜石C類								1	1					1
	安山岩A類			1						1					1
	安山岩B類														
	凝灰岩										3		3		3
	チャート										1		1		1
	頁岩														
	計			1					1	2	4		4		6

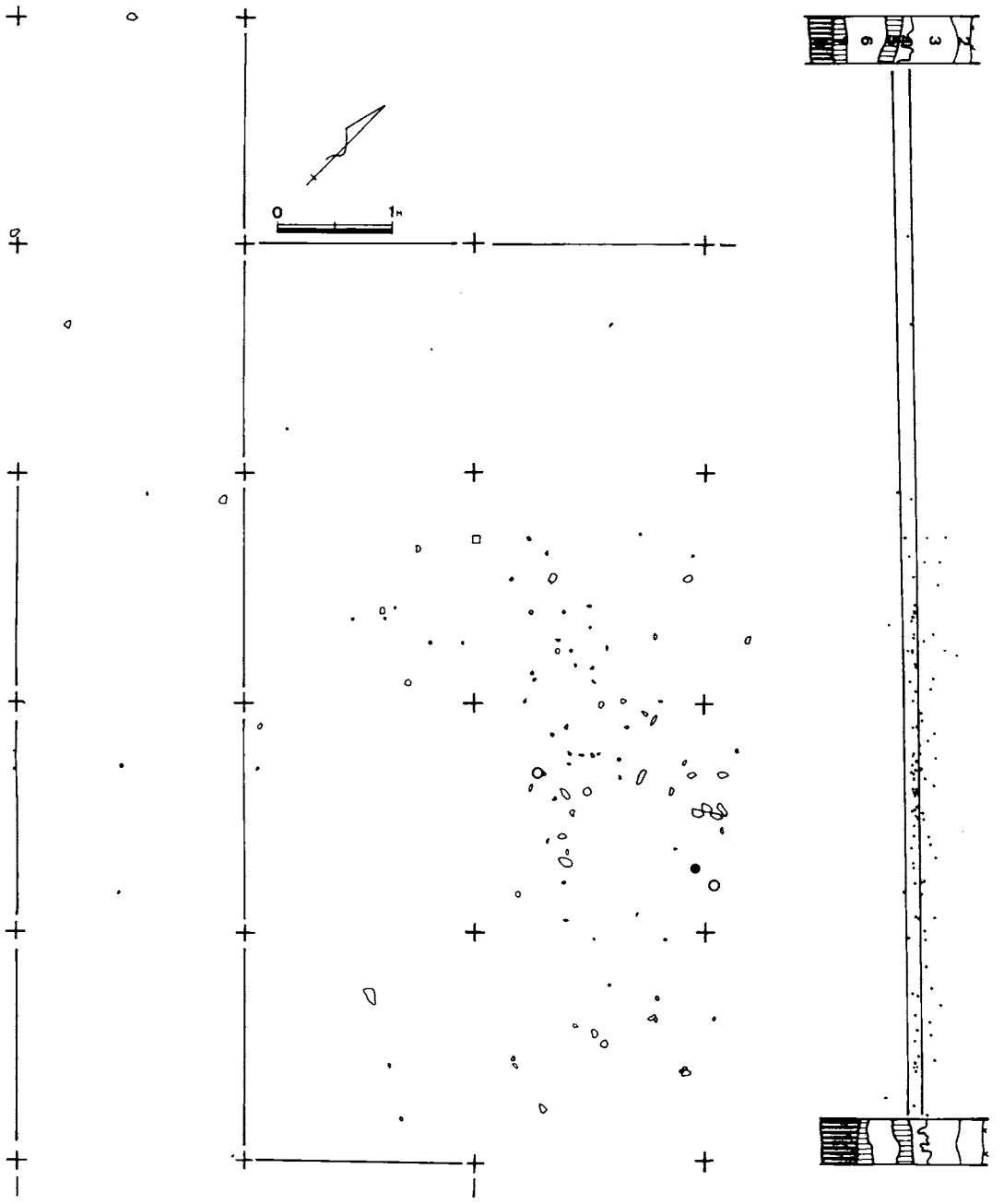
表　Fb区出土石器組成表



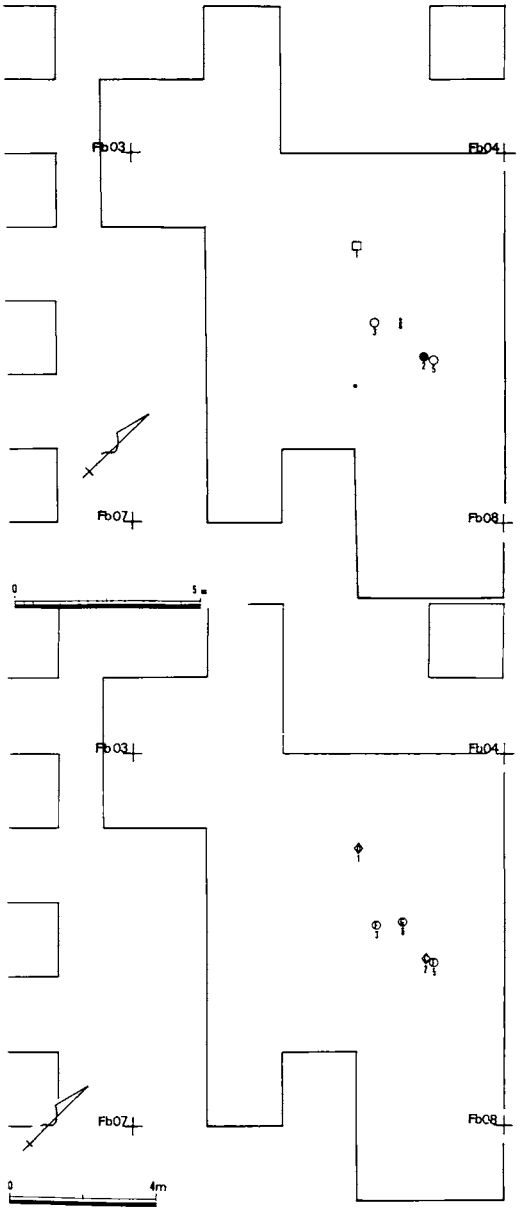
第3図　新開遺跡 Fb 区礫・石器分布図(1/200)



第４図　新開遺跡 Fb 区ユニット想定図(1/200)



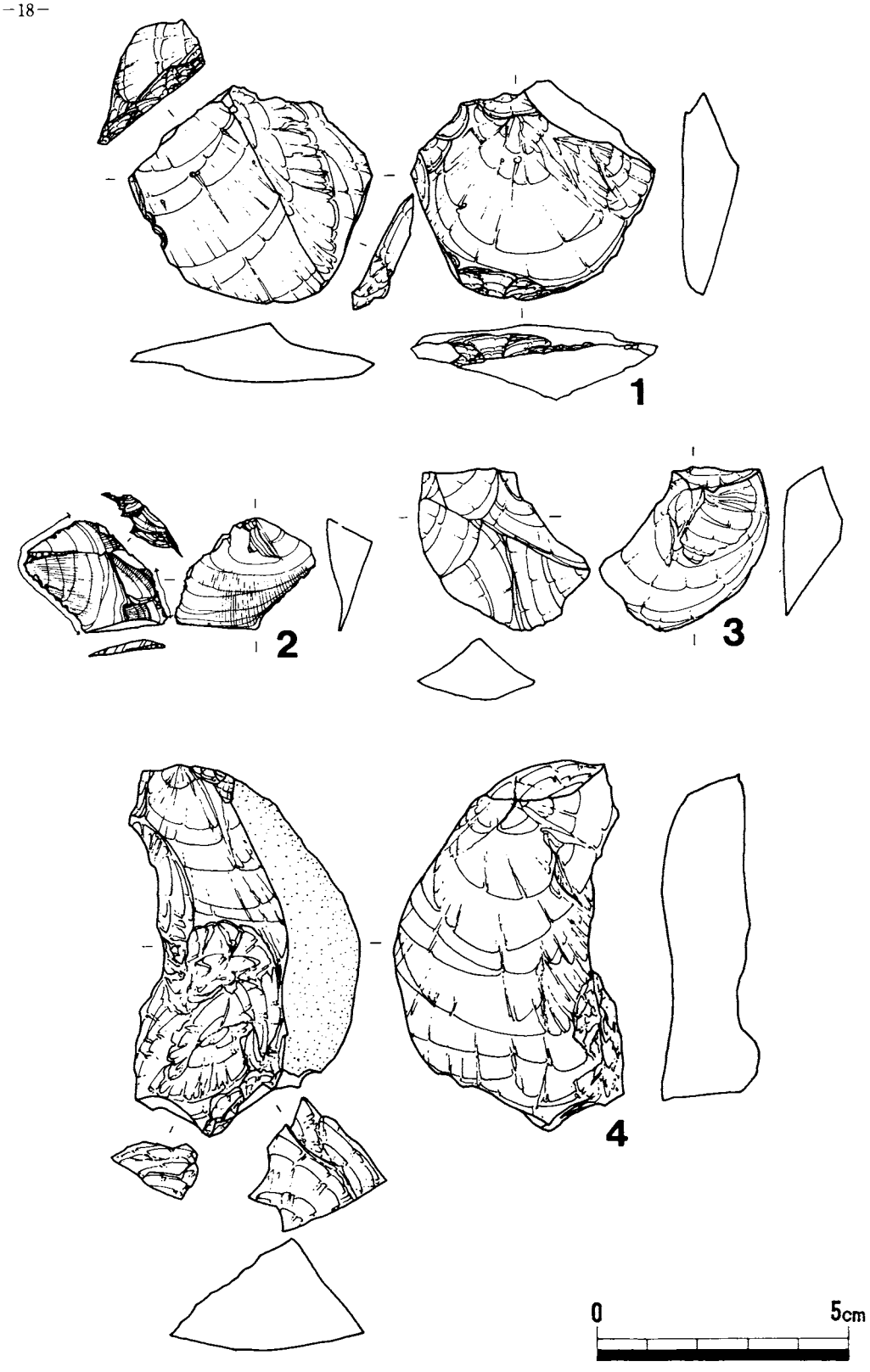
第5図　ユニット実測図(1/40)



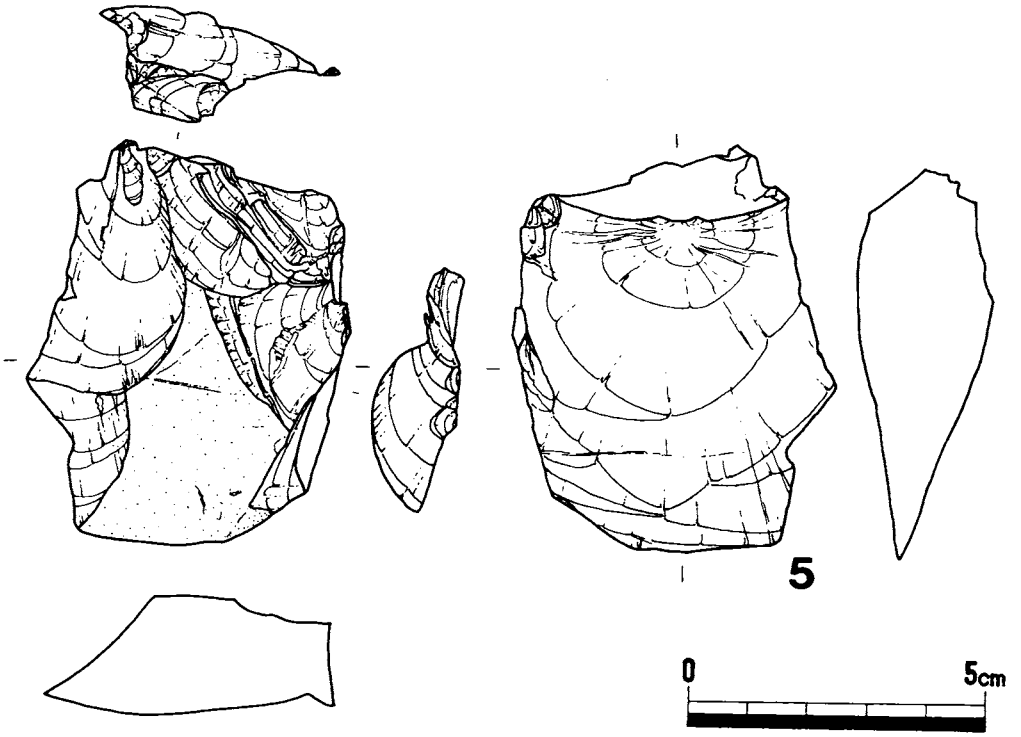
第６図　新開遺跡Fb出土石器器種別分布図(上)Fb区材質別分布図(下)

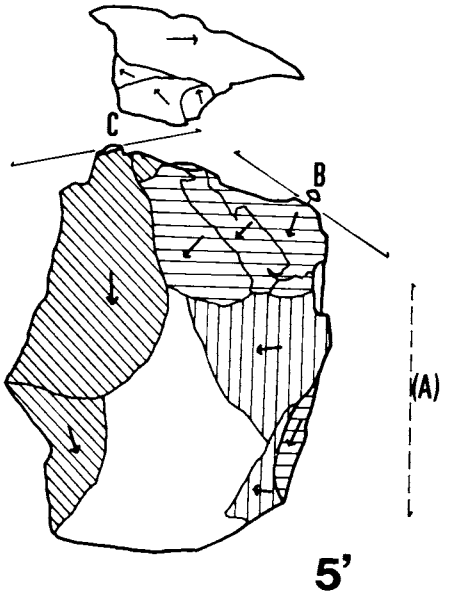
No.	器　種	石　質	器　長	器　巾	器　厚	重　さ	破損有無	図版No.	接合図No.	注 記 No.
1	スクレイパー	安山岩A	4.35	4.65	1.35	20.7		48－1		Fb－92
2	使用痕を有する石器	黒曜石④	2.15	2.5	0.9	2.5		48－2		Fb－84
3	剥片	凝灰岩	3.65	2.9	1.25	8.5		48－3		Fb－53
4	剥片	凝灰岩	7.2	4.75	2.35	59.1		48－4		Fb－2
5	剥片	凝灰岩	6.5	5.3	2.35	72.2		49－5		Fb－111
6	剥片	チャート	1.3	2.2	0.45	1.4				Fb－59

表　新開遺跡Fb区石器組成



第７図　新開遺跡 Fb 区出土石器図(1)(1/5)





第 8 図　新開遺跡 Fb 区出土石器図(2)(1/5)

3．新開遺跡 Gd 区の調査

新開遺跡 Gd 区は西側に緩い谷をひかえ、北西方向に舌状の台地を有する、その舌状台地に到る基部の台地縁辺上に位置する。北東側の Gc 区からは平安時代の須恵器生産に伴なう工房跡が検出され、北西側の Me 区からは平安時代の須恵器坏を焼成した登り窯が 1 基検出されている。Gd 区の調査で検出された遺構は Gd07・08区を中心にひろがる平安時代のピット群とほぼ完形の須恵器坏を 2 個体出土した土壙が主なるものであった。しかし、遺物包含層は、山林であったためか、保存状況が良かった。工房跡・登り窯を近くにもつ地域であり、作業場的な空間をとらえることも可能かとも考えられたため、包含層内の遺物は地点、標高を記録しながら取りあげていくという調査方法をとった。

1) 遺　構

a．包含層（第 9 図・第10図）

表土下約20cmで漆黒色の層（2 層）が発掘区全体にひろがる。Gd08区で20～25cmを計り Gd05区では、約 5 ～10cmになる。この層中には、遺物（須恵器・坏・瓦・甕等の破片）が多く検出された。層の厚い Gc08・07では遺物の量はおびただしいが Gc05・07・09・10・11・12にいくにしたがい遺物数は少なくなる。今回の調査においては、この包含層から検出される遺物の在り方から当時の生活遺構を検出することが可能ではないかと考え、総ての遺物の地点・層位を図化していった。第　図に示すのが、その遺物の出土状況であるが、Gc 区の工房跡（Gc05区；LN01・新開遺跡II で報告済）の方向へ向かうにしたがい、遺物量が増加していくことが伺える。(Gc 区と Gd 区の境界付近で遺物量が激減するが、これは Gc 区と Gd 区の調査方法の違いによる。Gc 区においては 3 cm以内の遺物はドットから除外していったが、Gd 区においては総ての遺物の地点をとったためである。) 包含層の残存状況が Gc 区付近は良好であるため Gc 区に遺物が多く集中するという捉え方もできるようが、ここでは Gc 区の工房跡（L. N. 01）を中心に遺物が集中していたものと理解したい。

b．ピット群（第 9 図・　表）

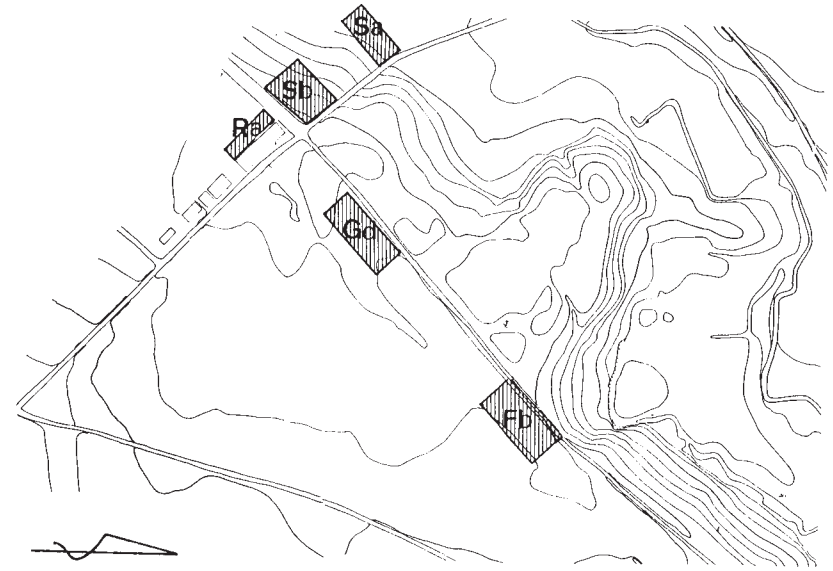
土壙は Gc07・08を中心として拡がり、数十基確認された。それぞれの数値は別表に記した。土壙は総じてみると 4 型態に分けることができる。

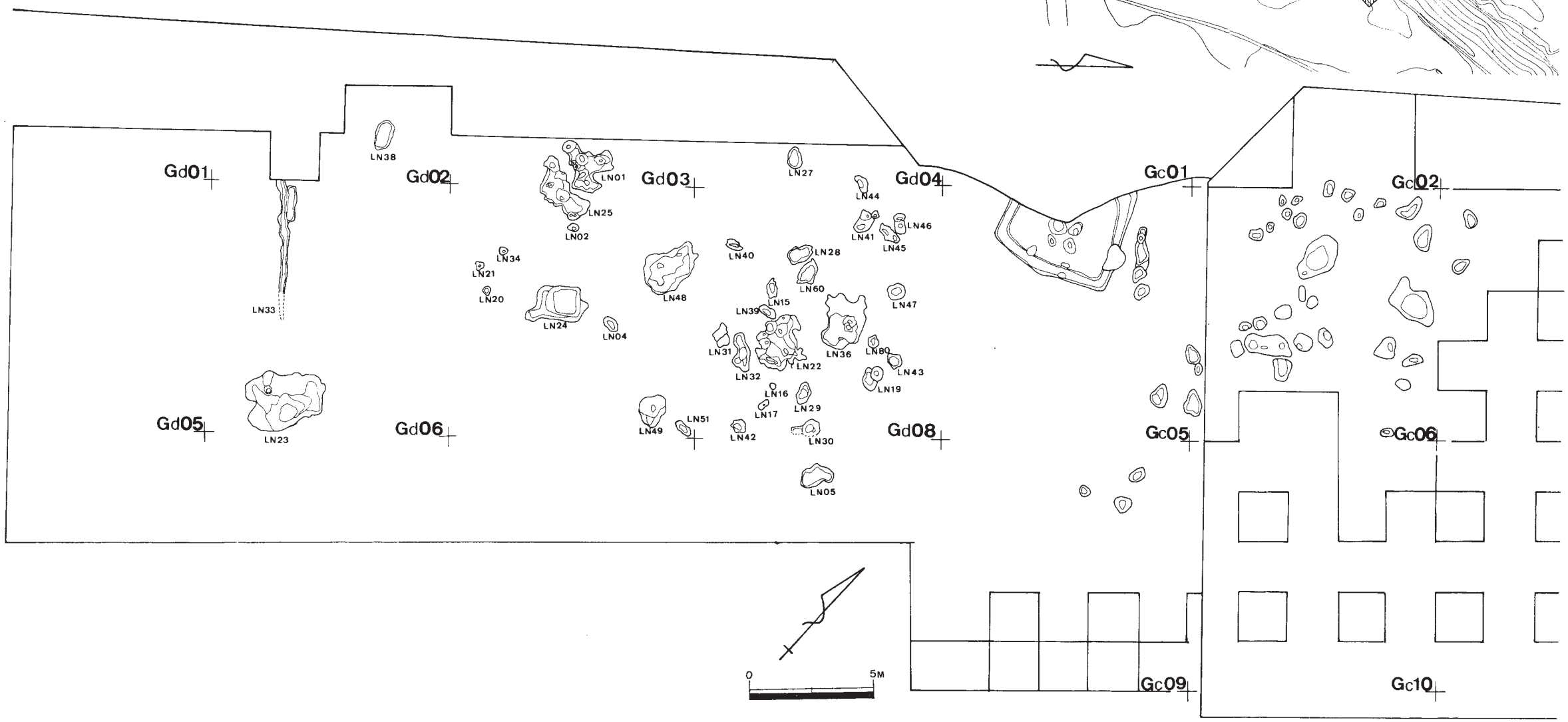
A型態：規模は約30～50cmを計り、平面形ないしは楕円形で底部はわん状を呈するもので、覆土はきわめてII層に類似している。これらの土壙の中には並ぶものもあり柱穴列の可能性もある。

B型態：規模は50～150cmを計り、平面形は不整形で底部は凹凸が激しい。覆土はII層に類似している。古い時期の木根跡か。

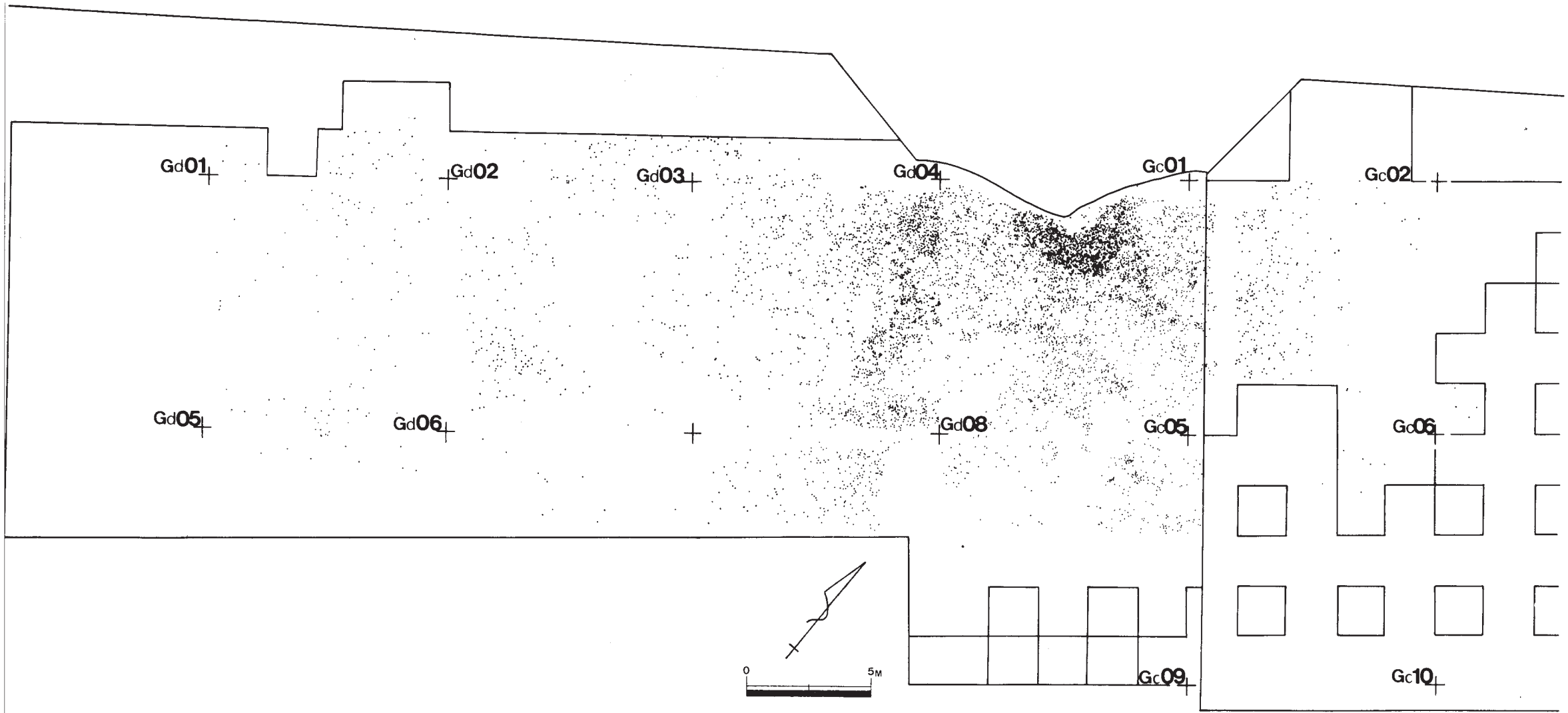
C型態：覆土中にロームブロックを含む土壙であり、深さは約80～100cmを計る。比較的新しい時期の木根跡か。

D型態：平面形は隅丸方形であり、底面は平坦である。この型態は 1 基のみである。





第 9 図　新開遺跡 Gd 区全測図(1/200)



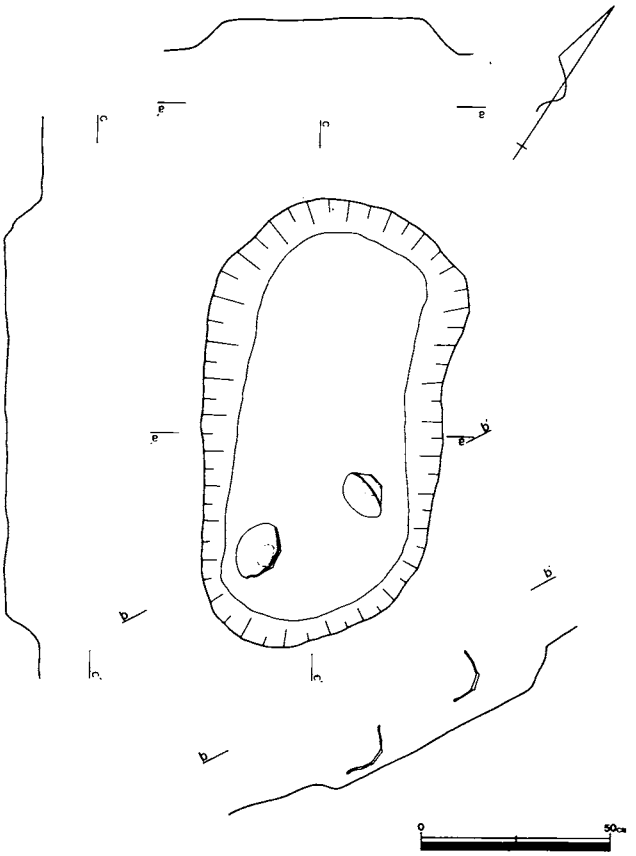
第10図　新開遺跡 Gd 区包含層出土遺物分布図(1/200)

遺構名	グリット名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	型態
LN01	Gd03	236.0	69.0	20.9		C
LN02	Gd07	148.8	70.0	14.5		A
LN04	Gd07	68.0	32.0	22.0		A
LN05	Gd12	144.8	63.6	20.4		A
LN15	Gd08	81.4	35.4	25.8		A
LN16	Gd08	30.4	23.6	10.5		A
LN17	Gd08	48.4	22.0	20.8		A
LN19	Gd08	94.8	60.0	26.2	遺物有	A
LN20	Gd07	29.0	24.0	15.8		A
LN21	Gd07	42.0	30.0	15.8	遺物有	A
LN22	Gd08	229.0	135.0	29.0		B
LN23	Gd06	301.0	264.5	115.0		C
LN24	Gd07	259.0	141.0	58.4		C
LN25	Gd07	285.0	67.5	36.2	遺物有	C
LN27	Gd08	50.8	12.4	50.5	遺物有	A
LN28	Gd08	100.0	60.8	21.6		A
LN29	Gd08	88.4	47.6	23.5		A
LN30	Gd08	113.6	20.8	30.1		A
LN31	Gd08	94.4	36.0	17.0		A
LN32	Gd08	186.0	75.0	39.4		A
LN34	Gd07	36.0	25.5	8.5		A
LN36	Gd08	248.0	130.0	38.6		B
LN38	Gd02	118.3	64.0	23.2	遺物有	D
LN39	Gd08	75.2	32.4	24.0		A
LN40	Gd08	70.0	32.0	13.5		A
LN41	Gd08	115.2	57.2	49.9		A
LN42	Gd08	60.0	49.2	25.4		A
LN43	Gd08	64.5	43.5	19.0	遺物有	A
LN44	Gd08	76.5	34.0	18.5		A
LN45	Gd08	96.0	44.0	21.0		A
LN46	Gd08	81.0	43.0	17.0		A
LN47	Gd08	78.0	59.0	31.0		A
LN48	Gd07	243.0	240.0	72.0		B
LN49	Gd07	125.0	90.0	66.0		B
LN50	Gd08	100.0	62.0	35.0		A
LN51	Gd08	74.0	30.0	28.0		A

表　新開遺跡Gd区ピット群一覧表

C．土壙（L. N. 38）（第11図）

Gd02区の東コーナー付近に位置する。平面形は、遺構確認面で隅丸長方形で、壙底部も同様に隅丸長方形を呈する。長軸方向は、N－60°－W である。壁は、わずかに10cmを確認したにすぎないが、確認できた範囲においてはほぼ垂直にたちあがる。壙底はほとんど平坦である。覆土は二層にわけることができる。一層は、ローム粒子・焼土粒子をわずかにふくむ、漆黒の土層であり、Gd 区の二層の遺物包含層と極めて似た土層である。二層は壙底部に 2 ～ 3 cmほど薄く存在し、ローム粒子を多く含む茶かっ色の層である。この層位からは、覆土がうすいため人為的な堆積なのか自然堆積なのかは判断しがたい。LN38土壙からの出土遺物はほぼ完形の須恵器坏 2 個体がある。いずれも壙底から 3 cmほど浮いて斜めに上を向いた状態で出土した。



第11図　新開遺跡 Gd 区の土壙(LN.38)
全測図(1/20)

d．溝（LN33）（第９図）

Gd06区のほぼ中央を東南から北西方向へのびる溝である。長さ約5.5mが確認され、幅20～40cmを計り、深さ10～30cmを計る。覆土には包含層と同様の土層が含まれるが、しまりが悪い。この溝に平行し隣接した北東側に平面が長方形の土壙が存在するが、これは農耕用の土壙と考えられるものであり（第２章４節参照）、溝内覆土はしまりが悪い。覆土や、こうした土壙との位置関係からして、この溝は新らしい時期のものと推定された。

3） 遺　物

Gd区からは、包含層中より平安時代の遺物が大量に出土した。その総数は2,000点をこえる。須恵器坏が圧倒的に多く全体の90％を占め、他に須恵器甕・瓦・土師器甕が出土している。土師器甕は少ないながらも他の地域に比べ多く出土した。また、平安時代の遺物以外の遺物もいくぶん検出された。先土器時代の石器（この出土があったため、数ケ所にローム層へのグリットを開掘したが、遺物はのぞめなかった）、縄文時代中期を中心とした土器片・石器類が出土した。

尚ここでは土壙（LN68）出土の遺物も一括して報告する。

a．須恵器坏（第12図）

須恵器坏は包含層中より1,989点出土したが、ほとんどは細片であり、器形を知り得るものは少なかった。須恵器坏片類は、青灰色のものから焼成の悪いものまであった。黄褐色から赤褐色の遺物が圧倒的に多く、全体の約５割を占め、次いで灰白色のものが全体の約３割であり、青灰色の焼成の良いものは全体の約２割と比較的に少ないことが理解された。ここでは、土壙（LN38）出土（第12図1・2）の遺物も含めて紹介することとする。

１は口縁部３分の１を欠損するがほぼ完形の坏である。口径13.2cm、底径6.0cm、器高3.8cmを計る。底部から約２～３㎜程、ほぼ垂直に立ちあがり、僅かに丸味をもちながら開いていき、口縁付近でわずかに外反する。焼成は軟質でありしまりがなく、良好とはいえない。黄褐色を呈する。胎土には微細な砂粒を含むが、精選されており良好である。右廻りのロクロしあげがなされている。

２は底部にヒビが入るが、完形である。口径14.2cm、底径5.5cm、器高4.6cmを計り、１に比べて大振の坏である。底部より約５㎜～７㎜程わずかに外開きに立ちあがり、それより丸味をもちひろがっていく。口縁下で比較的強く外反する。焼成は良くなく、軟質で生焼けの感がもたれる。色調は灰白色である。胎土は白色の微細な砂粒を含むが、精選されている。右廻りのロクロしあげがされているが、体部下端に粘土ひもの接合痕がみられる。

３～８は口縁部から胴部にかけての破片である。３～５は青灰色のしまりのよい焼成である。粘土には４・５に白色の微細な砂粒が僅かに含まれるが、いずれも精選されている。いずれも口縁下より外反する。６・８は黄褐色を呈し、あまり焼成は良くない。いずれも雲母の混入がみられる。またいずれも、口縁下には外反がなくなだらかに立ちあがる。７は灰白色を呈する。焼成は比較的良い。黒

色の砂粒が含まれるものの胎土は精選されている。口縁付近で僅かに外反する。

9～11は底部破片である。9は灰白色、10・11は黄褐色を呈する。いずれも微細な雲母が混入している。9は底径6.2cm、10は底径5.9cm、11は底径5.6cmを計る。9・10は底部が丸味をもちながら開いていくが、10は5㎜程外開きに立ちあがり、それより丸味をもって開いていく。

12・13は高台をもつ坏である。12は灰白色のあまり焼成のよくない破片である。胎土には砂粒が含まれるが、精選されている。高台はやや長めの外開きの底部に面取りのあるものである。13は赤褐色を呈し、比較的焼成はよい。胎土には雲母が僅かに含まれている。12の高台に比べ短かめであるが、底面にはやや内傾する面をもつ。（松本富雄）

b．須恵器甕（第13図）

須恵器甕の出さは極めて少ない。図化可能なものは次に紹介する3点であった。

14は、大型の広口甕になろう。推定口径約31.0cmを計り、口径部から肩部にかけて約4分の1を残す。頸部で肩部と接合されており、頸部より上位にも3段の接合が外面より観察できる。内外面ともロクロしあげされているが、頸部は工具によりロクロナデされている。色調は灰色で一部分褐色を呈している。やや軟質であり焼成はあまりよくない。微細な砂粒を僅かに含むが胎土は精選されている。

15は口縁部付近の破片である。たぶん長頸壺となるであろう。内外面ロクロしあげされている。微細な砂粒を含むが、胎土は精選されている。色調は青灰色で焼成は良好である。

16は高台をもつ底部付近の破片である。底部内外面には静止した状態でのナデが施されているが、内面のほうが粗い。高台は指によりロクロしあげがされているが、胴部下端の外面はロクロによるヘラケヅリがされている。胴部内面のロクロは粗い。胎土には白色の砂粒を含むが精選されている。焼成は良好で青灰色、断面はセピア色を呈する。（松本富雄）

c．瓦（第14図）

甕と同様に瓦の出土量も少ない。ここで紹介するのは男瓦3点と女瓦1点である。

17は女瓦の破片である。狭端部付近の破片である。凸面は布目、凹面は縄目である。狭端面は指ナデである。色調は赤褐色を呈し、焼成はあまり良くない。胎土には小石、雲母を含むが比較的精選されている。

18は男瓦の広端付近の破片である凸面はタタキの後にナデしあげされ、わずかに縄目を残す。凹面は布目である。側端面はヘラケズリされ、広端面はナデが施され僅かにワラ状の圧痕が見える。色調は灰白色であり、あまり焼成がよくない。

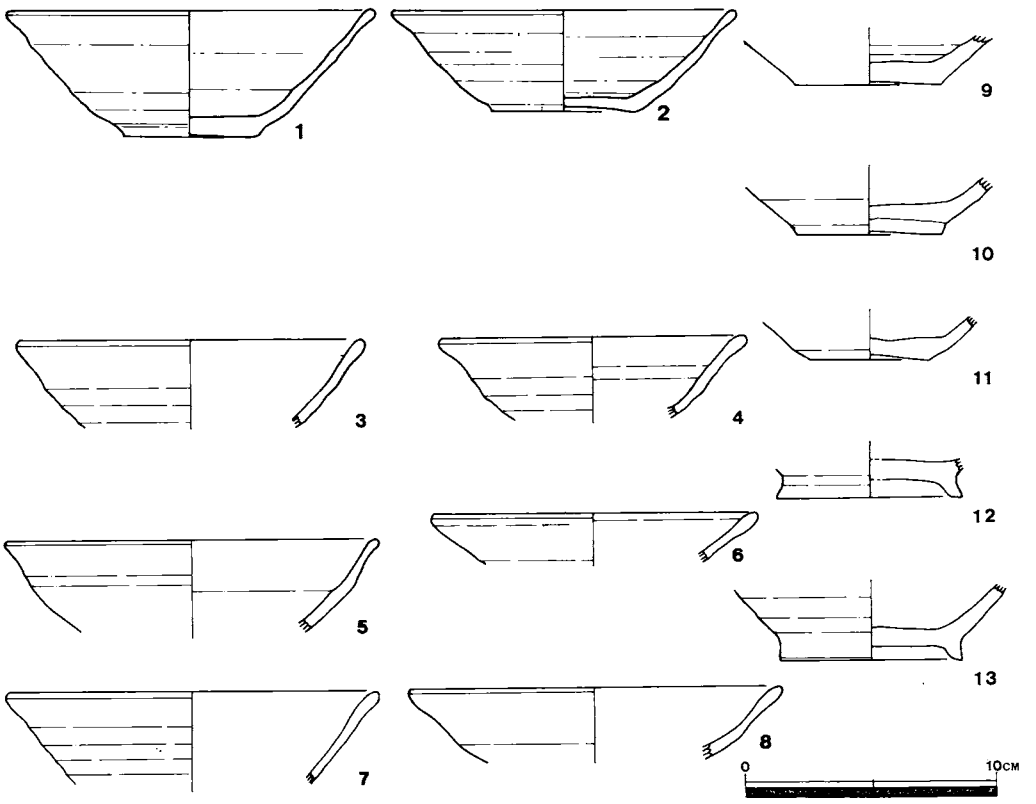
19は男瓦の破片であるが端部をもたない。凸面は荒れているが、たぶんナデしあげされていると思われる。凹面は粗い布目である。色調は黄褐色であり焼成はきわめて良くない。生焼けの状態である。胎土には砂粒・雲母が含まれる。

20は狭端部の破片である。凸面はナデしあげされており、凹面は細かい布目であり一部に段がみられるが、小破片であり性格は不明である。狭端面はナデしあげされている。色調は黄褐色でありあま

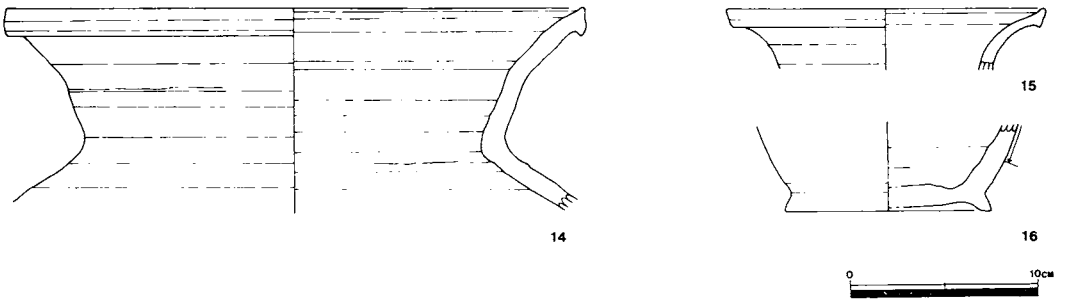
り焼成は良くない。胎土は良く精選されている。　　（松本富雄）

d．土師器甕

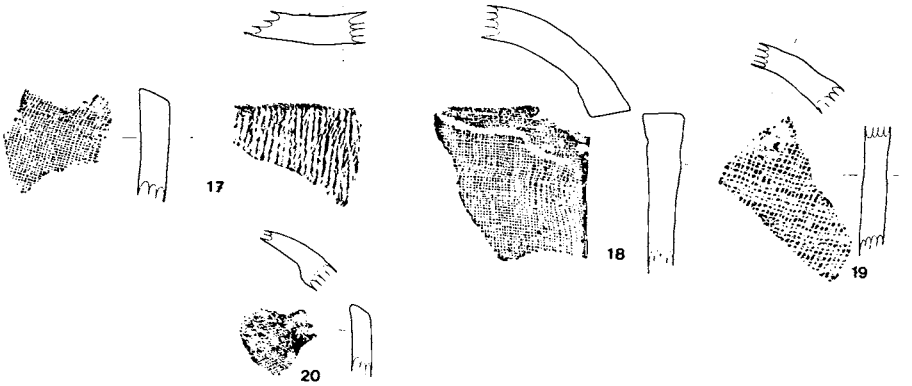
土師器甕としたが、いずれもロクロによって仕上げられている。1は口縁部付近の破片である。胴部と頸部の境は僅かな稜がみられる。頸部はゆるい「コ」の字状に屈曲する。口縁から頸部の外面、残存する内面全域がロクロ調整しあげされている。胴部は横方向のヘラケズリである。2は丸味のある胴部をもつと思われる「く」の字状を呈する口縁部破片。残存する部分はロクロ調整しあげ。3は「く」の字状を呈する口縁部破片。器面があれており製作痕は観察できず。　　（松本富雄）



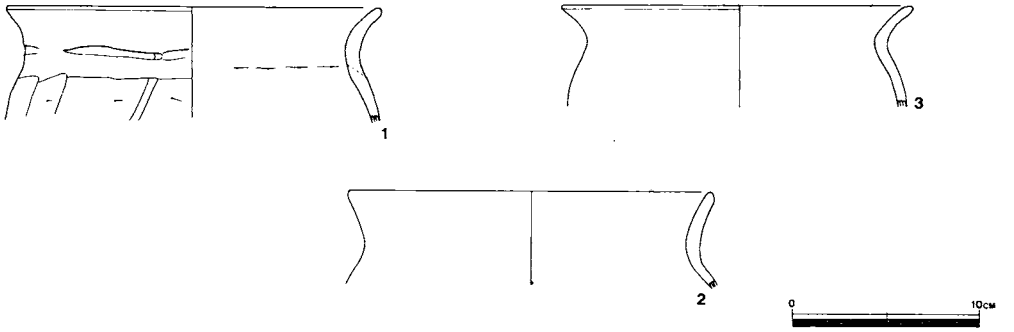
第12図　新開遺跡 Gd 区出土須恵器坏実測図(1/3)



第13図　新開遺跡 Gd 区出土須恵器甕(1/4)



第14図　新開遺跡 Gd 区出土瓦実測図(1/4)



第15図　新開遺跡 Gd 区出土土師器実測図(1/4)

e．縄文土器（第16図）

1～6まで縄文中期の土器である。1はわずかに外反する胴部破片である。ヘラ状工具により、輪積み痕の上下を連続刺突し、段状の文様を施している。胎土には砂粒・雲母を含んでいる。これは阿玉台式に比定されよう。2・3は内彎する口縁部破片である。口唇部直下を棒状工具により口唇と平行した沈線で廻らし、その下を同じ工具により逆「U」字形の懸垂文を施している。地文はLRの単接縄文であるが、器面が荒いため、あまり明瞭でない。2は最後に粘土紐を貼り付けて口唇を整形した跡が認められる。3は口唇の内側が肥厚している。内側はいずれもナデによって研磨されている。胎土・焼成からみても同一のものであり、加曽EIII式に比定されるものである。4は棒状工具による二条の沈線の懸垂文が施され、内彎した胴部破片である。地文はLRの単節縄文が、わずかに認められる。これは2・3と同じ時期に比定できよう。5は波状口縁を呈する浅鉢の口縁部破片である。隆帯と沈線により渦巻文が施されている。内面はよく研磨されている。6は外傾した胴部破片である。クシ状工具により鋭い条線を垂下させている。内面はたて方向によく研磨されている。胎土には、砂粒・小石が含まれている。

（吹野富美夫）

f．石器（第17図）

ナイフ形石器(1)

扁平な縦長剥片を素材とするが、背面側からの圧力によって刃部中程より切断を被っている。この切断面から腹面に微細な調整が加えられているが、その意図するところは不明である。刃部側の基部には背面側からの調整も交えたブランティングが施されており、相対する側縁にも同様なブランティングが施されていたと思われるが、腹面基部方向からの加撃により基部末端近くのわずかな部分を除いて原形をとどめない。チャート。

ピエス・エスキーユ(2)

上下両端には両極打法による数回の加撃の結果微細な剥離痕を有し、両端に近い部分では階段状剥離が観察される。また表面の剥離面においては波打つようなリングが密集し、そのリングを断ち切るようにして一本の稜線が上下両端を結んでいる。縦断面および横断面は、ともに凸レンズ状を呈している。なお当石器は剥片を素材としたものと考えられるが、その剥片の段階における剥離面が表面右端と裏面右端に認められる。チャート。

石鏃(3)

尖端部をわずかに欠くもののいわゆる二等辺三角形を呈する平茎の石鏃である。全体の調整は比較的粗い。尖端部の一部分に使用のために欠けたと思われる剥離面がみられる。また基部付近にも湾状の失損部分が認められる。チャート。

使用痕を有する剥片(4)

打面を良好に残す横長剥片で、打面に接する右側縁のほぼ中央部に約2.5cmに及ぶ使用痕が認められる。打面は平坦な剥離面である。表面の剥離面は殆どが打面方向へ剥離されており、これは主要剥離が行なわれる以前のものと思われる。チャート。

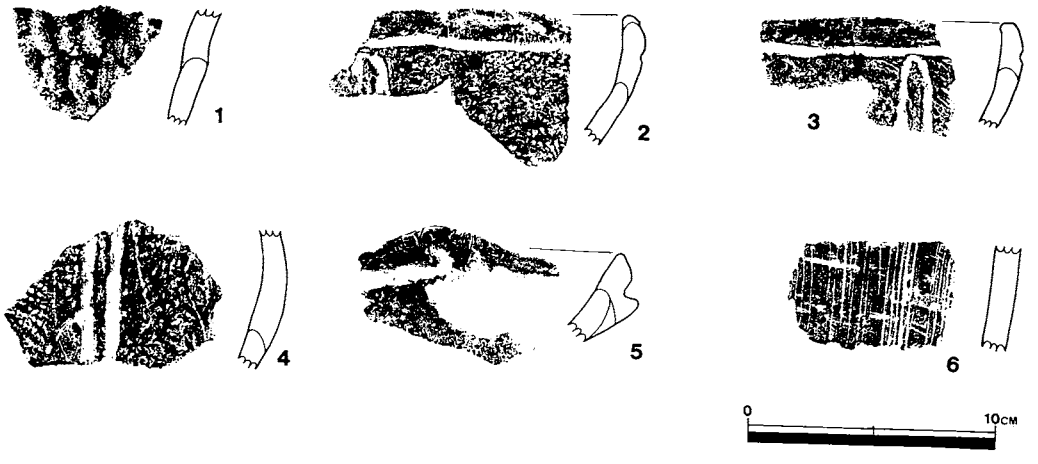
打製石斧（5～7）

5は基部方向から剥離された縦長剥片を素材としており背面に大きく自然面を残す。左側縁には大きな加工は施されていないが、右側縁では右方向からの加撃によって大きな剥離が試みられている。この数回にわたる加撃の結果、素材は石理によって大きくステップをひきおこされたがその加工の度合いは刃部側に比べ基部側でより顕著にみられる。これは器形を撥形に整えようという意図の表れであろうか。背面左半分の刃部には表裏面ともに加工が施されており、断面はV字を呈しているが、やはり石理によってステップがひきおこされている。一方右半分の刃部においては加工時における剥離の角度が浅かったために刃部角が左のそれに比べて鈍い。また刃部平面形は円弧形を呈するが、これについては刃部左半分の裏面における剥離が大きくこれに関与していると思われる。センマイ岩。

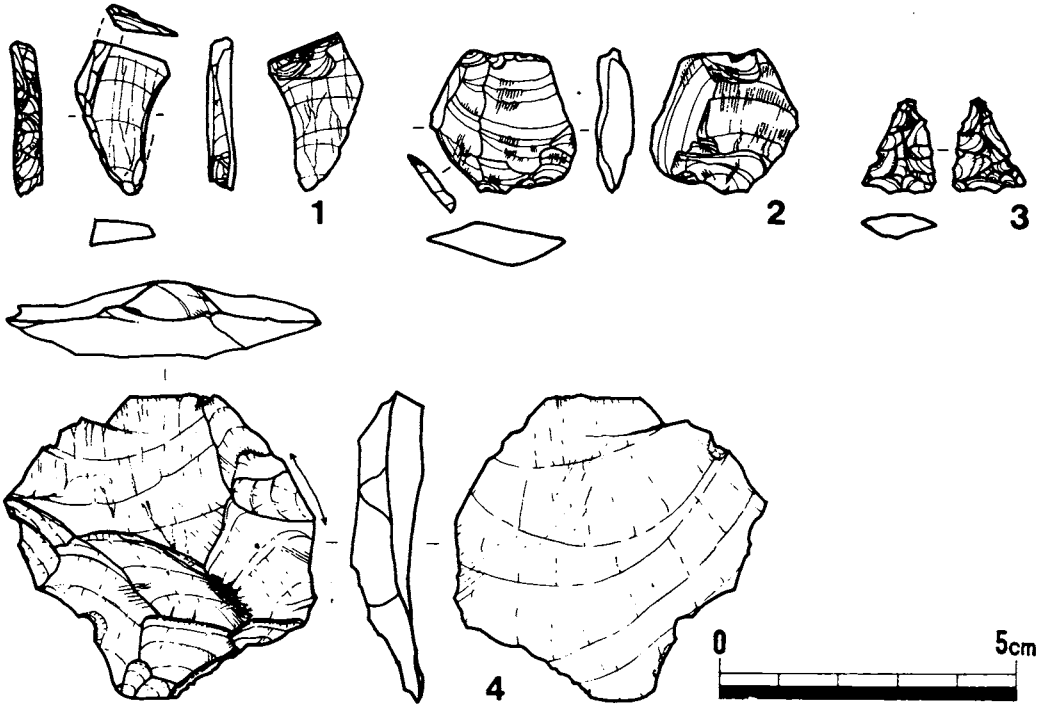
6は背面に自然面を大きく残し、横長剥片を素材とした細長い短冊形の石斧である。尚素材となった剥片作出の際、裏面左方向から加えられた力は当石器中央部において石理のために一度ステップした後右方向に抜け出ている。断面は縦横ともわずかに外彎する。また両側縁刃部よりにおいては磨耗が著しく進んでおり打製石斧の機能について若干のものを想起させる。

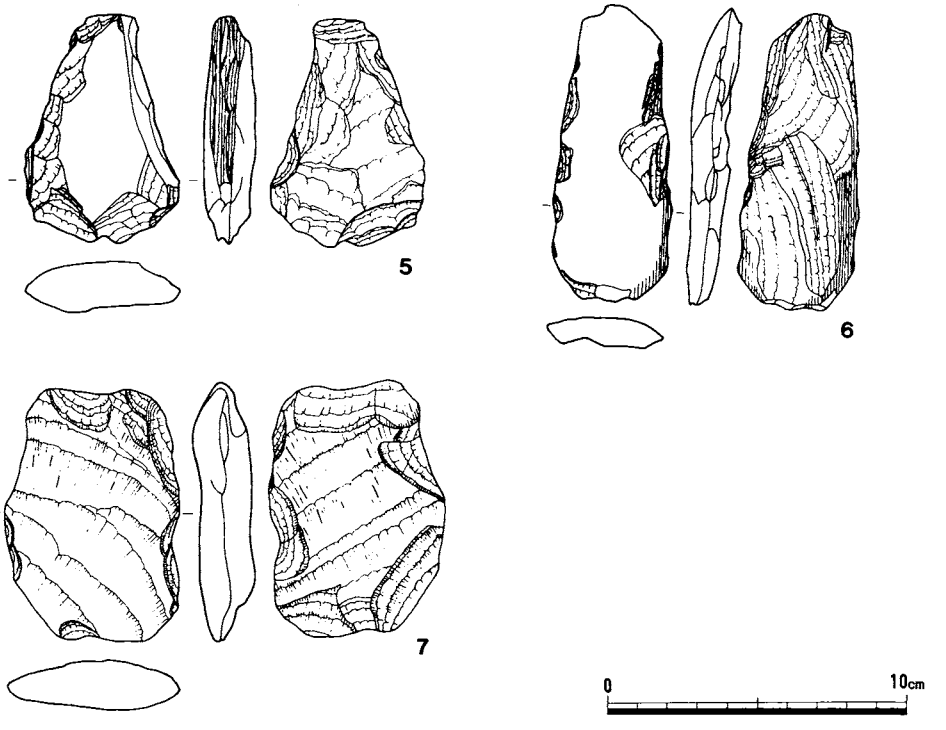
7は縦長剥片を素材とした短冊形の右斧である。基部、側縁部及び刃部とも階段状剥離による加工が施されているが、風化が著しく進んでおり剥離面の稜線は不明瞭である。

（下角圭司・菅谷みのぶ）



第16図　新開遺跡 Gd 区出土縄文土器実測図(1/3)





第17図　新開遺跡Gd区出土石器実測図(1～4は⅘、5～7は⅔)

4．新開遺跡 Ra 区の調査

新開遺跡 Ra 区は、新開遺跡の西端付近に位置する。Ra 区の北西側は北西方向に緩やかに斜下している（6節で述べる Sb 区に当たる）。調査以前は畑地であり、須恵器坏・瓦片等が比較的よく採集された地区であった。発掘時においては Sb 区に窯跡が存在することは知り得なかったが、Gc 区や Gd 区ともそれほど遠くないところに存在するため、同様の須恵器製作のための工房空間として捉えられるのではないだろうかと考えられ慎重な調査を準備した。調査を開始してみると、遺構・土層の保存状況等は悪く、畑地としての耕作は予想より深くソフトローム層（3層）の下部付近にまで及ぶことが判った。

1) 遺　構

上記のようなことから、遺構の検出も難しいのではないかと思われたが、下表に示すように近年の農耕用遺構も含めて、22基の遺構の検出ができた。このうち、土壙4基（LN01～LN04）と溝状遺構（LN05)は近年の農耕との結びつきが考えられるものであった。こうした長方形の土壙は現在でも農業の中で里芋等を冬期に貯蔵するに使用されている。またピットはすべてで17基検出されたが、このうち7基は覆土のしまりがあまりよくないことや、耕作土により近い土色を呈している等、比較的新らしい時期の所産ではないかと考えられるものであった。性格については知り得ない。発掘区の南東半に集中するピット群（Pit 06～12、14、16、17）は、覆土のしまりがよく、また Gc 区に存在した包含層と酷似した覆土をもつものであった。これらのピット群からはまったく遺物は検出されていないので、明確な性格は断定できないが、Gc 区や Gd 区との比較から平安時代の所産と考えられる可能性は高い。

あえて Ra 区について可能性を述べるならば、耕作によって遺物包含層等は消滅してしまっているが、ピットのあり方等の共通点から、Ra 区は Gc 区・Gd 区と同じような性格（工房的空間）の可能性が高い地区と言える。

2) 遺　物

出土した遺物はほとんどが小破片であるが、発掘地区全体に散布をみた。須恵器坏片がそのほとんどであったが、ほかに瓦片も比較的多く出土した。

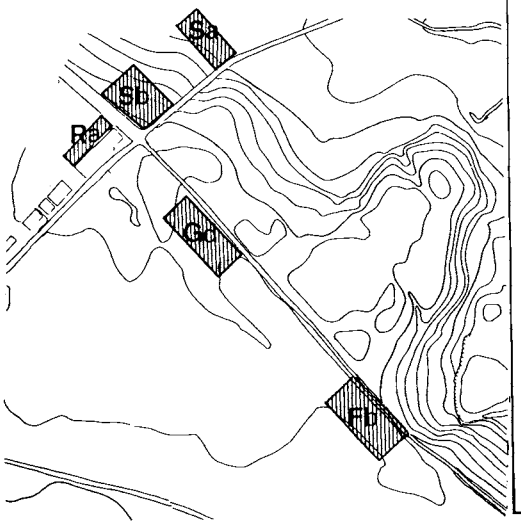
ほとんどが小破片であり、図化できるものは少ない。また接合もほとんど不可能であり、復元して器形をうかがえるものはない。とりわけ青灰色の焼成のよい遺物以外は小破片であり図化し難い。

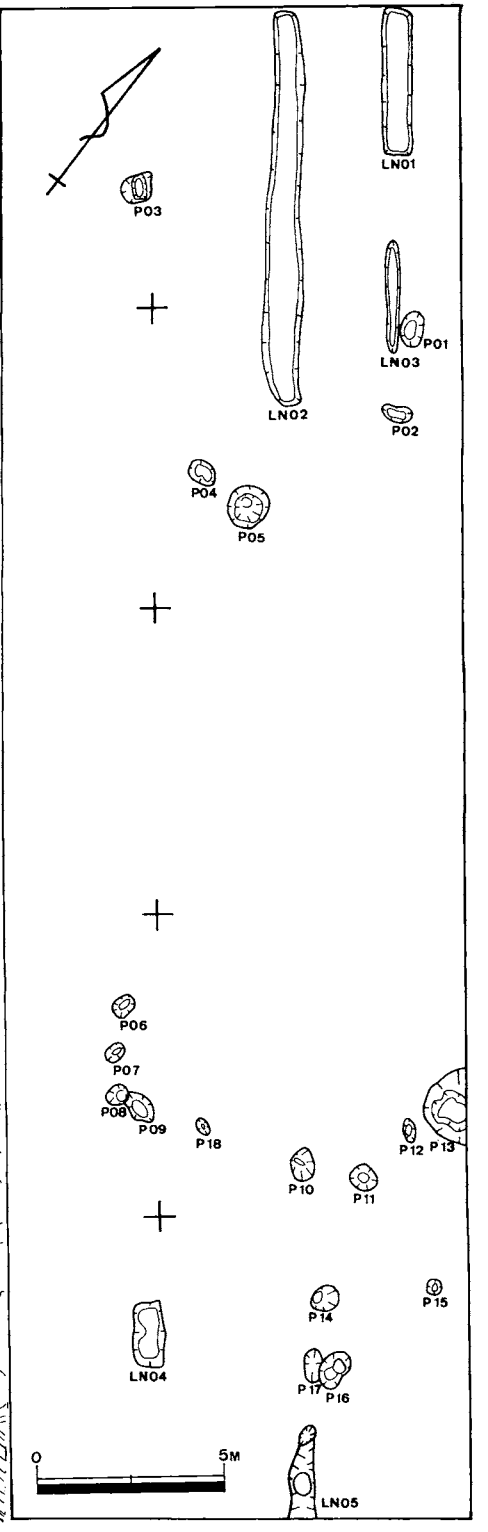
a．須恵器坏（第19図）

図示したもののうち1は口縁部から胴部の破片であり、他はすべて底部付近の破片である。1は1/5

遺構名	規模			形態	時期
	長径(m)	短径(m)	深さ(m)		
L.N.01	3.750	0.65	0.25	長方形	近　代
L.N.02	10.35	0.60	0.20	長方形	〃
L.N.03	2.90	0.45	0.15	不整長方形	〃
L.N.04	2.10	0.95	0.35	長方形	〃
L.N.05	(2.50)	0.60	0.20	溝	〃
Pit.01	1.00	0.65	0.10	楕円形	不　明
Pit.02	0.95	0.60	0.15	〃	〃
Pit.03	1.50	1.10	0.50	隅丸方形	〃
Pit.04	1.10	0.70	0.20	楕円形	〃
Pit.05	1.30	1.25	0.65	円　形	〃
Pit.06	0.70	0.55	0.25	楕円形	平安？
Pit.07	0.65	0.50	0.15	〃	〃
Pit.08	0.70	0.60	0.20	〃	〃
Pit.09	0.45	0.30	0.10	〃	〃
Pit.10	0.80	0.55	0.20	〃	〃
Pit.11	0.75	0.60	0.25	〃	〃
Pit.12	0.70	0.30	0.15	〃	〃
Pit.13	2.10		0.65	不整形	不　明
Pit.14	0.75	0.55	0.15	楕円形	平安？
Pit.15	0.45	0.30	0.10	〃	不　明
Pit.16	1.20	0.80	0.25	〃	平安？
Pit.17	0.80	0.55	0.10	〃	〃
Pit.18	0.55	0.25	0.15	〃	〃

表　新開遺跡Ra区遺構一覧表



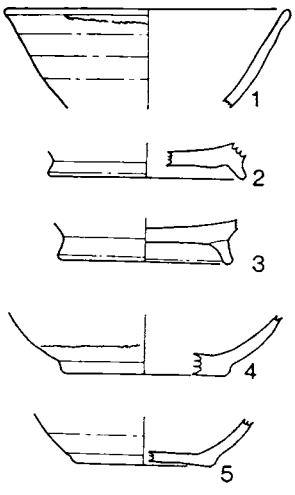


第18図　新開遺跡 Ra 区全測図(1/200)

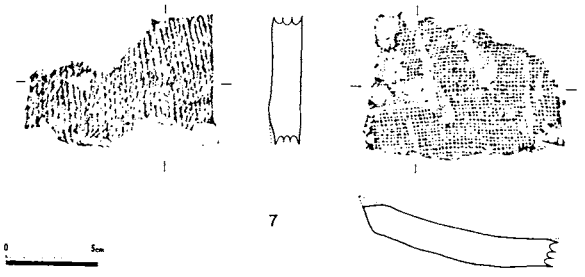
を残させる破片であり、推定口径11.3cmを計る。白色の微小砂粒を僅かに含むが、胎土は精選されている。焼成は良好で青灰色を呈する。体部はロクロ調整されているが、口縁部外面に接合痕を残す。2は高台坏の底部破片であり、底部約¼を残存させる。砂粒を若干含むが胎土は精選されている。焼成は良好で青灰色を呈する。3もまた高台坏の破片であり、底部約⅓を残存させる。細かな砂粒を含むの胎土は精選されており、焼成も良好で青灰色を呈する。高台の接合痕が断面より観察される。高台坏2・3の高台のあり方は若干異なる。いずれも外開きのふんばるような状態であるが、2は短かめの高台で断面が三角形に近い形をしているのに対して、3はやや長めで底部に面取りがみられる。4は須恵器坏の底部付近の残存率約⅙の破片である。小石を若干含むが、胎土は精選されている。黄褐色を呈し、焼成はあまり良くない。体部はロクロ調整であるが、一部接合痕を残す。5は約½を残す底部破片。白色の微小砂粒を含むが精選されており、焼成は良好で青灰色を呈す。体部にロクロ調整、底部は糸切りのままである。6も約⅓の底部破片である。小石を若干含むが胎土は精選されている。焼成は良好で青灰色を呈する。体部はロクロ調整、底部は糸切りのままである。

b．瓦（第20図）

7は女瓦の側端部を残す剥片である。小石を若干含むが胎土は精選されている。焼成は良好で青灰色を示す。凸面は縄目の叩き。凹面は布目であるが耕作時に受けたと思われるキズが両面ともはげしい。側端面は指ナデ調整されている。（松本富雄）



第19図　新開遺跡 Ra 区出土の須恵器坏(1/3)



第20図　新開遺跡 Ra 区出土の瓦(1/4)

5．新開遺跡 Sa 区の調査

新開遺跡 Sa 区は、Me 区の西隣、Sb 区の北西隣に位置する。地形的には新開遺跡の舌状部より南西側の緩やかな北西方向に傾斜する傾面のほとんど斜下した部分に当たる。しかし Me 区の窯跡（新開２号窯＝新開遺跡II報告を参照）が、約50m の東方に存在すること。Sa 区の北西方約20m の畑地よりかつてポイントが表採された（報告済＝新開遺跡 I 第131図２の石器）ことの２点より推して、いずれかの遺構の検出される可能性が強い地域であった。第　図の如く、２×２ m のグリットを基本として開掘したが、10数片の須恵器坏・瓦の小破片が表土中および２層より出土したにすぎず、遺構等の検出はなかった。

1)　層位（第22図）

遺構の検出はなかったが、表土中および２層とした層中より若干の平安期の須恵器坏片が出土しているため、層位についてふれておく。尚、この付近は道路に面していることもあって、ゴミの投棄等が著しく、それによって攪乱を受けた部分が多く明確な層位が確認できたのは部分的である。

図中、第１層は表土である。第２層はしまりがよく粘性に富む暗褐色の土層である。この層は新開遺跡内では台地下に発達がみられるものであるが、新開遺跡 Me 区窯の灰原層は漸移的に本層と変わるものであるとし、Gc 区や Gd 区の遺物包含層の土層もまたこの２層によく似た色調（粘性は弱い）を呈している。あるいはこの層は、平安期に形成された土層であるのかもしれない。第３層は、暗黄褐色をしたローム層への漸移層である。台地下の特徴であろうか赤色スコリア分が多く含まれる。第４層はソフトローム層であるが、粘性度は高い。黄色味が強いこと、赤色スコリアが多いこと等は台地下のロームの特徴であろう。５層はハードローム層。

2)　遺物（第23図）

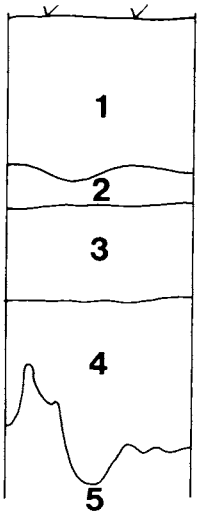
１～４は、いずれも須恵器坏の破片である。１～３は須恵器坏底部の破片で、４は口縁部から胴部付近の破片である。

１は底部３分の２の破片である。黄褐色の色調を呈し、焼成はあまりよくない。胎土には白色砂粒を若干含むものの精選されている。底部から若干垂直に立ちあがり開いていく。底部径6.4cmを計る。右回転の糸切り。ロクロしあげされている。

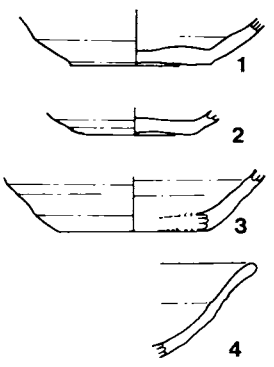
２も底部付近４分の１の破片である。白灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は良く精選されている。底部から２㎜程垂直に立ちあがり開いていく。右回転の糸切り。ロクロしあげされている。

３も底部付近の破片で、底部５分の１を残す。青灰色の焼成の非常に良好なものである。胎土には若干の小石を含むが精選されている。右回転の糸切り。ロクロしあげされている。

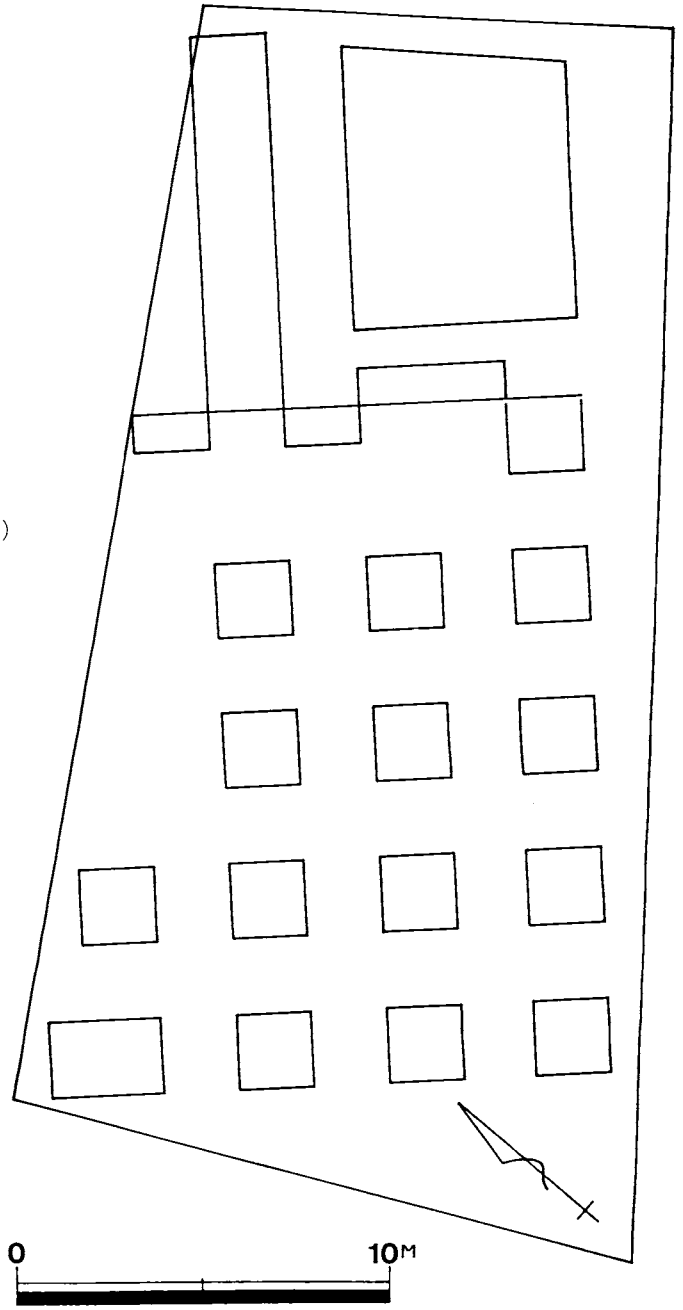
4は口縁部から胴部にかけての破片であるが、残存率が悪く法量を知り得ない。焼成は良好で青灰色をしている。胎土には白色の砂粒が若干含まれるものの精選されている。胴部から口縁部に向かい開いていくと思われ、口縁部付近で若干外反する。右回転のロクロしあげをされている。(松本富雄)



第22図　新開遺跡 Sa 区土層図(1/20)



第23図　新開遺跡 Sa 区出土土器(1/3)



第21図　新開遺跡 Sa 区全測図(1/200)

6．新開遺跡 Sb の調査

新開遺跡Sb区は行政上では三芳町竹間沢354－1に当る。この付近は江戸時代末期（天保年間）に開拓されたことにより小字名を新開という。本遺跡の名称もその小字に由来している。区画整理等の原因で新開遺跡はすでに昭和51年度から発掘調査されてきている遺跡であり、その成果はいくつか報告書として刊行されているが、現在までの調査の成果にもとずけば、本遺跡は北西側に緩やかな谷をもつ遺跡であり、かなり広範囲に広がっていることが理解される。

以下にいままでの調査の成果を簡単にまとめて、遺跡の環境に替えたい。

新開遺跡の発掘調査の発端となったのは、三芳町みずほ台土地区画整理事業であった。昭和51年から昭和55年までの5ヶ年を費やし、区画整理地区に存在する遺跡の全域をほぼ調査したが、先土器時代の遺構群が舌状に突出した台地を中心に確認され礫群約50ヶ所が発見されている。平安時代の遺構として検出されたのは窯業関連の遺構ばかりである。現在までのところ須恵器焼成登り窯2基と工房跡3軒が散在して発見されている。

また、昭和53年以降、区画整理地区以外の西南側にも開発等の原因により試掘調査、発掘調査がしばしば実施されるようになってきた。これまでに平安時代の遺物や包含層等が検出されてきており、それらのうちには窯業遺構の存在の可能性を示す遺物もいくつか確認されはじめてきている。

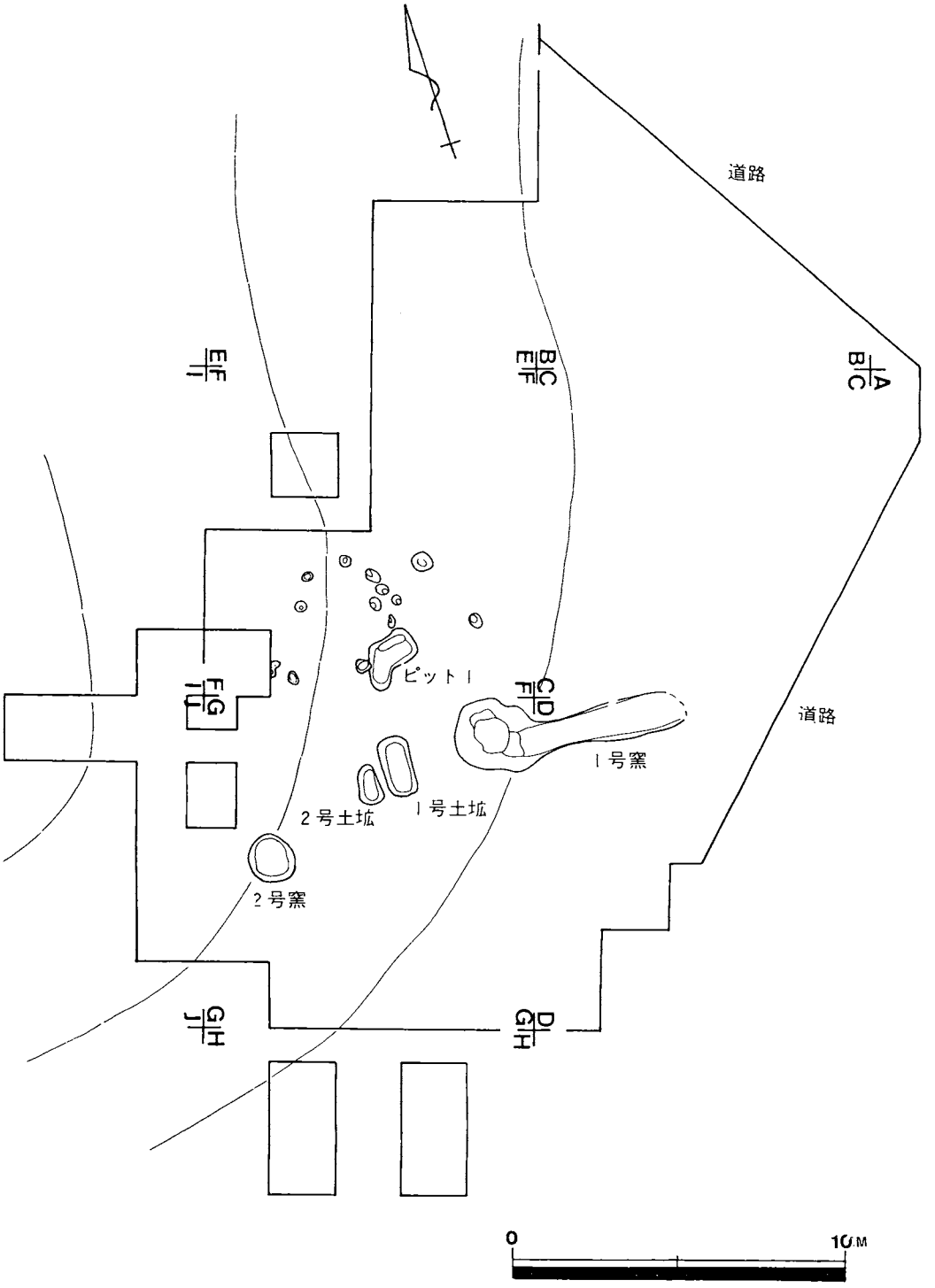
今回発掘調査された新開遺跡 sb 区の面積は約500㎡であり、検出された遺構は平安時代の土器焼成窯2基（うち1基は斜面に構築された登り窯であり、灰層を窯体下の斜面にもつ）と同時代の土壙2基と時代不詳のピット数基であった。1号窯としたものが登り窯であり、保存状態は比較的良く構築状況等がよく理解された。焼成部上半から煙道部付近の床面はローム層の上層である黒色土層を地山として構築されていたにもかかわらず、床面や床面下の貼り付け粘土の状況等も把握された。2号窯としたものは、浅く掘りくぼめられただけの野焼きとでも呼ぶような焼成をする所謂土師窯の形態を呈するものであった。焼成された土器は、窯内に残された破片から推察するに、ロクロしあげされた酸化焔焼成による坏と胴部にヘラケズリを残す甕であった。関東では希有な発見例であり、土器窯業の変遷を理解するには良好な資料と言えよう。（松本富雄）

1）　層　位（第25・26図）

Sb区とした地区は台地肩部付近から低地部にかけての斜面に当たる。傾斜角は5～20°と比較的ゆるやかである。斜面中位の傾斜角度の一番強い部分に1号土器焼成窯（新開3号窯）が形成され、ほとんど低地部に近くゆるやかになった斜面に2号土器焼成窯（新開4号窯）が形成されていた。

第　図に示した層位は1号土器焼成窯（新開3号窯）の縦セクションとその延長で観察したもの（a－a′）と窯に10°ずれたグリットのライン上で観察したもの（b－b′，c－c′）である。

3本のセクションに統一した土層番号を付し、その番号順に土層の説明をしながら、Sb区付近の土



第24図　新開遺跡 Sb 区全測図(1/200)

層からみた様相を説明していきたい。

1層から4層は後世の攪乱を受けた層である。

1層は最近の攪乱と考えられる。

2層は表土より上に盛られた埋土である。

3層は表土である。草木痕を含みパサパサした土層であり、攪乱を激しく受けている。

4層もやはり攪乱を受けた層である。かってこの地区は開墾されて畑地となっていたことがあると聞くので、開墾時の耕作の跡ではないかと思われるものである。表土よりも黒ずんだ層であるが、パサパサしてあまりしまりがない。

5層から6層は、1号土器焼成遺構（sb区L.N.01）の燃焼部から焼成部にかけての窯体内に充填されていた土層である。

5層は赤褐色のスサ混じりの層である。

6層は多量のスサの混入する層であり、遺物の混入も激しい。

7層から13層とした層は1号土器焼成遺構の焚口部から焚口ピットに充填されていた土層であり、灰・木灰・スサ・遺物を多く含む層である。これらの層は灰層として考えられるものであるが、セクションの観察より7層から9層は5層との関係から、直接窯から掻き出されたとは考えられず、焚口部ピット周辺に遺棄されたものが、2次的作用（人為的か自然かは不明）によって焚口部に充填されたと考えられるものである。これに対して、10層から13層は直接窯から掻き出された可能性をもつものである。尚、ここで7層から13層とした層は平面図で灰層1（H－1）とした層に相当する。

7層は焼土粒・スサを含む、やや茶味のある漆黒色の層である。

9層は焼土粒・スサを多く含むが、7層に比べてスサの量が多い漆黒色の層である。

9層は焼土粒・スサを多く含むが、6層に比べてスサの量が少ない。

10層は木炭・遺物を多く含む漆黒色の層である。

11層は焼土粒を多量に含む漆黒色の層である。

12層は炭化物・焼土粒・スサを含むが純性の灰に近い黒灰色を呈する層である。

13層はローム粒子混じりの漆黒色土層である。

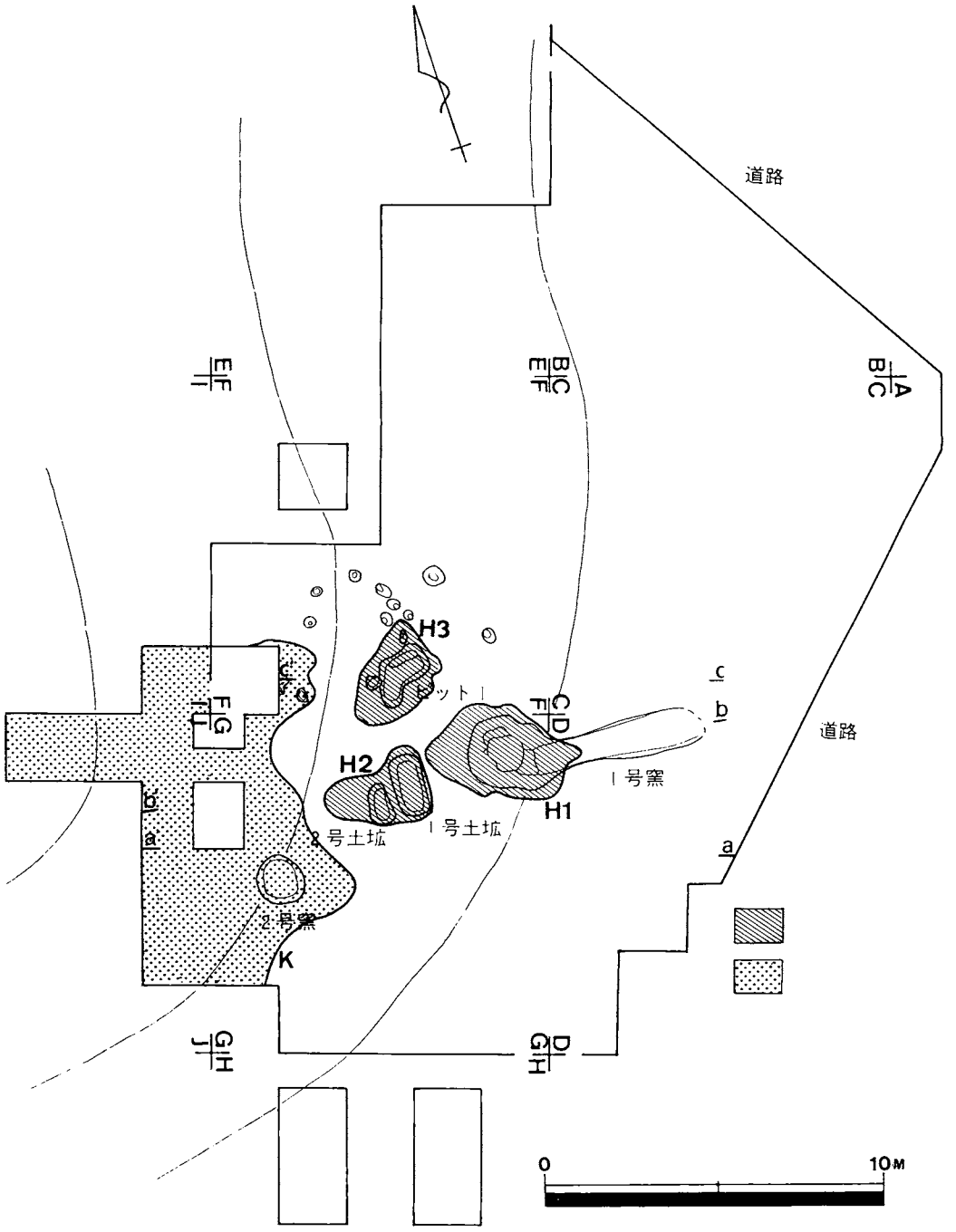
14層から16層は1号土壙(内の覆土中)に充填されていた土層である。平面図では灰層2（H－2）とした層にあたる。14層は1号土壙にのみ充填されているだけでなく、土壙北西側にもいくぶんの広がりをみせている。北西側の土壙の確認面はローム層の漸移層であり、その漸移層の上に14層がのる状態になっていた。漸移層が本遺構の形成期、あるいは廃絶期の地表面とは考えられないことから推して、この土壙付近は、窯操業時にはローム層漸移層面までテラス状に削平されていた可能性が高かったように思われる。

14層は木炭・遺物を多く含む漆黒色の土層である。

15層はローム粒子を幾分含むが14層とそれ程の差はない。

16層はロームブロックを幾分含む漆黒色の層である。

17層は平面図で灰層3（H－3）とした層である。木痕跡ではないかと思われるPit1にもこの層は



第25図　新開遺跡 Sb 区全測図と灰層・漆黒色土層およびセクションの位置（1/200）

第26図　新開遺跡 Sb 区土層図(1/80)

充填されていた。14層と酷似した木炭・遺物を多く含む漆黒色の土層であった。

18層とした層はやや粘性味のある茶味のある漆黒色土層である。本層の上部には遺物が多く検出されたが、下部では遺物がほとんど検出されなかった。分層は不可能であった。18層は窯操業時における表土層ではなかろうかと考えられる。上部に遺物が多く検出されたのは、上部に灰層等から流れ込んだ遺物が多く混入したためと考えられよう。

以上、Sb区の土層について述べたが、1層から4層の後世の攪乱によって灰層、あるいは当時の文化層は決して良好に保存されていたとは言えない。しかし、1号土器焼成窯の下部に、形状・規模等は不明であるが、テラス状の空間が付設されていた等を理解させるものであり、窯業空間のあり方を知る上では今後考慮していくべきものと言えよう。（松本富雄）

2) 遺　構

a．1号土器焼成遺構（新開3号窯）（第27図～第30図）

本窯は傾斜角度8～12度の斜面に構築されたもので、窯体の傾斜は10～15度を計る前庭部をもつ無階無段登り窯である。煙道部付近の床面の一部が攪乱を受けていたこと、天井部の全体が崩壊していたこと、焼成部付近の壁が僅かな立ちあがりを残すのみであったこと等はあるものの、ほぼ全体を推測できる状態で残存していた。規模は長さ約4.40m、最大幅を焼成部にもち約1.23m、最小幅を燃焼部にもち約0.74mで、燃焼部で最も狭くなり、焼成部で開いていく形態を呈していた。

窯壁はスサ・小石・土器小片を混入させた粘土で構築されていた。残存状態は焚き口部と燃焼部が良好で、最も残存するところで床から約45cmを計る。とりわけ燃焼部付近ではエレベーションd－d′に示す如く残存状態が良好で、天井部がアーチ状を呈していたことを推察させる。またエレベーションd－d′に観察できたのだが、窯壁は4次の補修の痕跡が観察され、序々に規模を小さくさせながら4回以上の窯操業を理解させる。

窯床は煙道部付近で一部攪乱されているものの保存状態が比較的良かった。焼成部の中間から煙道部にかけては黒色土層中を掘りくぼめ、そこに粘土を4～7cm程貼り、さらにその上に床面層を構築していた。焼成部の中間から下部すなわち焼成部・焚き口部はローム層を掘りくぼめ床面積を構築していた。その上に瓦片、甕片、小礫を敷くように、坏破片は伏せるように混入させながら粘土と砂状の土で床面を形成させていた。窯壁では補修の痕跡が観察され4回以上の操業を理解させたのであるが、床面の観察からも4次の窯床の構築を理解することが可能であった。このことは縦エレベーションであるa－a′から容易に確認できる。縦エレベーションで1とした層は最終窯床である。そして2とした層が1とした最終窯床以前の窯床の一部の残存である（2次窯床）。この層は床面全域に広がる状況でない（窯壁近くには確認できない－エレベーションb－b′図参照）こと等から推察して、最終窯床（1層）を構築する際に上部が削平されていると理解される。3次窯床は焚き口部付近に一部分残されている（9層）のみである。3次窯床構築以前に生じた所謂舟底状ピットを埋めるように充填された層である。層として確認された窯床面は以上3次であるが、それ以前に生じた舟底状ピットを3次

窯床の残存である9層が埋めていることを考え合わせれば、少なくとも3次＋1次の窯床面構築を理解することはできよう。

窯体内から出土した遺物は第　図から第　図にその出土状況を示したが、覆土中出土のもの、最終窯床出土のもの、3次窯床（第　図セクションにおける2層とした床面）出土のものに分けることができる。残念ながら最終窯床上、すなわち最終焼成時に焼成されたと確証される遺物の出土は全くなかった。覆土中において出土したものは瓦片（大型のものも含む）、甕片、須恵器坏片で占めるが、これらは大量のスサとともに出土したもので、天井部および側壁上部付近の壁内に補強材として組み込まれたものと判断されよう。最終窯床面の出土遺物もまた瓦片、甕片、須恵器坏で占めるが、瓦片は凸面が上位に向けられたもの、甕片は外面を上位に向けられたもの、底部をもつ坏類は底部を上位に向けられたものが多いことが観取された。また写真図版にも付したが、焼台と使用されたらしく坏底面の跡が明瞭に残るものが多く見られた。3次窯床（第28図2層）からも多量の遺物が出土している。最終窯床と同様に瓦・甕・須恵器坏片の破片類が多く出土し、同様に瓦は凸面を、甕は外面を、底部をもつ坏類は底部を上位に向けられたものが多かった。こうした規則性が最終窯業、3次窯床ともに見られたということは、床面である故の特徴と言えよう。

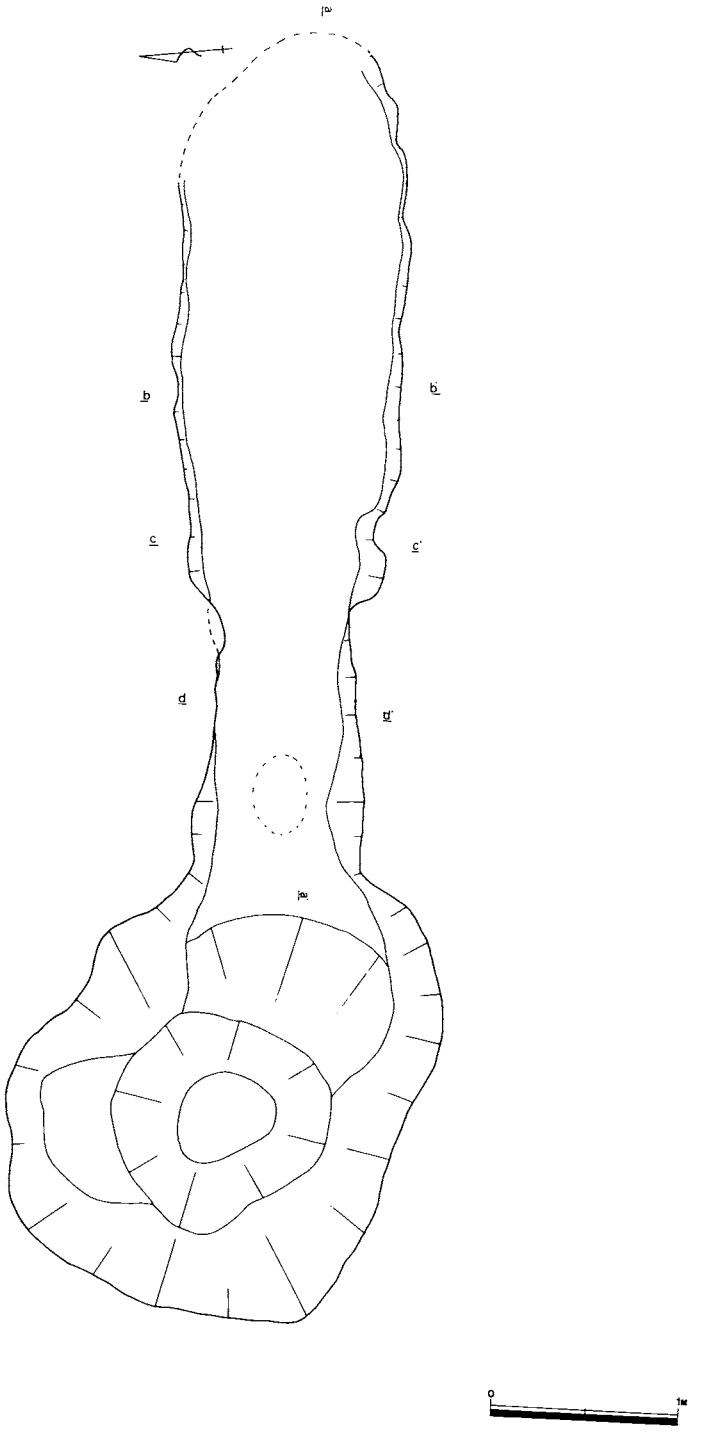
さて、これらの層から出土した遺物は調査終了後の整理作業において接合操作の課程を踏んだのであるが、その接合操作においては、甕・瓦類は3次窯床・最終窯床・覆土中のもので接合されたものが多くあったが、坏類についてはそうしたことはほとんどないという結果が導き出された。灰原において瓦・甕類の総数が坏類に比して極めて少なかったことや（第2節）、焼台として使用された遺物の多くに残る痕跡が坏類のものばかりである（写真参）等を考慮に入れて、このことを考えると、瓦・甕類は本窯で焼成されたものではなく、本窯構築の際に使用されたものと判断され、本窯では坏類を主体的に焼成したということが裏付けられるのである。　（松本富雄）

b．灰層と灰原（第31図）

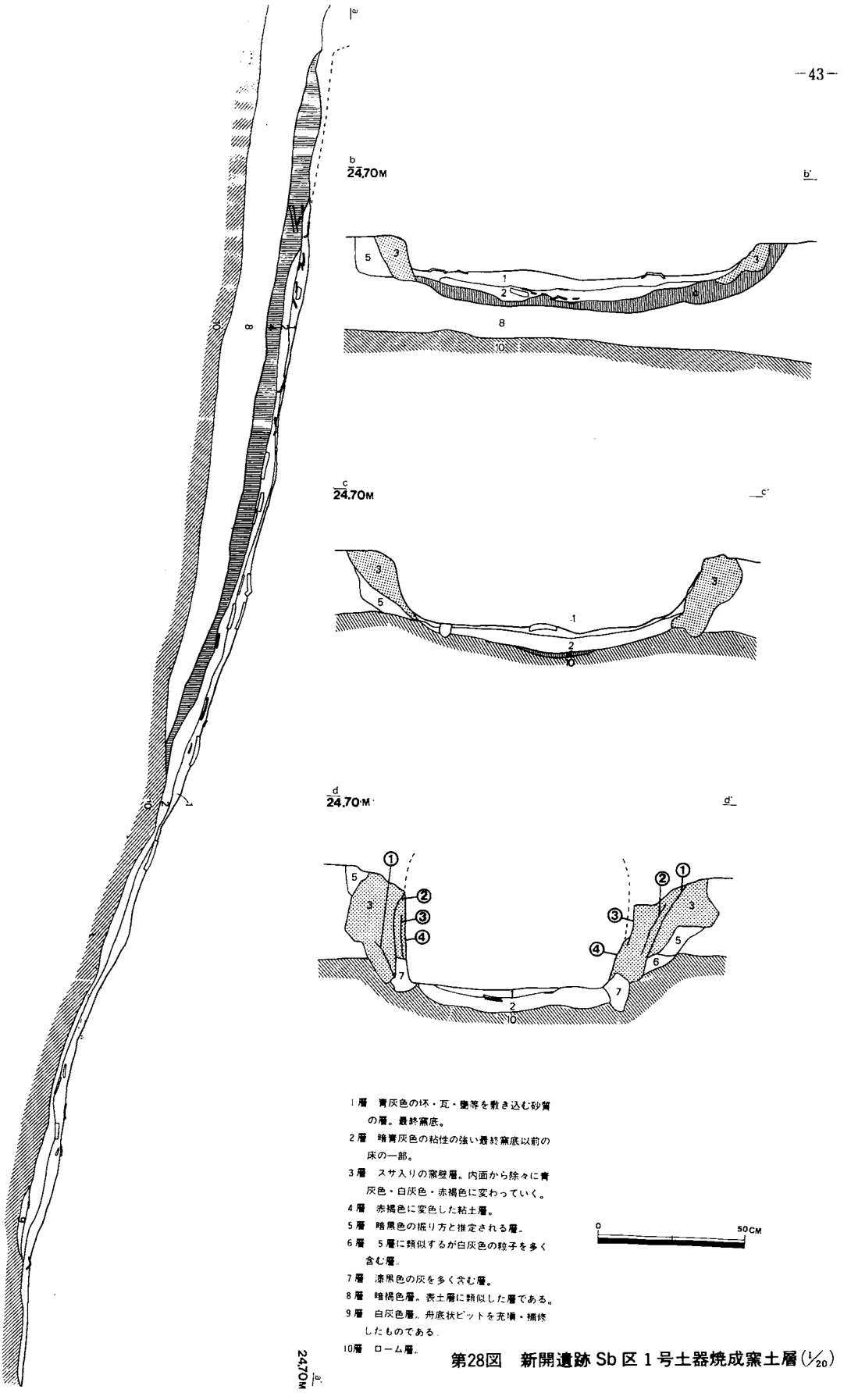
1号窯の灰層の保存状態は極めて悪いものであり、1号窯の焚口部から焚口部ピット付近（H－1）と、1号・2号土壙の覆土および上面（H－2）と、ピット1の覆土および上面（H－3）に残存していたに過ぎない。1号窯において少なくとも4次の窯業活動がなされたことが、窯セクションのあり方から捉えられたのであるが、4次を分け得るような状態では灰層は残っていなかった。また、斜面下部の粘性のある漆黒色土層（K－1）の上面に遺物の散布が見られたが、これは灰層・灰原と認定するよりも遺物散布域とした方が良い状況であった。尚、この漆黒色土層は遺物が上層にのみ検出されるというあり方からして、窯操業期の表土層と推定される。

こうした状況であったため、1号窯の灰層・灰原がどのように形成されていたのかを明確にすることは、発掘調査によってはできなかった。

表土中の遺物はすでに攪乱を受けており原位置を留めるものではない。したがって表土中の遺物のあり方から何かを導き出そうとするのは危険であると思われる。しかし、ここではそれを知りつつ、表土中の遺物のあり方から、発掘調査では理解できなかった灰層・灰原の形成状況を検討してみた。

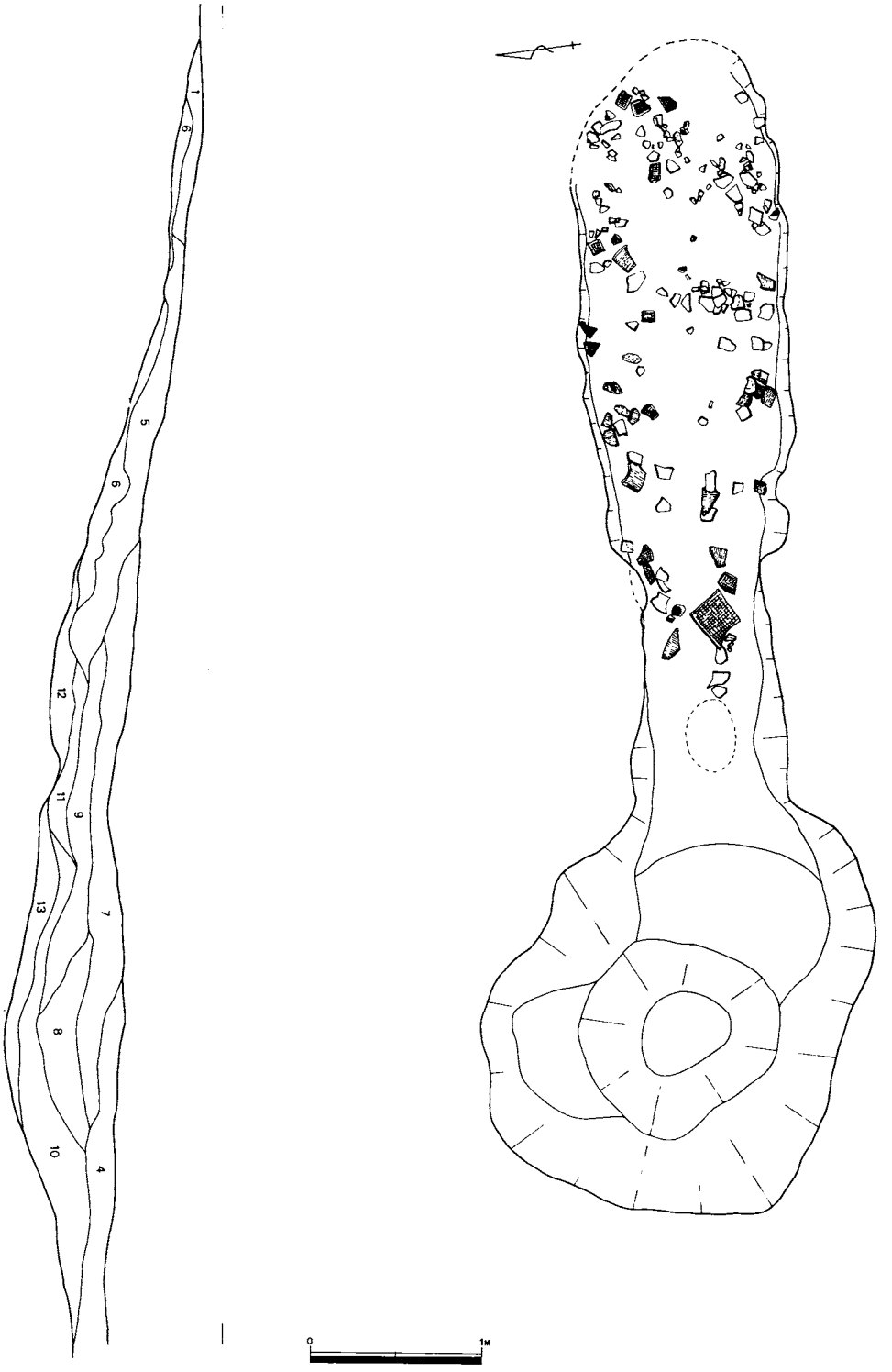


第27図　新開遺跡 Sb 区 1 号土器焼成窯全測図(1/40)

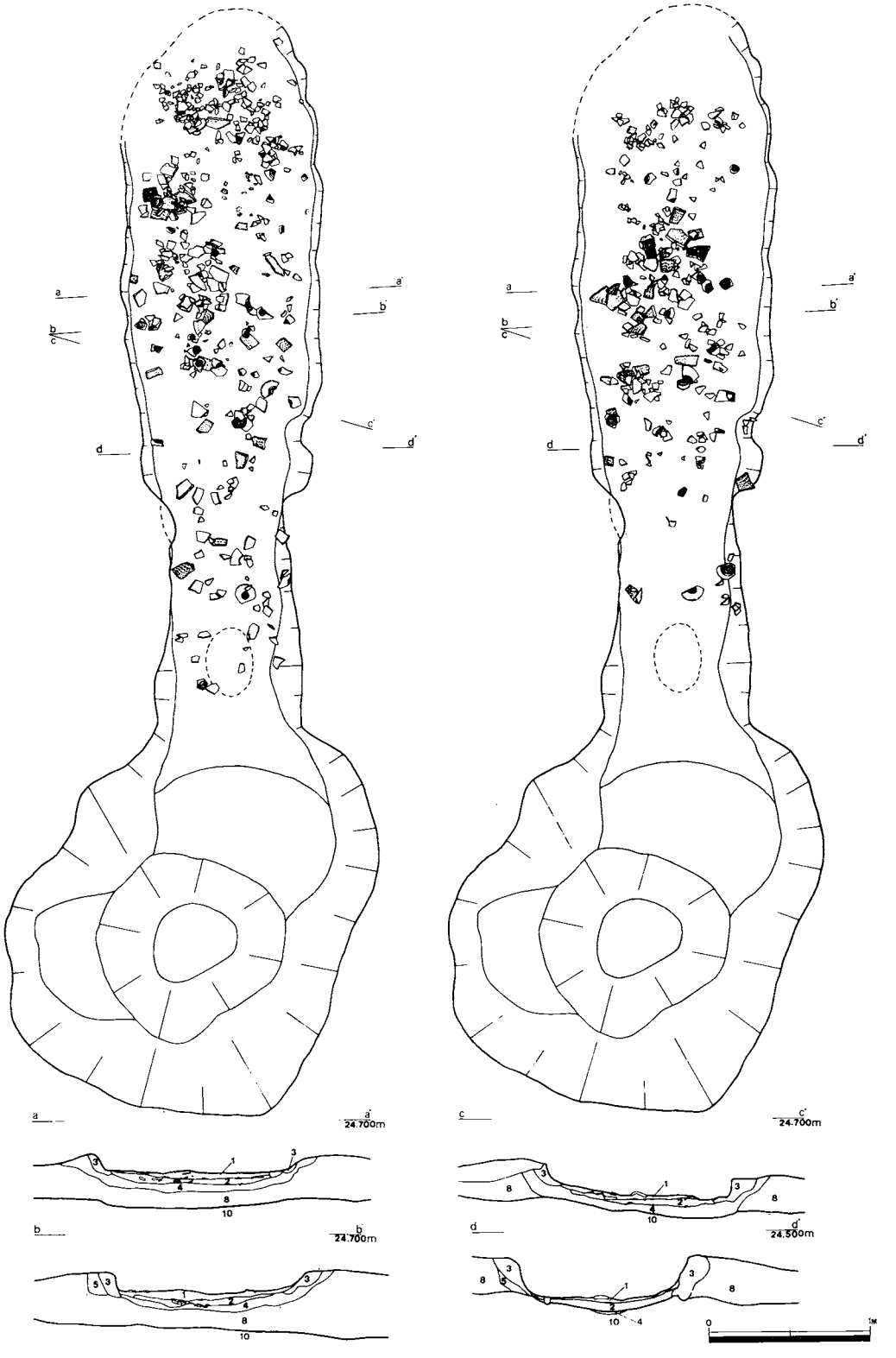


1層　青灰色の坏・瓦・塼等を敷き込む砂質の層。最終窯底。
2層　暗青灰色の粘性の強い最終窯底以前の床の一部。
3層　スサ入りの窯壁層。内面から除々に青灰色・白灰色・赤褐色に変わっていく。
4層　赤褐色に変色した粘土層。
5層　暗黒色の掘り方と推定される層。
6層　5層に類似するが白灰色の粒子を多く含む層。
7層　漆黒色の灰を多く含む層。
8層　暗褐色層。表土層に類似した層である。
9層　白灰色層。舟底状ピットを充填・補修したものである。
10層　ローム層。

第28図　新開遺跡 Sb 区 1 号土器焼成窯土層(1/20)



第29図　新開遺跡 Sb 区 1 号土器焼成窯覆土中の遺物全測図(1/40)



第30図　新開遺跡 Sb 区 1 号土器焼成遺構最終次(左)・(1/40)　第 3 次(右)窯床出土遺物全測図(1/40)

第31図１～８は表土中の遺物の出土量をグリットごとに数字で図表化したものである。遺物量をみると、１号窯の主軸の北側と南側には差が生じていることが理解できる。

表土中から出土した遺物のうち坏が圧倒的に多い。まず坏のグリットごとの出土量からみてみると、200以上の坏片を出土しているグリットは、F－02、F－06、F－07、F－11、F－12、F－16、F－17、F－21、F－22、C－01、G－04、G－15、G－20、G－24、I－21、J－20、J－25である。

これらのほとんどが、１号窯の主軸より北側にずれていることが理解される。

土師器甕は出土量は圧倒的に少なく、比較の対象としては捉え難い面をもってはいるのであるが、スサや須恵器坏・須恵器甕・瓦とはやや異なった散布をみせている。まず、C－０８、C－09、C－10、C－13、C－14、C－15に分布をみるが、この部分は他の遺物の出土量には際立った特徴を示していない。また、１号窯の主軸方向およびその南側に分布をもつところも他の遺物とは異なるものである。

さて、以上の如く表土中には遺物の分布がみられた。先にもふれたが、原位置を留めていない状況から灰層・灰原の形成の様相を捉えることは危険であるかもしれない。しかし、概略の様相を捉えることはできるのではないだろうか。表土中の遺物の分布状態から見る限りにおいては、灰層・灰原の形成は窯体北脇（C－01、C－02、C－06グリット付近）から、窯体の主軸より北側になされたと推定できまいか。主軸より南側に灰層・灰原が形成されなかった背景には南側が作業場的空間として使用されていたとの推察も可能ではないだろうか。（松本富雄）

c．２号土器焼成遺構（新開４号窯）（第32図）

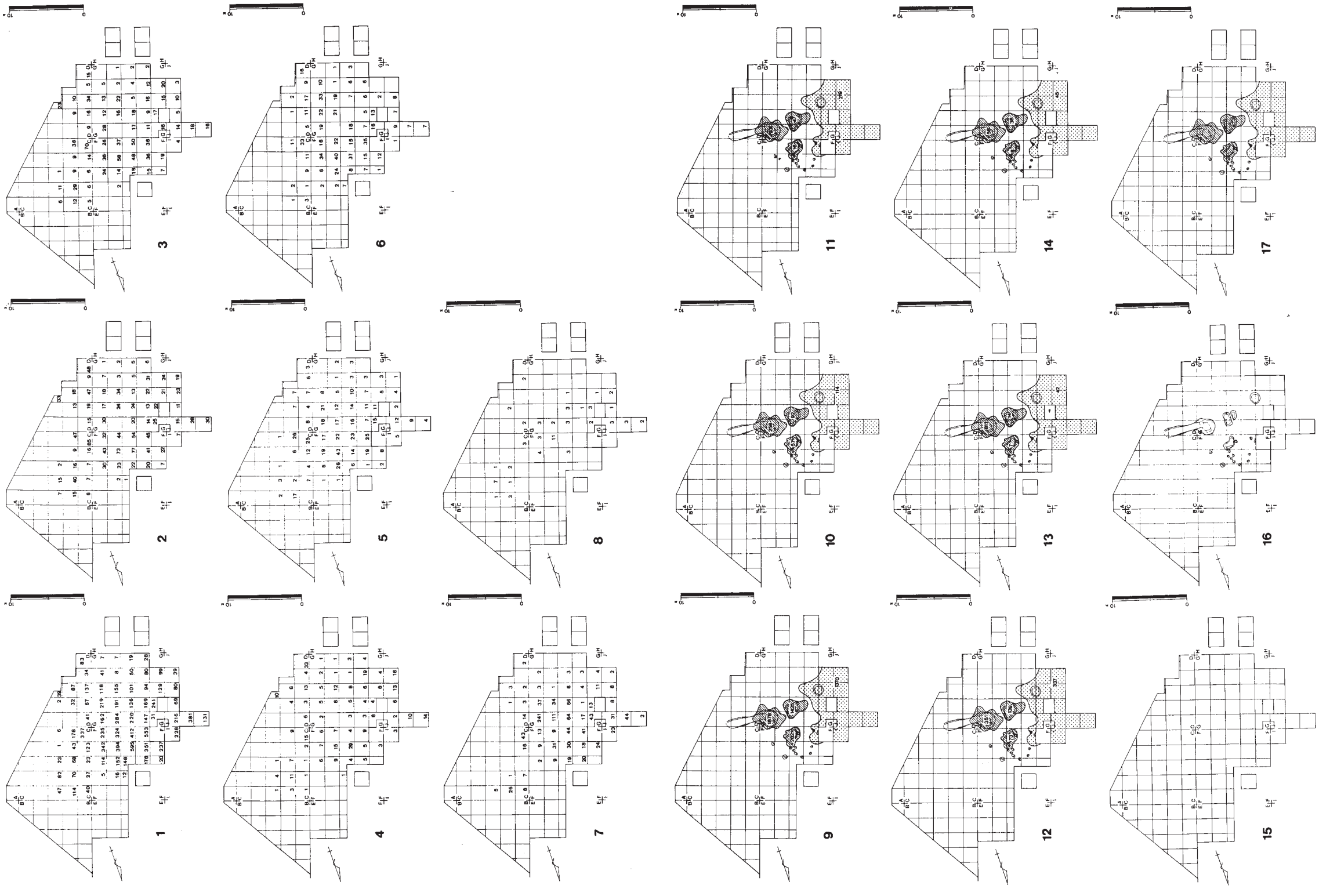
本窯は漆黒色土層（K層・18層）除去後に検出されたが、本窯内、１層のあり方からして漆黒色土層を切り込んで形成されていたと考えられる。（注１）遺構平面形はほぼ円形を呈し、径は南北約1.45m、東西約1.36mを計る。窯底面は遺構確認面から深さ約27cmを計り、ほぼ平坦である。北側の壁は窯底面から急な角度で立ちあがっているが、南側の壁は窯底面から緩やかに立ちあがっていく。窯底面下は地山が焼土化しており、厚いところで約８cmを計る。またその焼土化した層のさらに下層も厚いところで約10cm程生焼けしていた。

覆面は、１とした層が１号窯で焼成されたと思われる遺物を多く含む漆黒色の層、２とした層が１層と焼土粒の混合層、４とした層が、赤褐色の焼土の小ブロックや粒子で構成された焼土層であった。この層に遺物が多く含まれている。

４層からは約70片を数える遺物が出土しているが、いずれも酸化焔焼成の遺物のみ出土させる点、酸化焔焼窯であると判断してもさしつかえないだろう。

d．土壙（１号土壙・２号土壙）（第33図）

２基の土壙は１号窯の長軸上に並び、平面形はいずれも隅丸方形である。いずれも壙底面は平坦であり、壁は急斜で立ちあがる。両土壙の覆土には１号窯の灰層が充填されており、（注２）いずれの土壙も１号窯の操業時に開掘していたものと思われる。性格は不明である。



第31図　新開遺跡 Sb 区遺物出土状況図

1号土壙は長径約1.90m・短径約0.85m・深さ約0.30mであった。2号土壙は長径1.15m・短径約0.65m・深さ約0.34mであった。

e．ピット群（第34図）

1号窯の北西方向に都合13基のピットが確認された。しかし、これらのピットは不規則な位置関係にあり、柱穴とは考えられないものであった。覆土のいくつかには、枯れ草等も混入しており覆土も表土層とそれほど変化がないことから考えるとごく近年のものと考えてよさそうである。この付近では、晩秋に山芋を採集する人々を山野に多く見かけるが、あるいはこれらのピットはそうした人々の痕跡ではないだろうか。

しかし、ピット1についてはやや異なった性格、時代を考えてよいようである。ピット1は不規則な平面形であると同時に掘り方も不規則であった。しかし充填されている覆土は上層部が1号窯の灰層と思われるものであった。あるいは1号窯操業時に掘りおこされた木根跡ではないだろうかと考えられるものである。

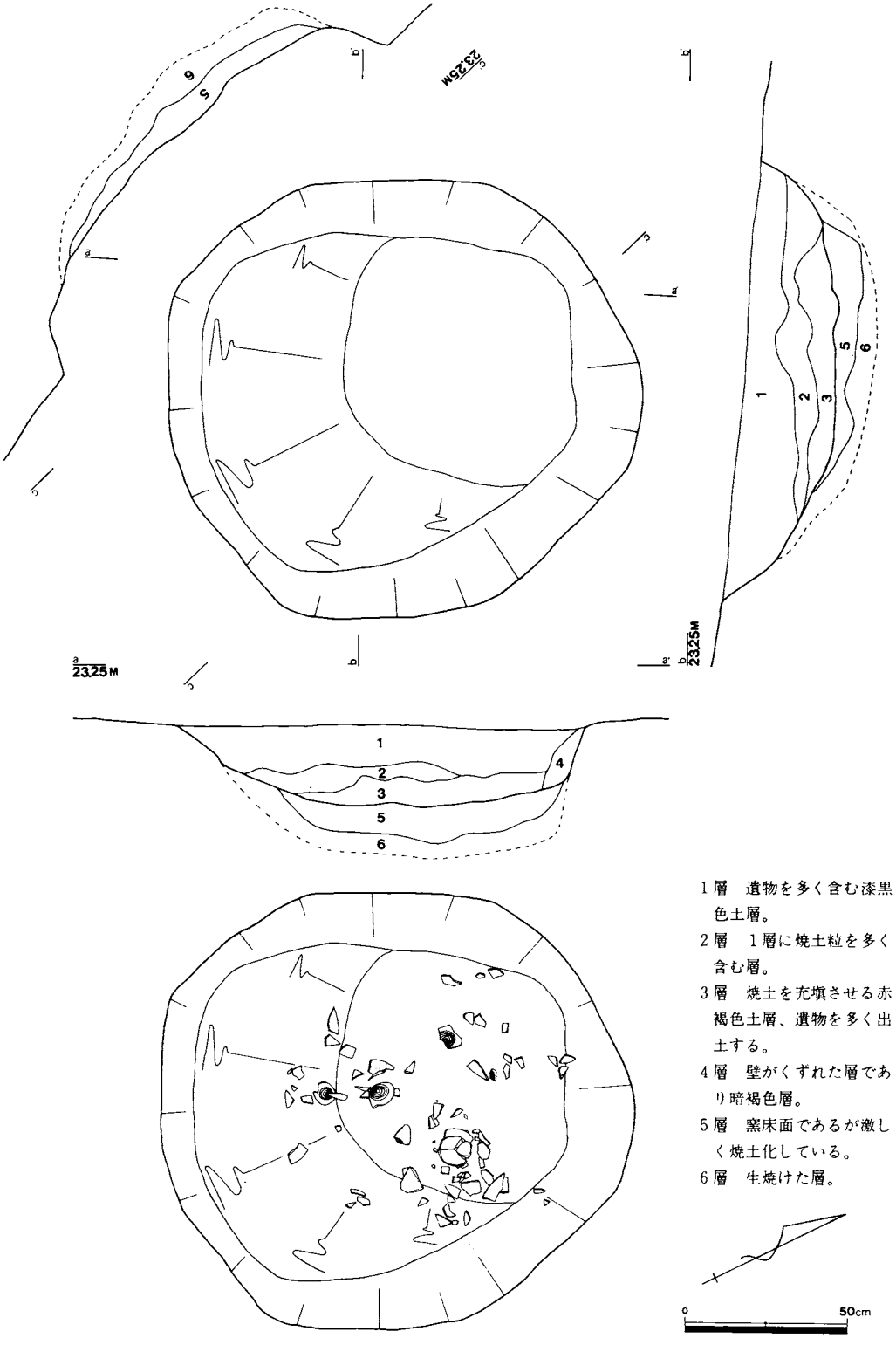
注1　2号土器焼成窯が検出されたのはローム層の漸移層面であった。しかし、平安時代の所産であることからして、漸移層面が遺構形成面であったことは考えられず、漆黒色土層を切り込んで形成されていたものと考えられる。

2号土器焼成窯の覆土中の第1層とした層は、土層中18層とした漆黒色土層に酷似した層である。（それ故、漆黒色土層面において遺構の確認が困難であった）。この第1層である漆黒色土層からも遺物が多く検出された。しかし、それらの遺物は2号窯のものではなく、還元作用の遺物が多く、1号土器焼成窯からの流れ込みと理解された。この2号土器焼成窯周辺には漆黒色土層が拡がりをもつが、土層説明の項でも18層として説明したが、上部に1号窯からの遺物が多くみられ、下部には遺物がほとんど検出されていない。となると2号土器焼成窯における第1層は漆黒色土層（18層）の上部層が入り込んだものと理解されよう。

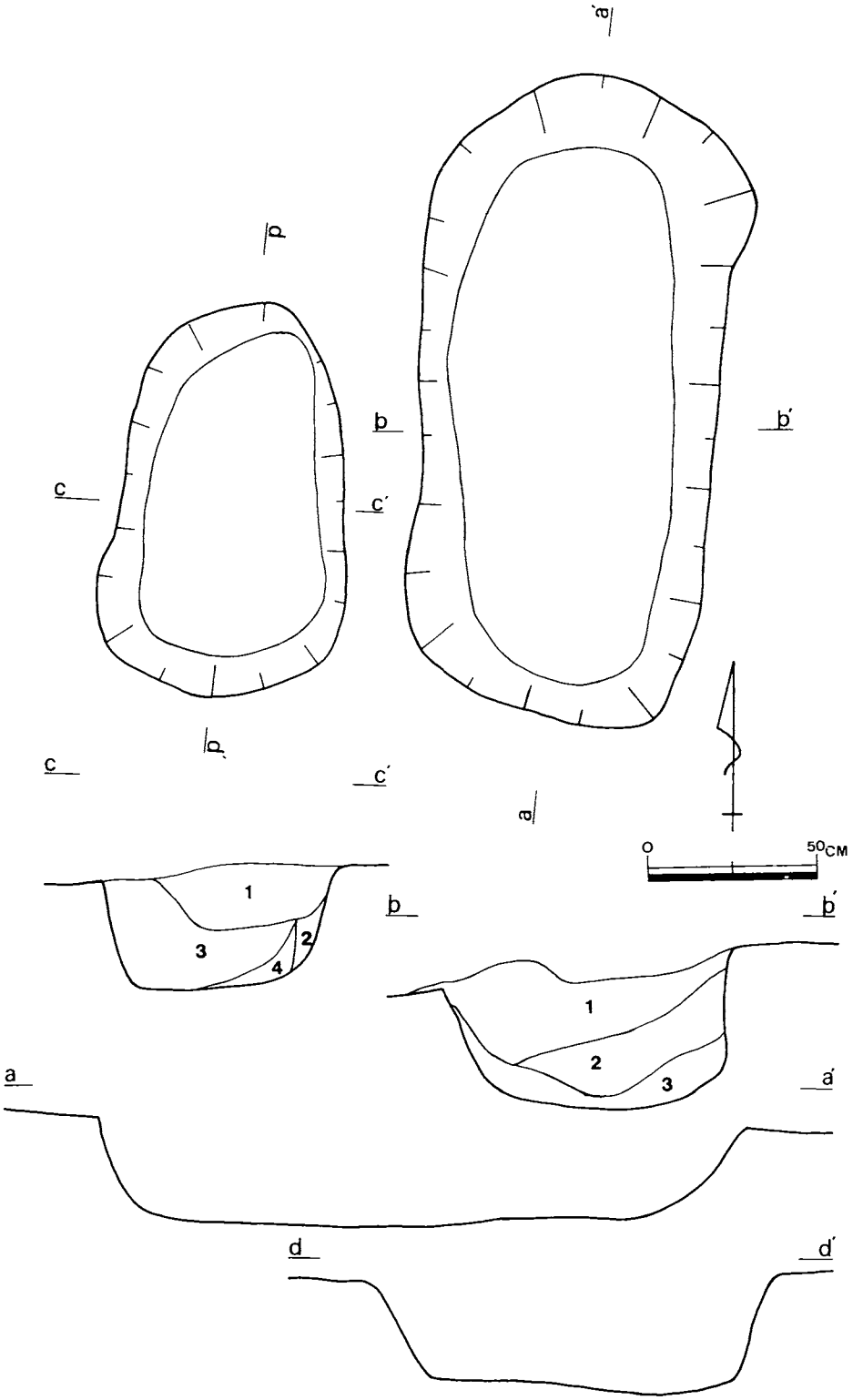
さて、2号土器焼成窯と1号土器焼成窯の新旧の関係については、重複があるわけでなく、明確な断言はできないのであるが、18層と2号土器焼成窯の第1層のあり方からして、2号土器焼成遺構は1号土器焼成遺構と同一操業期ないしはこれより新しい操業期として捉えることができよう。

注2　1号土壙に充填されていた灰層の1部は、1号土壙西側のローム層漸移層の上面まで僅かに確認できた。このことから推察するにこの1号土壙の西側面はローム層の漸移層面まで削平されていたことになろう。その規模等については、これだけのセクションからではほとんど理解できないが、1号土器焼成窯の下部になんらかの作業場的空間があったとも推察されよう。

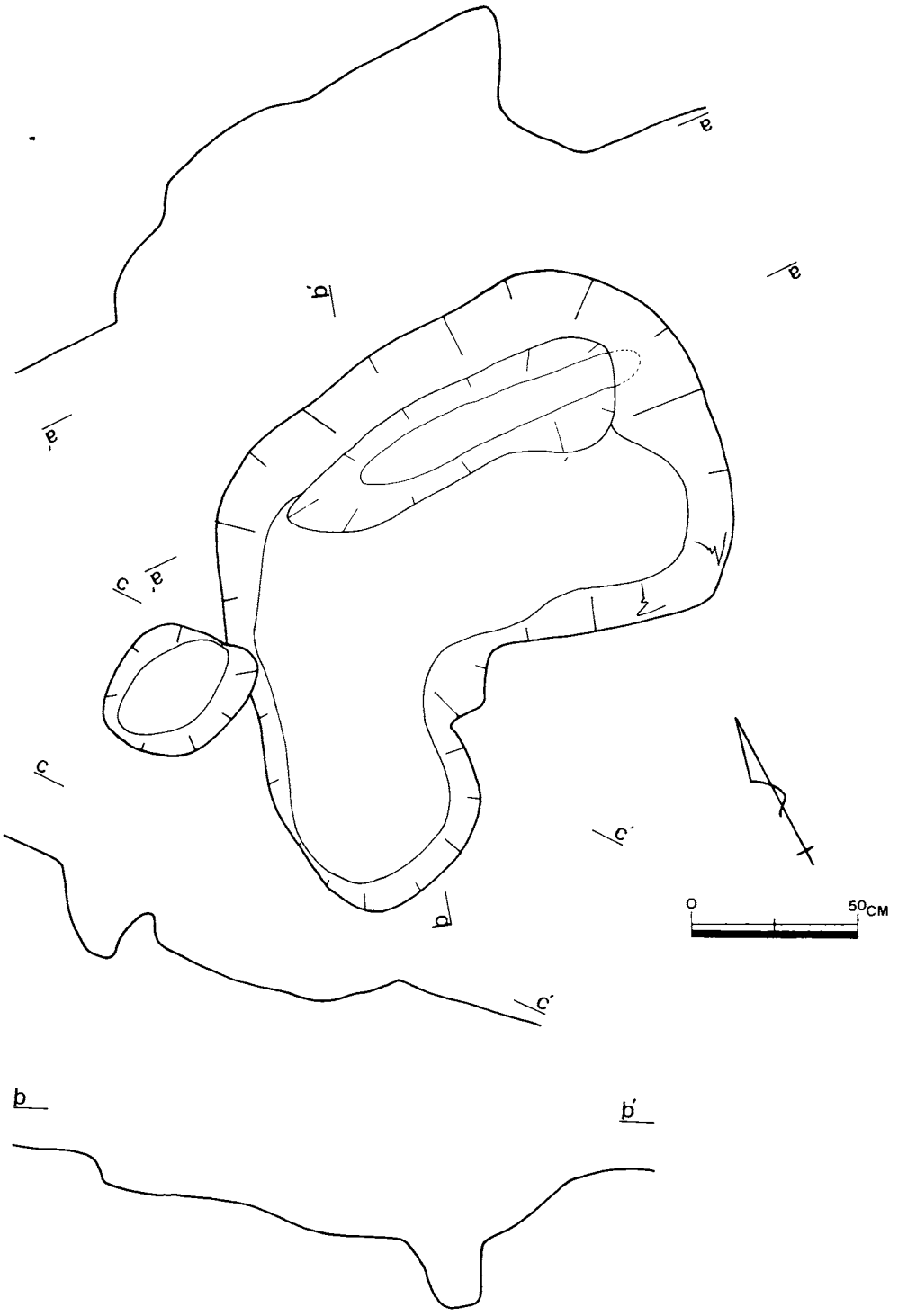
（松本富雄）



第32図　新開遺跡 Sb 区 2 号土器焼成遺構全測図(1/20)



第33図　新開遺跡 Sb 区 1 号・2 号土壙全測図(1/20)



第34図　新開遺跡 Sb 区ピット 1 全測図(1/20)

2) 遺　物

a．概括

Sb区から検出された遺構は1号土器焼成窯、2号土器焼成窯、1号土壙、2号土壙、ピット1である。これらのうち、1号土壙、2号土壙、ピット1の覆土は1号土器焼成遺構からの灰層(H－1～H－3）が充填されていたもので、同一期の所産と考えられ、1号窯との関連性が捉えられるものである。

1号土器焼成窯、2号土器焼成窯から検出された遺物は出土状況・標高を記録しながら取りあげた。灰層（遺構に入り込んだものも含めて）はH－1からH－3の3地点に分離して捉えられたため灰層単位で取りあげた。灰層（遺構に入り込んだものも含めて）はH－1からH－3の3地点に分離して捉えられたため灰層単位に一括して取りあげた。漆黒色土層（K層）はグリット単位で、表土層中の遺物もまたグリット単位で取りあげた。

2号土器焼成窯からは総数 70 点と出土量は少なく、土師器甕1点の他は酸化焔焼成のロクロ仕上げ（調整）された坏と坏の底部を利用した紡錘車2点のみであった。1号土器焼成窯およびその灰原等（1・2号土壙、ピット1）からは、坏が圧倒的に多く出土した。瓦・甕等は坏に比して極めて少なく、坏の　割に満たない。甕・瓦は完形になるものはなく、焼台として使用された跡等が多くあることからして焼成されたというよりも、焼台等として窯構築の材料として使用されたものと考えられる（詳細は甕･瓦の項参照)。その他特殊な遺物としては、窯構築に使用して還元化した土師器甕がめにつく。

また、遺物は整理作業の段階で表に示す様に色調別に分類してみた。色調1～3の青灰色、色調4～5の灰白色、色調6～7の灰褐色、色調8～11の赤褐色、色調12の紫褐色に分類した。

1号土器焼成窯および灰原等からは、色調1～3の遺物は焼きしまりも良好で、還元焔焼成された遺物であるが、それぞれの出土遺構等によって差はあるが、約3割を含め、色調4～7は還元のあまりいきとどかない半還元焔焼成というような遺物は約5.5割を占め圧倒的に多い。色調8～11は酸化焔焼成されたものであり、約1割である。

2号土器焼成窯からは第1層とした層からは、還元焔焼成された遺物の出土はあったものの(P47注1参照)、2号土器焼成窯本来の層からは酸化焔焼成された遺物のみ出土した。

それぞれの器種の特徴については以下で述べる。

b．坏（第35～40図）

表でも理解できるように坏の出土量は圧倒的に多い。図示したものは完形あるいはそれに近いものと、特徴的なものである。Sb区から出土した坏は、すべて、巻きあげの後にロクロ仕上げ（調整）されたものであるが、焼成が還元・半還元・酸化焔に分けられる（注1)。

1号土器焼成窯および灰原等から出土した坏は、器種としては3類に分けて捉えることができる。

数量としてはあまり多くはなかったが、高台をもつ坏があり、これを1類として捉えられる。そして、高台をもたない坏は法量の差によって2類に分けることができる。器高は底径に比べてばらつき

が多い。底径は4.6～6.5cm内であるのに対して、器高は3.0～6.2cmと幅がある。すなわち、器高の高いものと低いものとの法量の違いによって2類に分けることができる。

2号土器焼成窯出土の坏は、すべて酸化焔焼成によるものであった。きわめて焼きしまりの良いもので、部分的に黒斑が残るものもあった。残念ながら器種を完全に復元できる様な破片はなかった。破片の中には、坏の底部を利用し、焼成前に周囲をヘラケズリ等をして中央部を穿孔した紡錘車2点もみられた。

注1　2号窯の存在がなかったならば、酸化焔焼成されたロクロ仕上げ（調整）された坏が出土しても、須恵器坏と呼ぶところである。しかし、2号窯は従来考えられていた須恵器窯とは構造が全く異なっており、そうした生産遺構の違いから区別しておく必要があろうと思われた。ここで表題を坏とのみしたが、それはそうした考えからである。なお、2号窯出土の酸化焔焼成によるロクロ仕上げされた坏については、各地、各氏でさまざまな呼び方をしている。それぞれに定義を設けて呼んでいるようであるし、また地域によってもその技法や焼成に違いもあるようである。ここではあえて、特定の呼び方や先学の呼び方を使用せぬこととしたが、還元焔焼成の坏群が終焉期を迎えるころに新らたに発達をしてくる一群として、2号窯出土の遺物群を捉えることは可能である。

（松本富雄）

表　1号土器焼成遺構.関連遺構等の報告書掲載遺物一覧表

器種 / 遺構	須恵器坏	須恵器壺・甕	瓦	土師器壺・甕	その他
1号土器焼成窯覆土中	3.19.25.27.34.40.43.44	1.2.5.7	3.4.7.19.29.37		
1号土器焼成窯最終窯床内	5.11.15.22.23.28.31.32.36.38	2.4.5.6	14.15.20.24.28.33.34		
1号土器焼成窯第3次窯床内	6.7.8.9.26.32.35.36	3	13.22.25.26.28.31.36		
灰層1（H－1）焚き口部ピット					
灰層2（H－2）1・2号土壙					
灰層3（H－3）ピット1	45.47.50	32			
漆黒色土層上面	46.48.49.51.52.53.54.55.56				
表土	60.61.62.63.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76	11.12.13.14.15.16.17.18.20.21.23.24.25.27.28.30.31.32.33.34.35.37.38	2.5.6.8.9	1.4.5.6.7	

表　色調と色調番号

色調番号	1　2　3	4　5	6　7	8　9　10　11	12
色調	暗 ← 青灰色 → 明	暗←灰白色→明	明←灰褐色→暗	明 ← 赤褐色 → 暗	紫褐色

表土出土遺物

器種＼色調	1~3	4・5	6・7	8	9	10	11	12	合計
須恵器坏	2,736	3,772	2,861	870	294	351	102	51	11,037
男瓦	94	23	23		1				141
女瓦	225	73	117	5	3	13			436
瓦	43	27	43	2					115
須恵器壺・甕	514	179	122	15	11	1			842
土師器甕	17			2		4			23
その他									

灰層2（H－2）および1号・2号土壙出土遺物

器種＼色調	1~3	4・5	6・7	8	9	10	11	12	合計
須恵器坏	398	584	280	77	21	28	18	21	1,427
男瓦	5	5							10
女瓦	19	3	6	1					29
瓦	4								4
須恵器壺・甕	29	4	2						35
土師器甕		1	2			1			4
その他									

1号土器焼成窯覆土中遺物

器種＼色調	1~3	4・5	6・7	8	9	10	11	12	合計
須恵器坏	126	250	158	42	10	13	4		603
男瓦	12		2						14
女瓦	32	6				1			39
瓦	9	1							10
須恵器壺・甕	29	7							36
土師器甕									
その他									

灰層3（H－3）およびピット出土遺物

器種＼色調	1~3	4・5	6・7	8	9	10	11	12	合計
須恵器坏	72	51	84	51	6	15	1	2	282
男瓦									
女瓦	5	1	1						7
瓦									
須恵器壺・甕	4	4							8
土師器甕									
その他									

1号土器焼成窯床下遺物

器種＼色調	1~3	4・5	6・7	8	9	10	11	12	合計
須恵器坏	200	197	138	24				1	560
男瓦	7		1						8
女瓦	56	5	1						62
瓦									
須恵器壺・甕	39	4	2						45
土師器甕						1			1
その他									

漆黒色土層出土の遺物

器種＼色調	1~3	4・5	6・7	8	9	10	11	12	合計
須恵器坏	349	351	316	67	59	119	106	13	1,380
男瓦	11	2	2	1					16
女瓦	17	4	4	1					26
瓦	2	1							3
須恵器壺・甕	34	6	6	2					48
土師器甕			2	3	1	2	1		9
その他									

灰層1（H－1）および焚き口部ピット出土の遺物

器種＼色調	1~3	4・5	6・7	8	9	10	11	12	合計
須恵器坏	554	729	481	103	154	52	46	8	2,127
男瓦	21	2				1			24
女瓦	35	13	25	9	2	2	13		99
瓦	5	4	2						11
須恵器壺・甕	43	15	1	2				2	63
土師器甕	1		1	3					5
その他									

2号土器焼成窯（第1層は除く）

器種＼色調	1~3	4・5	6・7	8	9	10	11	12	合計
須恵器坏		2	2	1	3	1	59		67
男瓦									
女瓦									
瓦									
須恵器壺・甕									
土師器甕						1			1
その他							2		2

c．須恵器壺・甕（第41～４２図）

Sb区において出土した壺・甕は破片総数1050点で、大半が小破片である。これらを出土地別に見てみると、１号窯（L,N,01）で167点、2号窯（L,N,02）で４点（ここで、４点出土しているのは、２号窯の上層、つまり灰を多く含む漆黒色土層から出土しているものであり、１号窯からの流れ込みの土層と考えられるだろう）、１号土壙（P.A）で32点、２号土壙（P,B）で３点、灰層で41点、表土で803点である。これら破片総数を他の器種と比較すると坏の20分の１、瓦とほぼ同様の割合を占め、特に坏との比率が著しい。また、１号窯より出土した破片で、本窯の最終窯床と第３次窯床で接合関係が比較的多く見られるという結果が得られている。この２点の事から１号窯での須恵器壺、甕の焼成は行なわれなかったと推定されよう。

次に色調を見てみると、青灰色を呈する良好な焼成のものが約60％を占めるが、前回報告のPb区窯Me区窯のそれの割合よりも低く、比較的半還元焼成のものが目立つようである。

器種についてであるが、全てが破片からの復元実測であり、その器形を完全に復元できるものがないため、器種分類することは困難であるが、長頸壺（第41図－23）、甕、耳付甕（第42図－34･35）の３器種に分類可能と思われる。この内、甕としたものには次の３タイプの器形の相違が見られる。Aタイプは肩部で張りをもち、頸部屈曲後、口縁部で大きく開くもので、広口壺と呼称されるものの範疇に入る形態である（第42図－26）。Bタイプは Aタイプと器形上大差はないが、器肉が薄く小型のものと思われる（第41図－25）。Cタイプは胴部でほぼ直立気味に立ち、頸部屈曲後、口縁部で短く外反するもので、甑の範疇に入るもの（第41図－11）と考えたい。

調整方法については、胴部下半に一部ヘラ削りが認められるものもあるが、大半がロクロによるナデで仕上げている。また、Pb区窯で多量に認められた叩き目を残すものは１点も確認されなかった。

次に胎土について見てみると、小石、砂粒、雲母、石英を僅かに含むが全体的に精選されており、坏、瓦とほぼ同様の胎土を示す。また、Pb区、Me区、Gc区で出土した製品の胎土とも相違ないようである。

（望月精司）

d．土師器甕（第42図）

Sb区より出土した土師器は全て甕であり、破片総数120点を数える。出土地別では、１号土器焼成窯（L,N,02）で12点、１号土壙（PA）で３点、２号土壙（PB）で２点、灰層で２点、灰原で92点であり、１号窯より９点出土しているものは全て表土中またはその上層（攪乱層）から出土したものである。

器形については、口縁部から底部まで残存する遺物がない為、明確には把えられないが、長胴気味に立ち上がるものが全てのようである。口縁部の形態については「く」字状になだらかに立ち上がるものが大半で、１点のみ小破片であるが、「コ」の字状を呈する可能性を持つものがある（第42図－４）。しかし、これはいわゆる「コ」字状口縁土器とは異なる様相のものであろう。また、「く」字状を呈する口縁の内、器肉を肥厚させて若干内外面に陵を形成するものが見られる（第42図－２・３）。

調整については、口縁部から頸部で横ナデ、それ以下、横方向、縦方向のヘラ削りを施し、内面で

横ナデを施すのが一般的であるようだ(第42図－1)。また、2号窯で内面ヘラナデを施す焼成の良いもの（第40図－38）も見られる。

また、底部に回転糸切り痕を残す甕の小破片（第42図－6）が1点確認されている。

（望月精司）

e．瓦（第43図～第48図）

瓦は、表土中・ピット・登り窯等より出土したが、大部分は登り窯からである。但し、窯の補強材としての性格が強く、本窯で焼成されたという確証はない。器種は男瓦（1～12）と女瓦（13～38）の2器種のみである。これらの特徴は既に『新開遺跡』Ⅰ・Ⅱに述べられているものと概ね同様である。

男瓦―完形は存在せず、部分部分を列記するのみである。

凸面は縄の叩き目を消している。輪積み痕がみられるもの（1・4）もある。凹面は布目をそのまま残し、布の合わせ目（2・11）や、表中に「紐状圧痕」と記した線状の窪み（5・6・9・11）がみられたりする。また12には布を縫合したと思われる圧痕が、10には型（范）に起因する膨らみが認められる。広端面はヘラ調整の後にワラ状の圧痕を、狭端面はナデ調整後にワラ状の圧痕をそれぞれ残している。側端面はヘラ切りにより、端縁をナデるもの（1・2・5・8・12）がある。以上断片であるが、当資料も広義の桶巻きづくりと解しても良いようである。なお、11の凸面にはヘラ状工具による「X」印が鮮明に残されている。

女瓦―やはり完形は存在しない。13～22がSb区の中では比較的大形の破片であるが、ほぼ全様がわかるのは21のみである。

凸面は縄の叩き目がそのまま残されている。その表面には縄のほつれによる細かい圧痕がみられるものがあり、特に31～33に顕著である。また、乾燥時に立てかけられて付いたと思われる、側端に平行する棒状圧痕もみられる。凹面には布目が残り、型に起因するような凹凸が認められるものもある（後述）。広端面はナデ調整の後に、乾燥時に付いたと思われるワラ状圧痕がみられる。側端面・狭端面はナデ調整である。以上、当資料も一枚造りと考えて良いと思われる。

23～29・37・38は、型に起因するような凹凸のみられるものである。これは凹面の布目が乱れていないことからこう理解したものである。まず、37・38は表中に「模骨」と記した径2cm程度の不整形な膨らみが認められるものである。当資料は破片であるため詳細は不明であるが、Me区より多量に出土した同様の膨らみに極似することから、凹面のほぼ中央に位置するものと思われる。また、23～25は側端に平行する段差が認められるものであり、その位置もほぼ近似することより同じ型(范)を使用したものと思われる。この他、26～29にも矩形状の凹みが認められる。但し、その位置はそれぞれ異なるため型のクセとは思われないが、布目も乱れていないため、型と布との間に何らかの物質があったことに起因すると考えたい。いずれにしても完形品ではないため詳細は不明である。なお、30は糸のもつれたような圧痕を有する小破片であるが、同様の圧痕を28が有することから本来は凹面に凹みのあった可能性もある。

以上がsb区の瓦の概要であるが、留意したい点が2点ある。そのひとつは「模骨」である。既述のとおりMe区LN01窯とした新開2号窯出土の瓦と極似し、同窯との関連が想起される。この点につい

ては考察編を参照されたい。もう１点は窯の補修についてである。３片接合の資料である28は、２片が窯床第Ⅰ層から、１片が同第Ⅱ層からそれぞれ出土している。このことにより、旧期に床を補強していた遺物が灰のかき出しと共に床面を離れ、新期に窯を使用した場合に再び使用された、つまり、旧期と新期とにはそれほどの時差はないと言えるのではないだろうか。このことは、同じ型を使用したと考えた24と25がそれぞれ窯床第Ⅰ層・第Ⅱ層より出土したことからも言えると思われる。

（竹内宇哲）

ｆ．その他の遺物（第49・50図）

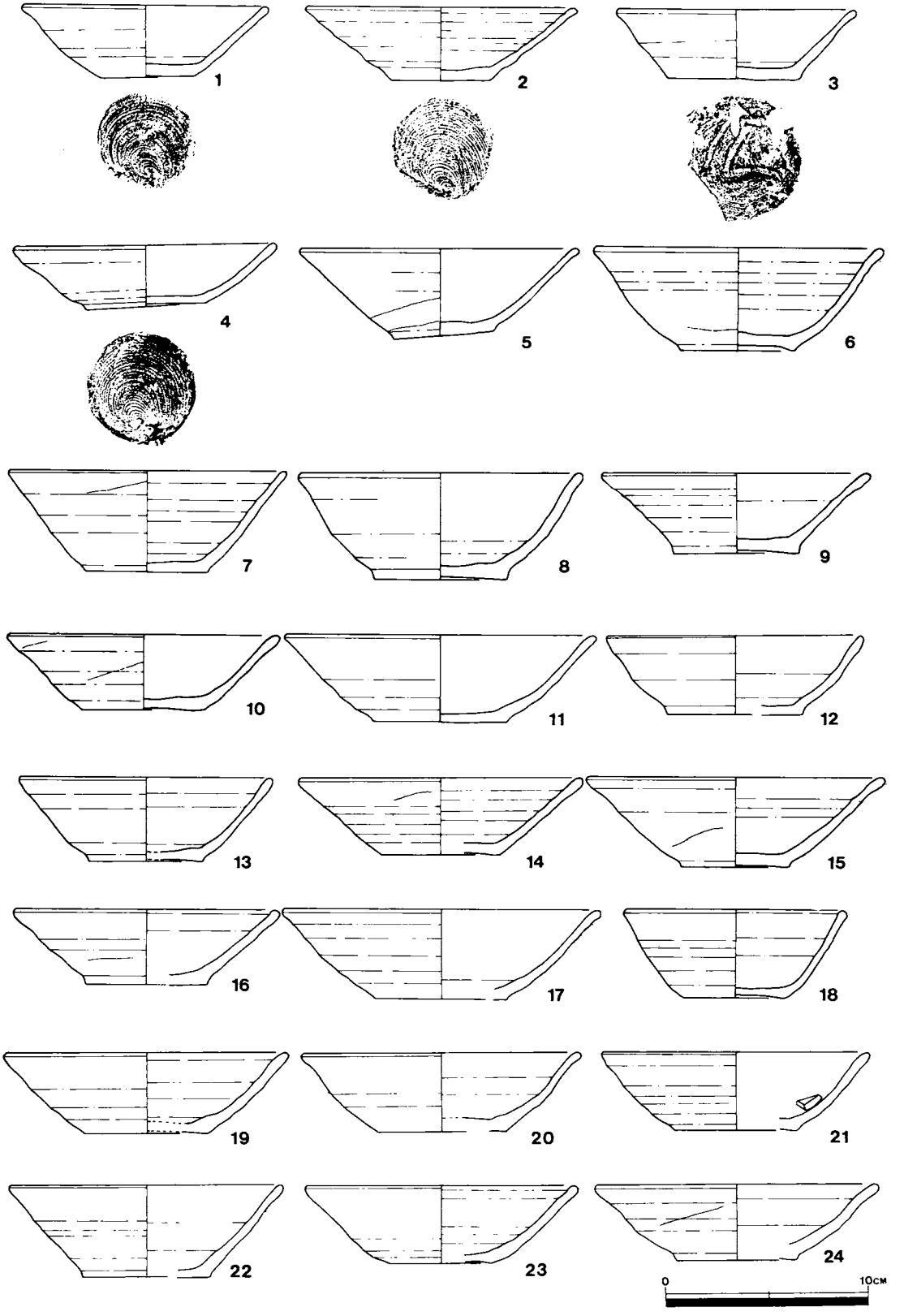
坏、甕、瓦以外の出土遺物を一括して紹介する。完形品が少ないため、器形、器種については他遺跡例等を参考に推察したものが多い。また、図示した遺物のうち、５、８、10は１号窯（L,N,01）、17は２号窯（L,N,02）、それ以外は灰原、灰層からの出土である。

１～６は器形、調整技法とも土師器甕と同様相の土器片である。しかし、これらはゆがみの見られる破片のため、器形については明確に把えることができない。ここではこれらを正常な器形に可能な限り復元して図示、説明することとしたい。１～３は口縁部破片で頸部屈曲後口縁部で外反する器形を呈す。調整は口縁部から頸部で横ナデ、それ以下で横方向のヘラ削り、内面では横ナデが施されている。４は頸部破片で、頸部以上で横ナデ、それ以下で横方向のヘラ削り調整が施されているものである。５・６は胴部破片で、外面縦方向のヘラ削り、内面横ナデ調整が施されているものである。色調は全て１を呈し、良好な還元焼成の土器で、釉の付着等が見られる。また、胎土は１～２㎜大の小粒の小石を多量に含むもので、当遺跡で見られるような粒の細い砂粒や雲母・石英等はほとんど含まないものである。本遺跡出土の須恵器・土師器には今まで見られなかった胎土を示す。また、この種の土器は本地区で総数37点を数え、１号窯から11点、土壙から５点、灰層・灰原から21点と、１号窯内出土の比率が高いようである。以上の事から考えてみると、これらの土器群は他地域から搬入されたもので、１号窯において何らかの形で使用した際、青灰色を呈す還元焼成のものとなったのであろう。そしてこの土器群は還元焼成を受けているも、土師器として考えてよかろうと思う。本遺跡Me区灰原からも１点、還元焼成を受けた青灰色を呈す土師器（「新開Ⅱ」第52図－２）が出土しており、本遺跡でよく見られる胎土を示すものであるが、前述の裏付けとなろう。

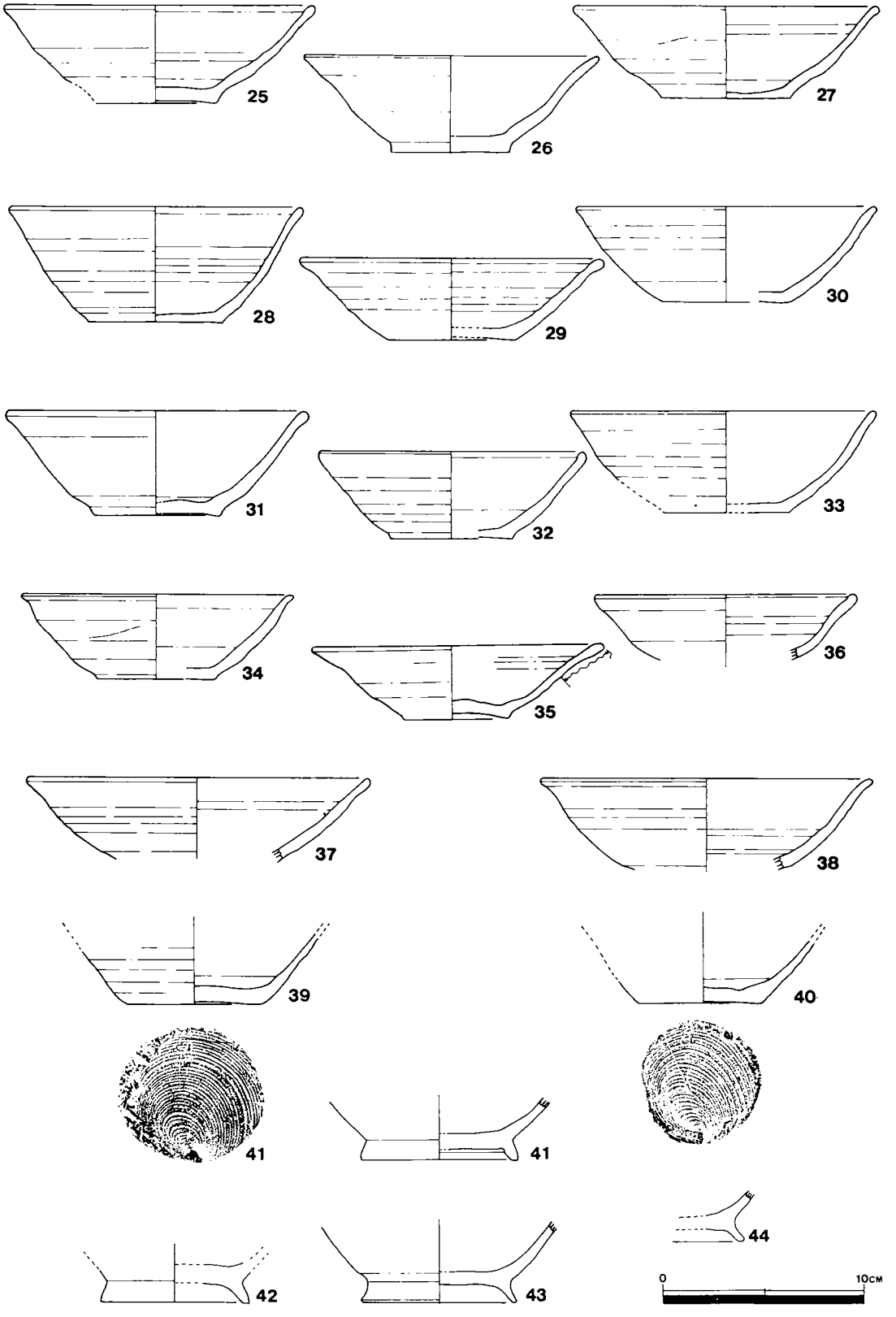
７は小破片であるが、蓋として把えられるものだろう。器形は低平な天井部からそのまま外反し端部に至る。端部は丸味を持つ。全面ロクロ調整で、白色砂粒を僅かに含む胎土を示す。色調２を呈し、焼成は良い。口径18.2cm（推定）を測る。

８は高台部付近のみ残存する。高台部は径6.4cmを測り、直立気味に立つ形態を呈す。畳付部は平坦で面を形成する。調整はロクロで仕上げており、白色砂粒、雲母を僅かに含む胎土である。色調５を呈し、焼成はやや不良。体部の器形が明確でないため、器種を想定しにくいが、高台部の径の小さいことや体部の開き具合から考えて、高台付皿と考えたい。

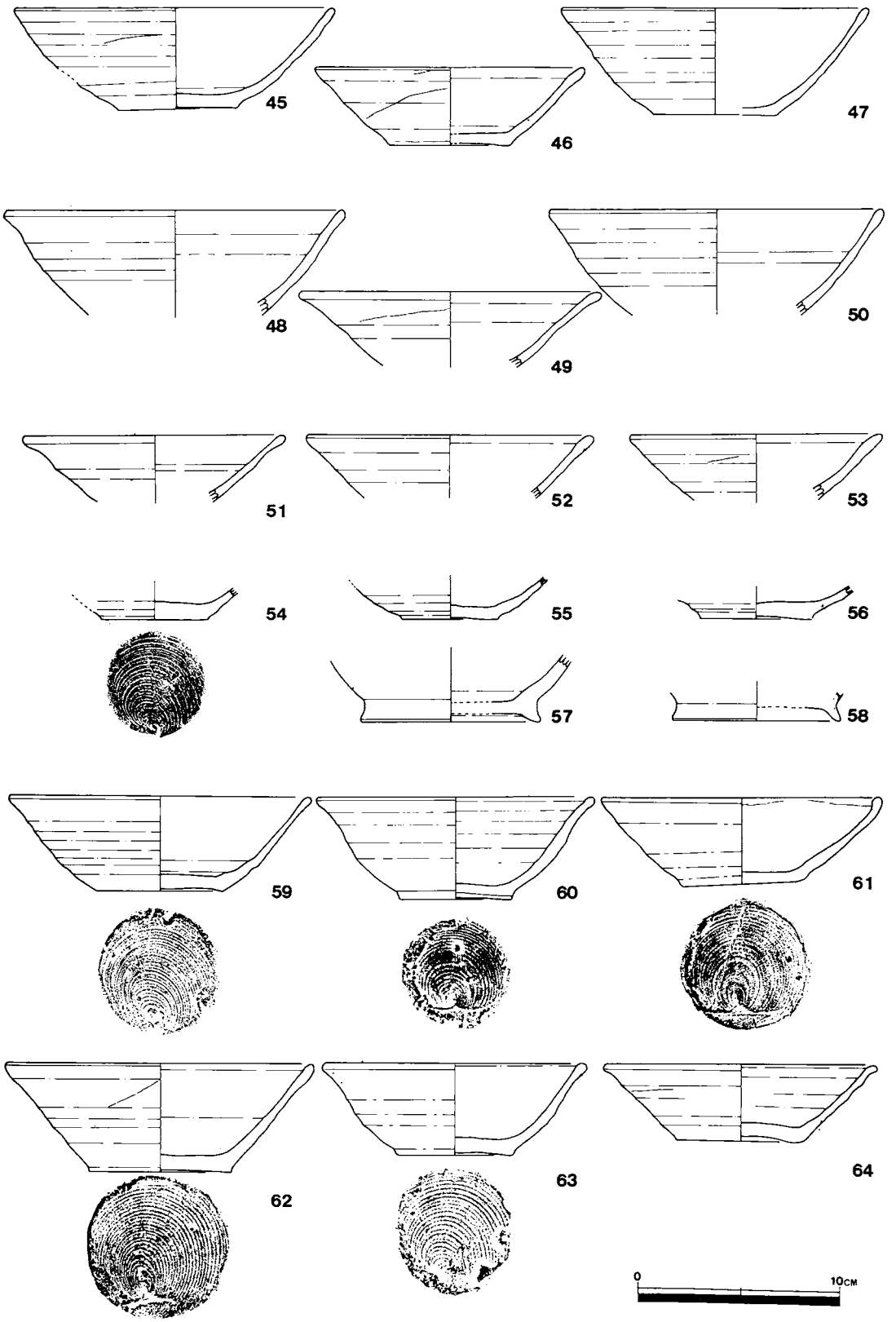
９～13は鉢として把えられよう。胎土は白色粒を僅かに含むものの比較的精選されている。色調は９が３と４、10が９、11～13が１を呈し、それぞれ良、不良、良好の焼成を示す。器形、調整につい



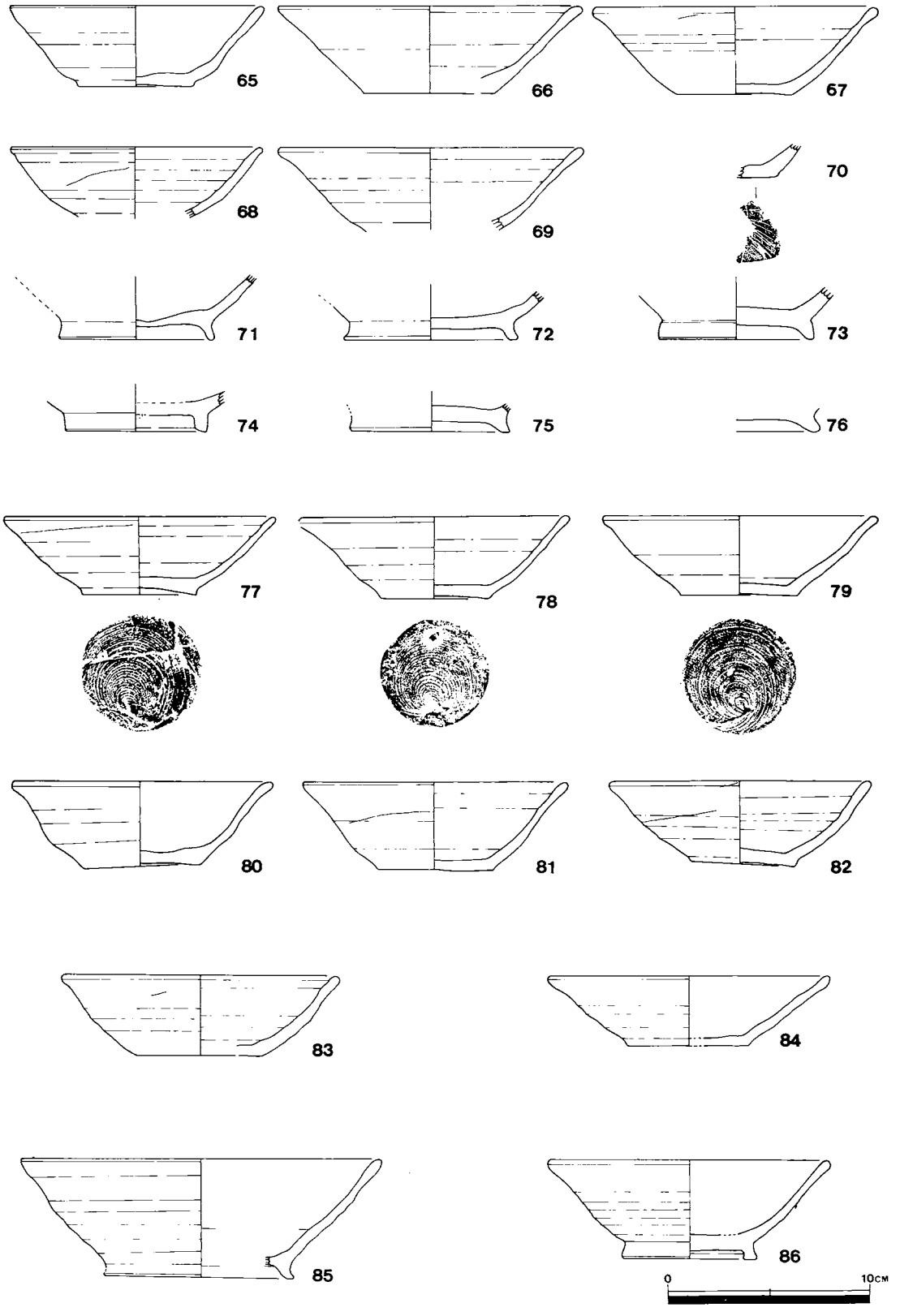
第35図　新開遺跡 Sb 区須恵器坏実測図(1)(1/3)



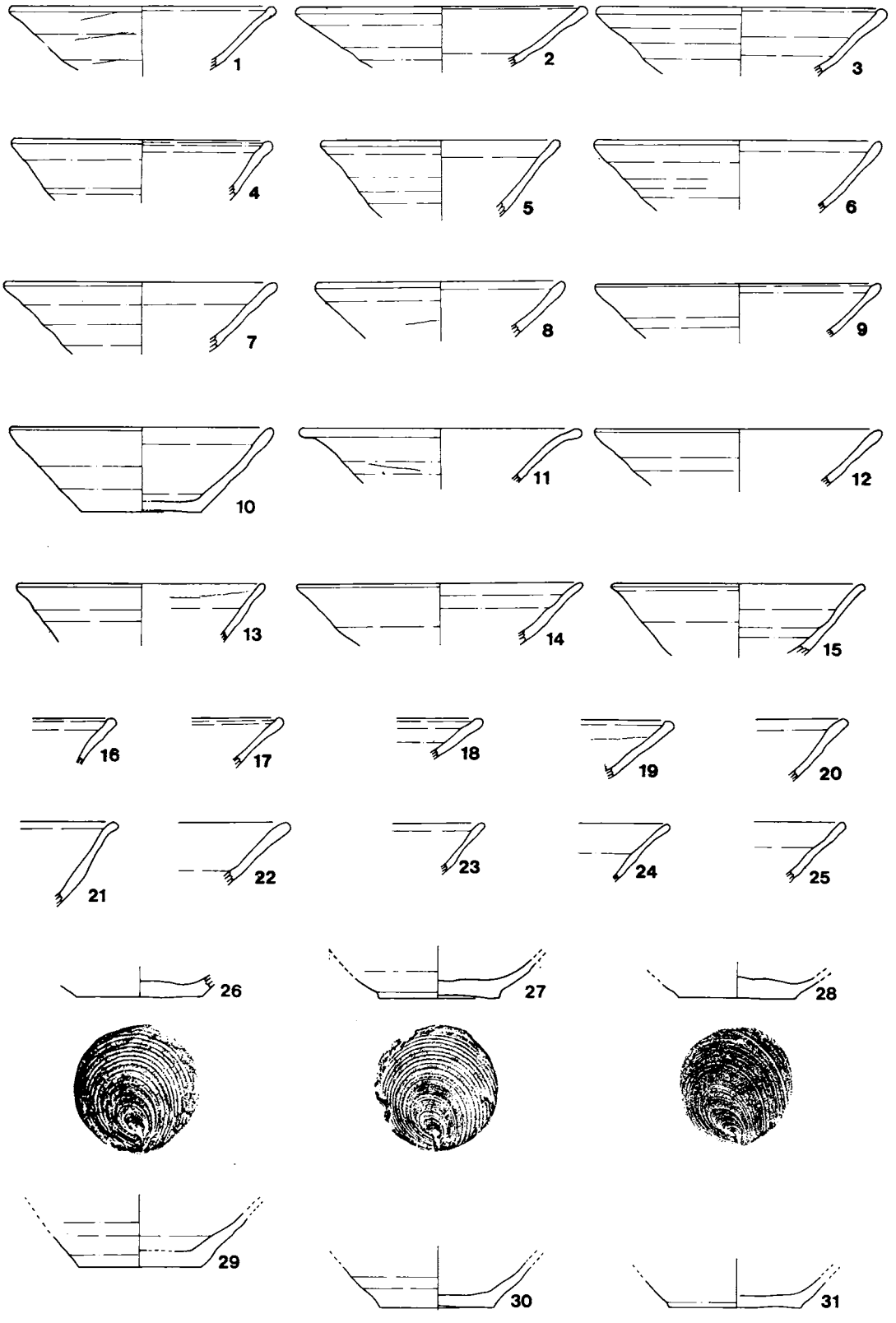
第36図　新開遺跡 Sb 区須恵器坏実測図(2)(1/3)



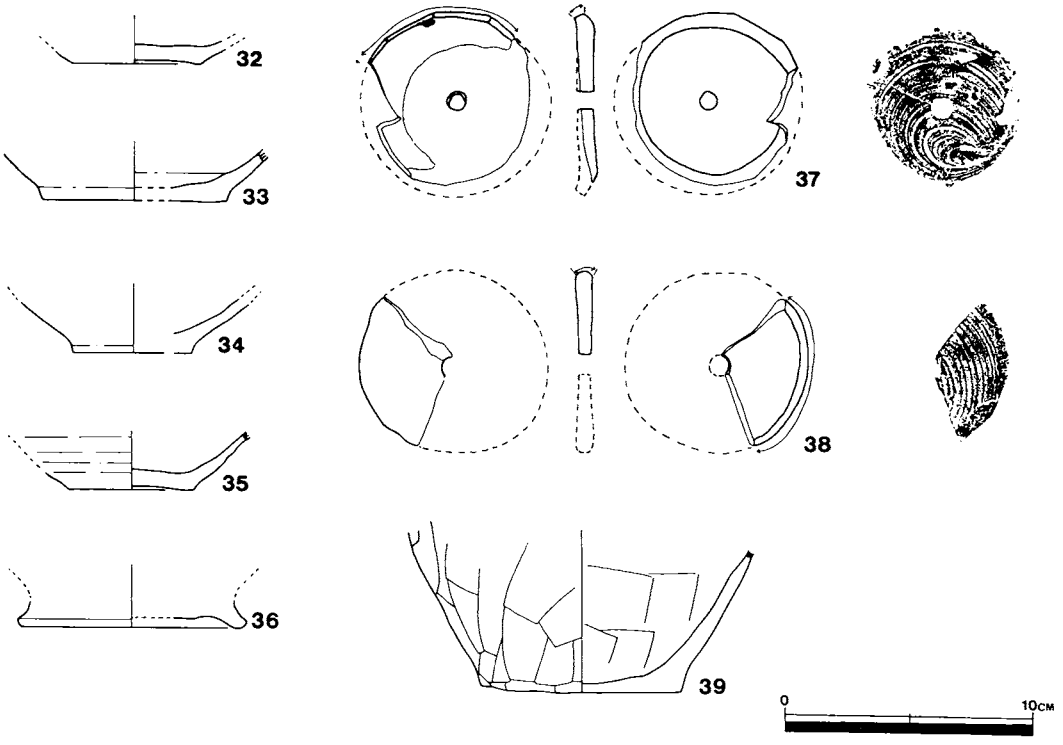
第37図　新開遺跡 Sb 区須恵器坏実測図(3)(1/3)



第38図　新開遺跡 Sb 区須恵器坏実測図(4)(1/3)



第39図　新開遺跡 Sb 区 2 号窯出土遺物実測図(1)(1/3)　0　10cm

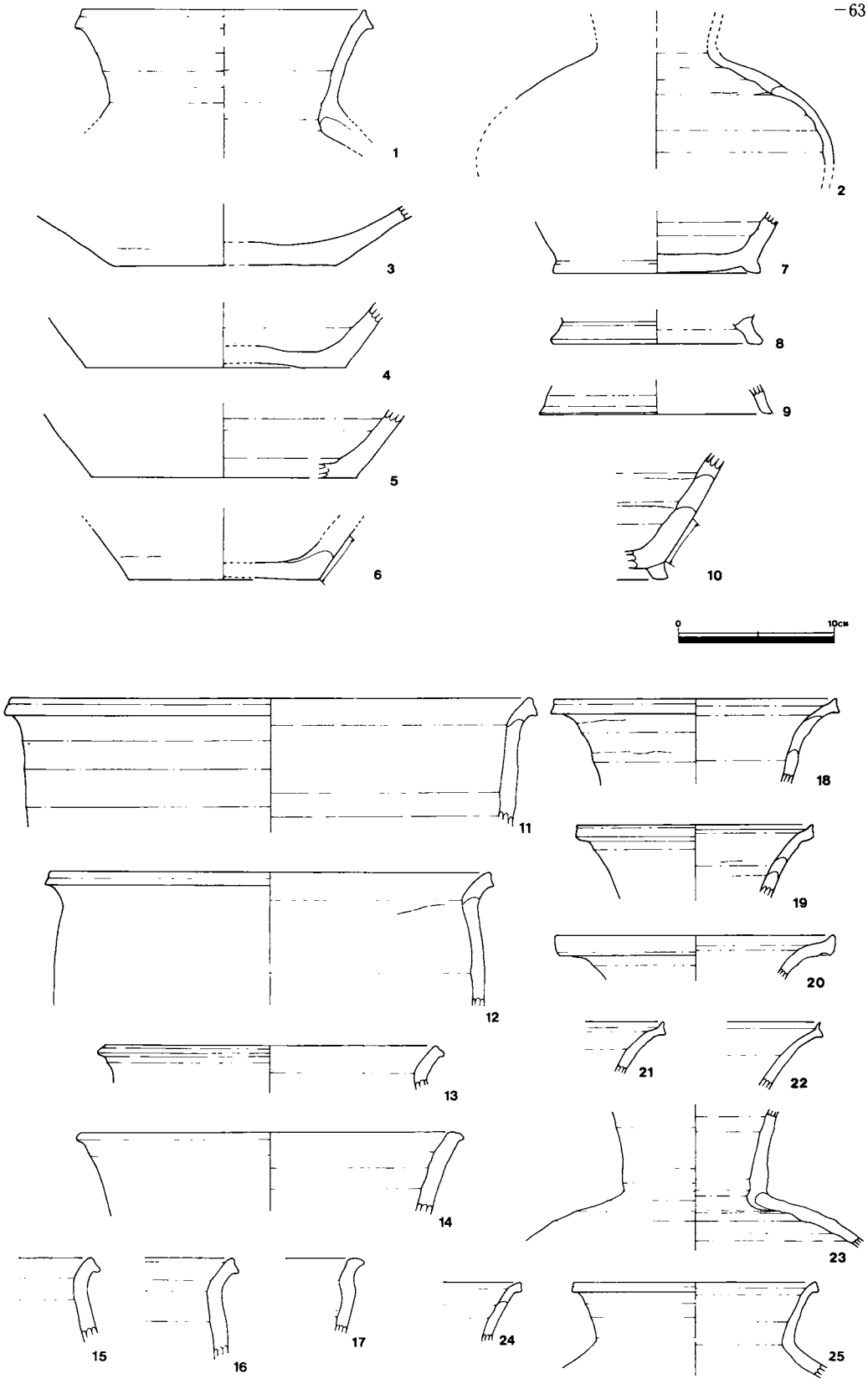


第40図　新開遺跡 Sb 区 2 号窯出土遺物実測図(2)(1/3)

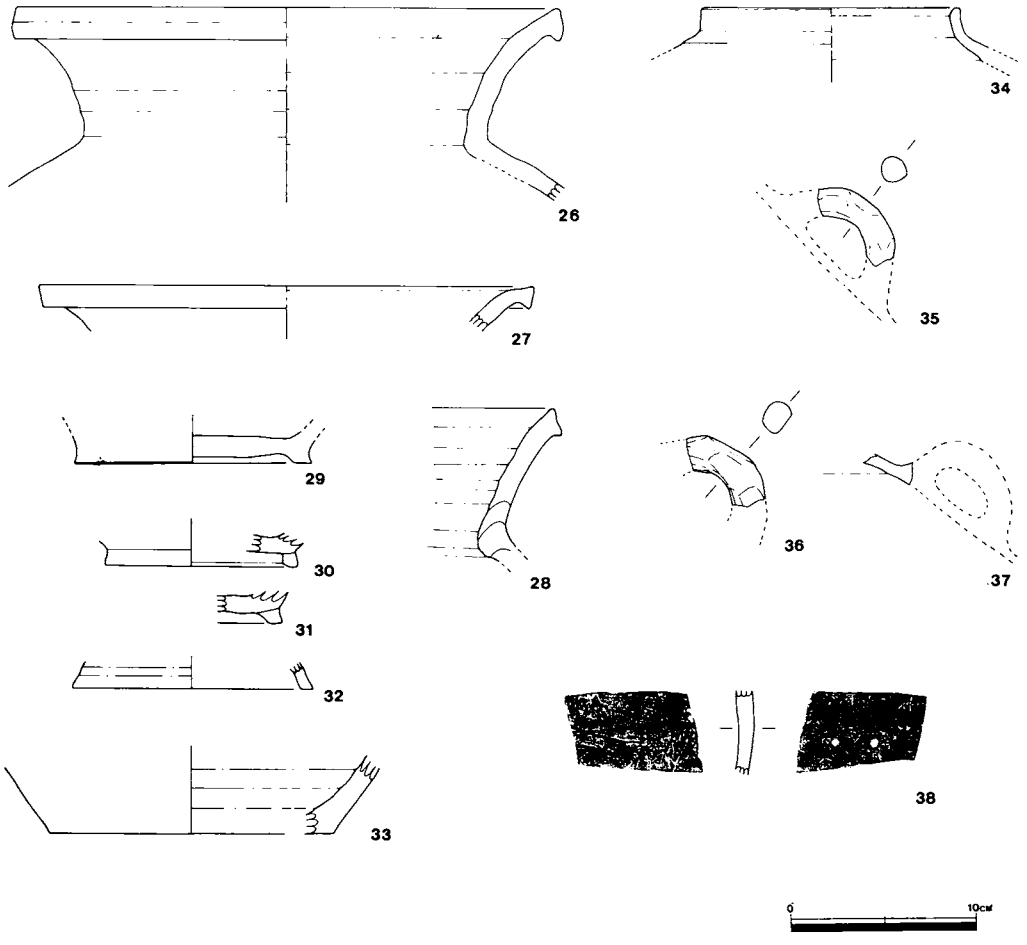
ては個々に述べるとしよう。9は口径（推定）21.7cm底径、(推定）12.0cm、器高10.5cmを測る。平底の底部から内湾気味に立ち上がり、口唇部で平坦な面を形成する器形である。調整は体部中位で回転ヘラ削り、それ以外はロクロによるナデで仕上げられている。この土器で特徴的なのは、内面の体部下半に棒状またはヘラ状の工具で横方向に条線が刻まれている点である。この条線はロクロ回転を使用していると推察できよう。10は口径（推定）18.0cmを測り、やや内湾気味に開く体部から平坦な口唇部に至る器形を呈すものである。調整はロクロによるもので、体部下半でヘラ削り、それ以外でナデ仕上げされている。11、12は小破片で、全面ロクロ調整である。13は浅鉢の口縁部破片として把えられよう。調整は粗雑なナデ仕上げである。

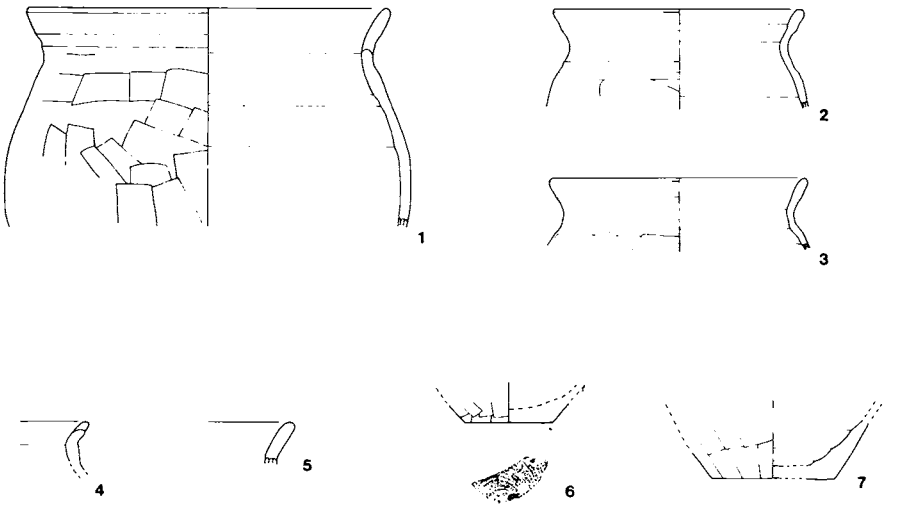
14は1/6ほど残存する風字硯の破片である。硯面には外堤がめぐり、外側でナデ調整後のヘラ削り、内側でナデ調整が見られる。胎土は白色砂粒を比較的多く含むもので、色調1、焼成良好を呈す。内外面には釉の付着が見られる。

15・16は六面～八面に面取りしている土製品である。面取りはヘラ削りによっている。胎土は若干の砂粒を含むものの精選されており、色調10を呈す。焼成は15が不良であるが、16は良好で堅緻なものである。これらは小破片のため器種を想定しにくいが、和田北遺跡においても同様相の土製品が出

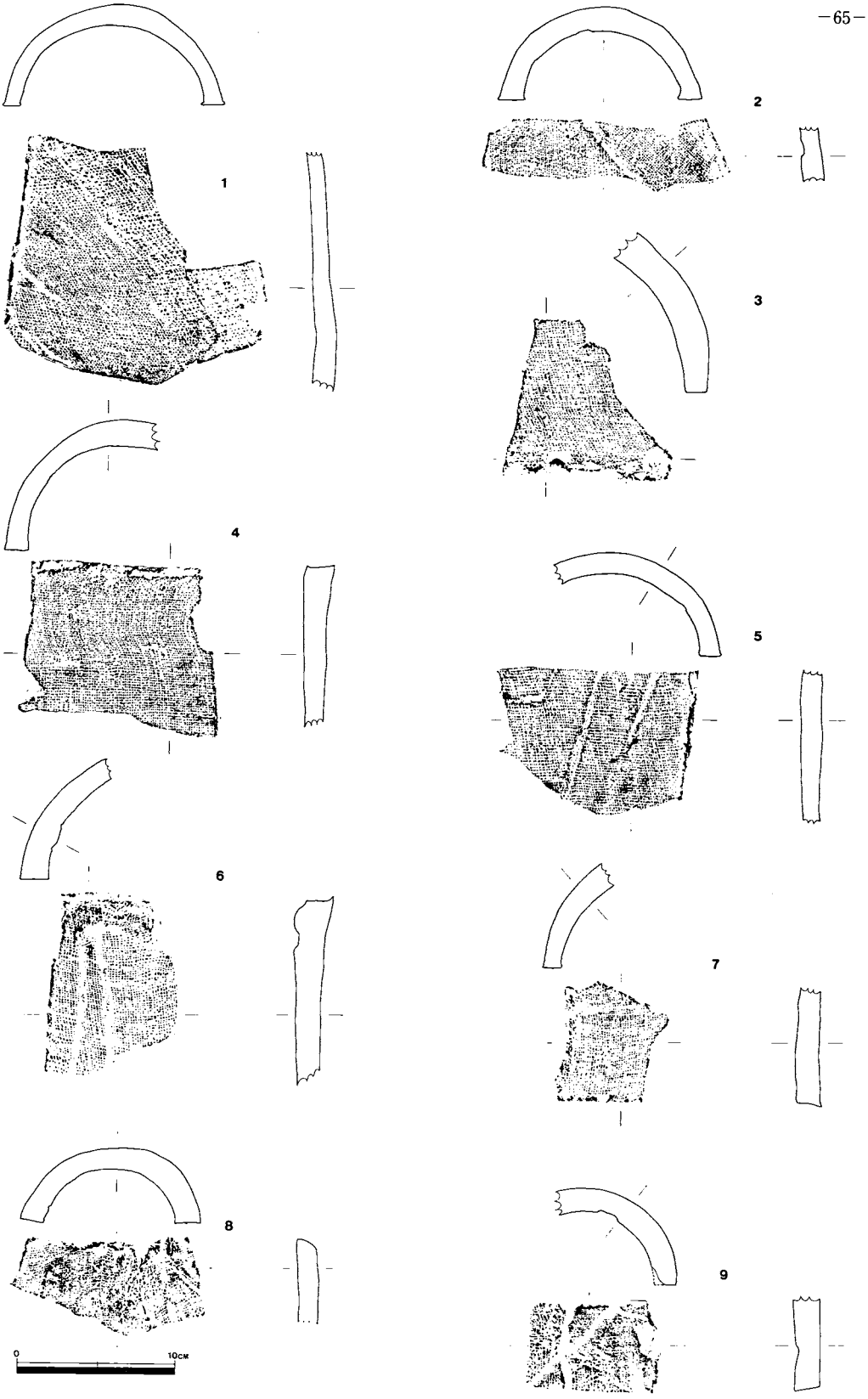


第41図　新開遺跡 Sb 区須恵器甕実測図(1)(¼)

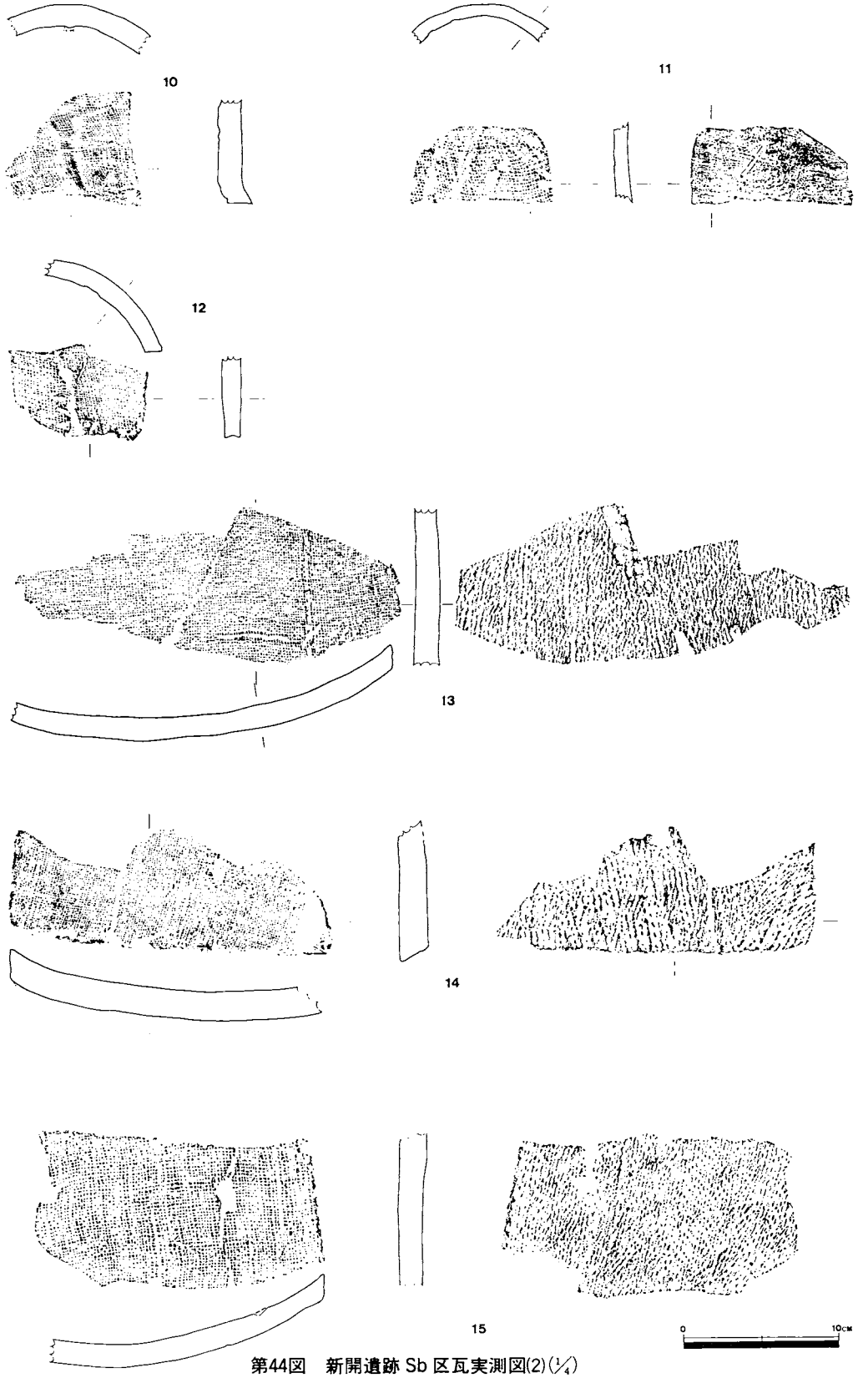




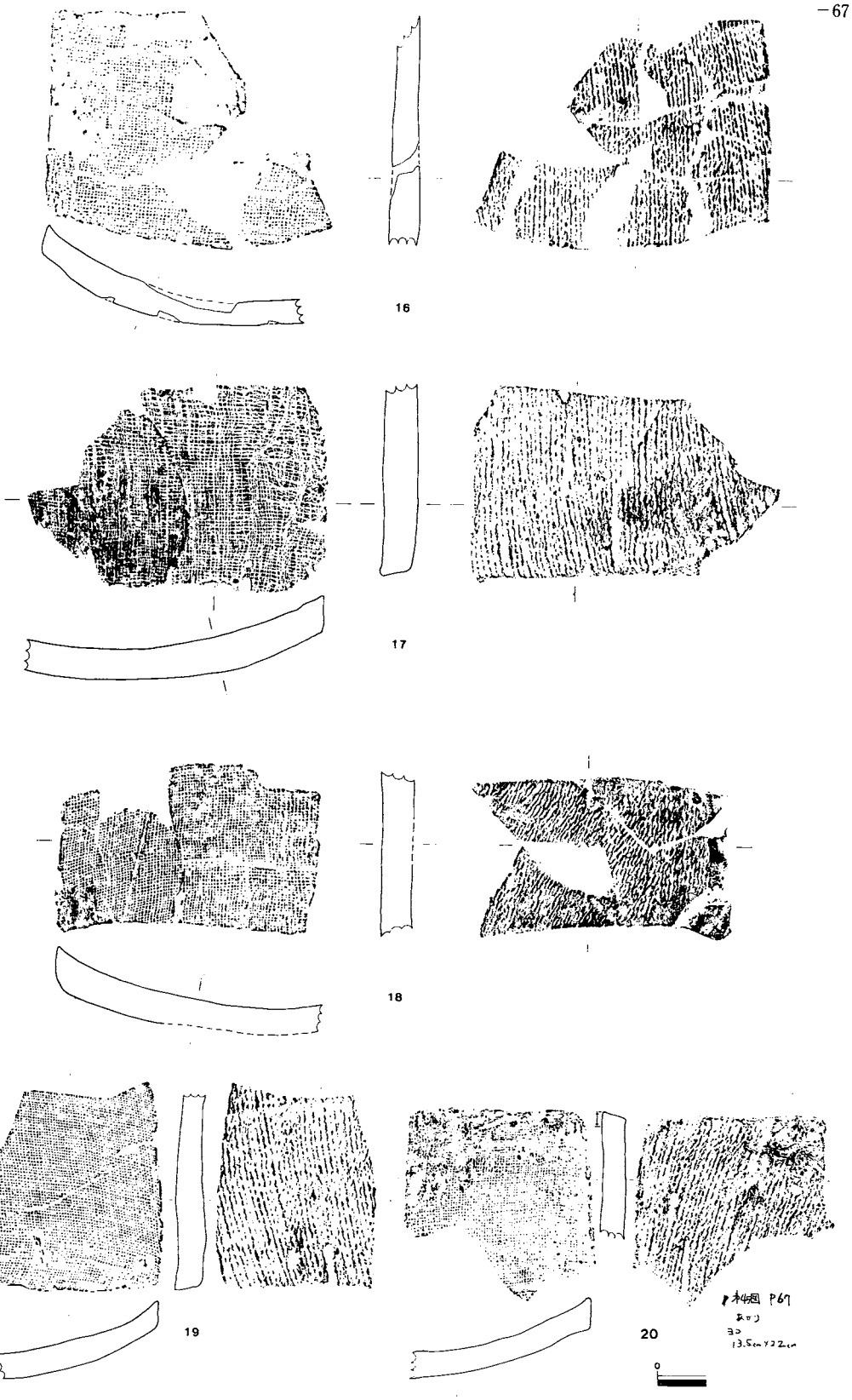
第42図　新開遺跡 Sb 区須恵器甕・土師器甕実測図(2)(1/4)



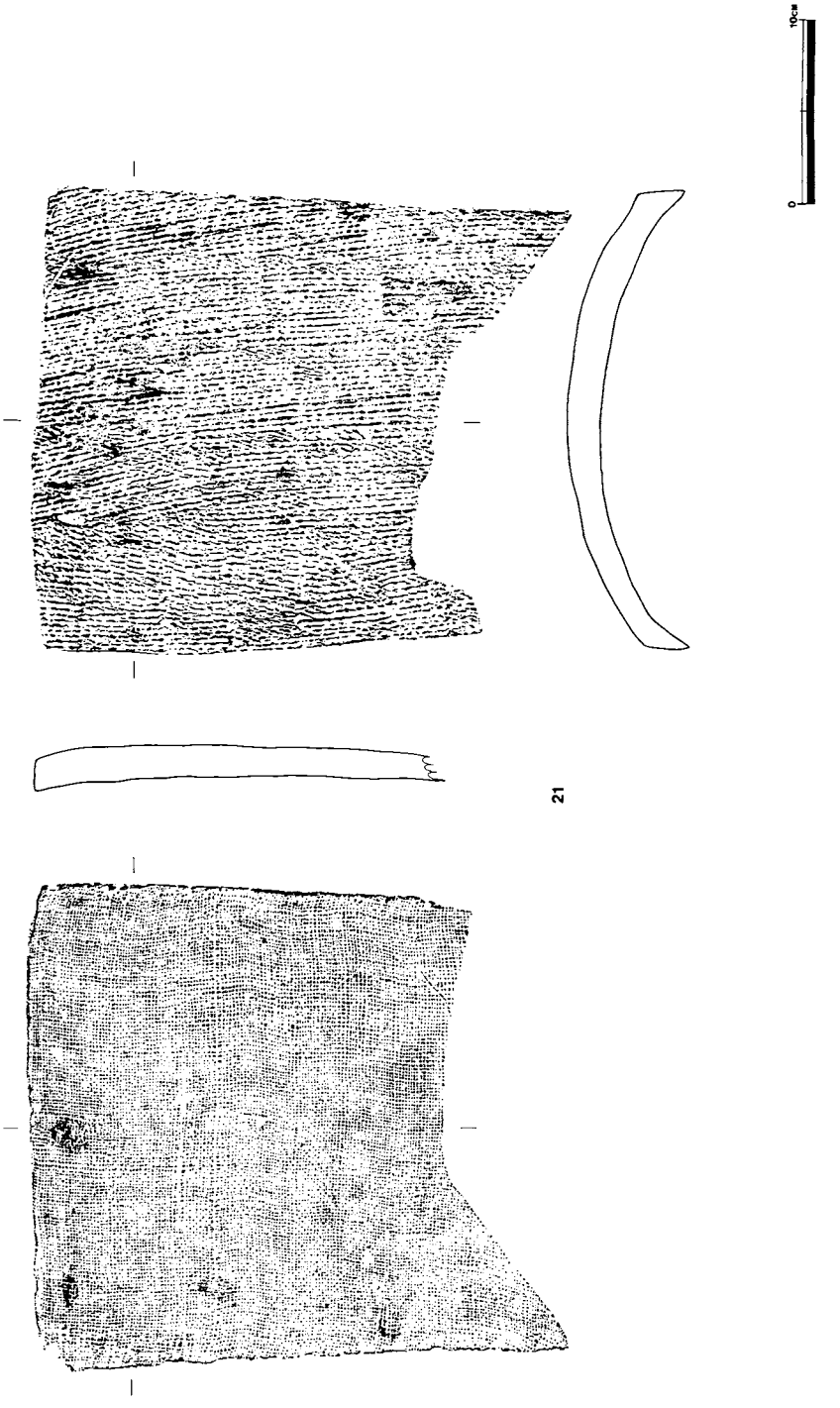
第43図　新開遺跡 Sb 区瓦実測図(1)(1/4)



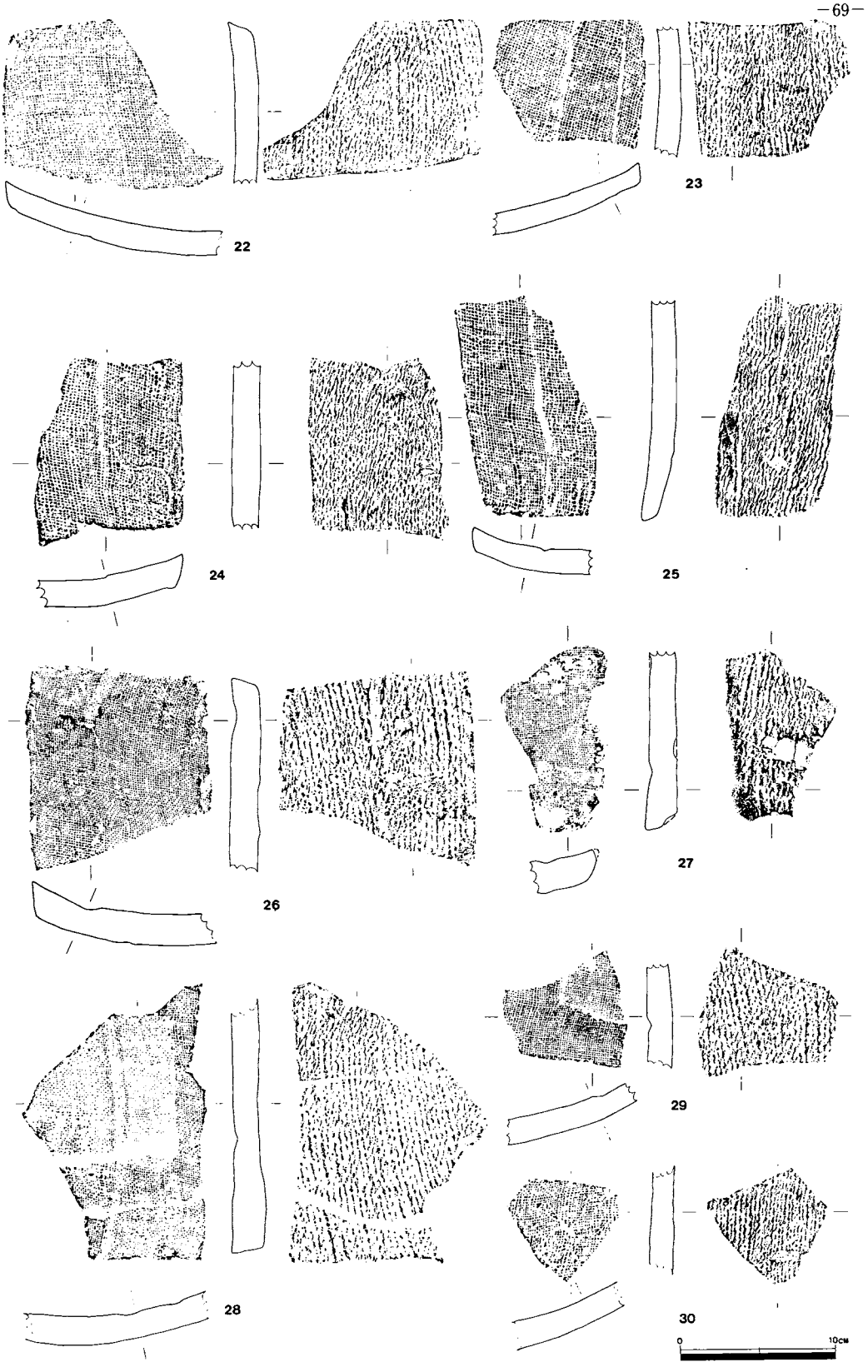
第44図　新開遺跡 Sb 区瓦実測図(2)(1/4)



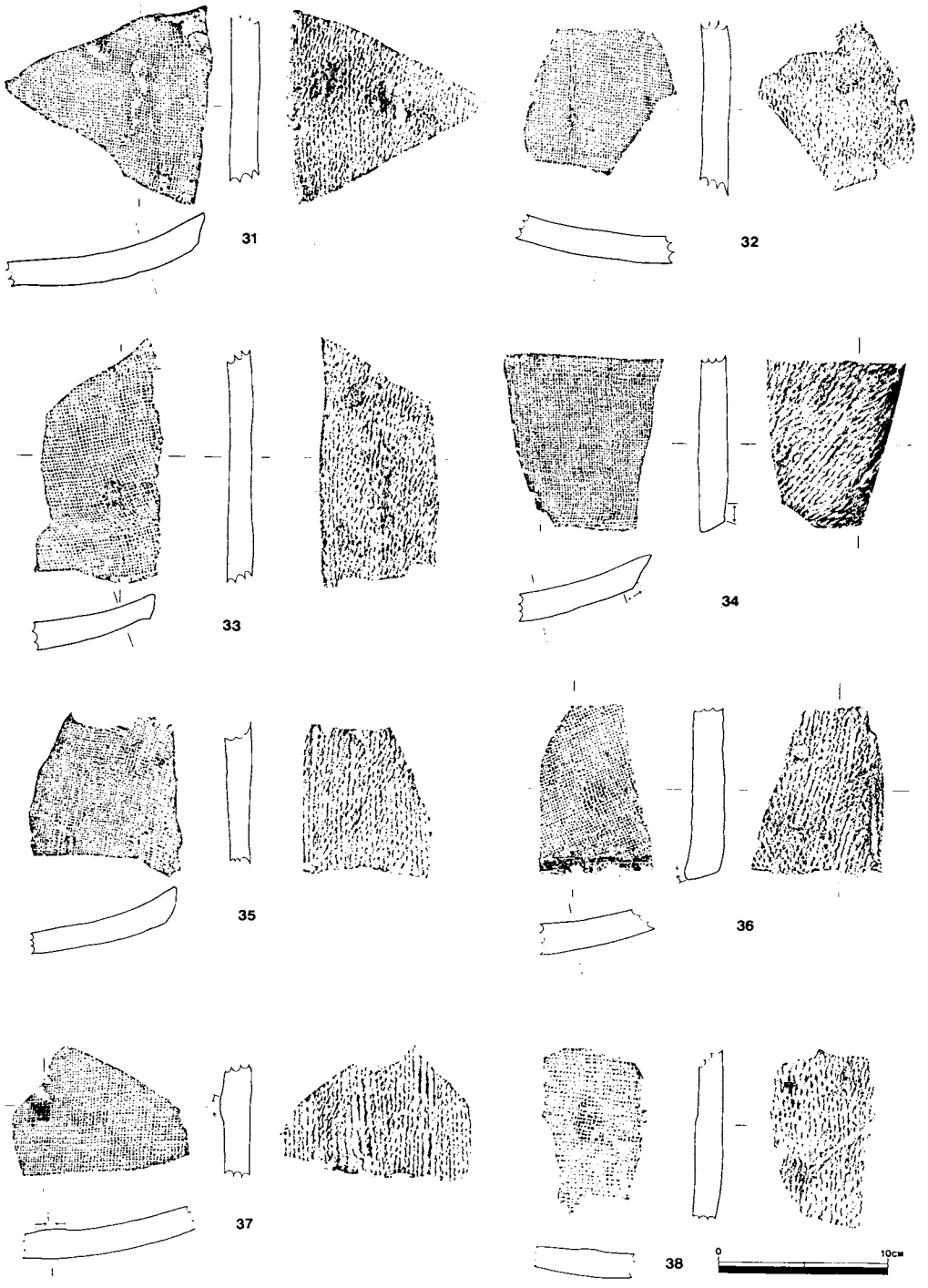
第45図　新開遺跡 Sb 区瓦実測図(3)(¼)



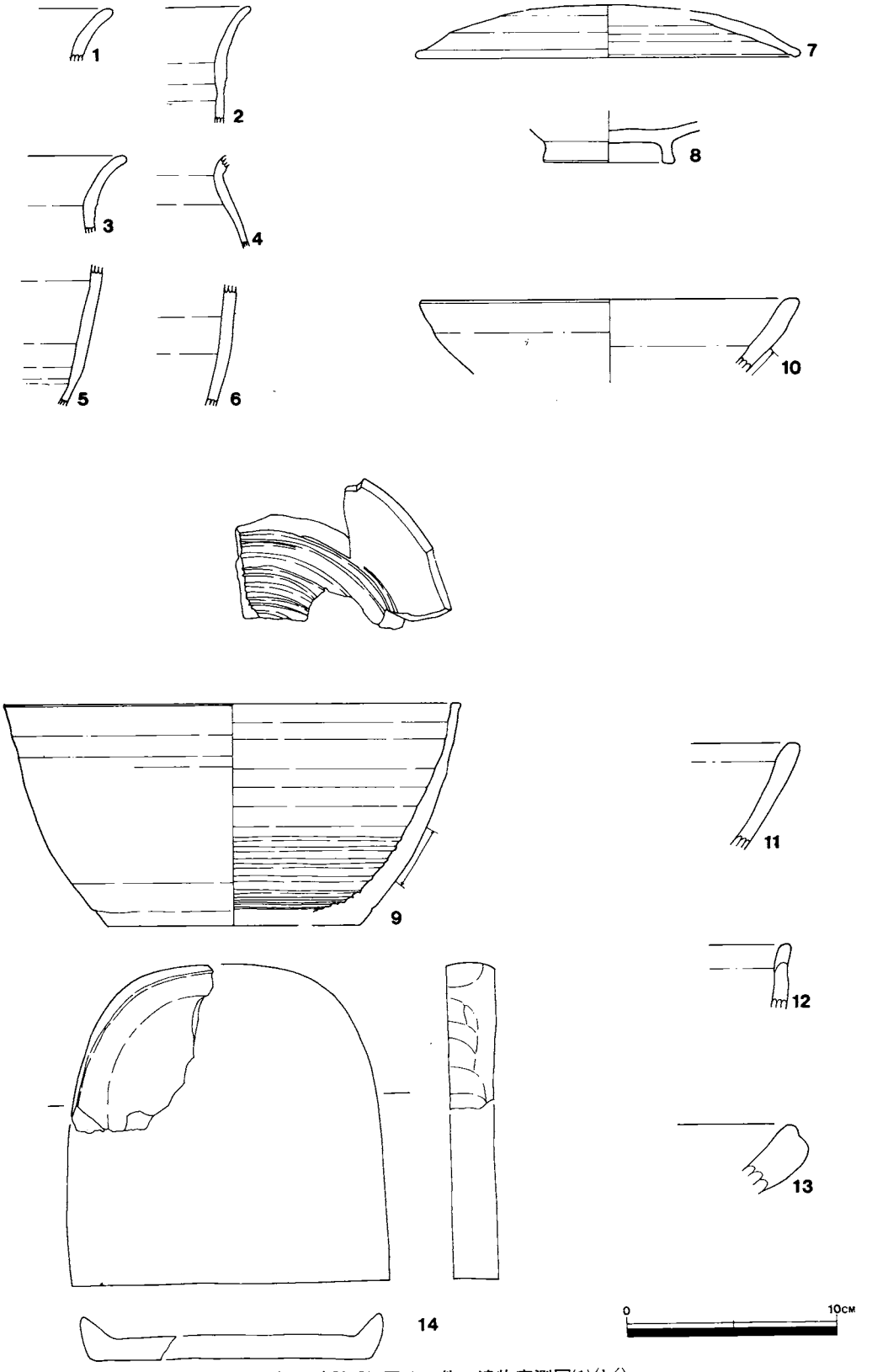
第46図。新開遺跡 Sb 区瓦実測図(4)(1/4)



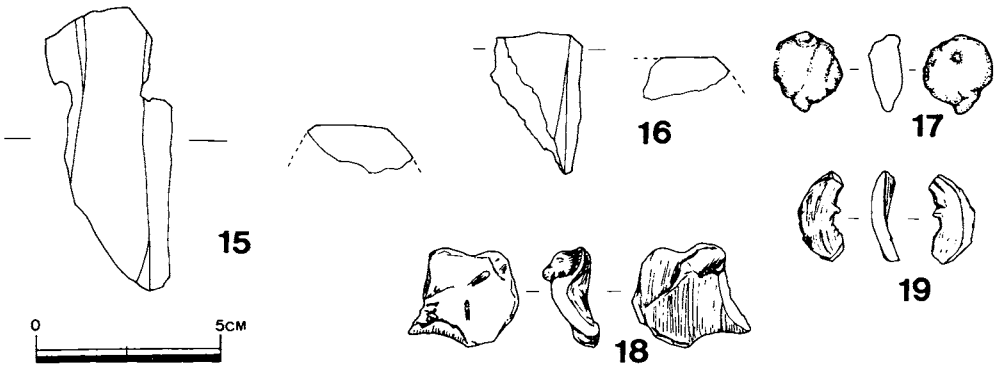
第47図　新開遺跡 Sb 区瓦実測図(5)(1/4)



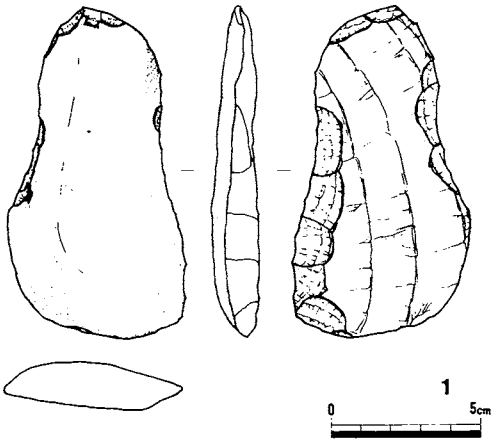
第48図　新開遺跡 Sb 区瓦実測図(6)(1/4)



第49図　新開遺跡 Sb 区その他の遺物実測図(1)(1/3)



第50図　新開遺跡 Sb 区その他の遺物実測図(2)(1/2)



第51図　新開遺跡 Sb 区石斧実測図(2/5)

土しており、これを鼎形土器の脚部として報告している(小倉、1982)。鼎形土器の脚部として把えてほぼ間違いなかろう。

17～19は粘土を指によってこね上げたり、工具によって切ったりした様な土製塊である。

(望月精司)

g．縄文時代の石器（第51図）

打製石斧

器形は従来の3分類において撥形に包括されるものである。横長剥片を素材としており、表面は基部及び右側縁中央部に部分的な調整がみられるだけでほぼ全面に円礫の自然面を残している。主要剥離面は左側縁に数回の大きな剥離が施され、右側縁には中央部付近に表面側からの急斜度な調整が加えられている。これらは器形を撥形に整えるためであろうか。　(下角圭司・菅谷みのぶ)

h．遺物観察表

須恵器坏

1号土器焼成窯(Sb区 L.N.01)出土

図版	整理番号	器種	器高	口径	底径 (口径/底径)	色調	特徴	備考
−1	SNSbL01−前庭部	坏	3.6	12.0	4.6 (2.6)	1	底部は平底を呈す。体部下端は内彎気味である。口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや平坦である。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良好。 ほぼ完形である。 口縁部付近に釉付着。
−2	SNSbL	坏	3.6	推 13.4	5.0	1	底部は平底を呈す。体部下端は直線的に開く。口縁部付近はやや外反する。口唇部はやや平坦である。	胎土は小石、白色砂粒を比較的多く含む。 焼成は良好。 残存率1/2。 口縁部〜体部上位に白色化した釉が付着。 ゆがみが見られる。
−3	SNSbL1−911, 981, L1上−065, 092	坏	3.5	11.7	6.5 (1.8)	2	底部は平底を呈す。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。小型の坏である。	胎土は白色砂粒、小石を多量に含み、粗悪である。 焼成は不良。 残存率1/2。 底部外面に棒状工具によるナゾリが見られる。
−4	SNSbL1−949, 974, 978, PA−03	坏	3.0	12.9	5.9 (2.2)	1	底部はやや上げ底状である。体部下端は2㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近はやや内彎気味に立ち上がる。口唇部は平坦である。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良好。 残存率1/2。 ややゆがみがみられる。 内外面に釉付着。
−5	SNSbL01−86	坏	4.5	13.8	5.3 (2.6)	1	底部は平底を呈す。体部下端は弱い段をもつ。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや平坦である。体部下位に接合痕がみられる。	胎土は小石、砂粒を僅かに含む。 焼成は良好。 残存率1/3。 内外面に釉付着。 ゆがみが若干みられる。
−6	SNSbL01−88	坏	5.0	14.2	5.5 (2.6)	1	底部は上げ底状である。体部下端は2㎜程垂直に立ち上がり、内彎する体部へ移行する。口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。体部下位に接合痕が見られる。	胎土は小石、白色砂粒を含む。 焼成は良好。 残存率1/2。 内外面に釉付着。 若干ゆがみがみられる。

表新開遺跡 Sb区遺物観察表(1)

図　版	整 理 番 号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
－7	SNSbL1下－089，090，091，682	坏	5.0	推 13.7	6.0	3	底部は平底を呈す。体部下端は弱段を持つ。口唇部は平坦である。体部上位に接合痕が見られる。	胎土は比較的に精選されており、僅かに白色砂粒を含む。 焼成は良。 残存率1/2。 内面に白色化した釉付着。 ゆがみが見られる。
－8	SNSbL1下－515	坏	5.3	推 13.5	推 6.3	6	底部はやや上げ底状である。体部下端は5㎜程垂直に立ち上がり、内彎する体部へ移行する。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや丸味を持つ。	胎土は石英、雲母、砂粒を含む。 焼成はやや不良。 残存率1/2。
－9	SNSbL1下－767	坏	4.0	推 13.3	6.1	1	底部はやや上げ底状である。体部下端は4㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部はやや丸味を持つ。	胎土は比較的精選されている。 焼成は良好。 残存率1/2。
－10	SNSbL1下－518	坏	3.8	推 13.2	5.9	2	底部はやや上げ底状である。体部下端は直線的に開く。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部はやや丸味を持つ。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 残存率1/2。
－11	SNSbL1下－073	坏	4.3	推 15.4	6.3	7	底部は平底を呈す。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。底部の器肉は薄い。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成はやや不良。 残存率1/5。 底部内面にスス付着。
－12	SNSbL1－936	坏	3.9	推 12.6	推 6.6	4	体部下端は4㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部はやや平坦である。	胎土は砂粒、石英を僅かに含む。 焼成は良。 残存率1/4。
－13	SNSbL1－949	坏	4.1	推 12.5	5.6	6	底部はやや上げ底状である。体部下端は3㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。全体的に器肉が薄い。	胎土は白色砂粒、小石、石英、雲母を僅かに含む。 焼成は不良。 残存率1/2。 内面にスス付着。
－14	SNSbL1－953	坏	3.8	推 14.0	推 5.8	2	体部下端は内彎気味である。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。体部上位に接合痕が見られる。	胎土は小石、砂粒、石英を含む。 焼成はやや不良。 残存率1/5。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(2)

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
－15	SNSbL1下－797，803	坏	4.4	推 14.7	推 5.2	2	底部はやや上げ底状である。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや平坦である。体部の中位から下位に接合痕が見られる。	胎土は比較的精選されており、僅かに白色砂粒を含む。 焼成は良。 残存率1/5。 内外面に白色化した釉が付着している。
－16	SNSbL1－958	坏	3.7	推 13.1	推 6.0	4	体部下端は4㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近は器肉を肥厚させ、内側に段を形成する。口唇部はやや平坦である。体部下位に接合痕が見られる。	胎土は砂粒、雲母を僅かに含む。 焼成は不良。 残存率1/3。
－17	SNSb－221，L1－977，L1下－071，072，075，111	坏	4.4	15.6	推 6.4	7	体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近はやや外反する。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、雲母を含む。 焼成はやや不良。 残存率1/2。 内面にスス付着。
－18	SNSb－139，L1－939	坏	4.3	推 11.0	5.0	1	底部はやや上げ底状である。体部下端は内彎気味である。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。全体的に器肉が薄く、小型である。	胎土は白色砂粒を含む。 焼成は良好。 残存率1/3。 外面に白色化した釉が付着している。
－19	SNSbL1上－0.26，112	坏	4.0	推 14.0	6.1	3	体部下端は直線的に開く。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部はやや平坦である。	胎土は雲母、砂粒を僅かに含む。 焼成はやや不良。 残存率1/3。
－20	SNSbL1－953	坏	3.9	推 13.8	推 6.3	1	体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや丸味を持つ。	胎土は白色砂粒を含む。 焼成は良好。 残存率1/4。 口唇部に釉が付着。
－21	SNSbL1－934	坏	3.9	推 13.1	推 6.0	1	体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良好。 残存率1/5。 内面に土器片、スサ、外面に白色化した釉が付着。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(3)

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
−22	SNSbL1下− 044，741	坏	4.5	推 13.5	推 6.2	4	体部下端は3㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は砂粒、石英を僅かに含む。 焼成は良。 残存率1/3。 若干ゆがみが見られる。
−23	SNSbL1下− 321，325，417	坏	3.8	推 13.4	推 5.0	4	体部下端は内彎気味である。口縁部付近は器肉を肥厚させ、内側に段を形成する。口唇部は若干丸味を持つ。体部の上位から中位に2段の接合痕が見られる。	胎土は比較的精選されており、僅かに砂粒を含む。 焼成は良。 残存率は1/3。
−24	SNSbL1− 939	坏	3.8	推 14.8	推 6.8	9	体部下端は3㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近は外反する。口唇部は若干丸味を持つ。体部の上位から中位に接合痕が見られる。	胎土は精選されており、雲母を含む。 焼成はやや不良。 残存率1/5。 若干ゆがみが見られる。
−25	SNSbL1上− 106，107，108， 109	坏	4.9	15.4	推 6.0	6	底部はやや上げ底状である。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、雲母を含む。 焼成はやや不良。 残存率1/2。 内面にスス付着。
−26	SNSbL1下− 444，450	坏	4.8	推 14.5	推 5.8	4	底部は平底を呈す。体部下端は5㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近はやや外反する。口唇部はやや平坦である。底部の器肉は厚い。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 残存率1/3。 ゆがみが見られる。
−27	SNSbL1上− 109，144	坏	4.6	推 15.2	推 6.4	7	底部は平底を呈す。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。体部上位に接合痕が見られる。底部の器肉は薄い。	胎土は精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成はやや不良。 残存率1/2。
−28	SNSbL1下− 392，626	坏	5.7	推 14.5	6.6	8	底部は平底を呈す。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。全体的に器肉が薄い。	胎土は精選されている。 焼成はやや不良。 残存率1/3。 内面に黒斑が見られる。
−29	SNSbL1− 975	坏	4.0	推 14.9	推 6.2	6	体部下端は内彎気味である。口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成は不良。 残存率1/3。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(4)

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
－30	SNSbL1－144	坏	4.7	推 14.8	推 6.1	4	体部下端は内彎気味である。口縁部付近はやや外反する。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は小石、砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 残存率1/4。
－31	SNSbL1下--652	坏	6.2	推 14.9	推 6.2	4	底部はやや上げ底状である。体部下端は4㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。大型の坏である。	胎土は白色砂粒、石英、雲母を僅かに含む。 焼成は不良。 残存率1/4。
－32	SNSbL1下－646，653	坏	4.3	推 13.2	推 6.0	4	体部下端は3㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近はやや内彎して器肉を肥厚させ、内側に段を形成する。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、僅かに小石を含む。 焼成は良。 残存率1/5。
－33	SNSbL1－007，930，976	坏	5.0	15.3	推 6.2	8	底部は平底を呈す。体部下端から内彎気味に立ち上がる。口唇部は丸味を持つ。	胎土は小石、雲母を僅かに含む。 焼成はやや不良。 残存率1/2。
－34	SNSbL1上－056	坏	4.2	推 13.4	推 5.8	8	体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近は外反して器肉を薄くする。口唇部は若干丸味を持つ。体部の中位に接合痕を持つ。体部中位は器肉が厚い。	胎土は石英、雲母を僅かに含む。 焼成はやや不良。 残存率1/4。
－35	SNSbL1下－788，789	坏	—	—	5.1	2	ゆがみが激しく、原形をとどめない。	胎土は小石、白色砂粒を含む。 焼成は良。 残存率3/4。 外面に火ダスキ有り。 ゆがみが激しい。
－36	SNSbL1下－143，183	坏	—	推 13.0	—	1	体部は内彎気味である。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させ、内側に段を形成する。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は小石、白色砂粒を含む。 焼成は良好。 口縁部～体部下位1/3が残存。 内外面に白色化した釉が付着。
－37	SNSbL1－927，928，939，948，953	坏	—	推 16.9	—	11	口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。比較的大型の坏である。	胎土は雲母、石英、砂粒を含む。 焼成はやや不良。 口縁部～体部下位1/3残存。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(5)

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
−38	SNSbL1下−050, 415	坏	—	推16.4	—	6	体部は内彎気味である。口縁付近は強く外反して器肉を薄くする。口唇部は若干丸味を持つ。比較的大型の坏である。体部の上位から下位に2段の接合痕が見られる。	胎土は白色砂粒、雲母を僅かに含む。 焼成は良。 口縁部〜体部下位1/3残存。
−39	SNSbL1下−376	坏	—	—	6.6	4	底部はやや上げ底状である。体部の器肉は薄い。	胎土は雲母、砂粒を含む。 焼成は良。 体部下半以下のみ残存。
−40	SNSbL1上−132, L1下−164	坏	—	—	6.0	5	底部はやや上げ底状である。体部下端は内彎気味である。体部の器肉は薄い。	胎土は小石、白色砂粒、雲母を僅かに含む。 焼成は良。 底部付近のみ完形。
−41	SNSbL1−949	高台付坏	—	—	推7.7	1	高台部は内彎気味に開く。畳付部は平坦である。底面は中央に糸切り痕を残し、周縁及び高台内面を工具状のものでナデ調整している。	胎土は白色砂粒、小石を僅かに含む。 焼成は良好。 高台部〜体部中位1/3残存。 内外面に白色化した釉付着。 若干ゆがみが見られる。
−42	SNSbL1−974	高台付坏	—	—	推7.3	8	高台部は長く開く。畳付部は若干平坦である。底部は器肉が厚い。	胎土は雲母、石英、砂粒を僅かに含む。 焼成はやや不良。 高台部付近1/3残存。
−43	SNSbL1上−131	高台付坏	—	—	推7.4	7	高台部は器肉薄く開く。畳付部はやや平坦である。底部は中央に糸切り痕を残し、周縁をナデ調整している。	胎土は砂粒、雲母と小石を僅かに含む。 焼成はやや不良。 高台部〜体部中位1/3残存。
−44	SNSbL1上−002	高台付坏	—	—	—	5	高台部付近の破片。高台部は開く。畳付部は丸味を持つ。	胎土は小石、砂粒、雲母を僅かに含む。 焼成は良。 高台部付近のみ残存。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(6)

灰層および漆黒色土層上面出土

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底径 (口径/底径)	色調	特　徴	備　考
—45	SNSb－305, 306	坏	5.1	15.7	5.9 (2.7)	9	底部はやや上げ底状である。体部下端は弱い段を持つ。体部から口縁部まで内彎気味に立ち上がる。口唇部はやや平坦である。体部上位に接合痕が見られる。	胎土は比較的精選されており、小石、雲母を僅かに含む。 焼成はやや不良。 残存率½。 内外面にスス付着。
—46	SNSb－405	坏	3.9	推 13.2	推 6.0	2	底部はやや上げ底状である。体部下端は2㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや丸味を持つ。体部は上位から中位に2段の接合痕を持つ。	胎土は白色砂粒、雲母、小石を僅かに含む。 焼成は良。 残存率⅓。
—47	SNSb－305	坏	5.3	推 13.0	推 6.0	8	体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部は内側に丸味を持つ。全体的に器肉が薄い。	胎土は精選されている。 焼成は不良。 残存率⅕。
—48	SNSb－410	坏	—	推 16.4	—	11	体部は内彎気味である。口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。大型の坏である。	胎土は雲母、小石、砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 口縁部～体部下位¼残存。
—49	SNSb－410	坏	—	推 14.8	—	11	口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや平坦である。体部の器肉は比較的薄い。体部上位に接合痕が見られる。	胎土は小石、砂粒、雲母を含む。 焼成は不良。 口縁部～体部下位⅕残存。
—50	SNSb－305, 306	坏	—	推 16.4	—	6	体部は内彎気味である。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや丸味を持つ。大型の坏である。	胎土は雲母、砂粒を含む。 焼成はやや不良。 口縁部～体部下位¼残存。
—51	SNSb－404, 411	坏	—	推 12.9	—	11	口縁部付近は強く外反して器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。体部の器肉は比較的薄い。	胎土は雲母、砂粒を僅かに含む。 焼成はやや不良。 口縁部～体部下位¼残存。
—52	SNSb－411	坏	—	推 14.1	—	11	口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部はやや丸味を持つ。	胎土は白色砂粒、石英、雲母を僅かに含む。 焼成はやや不良。 口縁部～体部中位⅕残存。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(7)

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
—53	SNSb—411	坏	—	推 11.4	—	4	体部から口縁部までやや内彎気味に立ち上がる。口唇部はやや丸味を持つ。比較的小型の坏である。体部上位に接合痕が見られる。	胎土は小石、白色砂粒を含む。 焼成はやや不良。 口縁部～体部下位1/3残存。
—54	SNSb—35	坏	—	—	5.2	11	底部は平底を呈す。体部下端は弱い段を持つ。底部の器肉は厚い。	胎土は石英、雲母、砂粒を僅かに含む。 焼成は不良。 底部付近のみ完形。
—55	SNSb—317, 318	坏	—	—	4.7	10	底部はやや上げ底状である。体部下端は弱い段を持ち、内彎気味に立ち上がる。体部の器肉は薄い。	胎土は雲母、小石、砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 底部付近ほぼ完形。 外面にスス付着。
—56	SNSb—404, 411	坏	—	—	5.5	11	底部はやや上げ底状である。体部下端は3㎜程垂直に立ち上がる。	胎土は雲母、砂粒を僅かに含む。 焼成はやや不良。 底部付近のみほぼ完形。
—57	SNSb—321	高台付坏	—	—	推 8.8	9	高台部は短く開く。畳付部は若干丸味を持つ。体部は内彎気味である。	胎土は比較的精選されており，僅かに雲母を含む。 焼成はやや不良。 高台部～体部中位1/4残存。
—58	SNSb—313	高台付坏	—	—	推 8.2	9	高台部は若干開く。畳付部は丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成は良。 高台部付近1/4残存。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(8)

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
−59	SNSb	坏	4.6	推 14.8	6.1	1	底部はやや上げ底状である。体部下端は内彎気味である。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。体部の内面下位に接合痕が見られ、器肉が薄い。	胎土は白色砂粒、小石を含む。 焼成は良好。 残存率½。 ややゆがみが認められる。 内外面に釉が付着。
−60	SNSb − 080, 083	坏	5.0	推 13.6	5.4	6	底部は平底を呈す。体部下端は4㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近は外反して器肉を肥厚させ、内側に段を形成する。口唇部は丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成は不良。 残存率½。 底部断面には底部円柱糸切り技法の際の接合痕が見られる。
−61	SNSb − 080, 086	坏	4.3	13.8	6.1 (2.3)	2	底部は平底を呈す。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近は内彎気味に立ち上がり、器肉を内側へ肥厚させる。口唇部はやや平坦である。口縁部内面は接合痕による段を持つ。	胎土は白色砂粒、石英を僅かに含む。 焼成は良好。 残存率⅔。 ややゆがみが見られる。 内面下位に土器片、外面に釉が付着している。
−62	SNSb−219	坏	6.3	推 15.1	7.1	7	底部はほぼ平底を呈す。体部下端は2㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。体部の上位に接合痕がみられる。底部は器肉が厚い。大型の坏である。	胎土は小石、雲母を比較的多く含む。 焼成は不良。 残存率½。
−63	SNSb − 154, 155	坏	4.5	推 13.0	5.7	2	底部はやや上げ底状である。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させ、内面に稜を持つ。口唇部はやや丸味を持つ。体部の上位に接合痕が見られる。	胎土は白色砂粒、小石を含む。 焼成は良。 残存率⅓。
−64	SNSb	坏	3.7	13.2	6.1 (2.2)	1	底部はやや上げ底状である。体部下端は2㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近は短く外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや丸味を持つ。体部上位に接合痕がみられる。	胎土は小石、白色砂粒を含む。 焼成は良好。 残存率½。 ゆがみが見られる。 内外面に釉付着、

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(9)

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
−65		坏	4.0	推 12.6	5.6	5	底部はやや上げ底である。体部下端は3㎜程度垂直に立ち上がる。口縁部付近は若干器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は砂粒、小石、石英、雲母を僅かに含む。 焼成は不良。 残存率1/2。
−66	SNSb−78	坏	4.4	推 13.0	推 6.4	11	体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや丸味を持つ。	胎土は砂粒、雲母を含む。 焼成は不良。 残存率1/3。
−67	SNSb−133	坏	4.4	推 14.1	5.7	4	底部はやや上げ底状である。体部下端は内彎気味である。口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。体部上位に接合痕が見られる。	胎土は砂粒、小石、石英を含む。 焼成は不良。 残存率1/2。
−68	SNSb−163, −169 I	坏	—	推 12.6	—	2	体部は内彎気味である。口縁端部は外反する。口唇部は平坦である。体部の中位から上位に接合痕が見られる。	胎土は小石、石英、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 口縁部〜体部下位1/3残存。
−69	SNSb−078	坏	—	推 15.0	—	11	口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや平坦である。体部の器肉は薄い。	胎土は小石、石英、砂粒を含む。 焼成は不良。 口縁部〜体部下位1/5残存。
−70	SNSb−019 I	坏	—	—	—	9	底部小破片である。底面にはヘラ状工具による線刻が見られる。	胎土は僅かに小石を含む。 焼成はやや不良。 底部付近1/5残存。
−71	SNSb−071, −083, 305	高台付坏	—	—	7.7	9	高台部は若干開く。畳付部は丸味を持つ。底面は中央に糸切り痕を残し、周縁をナデ調整している。底部の器肉は薄い。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成はやや不良。 高台部付近のみほぼ完形。
−72	SNSb−005 I, 016 I, 094 I	高台付坏	—	—	8.5	6	高台部は開く。畳付部は平坦である。底面は中央に糸切り痕を残し、周縁をナデ調整している。	胎土は比較的精選されており、僅かに砂粒を含む。 焼成はやや不良。 高台部付近のみほぼ完形。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(10)

図版	整理番号	器種	器高	口径	底径 (口径/底径)	色調	特徴	備考
−73	SNSb−061, 067	高台付坏	—	—	推 7.7	4	高台部は内彎気味に立つ。畳付部丸味を持つ。底面は中央に糸切り痕を残し、周縁をナデ調整している。底部の器肉は厚い。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。焼成は良。高台部付近½残存。
−74	SNSb−042	高台付坏	—	—	推 6.8	5	高台部は短く直立する。畳付部は平坦である。	胎土は砂粒、石英を僅かに含む。焼成はやや不良。高台部付近⅓残存。
−75	SNSb−057	高台付坏	—	—	7.8	6	高台部は短く開く。畳付部は若干平坦である。底面は中央に糸切り痕を残し、周縁をナデ調整している。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母を含む。焼成はやや不良。高台部付近½残存。
−76	SNSb−092	高台付坏	—	—	—	6	高台部付近の破片。高台部は短く開く。畳付部は丸味を持つ。	胎土は小石、砂粒、雲母を含む。焼成は不良。高台部付近のみ残存。

1号、2号土壙およびピット出土

図版	整理番号	器種	器高	口径	底径 (口径/底径)	色調	特徴	備考
−77	SNSbPA−03	坏	4.0	13.2	5.6	5	底部は上げ底である。体部下端は2㎜程垂直に立ち上り、内彎気味の体部へ移行する。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや丸味を持つ。体部上位に接合痕が見られる。	胎土は雲母、砂粒を含む。焼成はやや不良。残存率¾。
−78	SNSbPA−02, 04	坏	4.0	13.3	5.3 (2.5)	8	底部はやや上げ底である。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。体部の器肉は薄い。	胎土は小石を僅かに、雲母を比較的多量に含む。焼成は不良。残存率⅔。
−79	SNSbPA−03	坏	3.9	推 13.6	5.8	4	底部はやや上げ底状である。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は小石、石英を僅かに含む。焼成はやや不良。残存½。
−80		坏	4.1	13.1	5.8 (2.3)	6	底部はやや上げ底状である。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近は外反強く、器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。	胎土は白色砂粒、雲母を僅かに含む。焼成はやや不良。完形である。ゆがみが若干見られる。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(11)

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
－81	SNSbPA－03	坏	4.3	推 13.0	推 5.7	4	底部は平底を呈す。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部は内側に丸味を持つ。体部中位に接合痕が見られる。	胎土は小石、白色砂粒、雲母、石英を僅かに含む。 焼成はやや不良。 残存率1/3。
－82	SNSbPN－22	坏	4.1	12.9	5.2 (2.5)	2	底部はやや上げ底である。体部下端は2～3㎜程垂直に立ち上がる。口縁部付近はやや外反する。口唇部は丸味を持つ。体部の外面上位～中位に2段の接合痕を持つ。	胎土は精選されており、僅かに小石を含む。 焼成は良。 残存率1/3。 ややゆがみが見られる。
－83	SNSbPO－23	坏	4.0	推 13.7	推 6.1	10	体部下端は内彎気味である。口縁部付近はやや外反する。口唇部は丸味を持つ。体部の上位に接合痕が見られる。	胎土は精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成はやや不良。 残存率1/4。 若干ゆがみが見られる。
－84	SNSbPB－10	坏	3.5	推 14.0	推 6.0	3	体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 残存率1/4。 若干ゆがみが見られる。
－85	SNSb－042, L1－974, PA－01, 03, 04, 05	高台付坏	5.8	17.8	9.3	4	高台部は短く開く。体部は若干内彎気味である。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。体部上位に接合痕が見られる。	胎土は白色砂粒、石英、雲母を僅かに含む。 焼成は良。 残存率1/3。
－86	SNSb－093, 115, PA－07	高台付坏	4.9	推 14.0	6.7	1	高台部は短く直立気味である。畳付部は平坦である。体部は内彎気味である。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。体部下位に接合痕が見られる。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良好。 残存率1/3。 内面に白色化した釉、口縁部外面に光沢した釉が付着。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(12)　　(望月精司・松本富雄)

2号土器焼成窯(L，N，O2)出土

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
－1	SNSbL2－82	坏	—	推 13.0	—	11	口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。内側には段が見られる。口唇部は丸味を持つ。口縁部～体部下位に3段の接合痕が見られる。全体的に器肉は薄い。	胎土は白色砂粒、石英、雲母を僅かに含む。 焼成は不良。 口縁部～体部下位1/6残存。
－2	SNSbL2－09，49，82	坏	—	推 14.3		8	体部は直線的に開く。口縁部付近は器肉を肥厚させ、内側に段を形成する。口唇部は若干平坦である。	胎土は比較的精選されており、僅かに石英を含む。 焼成は良。 口縁部～体部中位1/5残存。
－3	SNSbL2－36，38，43，44，57，58	坏	—	推 14.2	—	11	口縁部付近は器肉を肥厚させ、内側に段を形成する。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成は良。 口縁部～体部下位1/2残存。 内外面に黒斑が見られる。
－4	SNSb－407，L2－81	坏	—	推 12.8	—	11	口縁部付近は若干器肉を肥厚させ、内側に段を形成する。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は砂粒、小石、雲母を含む。 焼成は不良。 口縁部～体部中位1/9残存。
－5	SNSbL2－82	坏	—	推 11.7	—	10	口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部はやや平坦である。	胎土は砂粒、石英、雲母を僅かに含む。 焼成は良。 口縁部～体部下位1/8残存。
－6	SNSbL2－81	坏	—	推 14.0	—	10	口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成は良。 口縁部～体部中位1/8残存。 内面に黒斑が見られる。
－7	SNSbL2－08	坏	—	推 13.2	—	10	口縁部付近はやや外反して、器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成は良。 口縁部～体部下位1/5残存。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(13)

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
−8	SNSbL2−32	坏	—	推 12.2	—	10	口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。体部の中位に接合痕がみられる。	胎土は小石、砂粒、雲母を僅かに含む。 焼成は良。 口縁部〜体部中位1/8残存。
−9	SNSbL2−01	坏	—	推 14.0	—	10	口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや丸味を持つ。比較的器肉は薄い。	胎土は比較的精選されている。 焼成は良。 口縁部〜体部中位1/5残存。
−10	SNSb−318, L2−81	坏	4.1	推 12.8	推 5.8	5	底部はほぼ平底を呈す。体部下端は弱い段を持つ。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部はやや平坦である。	胎土は白色砂粒、雲母を含む。 焼成はやや不良。 残存率1/3。 外面に黒斑が見られる。
−11	SNSbL2−40	坏	—	推 13.8	—	10	口縁部付近は外反強く器肉を肥厚させる。口唇部は丸味を持つ。体部中位に接合痕が見られる。	胎土は精選されている。 焼成は良。 口縁部〜体部中位1/5残存。
−12	SNSbL2−16	坏	—	推 14.0	—	11	口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや丸味を持つ。	胎土は僅かに雲母、砂粒を含む。 焼成は良。 口縁部〜体部中位1/8残存。
−13	SNSbL2−81	坏	—	推 12.0	—	10	口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。体部上位内面に接合痕が見られる。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母、砂粒を含む。 焼成は良。 口縁部〜体部中位1/5残存。 内外面に黒斑が見られる。
−14	SNSbL2−82	坏	—	推 14.0	—	11	口縁部付近はやや外反する。口唇部は若干丸味を持つ。体部の上位に2段の接合痕が見られる。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成は不良。 口縁部〜体部中位1/8残存。
−15	SNSbL2−82	坏	—	推 12.4	—	11	口縁端部は外反する。口唇部はやや平坦である。体部の上位から下位に2段の接合痕が見られる。比較的器肉は薄い。	胎土は僅かに砂粒、雲母を含む。 焼成は不良。 口縁部〜体部下位1/8残存。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(14)

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
−16	SNSbL2−14	坏	—	—	—	10	口縁部付近の破片。口縁部付近は器肉を肥厚させ、内側に弱い段を形成する。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は僅かに小石を含む。 焼成は良。 口縁部付近1/8残存。
−17	SNSbL2−81	坏	—	—	—	8	口縁部付近の破片。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。内側には弱い段が形成される。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、雲母を僅かに含む。 焼成は良。 口縁部付近1/8残存。 内面に、黒斑が見られる。
−18	SNSbL2−54	坏	—	—	—	10	口縁部付近の破片。口縁部付近は器肉を肥厚させ、内側に段を形成する。口唇部は丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、僅かに砂粒を含む。 焼成は良。 口唇部付近1/8残存。
−19	SNSbL2−63	坏	—	—	—	9	口縁部～体部中位の破片。口縁部付近は器肉を肥厚させ、内側に段を形成する。口唇部は若干平坦である。体部の上位に接合痕が見られる。	胎土は僅かに砂粒、雲母を含む。 焼成は良。 口縁部～体部中位1/10残存。
−20	SNSbL2−82	坏	—	—	—	11	口縁部付近の破片。口縁部付近は外反して器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成は良。 口縁部～体部中位1/10残存。
−21	SNSbL2−81	坏	—	—	—	10	口縁部付近の破片。口縁部は外反する。口唇部はやや平坦である。	胎土は砂粒、雲母を比較的多く含む。 焼成は不良。 口縁部～体部中位1/10残存。
−22	SNSbL2−00, 82	坏	—	—	—	10	口縁部付近の破片。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母を含む。 焼成は良。 口縁部～体部中位1/8残存。 内外面に黒斑が見られる。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(15)

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
−23	SNSbL2−82	坏	—	—	—	11	口縁部付近の破片。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部は若干丸味を持つ。全体的に器肉が薄い。	胎土は石英、雲母、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は不良。 口縁部～体部上位1/10残存。
−24	SNSbL2−82	坏	—	—	—	8	口縁部付近の破片である。口縁部付近はやや外反して器肉を肥厚させる。口唇部はやや平坦である。	胎土は白色砂粒、小石、雲母を含む。 焼成は不良。 口縁部～体部中位1/8残存。 若干ゆがみが見られる。
−25	SNSbL2−41	坏	—	—	—	10	口縁部付近の破片。口縁部付近は器肉を肥厚させる。口唇部はやや平坦である。	胎土は雲母、石英、砂粒を含む。 焼成は良。 口縁部～体部中位1/10残存。
−26	SNSbL2−00	坏	—	—	—	10	底部は平底を呈す。体部下端は弱い段を持つ。	胎土は小石、雲母を僅かに含む。 焼成は良。 底部付近のみ完形。
−27	SNSbL2−36	坏	—	—	6.0	5	底部はやや上げ底状である。体部下端は2㎜程垂直に立ち上がる。	胎土は雲母、石英を僅かに含む。 焼成は良。 底部付近のみ残存。 内面に黒斑が見られる。
−28	SNSbL2−13	坏			5.9	10	底部はやや上げ底状である。体部下端は弱い段を持つ。	胎土は雲母、砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 底部付近のみ残存。
−29	SNSbL2−82	坏	—	—	6.0	8	底部付近の破片である。底部は平底を呈す。体部下端は直線的に開く。底部の器肉は厚い。	胎土は精選されており、雲母を含む。 焼成は良。 底部付近3/4残存。
−30	SNSbL2−37	坏	—	—	推 5.6	9	底部付近の破片である。底部はほぼ平底を呈す。体部下端は弱い段を持つ。	胎土は小石、雲母を僅かに含む。 焼成は良。 底部付近1/3残存。
−31	SNSbL2−81	坏	—	—	推 6.4	8	底部付近の破片である。底部はやや上げ底状である。体部下端は弱い段を持つ。	胎土は小石、砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 底部付近1/4残存。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(16)

図　版	整理番号	器種	器高	口径	底　径 (口径/底径)	色調	特　　徴	備　　考
—32	SNSbL2—22	坏	—	—	5.1	8	底部付近の破片である。底部は上げ底状である。	胎土は精選されており、雲母を含む。 焼成は不良。 底部付近⅔残存。 若干ゆがみが見られる。
—33	SNSbL2—00, 15	坏	—	—	推 7.5	9	体部下端は3㎜程垂直に立ち上がる。	胎土は比較的精選されている。 焼成は良。 底部付近½残存。
—34	SNSbL2—18	坏	—	—	推 4.8	7	底部付近の破片である。体部下端は3㎜程垂直に立ち上がる。	胎土は精選されている。 焼成は良。 底部付近⅕残存。
—35	SNSb—407, L2—82	坏	—	—	5.0	11	底部は上げ底状である。体部下端は弱い段を持つ。	胎土は砂粒、雲母、小石を含む。 焼成は不良。 底部付近のみ完形。
—36	SNSbL2—82	高台付坏	—	—	推 9.2	10	高台部付近の破片である。高台部は開く形を呈す。	胎土は小石を含む。 焼成は不良。 高台部付近⅕残存。
—37	SNSbL2—04	紡錘車	—	—	—	10	片面は糸切り痕を残し、もう片面は水挽き調整。中央には焼成前の穿孔が見られる。周辺はヘラみがき調整。断面形を見ると坏の底部欠損部を再利用しているかのようである。	胎土は比較的精選されている。 焼成は良。 内面に黒斑が見られる。
—38	SNSbL2—21	紡錘車	—	—	—	9	片面は糸切り痕を残し、もう片面は水挽調整。中央に焼成前の穿孔がみられる。周辺は工具による粗雑なナデ調整。	胎土は雲母を僅かに含む。 焼成は良。
—39	SNSbL2—00, 35, 81, 82	甕 (上師器)	—	—	8.0	10	胴部中位以上を欠損する。底部は平底である。比較的胴部の器肉は薄い。調整は胴部で縦方向のヘラ削り。胴部下端で横方向のヘラみがき。底部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	胎土は雲母、砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 底部～胴部下位⅕残存。 内外面に黒斑が見られる。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(17)　　(望月精司・松本富雄)

須恵器壺・甕

1号窯（L、N、01）出土

図版	整理番号	器種	法量 (cm)	色調	特徴	備考
－1	SNSb－072 L1－973，L1上－011	甕	口径推18.0 現高 7.0	2	肩部以下を欠損する。頸部は若干屈曲し、口縁部で外反する。口唇部は内傾し、下端部を突出させる。調整はロクロ。	胎土は小石・白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良好。 口縁部～頸部1/2。 内外面に白色した釉付着。
－2	SNSbL 1上－006，122，127，L1下－166	長頸壺	現高 7.2	1	肩部付近の破片。肩部はやや張りを持ち、なだらかに立ち上がる。内面に接合痕が見られる。調整はロクロ。	胎土は小石、白色砂粒を含む。 焼成は良好。 胴部上半のみ3/4残存。 外面に白色化した釉付着。
－3	SNSbL1下－339	甕	底径推14.3 現高 3.2	1	胴部下位以上を欠損する。底部は平底を呈す。胴部は開く。外面に接合痕有り。調整はロクロ。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良好。 底部付近1/6。 内面に白色化した釉付着。
－4	SNSbL1下－609	甕	底径推15.6 現高 3.2	4	胴部下位以上を欠損する。底部は平底を呈し、中央にくぼみを持つ。調整はロクロ。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成はやや良好。 底部付近1/4残存。
－5	SNSbL1－904，L1－142，L1下－074	甕	底径推17.0 現高 4.0	4	胴部中位以上を欠損する。底部は平底を呈す。調整はロクロ。	胎土は比較的精選されており、僅かに白色砂粒を含む。 焼成は良。 底部付近1/6残存。
－6	SNSbL1下－480	甕	底径推12.3 現高 3.3	4	胴部中位以上を欠損する。底部は平底を呈す。胴部下位は回転ヘラ削り、それ以上はロクロで調整している。	胎土は白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 底部付近1/4残存。
－7	SNSbL1上－017，119	甕	底径推13.2 現高 3.3	1	胴部下位以上を欠損する。高台部は短く開く。調整はロクロ。	胎土は比較的精選されており、僅かに白色砂粒を含む。 焼成は良好。 底部付近1/2残存。
－8	SNSb－127，L1－971		底径推13.2 現高 1.7	6	高台部付近の破片。高台部は開く。畳付部は平坦である。調整はロクロ。	胎土は白色砂粒、雲母を僅かに含む。 焼成はやや不良。 高台部のみ残存。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(18)

図版	整理番号	器種	法量 (cm)	色調	特徴	備考
－9	SNSbL1－926	甕	底径推14.8 現 高 2.9	4	高台部付近の破片。高台部は内彎気味に立ち、端部で外傾する。畳付部はやや平坦である。調整はロクロ。	胎土は小石、石英、雲母を僅かに含む。 焼成はやや不良。 高台部のみ残存。
－10	SNSbL1－981, L1上－078	甕	現 高 7.5	3	胴部下位以下の破片。高台部は短く開く。調整は胴部下位で回転ヘラ、それ以外ではロクロである。胴部下位内面に2段の接合痕が見られる。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 胴部下位以下の破損のみ残存。

表土出土

図版	整理番号	器種	法量 (cm)	色調	特徴	備考
－11	SNSb－039, 075I, 085, 094I, 197, PL－20	甕	口径推33.0 現 高 7.9	4 一部 1	胴部中位以下を欠損する。口縁部に最大径を有する。口縁部付近は外反する。口唇部は内傾して立ち上がり、下端部を突出させる。調整はロクロ。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良好と良。 胴部上位以上1/6残存。 口縁部外面に白色化した釉、口縁部内面に光沢化した釉が付着。
－12	SNSb－010I	甕	口径推28.0 現 高 8.5	7	胴部下以下を欠損する。頸部は屈曲し、口縁部で短く外反する。口唇部は内傾して、下端部を突出させる。頸部内面に接合痕有り。調整はロクロ。	胎土は比較的精選されており、僅かに小石を含む。 焼成はやや不良。 胴部上半以上1/6残存。
－13	SNSb－094I、101I	甕	口径推21.0 現 高 2.5	4	胴部以下を欠損する。頸部は屈曲し、口縁部で短く外反する。口唇部は内傾し、下端を突出させる。調整はロクロ。	胎土は砂粒を僅かに含む。 焼成はやや不良。 口縁部付近1/4残存。
－14	SNSb－093	甕 ?	口径推24.0 現 高 5.4	1	胴部以下を欠損する。体部は外傾して立ち上がり、最大径を有する口縁部に至る。口唇部は下端を突出させる。調整はロクロ。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良好。 口縁部～胴部上位1/6残存。内外面に釉付着。
－15	SNSb－080	甕	現 高 4.8	1	胴部中位以下を欠損する破片。頸部から口縁部にかけて短く外反する。口唇部は内傾し、下端部を突出させる。調整はロクロ。	胎土は小石、白色砂粒を含む。 焼成は良好。 口縁部付近の破片のみ残存。
－16	SNSb－039	甕	現 高 6.0	1	胴部中位以下を欠損する破片。頸部は屈曲して、口縁部で短く外反する。口唇部は内傾し、下端部を突出させる。調整はロクロ。	胎土は白色砂粒、石英を含む。 焼成は良好。 口縁部付近の破片のみ残存。

図版	整理番号	器種	法量 (cm)	色調	特徴	備考
−17	SNSb−160	甕	現 高 4.9	6	胴部中位以下を欠損する。口縁部は外反する。口唇部は平坦である。調整はロクロ。	胎土は小石、砂粒、雲母を僅かに含む。 焼成は不良。 口縁部付近の破片のみ残存。
−18	SNSb−121	長頸壺	口径推18.0 現 高 5.5	3	頸部以下を欠損する。口縁部は外反して立ち上がり、口唇部はやや内傾する。口唇下端部は突出する。口縁部に2段の接合痕が見られる。調整はロクロ。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 口縁部付近1/3残存。
−19	SNSb−047I	長頸壺	口径推15.1 現 高 4.6	4	頸部以下を欠損する。口縁部付近は外反して立ち上がり、口唇部はほぼ直立する。口唇上端部は突出する。口縁部内面に2段の接合痕が見られる。調整はロクロ。	胎土は砂粒、雲母、石英を僅かに含む。 焼成はやや不良。 口縁部付近1/3残存。
−20	SNSb−111	長頸壺	口径推17.5 現 高 2.8	2	頸部以下を欠損する。口縁部付近は外反して口唇部でほぼ直立する。口唇下端部は突出する。調整はロクロ。	胎土は比較的精選されており、僅かに白色砂粒を含む。 焼成は良。 口縁部付近1/3残存。
−21	SNSb−010I	長頸壺	現 高 3.3	2	口縁部付近の破片。口縁部付近は外反して立ち上がり、口唇部はやや内傾する。口唇上端部は突出する。調整はロクロ。	胎土は白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良好。 口縁部付近のみ残存。 内外面に白色化した釉が付着。
−22	SNSb−201	長頸壺	現 高 4.3	2	口縁部付近の破片。口縁部付近は外反して立ち上がり、口唇部は内傾する。口唇下端部は突出する。調整はロクロ。	胎土は比較的精選されている。 焼成は良好。 口縁部付近のみ残存。 内外面に白色化した釉付着。
−23	SNSb−075I, 084I, 085I, 094I, 100I	長頸壺	現 高 8.2	2	口縁端部及び胴部中位以下を欠損する。頸部は「L」字状に屈曲して立ち上がり、口縁部でやや外反する。調整はロクロ。	胎土は僅かに白色砂粒、小石を含む。 焼成は良好。 口縁部～肩部1/3残存。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(20)

図版	整理番号	器種	法量 (cm)	色調	特徴	備考
－24	ＳＮＳｂ－121，321	甕	現　高 3.7	1	頸部以上の破片。口縁部は外傾して立ち上がり、口唇部でやや内傾する。口唇下端部は突出する。調整はロクロ。	胎土は比較的精選されており、僅かに白色砂粒を含む。 頸部以上の破片のみ残存。 内外面に白色化した釉付着。
－25	SNSb－155	甕	口径推15.4 現　高 5.5	2	胴部中位以下を欠損する。頸部は「く」の字に屈曲する。口縁部は外傾して立ち上がり、口唇部で内傾する。口唇下端部は突出する。調整はロクロ。	胎土は比較的に精選されており、僅かに白色砂粒を含む。 焼成は良好。 胴部上位以上1/4残存。 胴部外面、口縁部内面に白色化した釉、口縁部外面に光沢化した釉が付着。
－26		甕	口径推29.0 現　高 9.7	7	肩部以下を欠損する。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部で外反する。口唇部は内傾し、下端部を突出させる。調整はロクロ。	胎土は比較的精選されており、僅かに砂粒を含む。 焼成はやや不良。 口縁部～頸部1/3残存。
－27	ＳＮＳｂ－057，058	甕	口径推23.4 現　高 2.6	2	頸部以下を欠損する。口縁部付近は外反して、口唇部でやや外傾する。口唇下端部は突出する。調整はロクロ。	胎土は比較的精選されており、僅かに白色砂粒を含む。 焼成は良。 口縁部付近1/10残存。
－28	SNSb－011 I，062I	甕	現　高 8.0	1	胴部以下を欠損する破片。口縁部付近は外反して立ち上がり、口唇部で内傾する。口唇下端部は突出する。調整はロクロ。	胎土は僅かに白色砂粒を含む。 焼成は良好。 頸部以上の破片のみ残存。 外面に白色化した釉付着。
－29	SNSb	甕	底径推12.7 現　高 1.4	1	胴部以上を欠損する。高台部は短く開く。調整はロクロ。	胎土は小石、砂粒を含む。 焼成は良好。 底部2/3残存。 内外面に白色化した釉付着。
－30	SNSb－072	甕	底径推11.2 現　高 1.3	2	高台部付近の破片。高台部は短く立つ。調整はロクロ。	胎土は白色砂粒を含む。 焼成は良好。 底部付近1/5残存。 底面及び胴部外面に釉付着。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(21)

図版	整理番号	器種	法量 (cm)	色調	特徴	備考
−31	SNSb−085	甕	現 高 1.6	1	高台部付近の破片。高台部は短く開く。調整はロクロ。	胎土は比較的精選されており、僅かに砂粒を含む。 焼成は良好。 高台部付近の破片のみ残存。 胴部外面に釉、内面に白色化した釉が付着。
−32	SNSb−070, 303	甕	底径推12.8 現 高 1.4	5	高台部付近の破片。高台部は開く。畳付部は平坦である。高台部に焼成前の孔が穿たれている。調整はロクロ。	胎土は小石、砂粒を僅かに含む。 焼成はやや不良。 高台部のみ残存。
−33	SNSb−004I	甕	底径推15.2 現 高 3.5	6	胴部中位以上を欠損する。底部は平底を呈す。調整はロクロ。	胎土は小石、雲母、砂粒を僅かに含む。 焼成はやや不良。 底部付近1/5残存。
−34	SNSb−042	耳付甕 ?	口径推13.5	4	口縁部付近の破片。頸部は屈曲して口縁部は短く直立する。口唇部は内側に丸味を持つ。調整はロクロ。	胎土は比較的精選されている。 焼成は良。 口縁部〜肩部上位1/5残存。
−35	SNSb−058	耳付甕	——	1	把手(耳)のみの破片。指頭痕が見られる。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良好。 把手のみ残存。 白色化した釉が付着。
−36	⑧	耳付甕	——	2	把手(耳)付近の破片。指頭圧痕がみられる。	胎土は白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 把手付近のみ残存。 釉が付着している。
−37	SNSb−080	耳付甕	——	2	甕の把手(耳)付近の破片。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 把手付近の破片のみ残存。
−38	SNSb−115	甕	現 高 4.5	2	胴部小破片である。内外面に葉の圧痕が見られる。	胎土は小石、白色砂粒を僅かに含む。 焼成は良。 胴部付近の小破片。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(22)

土師器甕

図版	整理番号	器種	法量 (cm)	色調	特徴	備考
−1	SNSb−071, 080, 083, 128, 321, L1−953	甕	口径推19.4 現 高11.7	7	胴部下半を欠損する。胴部中位に最大径を持つ。頸部はゆるやかに屈曲し、口縁部で外反する。口縁部外面に若干稜を形成する。口唇部はやや平坦である。外面は口縁部から頸部で横ナデ、胴部上位で横方向、それ以下で斜方向及び縦方向のヘラ削り。内面は横ナデ。	胎土は小石、砂粒、石英、雲母を比較的多く含む。 焼成はやや不良。 口縁部〜胴部中位½残存。 表土、包含層、灰層および1号窯(L,N,01)出土。
−2	SNSbL01−941	甕	口径推13.4 現 高 5.3	11	胴部中位以下を欠損する。肩部はゆるやかに立ち上がる。頸部は屈曲して、口縁部で器肉を肥厚させながら外傾する。口縁部内外面に稜を形成する。外面は肩部で横方向のヘラ削り、それ以上で横ナデ。内面は横ナデ。	胎土は比較的精選されている。 焼成はやや不良。 口縁部〜肩部¼残存。 1号窯(L,N,01)出土。
−3	SNSbL01−948	甕	口径推13.8 現 高 3.7	10	肩部以下を欠損する。頸部は屈曲して、口縁部で器肉を肥厚させながら外傾する。口縁部外面に稜を形成する。外面は口縁部から頸部で横ナデ、それ以下で横方向のヘラ削り。内面で横ナデ。	胎土は比較的精選されており、僅かに雲母、砂粒を含む。 焼成はやや不良。 口縁部〜頸部⅓残存。 1号窯(L,N,01)出土。
−4	SNSb−194	甕	現 高 2.7	6	口縁部付近の破片。頸部は内傾し「く」字に屈曲した後、口縁部で外傾する。「コ」字状口縁の退化した形態か？ 口縁部外面に接合痕あり。内外面とも横ナデ。	胎土は砂粒、石英を含む。 焼成は良。 口縁部付近の破片のみ残存。 表土、包含層出土。
−5	SNSb−019I	甕	現 高 2.3	10	口縁部付近の破片。頸部で若干屈曲し、口縁部で外傾する。内外面とも横ナデ。	胎土は比較的精選されている。 口縁部付近の破片のみ残存。 表土、包含層出土。
−6	SNSb−007I	甕	底径推 4.6 現 高 1.0	7	底部付近の小破片・外面は斜方向のヘラ削り、底面は糸切り痕を残す。	胎土は小石、砂粒、石英を含む。 焼成は良。 底部付近½残存。 底面に黒斑が見られる。 表土、包含層出土。
−7	SNSb−095, PA−02	甕	底径推 6.6 現 高 3.0	10	底部付近の破片。外面は縦方向のヘラ削り。内面は横ナデ。	胎土は砂粒、石英を含む。 焼成はやや不良。 底部付近½残存。 表土、包含層および1号土壙(PA)出土。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(23)　　(望月精司)

瓦

図　版	整理番号	種別	広端幅(cm)	狭端幅(cm)	長さ(cm)	色調	特　　徴	備　　考
－1	SNSbL1－939，941，948	男瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩きの後、横ナデ調整。輪積み痕が約4cm間隔に3本みられる。凹面は布目。布のよれによる圧痕がみられる。側端面はヘラ切り後、両端縁をナデている。	焼成良好。胎土は精選されているが若干の小石を含む。
－2	SNSb－015I	男瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩きの後、横・縦のナデ調整がみられる。凹面は布目。布のあわせめがみられる。側端面はヘラ切りの後、凸面端縁に指ナデを施す。	焼成良好。胎土は精選されている。
－3	SNSbL1上－016	男瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩きの後、横のナデ調整。凹面は布目。広端面はナデ調整の後、ワラ状圧痕がわずかにみられる。器肉は広端縁付近で段差を持って肥厚している。	焼成良。胎土は精選されているが若干の小石を含む。
－4	SNSbL1上－024	男瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩きの後、横のヘラナデ調整。凹面は布目。一部に輪積み痕がみられる。広端面はヘラナデの後、ワラ状圧痕がみられる。側端面はヘラ切り。	焼成良好。胎土は精選されている。
－5	SNSb－083，071	男瓦	—	—	—	2	凸面は縄の叩きの後、横のナデ調整で、その際生じたと思われる浅い断面半円形の沈線が2条みられる。凹面は布目。線状の紐痕が2本平行して縦断してみられる。側端面はヘラ切りの後、両端縁に指ナデを施している。	焼成良好。胎土は精選されている。
－6	SNSb－085	男瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩きの後、横ナデ調整。凹面は布目。2本の紐状圧痕がみられる。広端面はナデ調整の後、ワラ状圧痕がみられる。側端面はヘラ切り。	焼成良。胎土は精選されている。
－7	SNSbL1上－116	男瓦	—	—	—	2	凸面は縄の叩きの後、横ナデ調整。凹面は布目。広端面はナデ調整の後、ワラ状圧痕がみられる。側端面はヘラ切り。	焼成良。胎土は精選されているが若干の砂を含む。
－8	SNSb－010I，015I	男瓦	—	11.0	—	2	凸面は縄の叩きの後、横のナデ調整。凹面は布目。狭端面は指ナデ調整の後、ワラ状の圧痕がみられる。側端面はヘラ切りの後、両端縁に指ナデを施している。	焼成良好。胎土は精選されているが、わずかに砂を含む。
－9	SNSb－086，088	男瓦	—	—	—	2	凸面は縄の叩きの後、横ナデ調整。凹面は布目。紐状圧痕・布のほつれがみられる。狭端面はヘラナデ調整の後、ワラ状圧痕がみられる。側端面はヘラ切り。	焼成やや不良。胎土は精選されている。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(24)

図　版	整理番号	種別	広端幅(cm)	狭端幅(cm)	長さ(cm)	色調	特　　徴	備　　考
－10	SNSb－015I	男瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩きの後、横ナデ調整。凹面は布目。型に起因すると思われる膨みが広端にみられる。広端面はナデ調整の後、ワラ状圧痕がみられる。	焼成良好。胎土は精選されている。
－11	SNSb－093	男瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩きの後、横ナデ調整。ヘラ状工具による「×」印の刻みがみられる。凹面は布目で布のあわせめがみられる。また線状の紐痕が2本平行して縦断しているのがみられる。凹面全体に弱い自然釉が認められる。	焼成良好。胎土は精選されている。
－12	SNSbPA－07，SbPB－010	男瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩きの後、横ナデ調整。凹面は布目。布の補修(縫合)のあとが明瞭にみられ、一部布目を消すナデがみられる。側端面はヘラ切りの後、端縁をナデている。	焼成良。胎土は精選されている。
－13	SNSbL1下－654，716	女瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩き。側端に平行する浅い棒状圧痕及び、二次焼成による剝離がみられる。凹面は布目。棒状工具によるナデがみられる。側端面はナデ調整。	焼成良。胎土は精選されているがわずかに小石を含む。
－14	SNSbL1下－020，915	女瓦	—	—	—	4	凸面は縄の叩き。凹面は布目。広端面はナデ調整の後、ワラ状圧痕がみられる。側端面はナデ調整。	焼成良。胎土は精選されている。
－15	SNSb－088，SbL1下－311，765	女瓦	—	—	—	3	凸面は縄の叩き。側端に平行する1本の棒状圧痕がみられる。凹面は布目。	焼成良好。胎土は精選されているが若干の砂を含む。
－16	SNSbL1－932，934，939，948	女瓦	—	—	—	8	凸面は縄の叩き。凹面は布目。側端面はナデ調整。	焼成不良。胎土は精選されている。
－17	SNSbL1－975，Sb－318	女瓦	—	—	—	4	凸面は縄の叩き。補修と思われるナデにより叩き目が一部消えている。凹面は布目。布目が乱れており、補修と思われるナデがみられる。広端面はナデ調整。弱いワラ状圧痕がみられる。側端面はナデ調整。	焼成やや不良。胎土は精選されているが若干の砂を含む。
－18	SNSbL1－934	女瓦	—	—	—	4	凸面は縄の叩き。側端部にナデが認められる。凹面は布目。棒状工具によるナデ、及び補修と思われるナデ痕がみられる。側端面はナデ調整。	焼成不良。胎土は砂・雲母を多く含む。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(25)

図　版	整理番号	種別	広端幅(cm)	狭端幅(cm)	長さ(cm)	色調	特　　徴	備　　考
－19	SNSbL1上－034，041	女瓦	—	—	—	3	凸面は縄の叩き。側端に平行する浅い棒状圧痕がみられる。凹面は布目。布のほつれた部分がみられる。広端面はナデ調整の後、ワラ状圧痕がみられる。側端面はナデ調整。	焼成良。胎土は精選されている。
－20	SNSbL1下－736	女瓦	—	—	—	3	凸面は縄の叩き。側端に平行する１本の棒状圧痕、及び補修と思われるナデがみられる。凹面は布目。補修と思われるナデがみられる。狭端面・側端面ともにナデ調整。	焼成良。胎土は精選されている。
－21		女瓦	24.5	—	—	2	凸面は縄の叩き。叩き具の痕跡より、5.5cm平方程度の叩き具を使用したと思われる。また側端に平行する浅い棒状圧痕がみられる。凹面は布目。広端面はヘラナデ調整後、ワラ状圧痕がみられる。側端面はナデ調整。なお、広端面を調整後、側端面を調整している。	焼成良好。胎土は小石・白色砂粒・雲母を若干含む。
－22	SNSbL1下－452	女瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩き。側端に平行する浅い棒状圧痕がみられる。凹面は布目。棒状工具によるナデがみられる。狭端面・側端面ともにナデ調整。	焼成良好。胎土は精選されているが若干の砂を含む。
－23	SNSb－039	女瓦	—	—	—	2	凸面は縄の叩き。凹面は布目。型に起因すると思われる段が側端に平行して認められる。また、棒状工具によるナデもみられる。側端面はナデ調整。	焼成良好。胎土は精選されているが若干の砂を含む。
－24	SNSbL1下－605	女瓦	—	—	—	3	凸面は縄の叩き。凹面は布目。型に起因すると思われる段が側端に平行して認められる。側端面はナデ調整。	焼成良好。胎土は精選されているが若干の砂を含む。
－25	SNSbL1下－099	女瓦	—	—	—	3	凸面は縄の叩き。補修と思われるナデがみられる。凹面は布目。型に起因すると思われる段が側端に平行して認められる。狭端面・側端面ともにナデ調整。	焼成良好。胎土は精選されているが若干の砂を含む。
－26	SNSbL1下－660	女瓦	—	—	—	4	凸面は縄の叩き。側端に平行する棒状圧痕がみられる。凹面は布目。広端部の一角に「L字」状の凹みが認められる。広端面はナデ調整の後、ワラ状圧痕がみられる。	焼成良好。胎土は精選されている。
－27	SNSbL1－936	女瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩き。狭端部は叩き目がつぶれている。凹面は布目。「L字」状の凹みが認められる。凸面・凹面ともに二次焼成による剥離がみられる。	焼成良好。胎土は精選されている。

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(26)

図　版	整理番号	種別	広端幅(cm)	狭端幅(cm)	長さ(cm)	色調	特　　徴	備　　考
－28	SNSbL1下－095，512，641	女瓦	—	—	—	4	凸面は縄の叩き。凹面は布目。矩形状の凹み、及び糸のもつれたような圧痕がみられる。広端面はナデ調整の後、ワラ状の圧痕が認められる。	焼成良。胎土は精選されている。
－29	SNSbL1上－032	女瓦	—	—	—	3	凸面は縄の叩き。凹面は布目。矩形状の凹みが認められる。	焼成良好。胎土は精選されている。
－30	SNSb－194	女瓦	—	—	—	2	凸面は縄の叩き。ナデにより叩き目の消えている部分がみられる。凹面は布目。糸のもつれたような圧痕がみられる。	焼成良好。胎土は精選されているが若干の砂を含む。
－31	SNSbL1下－640	女瓦	—	—	—	2	凸面は縄の叩き。ナデにより叩き目の消えている部分、及び縄のほつれによる圧痕がみられる。凹面は布目。ナデにより布目の消えている部分がみられる。側端面はナデ調整。	焼成良。胎土は精選されているが若干の砂を含む。
－32	SNSbL1－957	女瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩き。縄のほつれによる圧痕がみられる。凹面は布目。棒状工具によるナデがみられる。	焼成良好。胎土は砂を多く含む。
－33	SNSbL1下－607	女瓦	—	—	—	4	凸面は縄の叩き。ナデにより叩き目のつぶれている部分、及び縄のほつれによる圧痕がみられる。凹面は布目。布目の歪みが認められる。側端面はナデ調整。	焼成良。胎土は精選されているが砂を含む。
－34	SNSbL1下－810	女瓦	—	—	—	3	凸面は縄の叩き。狭端縁・側端縁に、ナデにより叩き目の消えている部分がみられる。凹面は布目。狭端面・側端面ともにナデ調整。	焼成良。胎土は精選されている。
－35	SNSb－079I	女瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩き。側端に平行する浅い棒状圧痕、及び側端にナデが施され叩き目の消えているのがみられる。凹面は布目。側端面はナデ調整。	焼成良。胎土は精選されているが、砂・小石を含む。
－36	SNSbL1下－711	女瓦	—	—	—	1	凸面は縄の叩き。ナデにより叩き目の消えている部分がみられる。凹面は布目。広端面はナデの後、ワラ状圧痕がみられる。凹面広端縁に粘土を貼る補修を最後に行っている。	焼成良。胎土は精選されているが小石を含む。
－37	SNSbL1上－029	女瓦	—	—	—	3	凸面は縄のやや強い叩き。叩き具は4cm程度の幅かと思われる。凹面は布目。模骨と思われる膨みが認められる。	焼成良。胎土は精選されている。
－38	SNSb－167I	女瓦	—	—	—	2	凸面は縄の叩き。ナデにより叩き目の消えている部分がみられる。凹面は布目。模骨と思われる弱い膨みが認められる。	焼成良。胎土は精選されているが、若干の砂を含む。

（竹内宇哲・渡辺謙・新島喜久雄・菅谷みのぶ）

表新開遺跡 Sb 区遺物観察表(27)

7．浅間後遺跡の調査

調査地域は264㎡であり、畑地として利用されていたところである。発掘調査は表土からグリット掘りで行なうこととして２×２ｍのグリットを１グリットおきに開掘した。

表土は耕作によって50cm～60cmの深さに及んでおり、ローム層上面は耕作により激しく攪乱を受けていた。

グリットはすべてで16ヶ所を開掘したが、これは発掘予定地の面積のおよそ５分の１にあたる。しかし、遺構と推定できるものは全く検出されなかった。

遺物は後に紹介するが、わずかに10数片が発見されたにすぎなかった。平安時代の須恵器片と縄文時代の中期の所産と考えられる土器片と土製円板が出土したにすぎない。第七図の１は４－２グリット（横グリット東から４グリット目・縦グリット北から２グリット目）　２は２－４グリット　３は３－４グリット　４の土製円板は２－３グリットのそれぞれ表土中からの出土である。

浅間後遺跡は過去に２回（藤久保富士塚88－２・藤久保富士塚92番地）の試掘調査を行なっているが、いずれも遺構の検出はなく数片の平安時代の須恵器片と縄文時代の土器片のみが出土したにすぎない。浅間後遺跡の付近は住宅建設が早い時期にすすんだ地域であり、発掘の可能な畑地等は現地では極めて少なくなっている。このため遺跡の中心地はすでに煙滅してしまっているのであろうか。それとも、遺跡のもつ性格から、このような状況になるのであろうか。　（松本富雄）

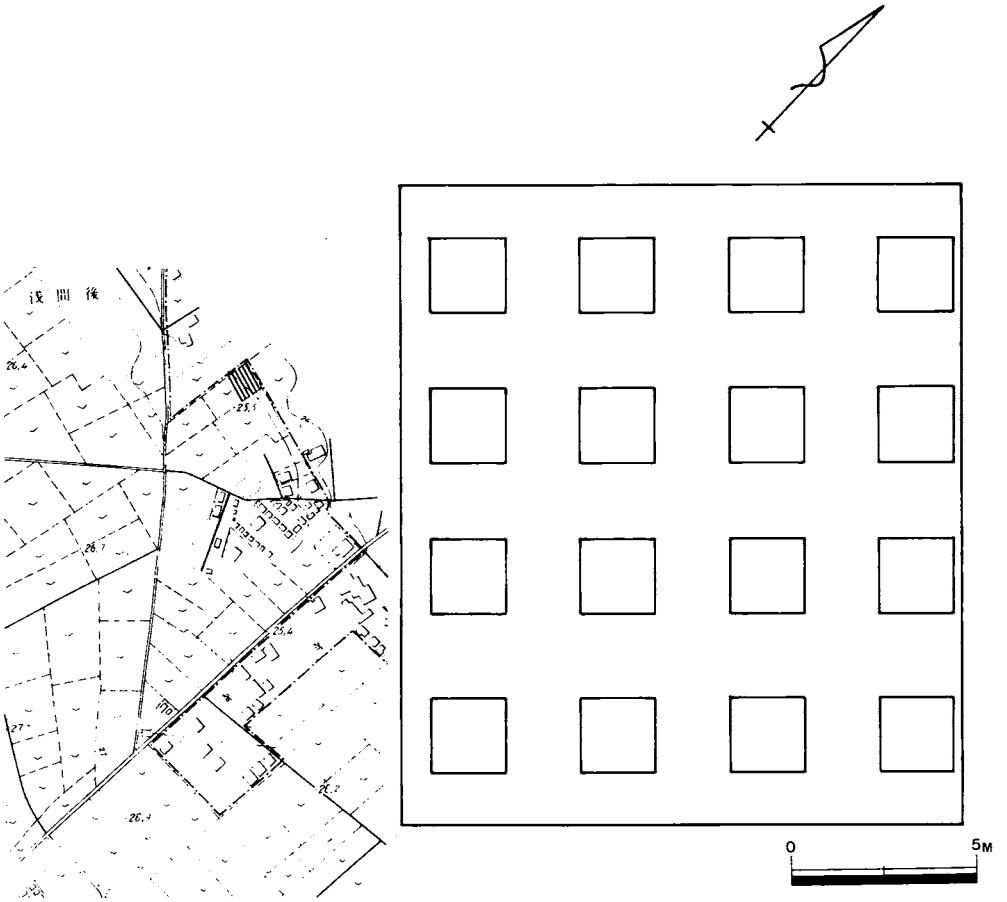
1）遺　物

１は、須恵器坏である。口径(推)12.8cm、残存高約3.7cmを測る。体部は水びき調整を施す。底部は欠粒を僅かに含むが精選されている。焼成は、良好である。

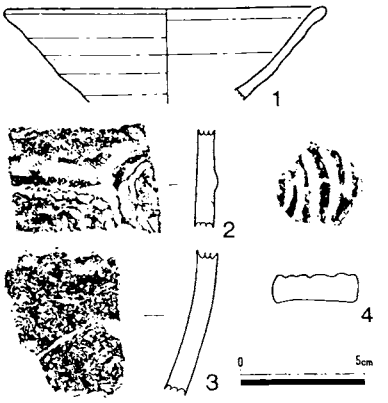
２は、阿玉台式期の土器破片である。外面は断面三角形状を呈する微隆起から楕円形及び直線状に区画する。楕円形状区画内には、微隆起に沿って沈線が走り、直線状の微隆起から楕円形状の微隆起に沿って半截竹管による結節沈線が描出されている。色調は茶褐色を呈する。胎土は雲母を含み、焼成は良好である。外面の一部にススが付着する。

３は、縄文式土器の破片である。外面は無文。色調は茶褐色を呈する。胎土は小石を含み、焼成は良好である。

４は、土製円板である。太い沈線により同心円文が施された曽利系の土器片を利用している。大きさは、径3.5cmを測り、ほぼ円形状に打ちかき、割れ口を一部すっている。　（松本富雄）



第52図　浅間後Ｂ遺跡全測図(1/200)



第53図　浅間後Ｂ遺跡出土遺物実測図(1/3)

8．本村北遺跡の調査

本村北遺跡は竹間沢北側に存在する遺跡である。今回発掘調査の対象となった区域は北側790番地であり、本村北遺跡の中では南端部付近に当たる。

本遺跡は柳瀬川の形成した沖積地を東側に臨む左岸台地上に存在するが、遺跡の南側にも柳瀬川へ流れ込む小河川が、小さな谷戸を形成している。

発掘調査の対象とした面積は1,200㎡であり、検出された遺構は、縄文時代の遺物包含層1ヶ所・土壙1基、古墳時代の大型住居跡1軒、奈良・平安時代の住居跡2軒および土器焼成遺構1基であった。三芳町で古墳時代、奈良時代の住居跡が検出されたのは初現であり、町の歴史を考える上では貴重な成果であった。

1) 遺　構

a．縄文時代遺物包含層（第54図）

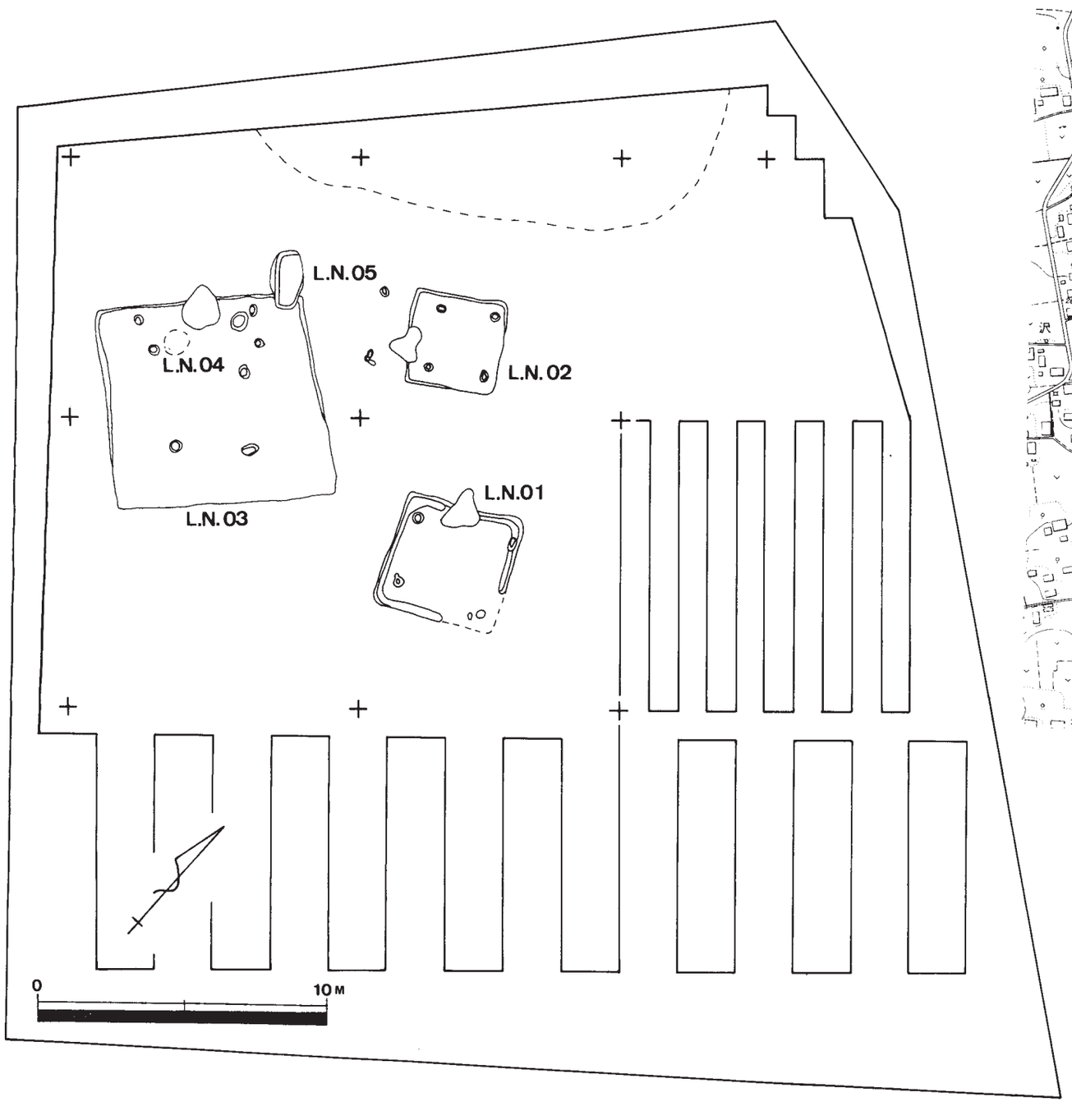
今回の発掘区は台地肩部から南側に傾斜した地形を呈していたが、縄文時代の遺物包含層は発掘区の北側壁に沿った台地肩部付近に拡がるものであった。約16m×約5mの拡がりが確認された（第図点線内)。表土下のローム層との間に暗茶褐色の層が約5cm～約20cmの厚さで存在し、この層内に縄文草創期・早期・前期・後期の縄文土器片約350点、石器3点、剥片、礫が包含されていた。とりわけ前期の遺物が圧倒的に多く存在したが、前期の土器の中には、約3分の2の器形を残す土器が横倒れで押し潰された状態で検出されたものもあった。礫も多く出土したが、そのほとんどのものは赤化し、火を受けた可能性が強いものであった。（松本富雄・柳戸信吾）

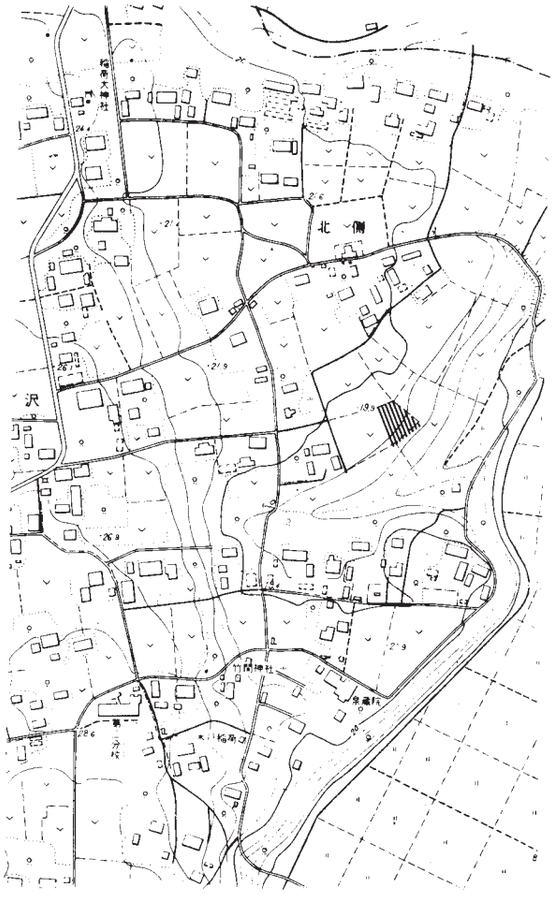
b．縄文時代土壙（L.N.05）（第55図）

3号住居跡（L.N.03）の北隅に重複して検出された。平面形はややくずれた長楕円形で短径約105cm、長径約185cmを計る。壙底面は長方形を呈し、短径約65cm、長径約180cmを計る。断面形は確認面で広く、壙底面へいくにしたがい狭くなっていくものである。深さ約190cmであり、ローム層を掘り貫き粘土層まで達していた。覆土は土層が暗黒褐色を呈し、下層にはロームブロック混りの茶褐色土が充塡されていた。壙底面のほぼ中央に径約15cmのピットが検出された。深さ約25cmを計った。

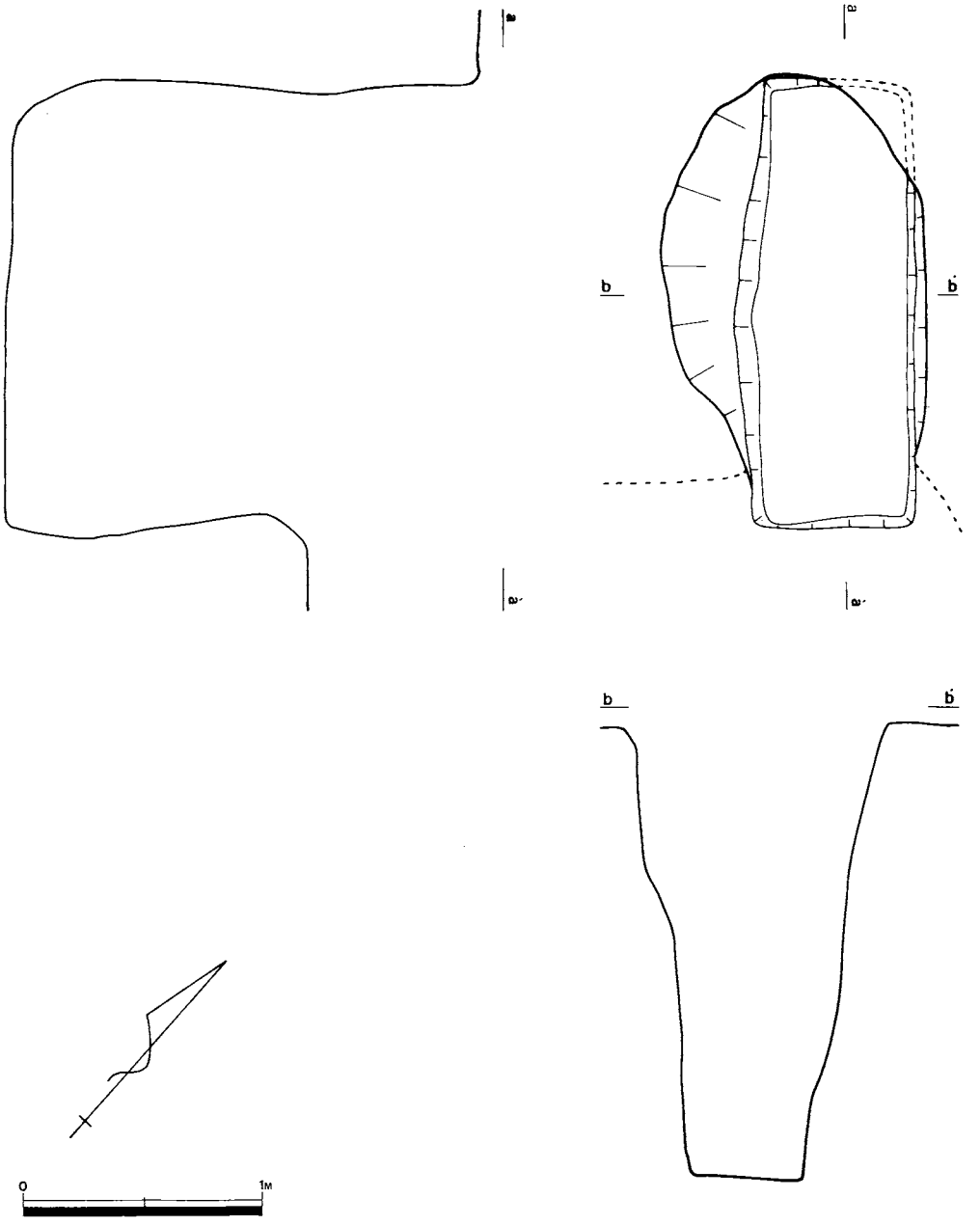
遺物は覆土中から3片であるが縄文時代前期の土器片が出土した。

（松本富雄・柳戸信吾）





第54図　本村北遺跡全測図(1/200)



第55図　本村北遺跡縄文時代土壙（1/30）

c．1号住居跡（L.N.01）（第56・57図）

本住居跡は調査区南側斜面上に位置し、主軸はN－15°－Wを計る。斜面に形成されているため、南東コーナーを欠損し、決して保存状態の良いものではなかった。平面形はほぼ正方形であり、壁長はカマドを有する壁（北壁）で4:06m、西壁で4.02mを計る。壁高は北西コーナーが一番深く、約22cmを計った。覆土中にはカマドから流出した粘土が散乱していたのが特徴としてあげられよう。床面は平坦であり、斜面に形成されているにも拘わらず、ほぼ水平を保ち得ていた。床面のカマド付近から住居跡中央部付近が堅くしまっている他は軟弱な床を呈していた。床面の壁側には周溝が存在し、幅約15cmから20cmを計り、深さは床面から約10cmから14cmを計った。柱穴と考えられるものは4本存在する。P 1は床面からの深さ約24cm、P 2は壁溝内に存在し床面から深さ約25cm、P 3は約30cm、P 4はややくずれた状況を示すが、一番深く、床面からの推定約46cmを計った。北壁に存在するカマドは、床面より約20～30cm程掘りくぼめられ、その上に黄褐色粘土を焚き口部、燃焼部、煙道全域の床面に貼り（5層）、黄褐色粘土を袖として構築したものである。5層上面の焼土層（3層）は燃焼部床面と考えられる。4層は灰を多く含むことから、燃焼部に残された灰層と考えられよう。天井部はくずれているが、4層上面の焼土層（3層）は天井部の加熱された部分の残存と考えられ、2層は天井部を構築した層と推定された。遺物は、煙道部2層中にかめの底部付近の破片が伏せられたように存在した。

出土遺物は真間式土器であり、奈良時代の年代の与えられる住居跡である。（松本富雄）

d．2号住居跡（L.N.02）（第58・59図）

本住居跡は台地の傾斜しかけた付近に位置し、主軸方向をS－38°－Wに計る。平面形はほぼ正方形であり、カマドをもつ壁（南西壁）で約3.10mを計り、北西壁で約3.20mを計る小規模な住居である。壁高は西コーナが深く約30cmを計るが、斜面であるため東コーナでは確認面と床面が同一のレベルであった。床面はカマド付近が一番しまりが良く良好であったが、他は土のしまりが悪かった。しかし、暗褐色のロームブロックが貼床されていたため床面を捉えることは比較的容易であった。東コーナでは確認面と床面が同一のレベルであったが、この暗褐色のロームブロックの拡がりから床面を捉えることが可能であった。柱穴は竪穴内に4本確認された。ピットの床面からの深さはP 1で約30cm、P 2で約15cm、P 3で約22cm、P 4で約15cmといずれも浅いものであった。竪穴内で確認されたピットは以上4本であったが、本住居跡の南西側に2本のピットが検出された。P 5とP 6である。これらのピットに充填された覆土は2号住居跡の覆土と類似していることと、P 5はP 1・P 3の延長上に存在し、P 6はP 2・P 4の延長上に存在することと、どのピット間の距離も約2 mとほぼ均一であることの3点から考えて、あるいはこの2本のピットは壁外柱穴と考えられる可能性がある。P 5は深さ約22cm、P 6は深さ約15cmといずれも浅い。かまどは南西壁に存在するが、壁の中央部よりやや南に寄った部分に確認された。

カマドは、天井部が崩壊しており、袖も粘土の流出が激しい。袖部は壁を部分的に張出させ芯とし、その周囲に暗褐色のあまり粘性のない粘土を貼り付けることによって築きあげている。焚き口部は床面から徐々に掘りくぼめられ約20cmほどの深さを呈する。下層（4層）に灰と木炭の混入した暗

褐色の粘土が存在した。燃焼部には高さ約20cm幅約13cmの河原石が支柱として据付けられていた。燃焼部はこの支柱の位置から観察する限り、壁ラインより外側となっていた。焚き口部付近はピットが認められたが、カマドを切り込んでおり、カマドより新らしいものと考えられた。

本住居跡からの出土遺物は少なく、器種としては須恵器坏、土師甕等の破片が捉えられたが、カマド出土のものは古く時期が捉えられる。住居内からの出土した須恵坏等から判断して、国分期の住居跡として考えられるものである。（松本富雄）

e．3号住居跡（L.N.03）（第60～62図）

本住居跡は発掘区の西コーナー付近に位置し、今回発掘された住居跡の中では一番大規模なものであった。主軸方向はN－33°－Wを測る。斜面に構築されているため、南東壁と北東壁の約3分の1の壁は確認できなかったが、床面の状態からその規模は捉えられた。本住居跡の平面形はややゆがみをもち台形状を呈していた。カマドをもつ壁（北西壁）で約7.06m、南西壁で約6.80m、南東壁で約7.32m、北東壁で約6.66mを計る。覆土中下層には焼土および炭化材が多くみられ、火災住居跡として考えられた。炭火材・焼土の分布は第62図に示した。壁高は北西壁側が一番深く、約48cmを計った。床面は全体的にしまりがよく、とりわけカマド付近からP3、P4付近のピット内側がしまりが良かった。柱穴と考えられるピットはP1～P7まであるが、その配置関係等には明確さを欠く。

それぞれの床面からの深さは、P1が約28cm、P2が約35cm、P3が約58cm、P4が約62cm、P5が約66cm、P6が約25cm、P7が約27cmであった。P8は貯蔵穴と考えられるピットで南側が1部くずれていたがほぼ円形の平面形を呈し、壙底面は平坦な形状をしていた。このP8の壙底面には、丸甕の胴部約⅓の破片が検出された。カマドは北西壁のほぼ中央に存在したが、アーチ状の天井部は欠損していたものの両袖等良好に残っていた。左ソデ外側には支柱が3本たてかけられるように出土し、右ソデ壁ぎわからは手捏形土器の器種が確認され、また破片であるが須恵器甕片も出土している。

カマド

北西壁のほぼ中央に設けられたカマドは規模は約1.40m×約1.40mと大型のものであった。上述したように保存状態はアーチ部が崩壊しているものの良好であった。両袖はほとんど崩れはなく、左ソデ外側には支柱が3本（うち1本は半損）たてかけられてある状態が確認できるほどであった。支柱がカマド内にではなくカマド外側にたてかけられるという例は初見である。支柱の使用方法等を今後検討する良い資料となるであろう。また、右ソデ側のカマド付近には、上部から転げ落ちたように3個体の手捏形土器の出土があった。カマド祭礼的様相を思わせるものである。

さて、カマドの構造についてであるが、壁面からローム層をほり残し袖芯とし、その上に白色粘土を貼りつけソデおよび天井部を構築している（1層）。カマド床面は住居跡床面より約10cmほどほりくぼめ、燃焼室付近に限りその上に約4～6cmほどに袖で使用したと同様の粘土を貼りつけている。2層は焼土層である燃焼室および煙道部の下面の焼けた部位であろう。3層は炭・灰・焼土まじりの粘土層である。天井部・焚き口・燃焼室に残された灰・木炭の上に落ちた天井部の焼けた部位と考えられる。4層は1層とほとんど変りのない粘土層である。天井部を構築していた粘土層であり、天井のく

ずれによって堆積したものと推定される。5層は暗褐色土の混入した白色粘土層である。カマド構築粘土と覆土の混在したものと思われる。さて、このように比較的保存状態が良く、理解し易い土層を呈していたのであるが、煙道部の状況については捉え難い状況があった。煙道部に焼土化した層が少なく、煙道部の構造は理解し難いところがあった。

3号住居跡出土遺物は、鬼高期の所産である。従って、本住居跡は古墳時代の住居跡である

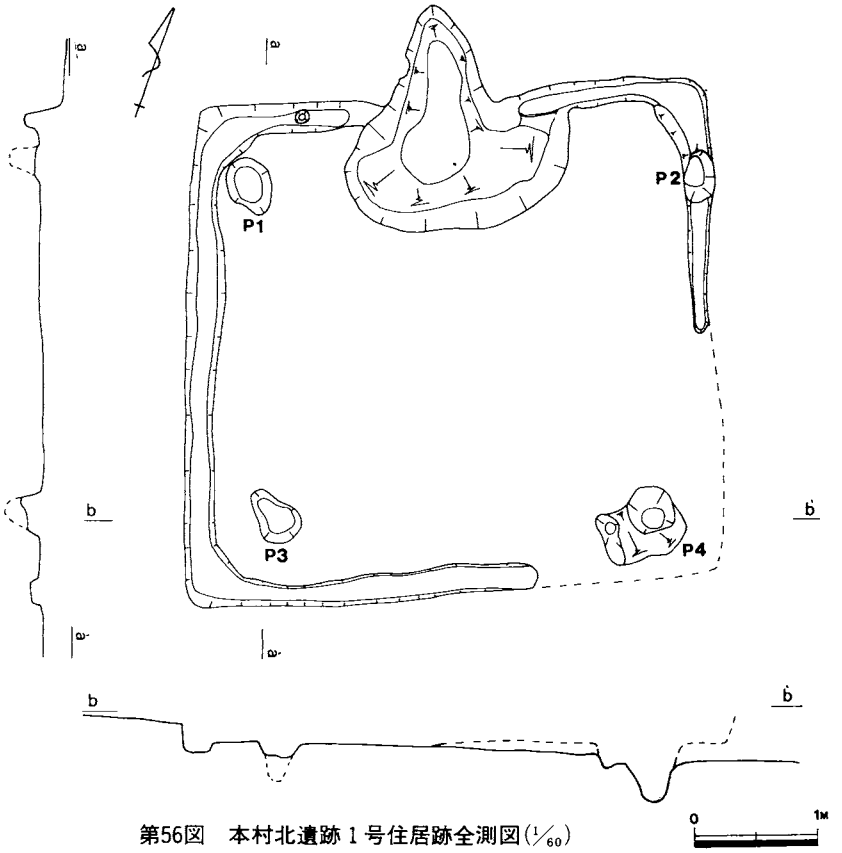
（松本富雄）

f．土器焼成遺構（L.N.04）（第63図）

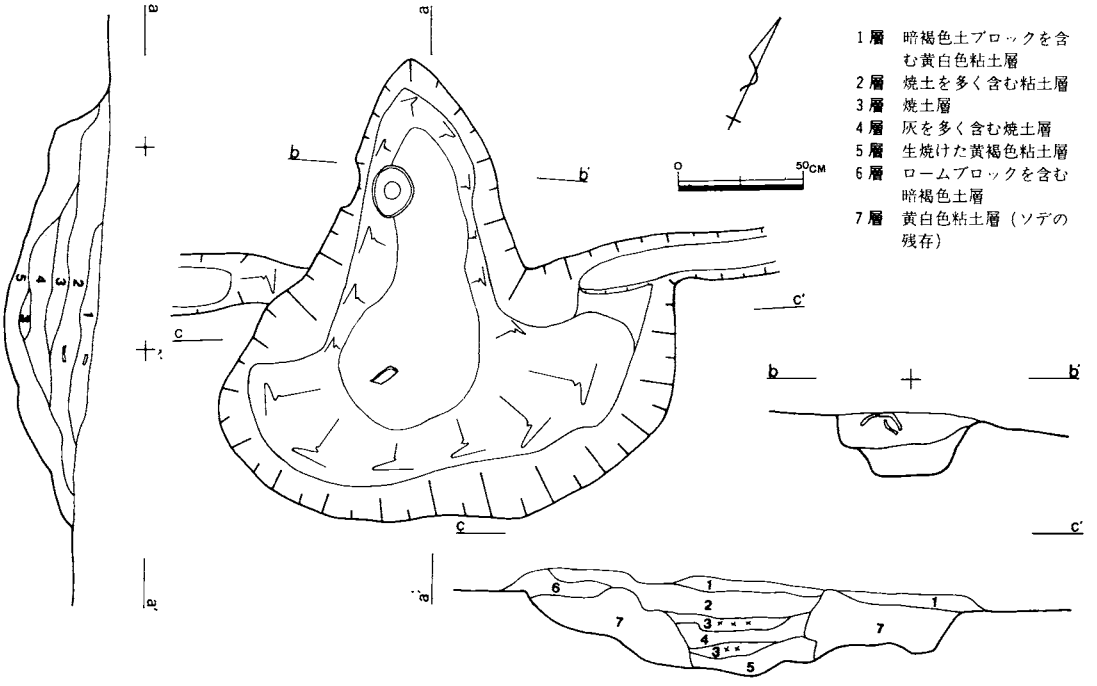
3号住居跡の覆土上層を切り込んで形成されていた。3号住居跡の覆土は暗黒褐色で火災住居であるため覆土中にも焼土が多く混在していた。本遺構はこうした覆土中に切り込んでいたためにその範囲等は捉え難く、充分な調査とは言えなかった。平面形は卵子形とでもいおうか長楕円形を呈していた。確認面からの深さは約15cmで、確認面からなだらかに落ちていく。長軸上のエレベーションを見ると理解されるが、北東側からなだらかに落ちていき、その反対側の南西側では比較的急な立ち上がりをする。壙底面は、暗黒褐色の覆土中に形成されているため捉えにくかったが、焼土化していた。

出土した遺物は、ほとんどが酸化焔焼成され、ロクロ仕上げ(調整) された坏形土器であった。

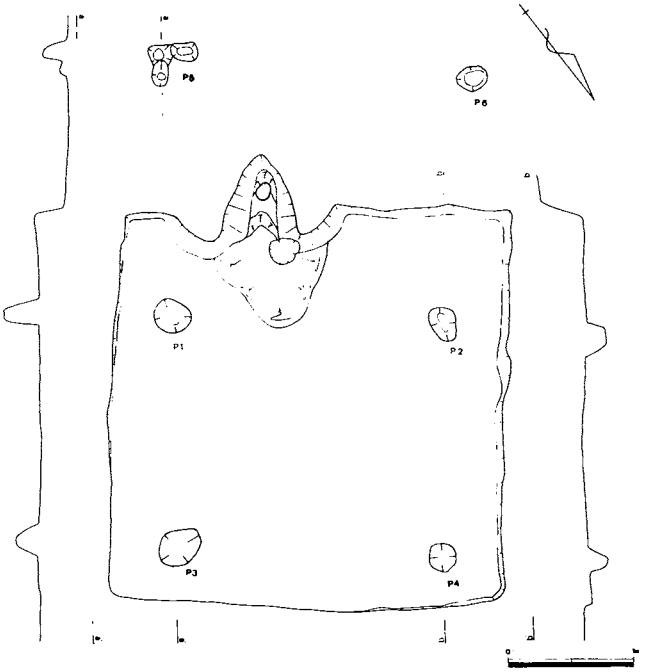
（松本富雄）



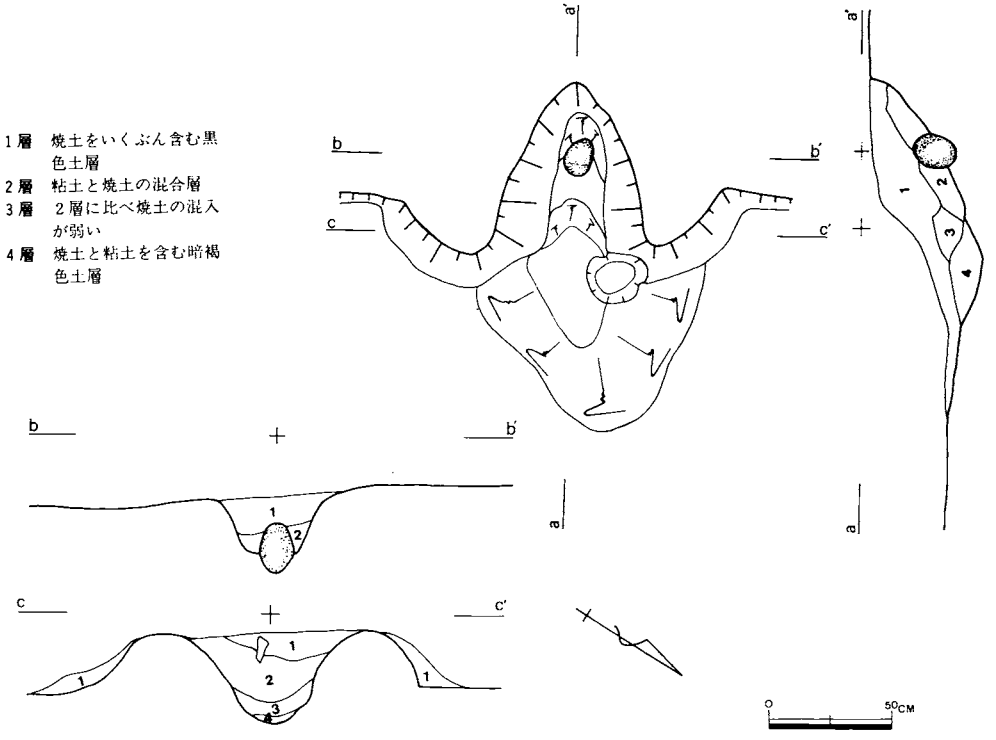
第56図　本村北遺跡１号住居跡全測図(1/60)



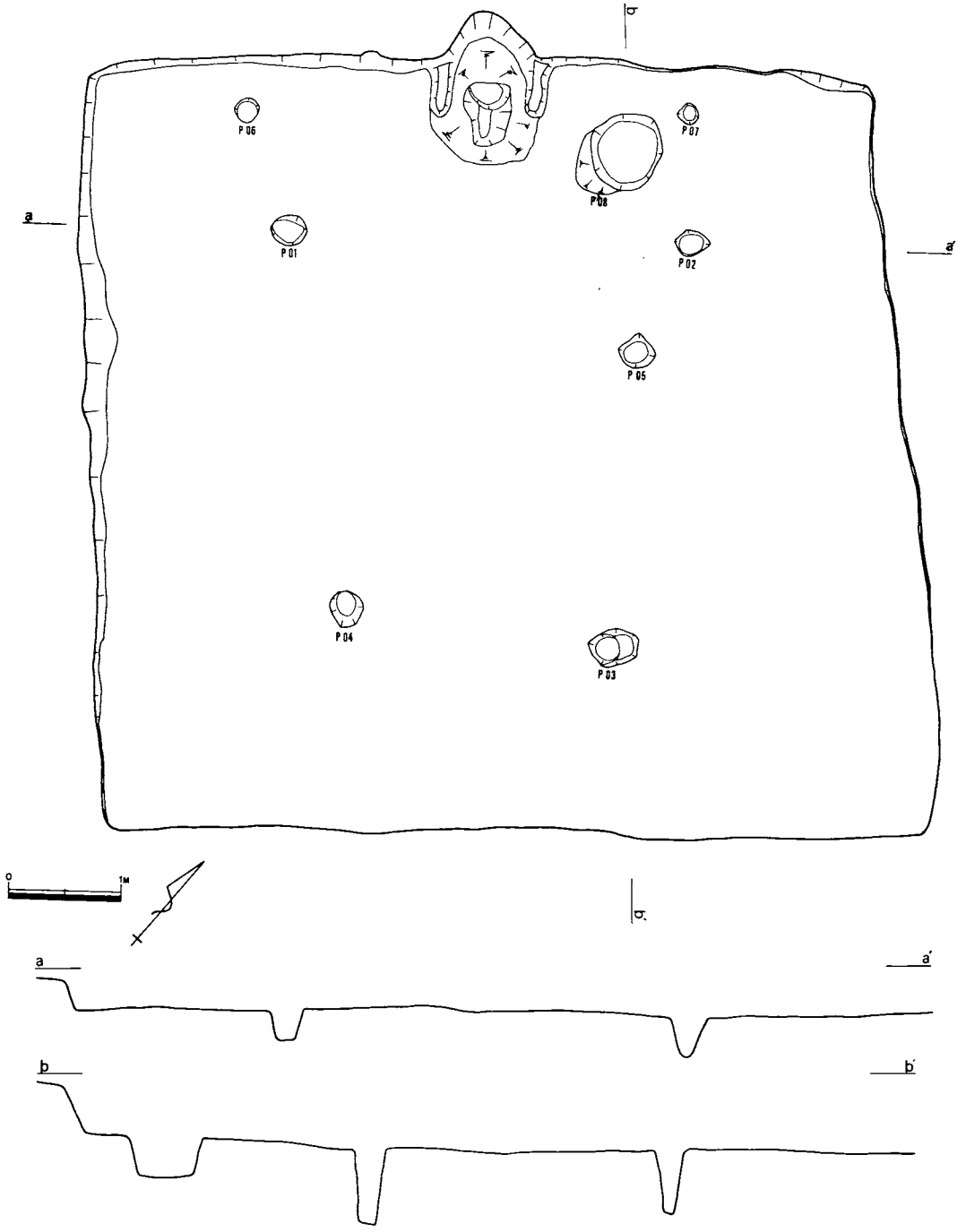
第57図　本村北遺跡１号住居跡カマド全測図(1/30)



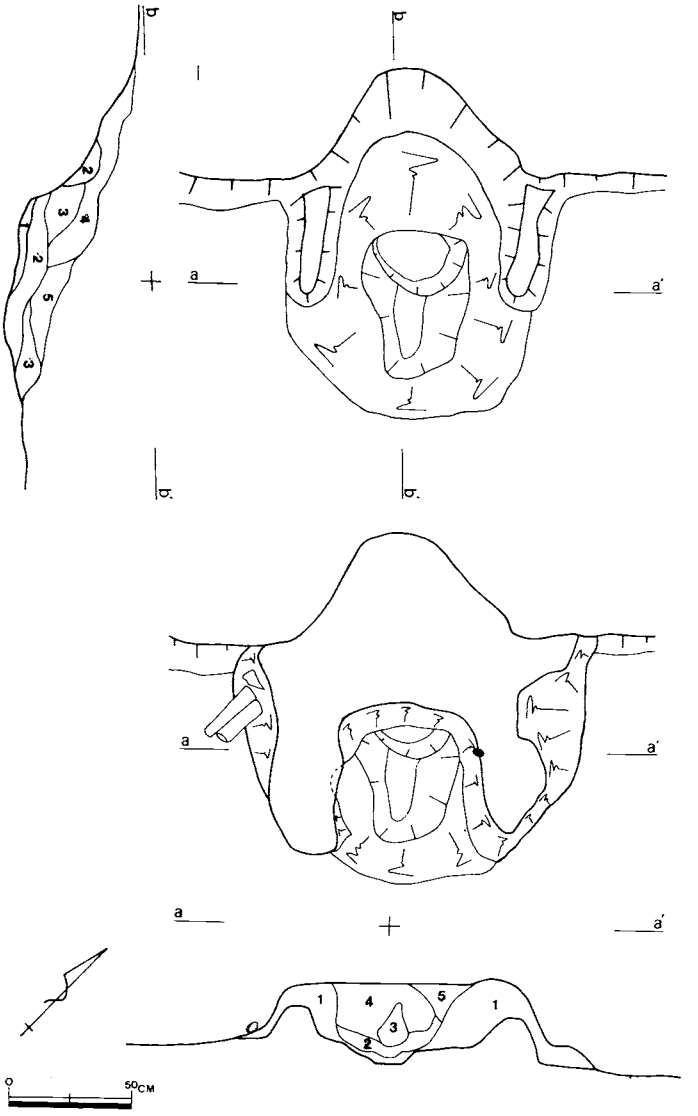
第58図　本村北遺跡２号住居跡全測図(1/60)



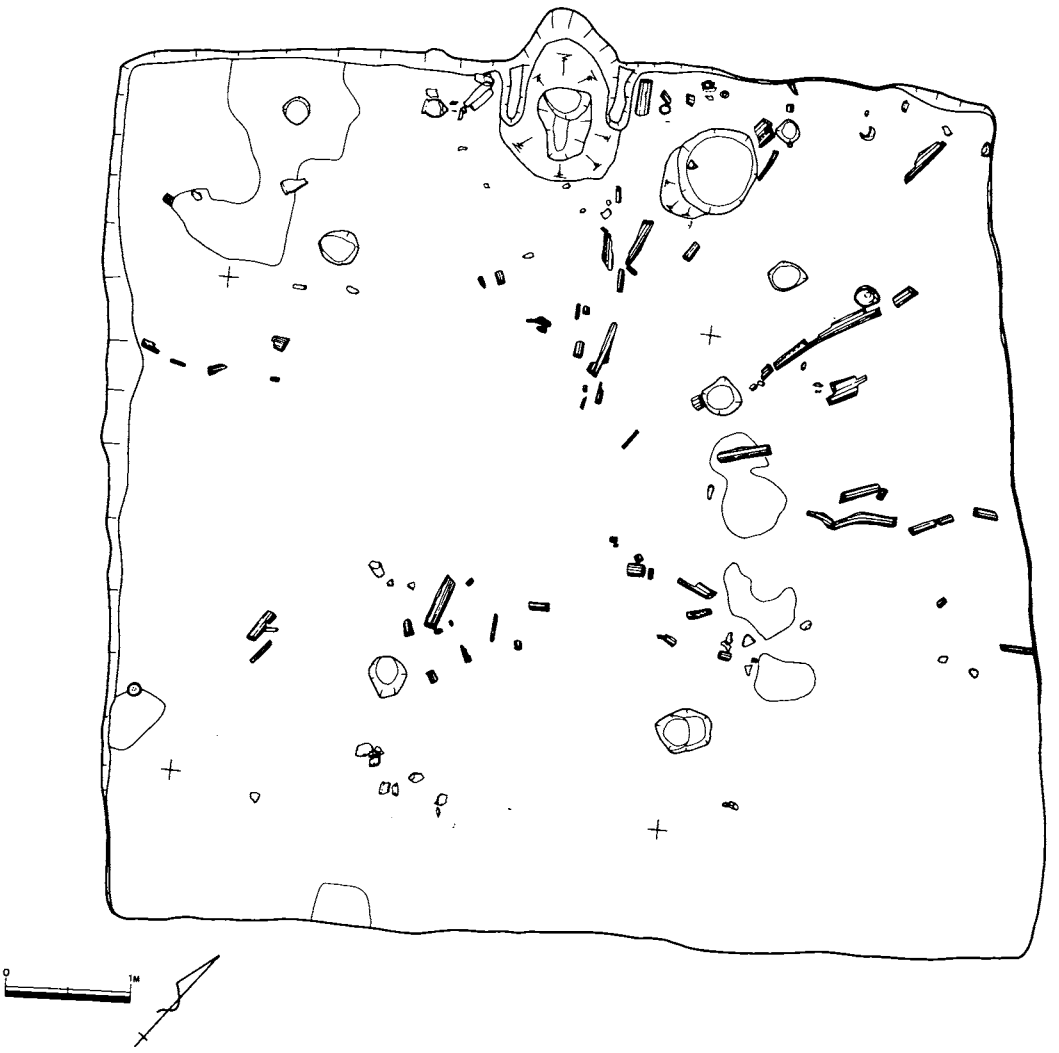
第59図　本村北遺跡２号住居跡カマド全測図(1/30)



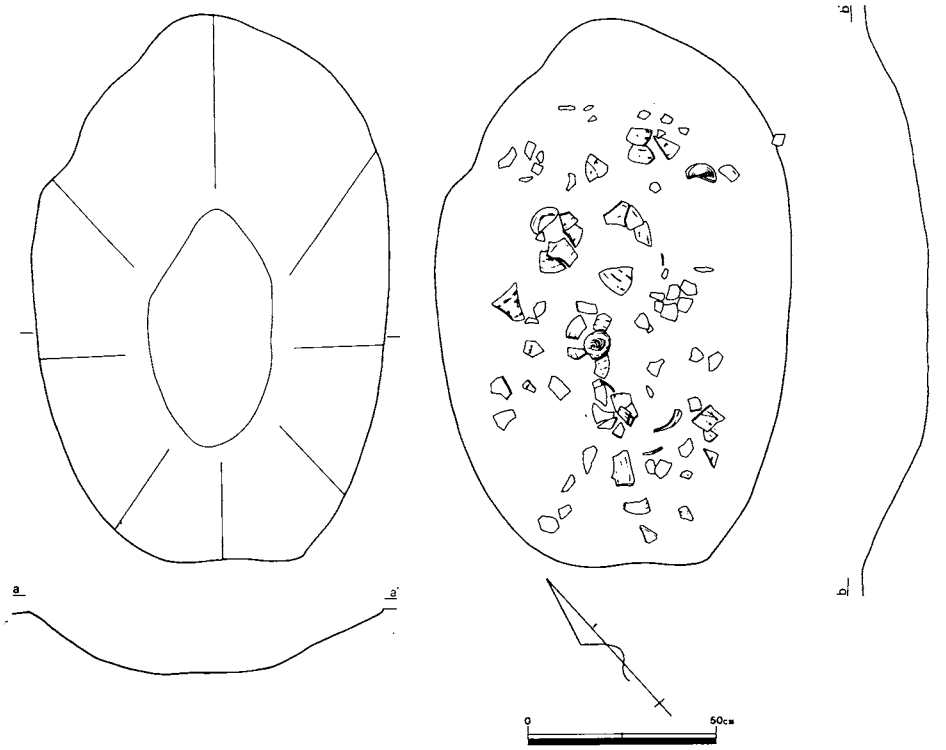
第60図　本村北遺跡３号住居跡全測図（1/60）



第61図　本村北遺跡３号住居跡カマド全測図(1/30)



第62図　本村北遺跡３号住居跡内炭化材・遺物分布図(1/60)



第63図　本村北遺跡土器焼成遺構実測図(1/20)

2)　遺　物

a．縄文時代の土壙出土土器（L.N.05）（第64図１～３）

１は口縁部破片。口唇部は円頭状を呈し、組紐文を地文として多截竹管状工具で縦長のコンパス文を施す。内面はよく研磨され、繊維脱痕が見られない。２は胴部破片で、LR と RL の原体を用い羽状を構成する。内面は平坦でなく繊維脱痕が見られる。３は底部破片。脚部をもつ上げ底を呈する。表面には縄文が施されているが、原体の種類は判然としない。底面はよく研磨されているが、内面はあまり整形されておらず、平坦でない。これらの土器は関山II式に比定されるであろう。

b．縄文時代の包含層出土土器（第64～66図）

縄文時代草創期、早期の土器（４・５）

４は押型文土器である。口縁部の破片で、口縁がわずかに外反し口唇部は外側にやや傾斜している。口唇部と口縁から2.5cm程のところまで横位の山形押型文が施され、２cm程の無文帯をはさみ、さらに押型文が施される。胎土に雲母、砂粒を含む。５は撚糸文土器の口縁部破片。口縁部に向かうに従い器厚を薄くし、口唇部は尖っている。表面にはＬの撚糸文が施され、口唇下には押捺圧痕文が見られる。

縄文時代前期の土器（６～３８、42、43）

６～８は単節縄文を地文にもつもの。６、７は口縁部破片。６は口唇部が平坦で、山形の突起が付けられる。０段多条LRの単節縄文を地文とし、櫛状工具によりコンパス文を描く。７は口唇部は平坦であるがやや丸みをもち、地文はLRとRLで羽状を構成し、多截竹管状工具による縦長のコンパス文を施す。６、７とも内面はよく研磨され、繊維脱痕も少ない。８は胴部破片で地文は浅く施文されており、縄文の種類は判別し難い。半截竹管状工具で鋸歯状文、コンパス文を描く。内面は研磨されているが、繊維脱痕が見られる。９・10は羽状縄文を構成する土器である。９はRLとLRの原体を用いて羽状を構成し、10はRLとLRを第１種の結束により羽状を構成するものである。両者とも内面は研磨され、繊維脱痕も少ない。11・12は附加条の土器である。両者とも、０段多条RLにLの縄を2本巻きつけたものである。内面は研磨され、繊維脱痕は少ない。13は正反の合が施された口縁部破片。口縁部は外反し、口縁には隆帯が付けられ、口唇部は尖る。隆帯の下には正反の合 $L\left\{\begin{matrix}R\\L\end{matrix}\right.\left\{\begin{matrix}L\\LR\\R\end{matrix}\right.$ が施される。繊維が多く混入し、風化が著しい。14・15は結節縄文のものである。14はRLの縄同志を結節し、15は風化が著しく縄文の種類は判別しがたいが同じ種類の単節縄文を結節している。14は内面に繊維脱痕が著しく、15は胎土に砂粒を多く含む。43は異節斜縄文が施されるもの。⅔ほどが現存し、推定口径約23cm、底径10.3cm、推定器高約38cmを測る。底部は上げ底を呈し、底部からゆるやかにひらくラッパ状の器形である。口唇部は内側に削がれた観を呈し、口縁には８個の山形突起が付けられ、これは４単位付けられるものと思われる。器面には $R\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.\left\{\begin{matrix}L\\RL\\R\end{matrix}\right.$ が施文される。内面は底部までよく研磨されている。16～18は組紐文を地文にもつもの。16は口縁部破片で口唇部は円頭状を呈し、櫛状工具によるコンパス文を廻らす。17は口縁に近い胴部破片で、多截竹管状工具で縦長のコンパス文を施す。18は胴部破片で３回１組の半截竹管状工具（各々一本をだぶらせているため、結果として沈線４本となる）で幾何学文を描くものと思われるが、文様構成は判然としない。16～18とも胎土に砂粒、繊維を含み、内面はよく研磨され繊維脱痕も少ない。19～21、42は組紐文のみの施されたもの。19は口縁部破片で、口唇部は円頭状を呈し、器厚をやや薄くする。内面はよく研磨され、光沢をもつが、21の内面は平坦でなく、繊維脱痕が見られる。42は口縁から胴部にかけての破片で、推定口径約17cm。胴部中位がふくらみ、口縁はほぼ直上する形態で、口唇部は内側に削がれた観を呈する。口唇下約１cmの無文帯をもち器面全体に組紐文が施される。内面は平坦でなく、繊維脱痕が見られる。22～24は単軸絡条体文の施された口縁部破片。22は口縁がわずかに外反し、口唇部は平坦であるが、やや丸みをもつ。23は口縁がわずかに外反し、口唇部は棒状工具で、なでた痕跡が認められる。22、23とも、Lの縄を２本密着させて棒にまきつけ、回転させたものである。24は口縁部で器厚を薄くし、口唇部は外側に削がれた観を呈する。Lの縄を２本密着させて棒にまきつけたものが、途中で縄を固定し、さらに逆方向に巻いていったもの。25は貝殻背圧痕文が施された土器で、内面はよく研磨されているが、繊維脱痕が見られる。焼成は堅緻である。26～33は沈線あるいは条線の施された土器である。26・27は縦方向に刻みをいれた後、半截竹管状工具により幾何学文を描いたもので、胎土に小石、砂粒を含む。28は半截竹管により、連続爪形文を数条施したもので、胎土に多量の小石を含む。29・30は同一個体であり、厚手の胴部破片。４本１組の工具を使って横位に条線を施している。赤褐色を呈し、胎土に小

石、砂粒を含む。31は櫛状工具で条線を描いたもので胎土に小石を含む。32は口縁部破片で、波状口縁を呈するものと思われる。口縁部はわずかに内湾しながらひらき、口縁の内側は段をもって厚くなる。口縁にそって２本の沈線が施され、その下には縦方向に数本の沈線が施される。内面は横位に整形され、胎土に砂粒を含む。33は深く沈線が施された胴部片で、胎土に雲母を含む。３４～３６は底部破片である。34は推定底径約７cmを測り、脚部が外に張り出した上げ底を呈し、脚部を意図する粘土を追加している。表面には組紐文が施され、脚部にはコンパス文が浅く施文されている。内面はよく研磨されている。35・37・38は表面に単節縄文が施された土器で、それぞれ推定底径約７cm・８cm・10cmを測る。原体は35がRL、37・３８がLRである。37は底面にも施文され、38は底面に棒状工具による刺突が施されている。いずれも脚部をもち、38は判然としないが、35と37は脚部を後から付け足している。35の内面はよく研磨されているが、37、38はあまり整形されていない。36は推定底径約8.5cm、底部下端は張り出し、底面はなだらかに立ち上がる。表面に貝殻背圧痕文が施され、無文部が下端に見られる。底面はよく研磨され、底部円盤の製作の後に胴部を積み上げていったつくりである。胎土・焼成等から考えて、25と同一個体であろう。

中・後期の土器

39は口縁部破片で、口縁がわずかに内湾しながらひらく器形である。口縁部にコブ状に粘土をはりつける。胎土に小石、多量の雲母を含む。40は波状口縁の波頂部付近の破片で、口縁の内側は段をもって厚くなる。鎖状の隆帯が垂下し、胎土に砂粒を含む。41は胴部破片で、鎖状の隆帯が横行し、その下に太い２本の沈線を施す。沈線の下にはLRの細かい単節縄文が施され、沈線で区画されている。胎土に小石を含む。

以上のように包含層からは、縄文時代早期から後期にかけての土器が出土したが、前期の土器が圧倒的多数を占める。中でも、43の復元土器を含め、６～25及び底部破片である34～38の関山式土器が中心となる。これらの関山式土器は組紐文が多いこと、櫛状工具によるコンパス文の存在等から考え、関山II式に比定されよう。（柳戸信吾）

c．縄文時代の包含層出土の石器（第67図）

打製石斧（１）

楕円で表裏面ともに平担な面を広く有する自然石の一端を打ちかいて片刃の刃部を作出している。表面右側縁上部、同じく裏面左側縁上部の剥離は、数回の礫打によって所謂ステップ＝フレイキングをひきおこしている。着柄のための剥離と考えられようか。自然石そのものの形状を利用しているため、他に加工が見られず、その結果、両面とも礫面を多くとどめることになっている。砂岩。

スクレイパー（２）

片面に自然面を多く留める隅丸方形の剥片を素材とし、縁辺の一部に加工を施してスクレイパーエッヂを作出している。裏面右側縁の剥離は、当石器の素材である剥片を剥離する以前の段階においてなされたものと思われる。

玄武岩。

ピエス・エスキーユ（3）

素悪な黒曜石の小礫を素材とし、いわゆる両極打法による加工が施されている。上下両端近くには、数回の急激な打撃とその反作用に起因すると思われるステップ＝フレイキング及び破砕痕が観察できる。側面図において表現した剥離面は、裏面左端の剥離面を打面として剥離されているが、何らかの事故によるものと解釈するよりは、器形を整えるため、或いは別の意図をもって剥離されたものと理解した方が良いと思う。（下角圭司）

d．古墳時代・奈良時代・平安時代の土器（第68図～第72図）

1号住居跡出土遺物（第71図）

本住居跡の出土遺物は土師器がほとんどであるが、須恵器坏が2点ほど出土している。

1～3は口縁部付近の破片であるが、土師器の甕形土器であろう。いずれも、口唇は強く外反し、胴部は縦方向のヘラケズリである。

4～11は土師器の甕形土器であり、このうち4・5は長甕形土器、6～8は丸甕形土器である。

12～14は土師器坏形土器である。いずれも器形は平底の底部から内湾しながら立ち上がっていき、口縁部で直立気味に立ち上がるものである。12はやや小振りである。3分の1の破片、13・14は約3分の2を残すものである。

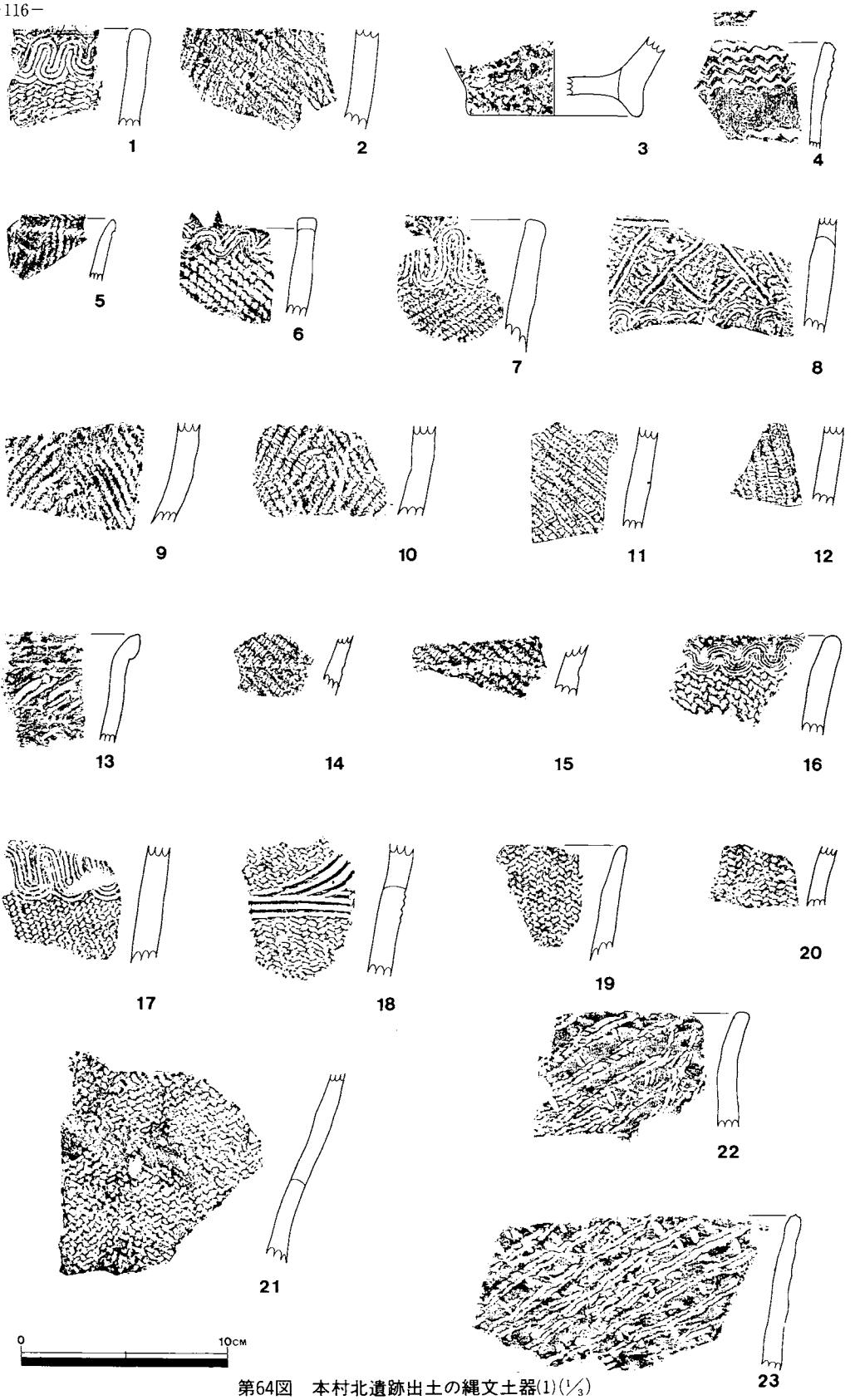
15・16は須恵器坏形土器である。15は口縁部まで残存する3分の2を残す坏である。口径16.0cm、底径9.5cm、高さ3.7cmと比較的大振りである。底部は回転ヘラケズリされている。胎土には白色針状物質、1㎜程の石英を含む。16はやや丸味をもった底部破片である。底部外面は中央に僅かに糸切痕を残すが、他は回転ヘラケズリである。底部と胴部を隔する部分に竹管状の工具によったと思われる沈線がみられる。胎土には1～3㎜程の小石が多く含まれる。

2号住居跡から出土した遺物は真間式土器であるが、15の須恵器等から見るに8世紀中葉に年代が与えられるものと思われる。（松本富雄）

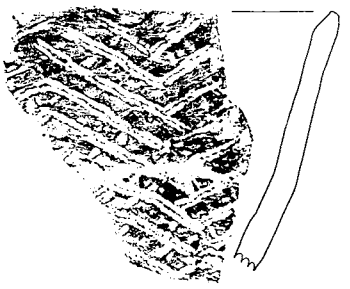
2号住居跡出土遺物（第70図）

出土遺物は極めて少なかった。図化できた遺物は5点であった。1から3は須恵器である。1は口縁部から胴部下半までの約3分の1の破片である。口唇部は平坦な面をもつ。セピア色を呈する。胎土には小石と白色状遺物を含む。2は底部破片である。底部外面は回転糸切痕のままである。セピア色を呈する。胎土には1～2㎜程の石英粒と白色針状物質を含む。3は底部破片である。胎土には1～2㎜程の石英粒を含む。4は土師質の土製品、5は丸甕形土器の口縁から胴部中位の2分の1の破片である。

本住居跡の遺物は国分期の所産として考えられる。須恵器のあり方からみると9世紀前半代の年代が与えられよう。（松本富雄）



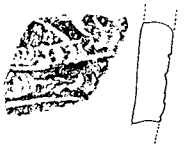
第64図　本村北遺跡出土の縄文土器(1)(1/3)


24

25

26

27


28

29

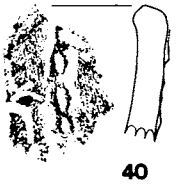
30

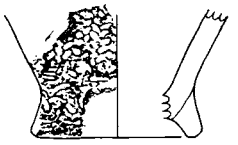
31

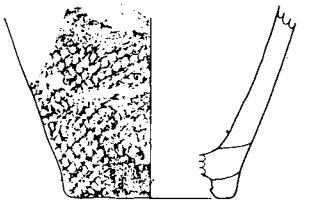
32

33

39

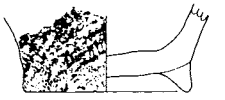

40

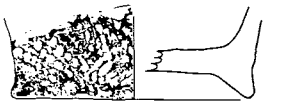

34


35

41

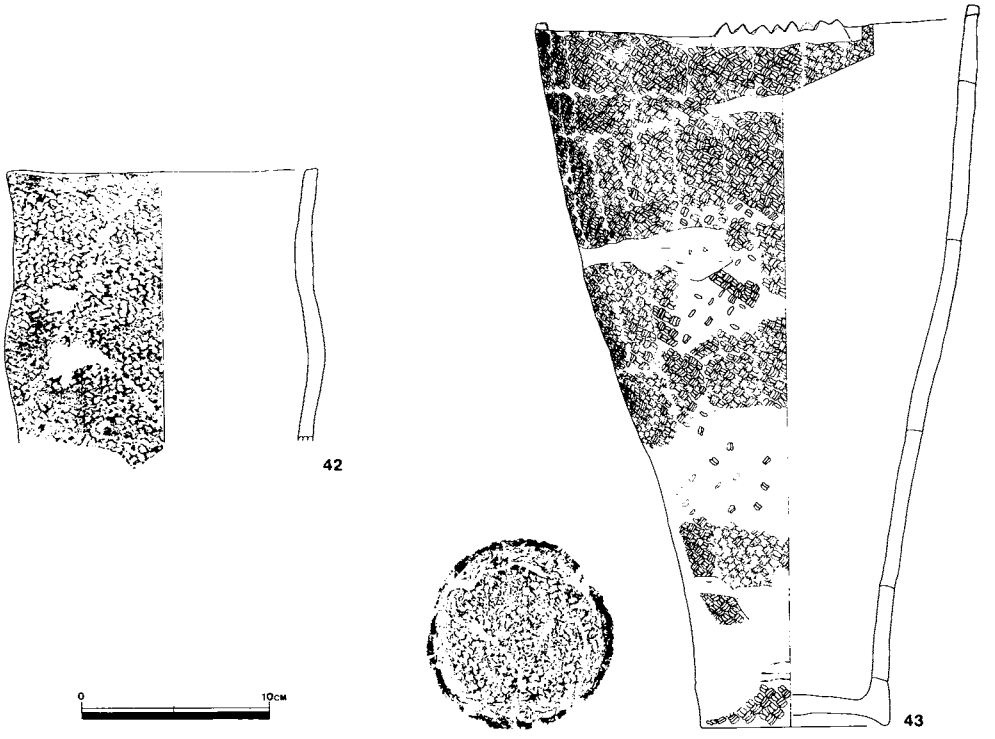
36


37

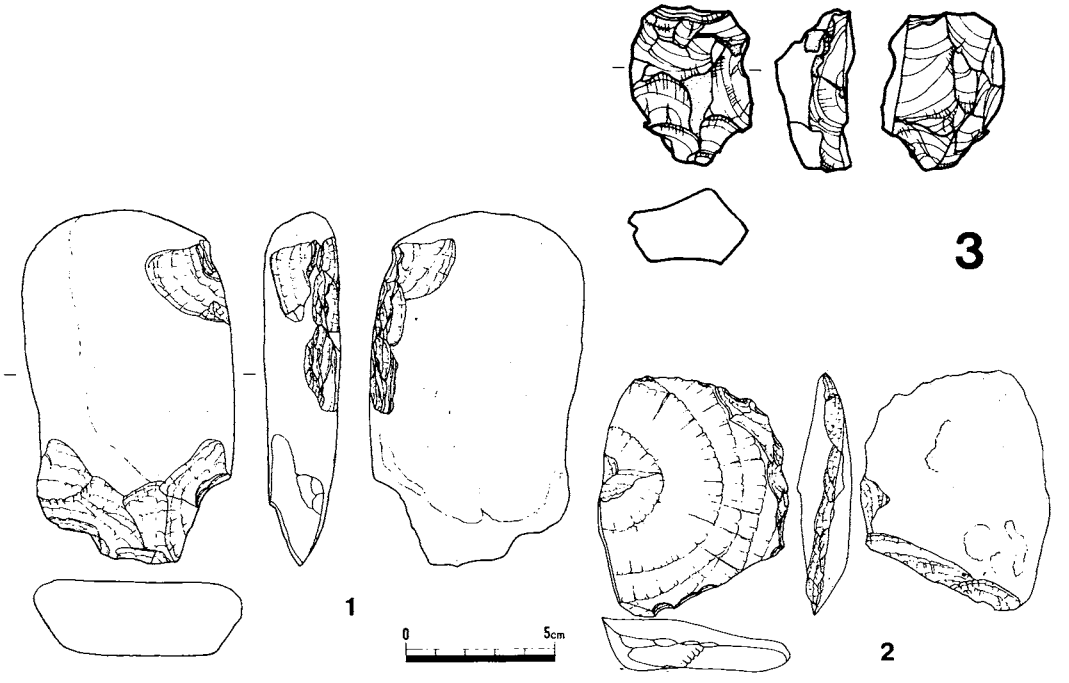

38

第65図　本村北遺跡出土の縄文土器(2)(1/3)

0　10cm



第66図　本村北遺跡出土の縄文土器(3)(1/4)



第67図　本村北遺跡出土の石器(4/5・2/5)

3号住居跡出土遺物（第68・69図）

本住居跡は火災住居跡であり、他の住居跡に比べ遺物の出土量は豊富であった。しかし、豊富であるにもかかわらず、完形品は少なかった。

図示したものは24点であるが、器形を復元できるものはすべて図化した。器種としてとらえられたものは土師器長甕形土器（1～9）、土師器丸甕形土器(10～12)、手捏土器(13～15)、土師器坏形土器(16～19)、土師器高坏形土器(20)、須恵器甕形土器(21)、支柱（22～24）であった。

長甕形土器は9点図化したが、胴部の器肉の厚いもの（1～5）と胴部の器肉の薄いもの（6・7）に分けられる。胴部の器肉の厚いものは約6m～約8mを測り、胴部の器肉の薄いものは約3m～約4mを測る。2者は器肉の面だけでなく、調整手法に違いがみられた。器肉の薄い6・7の胴部の調整は縦方向のていねいなヘラケズリによって仕上げられているのに対して、器肉の厚い1～4の胴部の調整はヘラケズリというよりもヘラによってナデ仕上げしたようなものと、指ナデを多く残し部分的にナデ付けたようなヘラケズリをしているものである。（注1）

丸甕形土器は3点確認されている。このうち10の土器は貯蔵穴（P.8）の底部より出土している。

13～15は手捏土器である。いずれも完形品であり、カマド右袖わきから出土している。

16～19は土師器坏形土器である。18・19には図示したように丹彩されている。

20は土師器高坏形土器である。脚部外面と一部残る坏部内面が丹彩されている。

21は須恵器甕の破片である。器形等については小破片であり復元できなかった。

22～24は支柱である。カマド左袖にたてかけるように置かれていたものである。うち24は半損するが他は完形であった。支柱がカマド袖にたてかけられているという例は他に例を知らない。

3号住居跡の遺物は総じてみるに古墳時代後期の鬼高期の所産とみて大過ない。

注1．長甕形土器の胴部を縦・斜方向のヘラケズリによって器肉を薄く仕上げるということは鬼高期の北武蔵地域の一つの特徴とされる。しかし、本住居跡から出土した遺物のうち1～4の長甕は、そうした様相を呈さず、6・7の土器に比べると稚拙さえ言えそうである。これらの一群は果して地域差として、あるいは時間差として捉えるべきものなのであろうか。18・19の丹彩されている坏もまた、あまり北武蔵には見られぬものである。こうした遺物と加味して、今後、三芳周辺の土器群を観察し、究明していきたい。（松本富雄）

土器焼成窯出土遺物（第72図）

本窯から出土した土器はすべて酸化焔焼成によるものであった。器種としてはロクロしあげによる坏がほとんどで、図化した高台坏・甕片は1片ずつの出土である。

坏についてまず見てみると、いずれも焼成は良好で、登り窯等の灰原などから出土する酸化焔焼成化した赤褐色の土器に比べると、明らかに焼きしまりもよく、色調も鮮やかなものである。器形は復元実測できた1～4の土器から見取ることが可能であるが、胴部は僅かにふくらみをもつが、どちらかと言えば直線的に開き、口縁はほとんど外反をせず、口唇は玉縁状を呈しない。全体的に焼きしまりの為か器肉は薄い。製作技法については、ロクロ仕上げ前に輪積みによって成形されたと思われ、

3号住居跡出土土器観察表

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴
1	土師器 長甕形土器	口径推19.8cm 現高22cm	口縁部に最大径をもつ。胴部上端にややふくらみをもつ。器肉は厚い。	口縁部指ナデ。胴部ナデつけた様な荒い方向のヘラケズリ。内面は頸部までが指ナデ。頸部から胴部中段までが横方向のヘラナデ。胴部下端はヘラにより斜めにかきあげている。
2	〃	口径推20.8cm 現高16cm	口縁部に最大径をもつ。胴部に若干の張りをもつ。器肉は厚い。	口縁部指ナデ。胴部はナデつけた様な荒い縦方向のヘラケズリ。内面は頸部までが指ナデ。胴部は指ナデ後横方向のヘラナデ。
3	〃	口径推23.0cm 現高	口縁部に最大径をもつ。胴部中央よりやや上段にふくらみをもつ。器肉は厚い。	口縁はヨコ方向のナデ。胴部上段は縦方向のヘラによるナデ。下段はヘラによるケズリ。内面は頸部までが指ナデ。胴部は指ナデ後横方向のヘラで軽くしあげている。
4	〃	口径推19.8cm	口縁部最大径をもつ。口唇は僅かに玉状を呈し外反する。器肉は厚い。	口縁は横方向のナデ。胴部は指ナデの後に縦方向・斜方向に軽くナデ付けたようなヘラケズリしている。内面は頸までの横方向のナデ。頸部下約10cm程を指ナデしあげ。以下を粗い斜め縦方向のナデ付けたようなヘラケズリ。
5	〃	口径推17.8cm	口唇は僅かに玉状を呈し外反する。器肉は厚い。	口縁は横方向の指ナデ。胴部縦方向のヘラケズリ。
6	〃	口径推19.8cm	口唇は外反する。器肉は薄い。	胴部は縦方向のていねいなヘラケズリ。口縁は横方向の指ナデ。
7	〃	口径推19.6cm	口唇は「く」の字状に開く。胴部上段にふくらみをもつ。器肉は薄い。	口縁は横方向の指ナデ。胴部は縦方向のていねいなヘラケズリ。
8	〃	底径7.8cm		外面は斜め方向のヘラケズリ。底部には木葉痕を残す。
9	〃	底径8.5cm		外面は縦方向のヘラケズリ。底部には木葉痕を残す。
10	土師器 丸甕形土器	最大径推33cm	器肉が薄い。	外面にはていねいな斜方向のヘラケズリがみられ、内面にも部分的にヘラケズリが観察される。
11	〃	底形推12cm	底部のみの破片であるが、やや丸底を呈す。	外面は胴部・底部に荒い縦方向のヘラケズリが施されている。
12	〃	底径9.8cm	底部より弱い段をもって立ちあがり、球形状の胴部へ移行する。	胴部内面はヘラナデされている。
13	手捏形土器	口径5.9cm 器高3.5cm	椀状を呈するが、手捏であるためやや均整のとれぬ形状をしている。	胴部には指頭による圧痕がみられ、口縁から内面は指ナデされている。
14	手捏形土器	口径5.9cm 器高3.5cm	椀状を呈するが、手捏であるためやや均整のとれぬ形状をしている。	胴部には指頭による圧痕がみられ、口縁から内面は指ナデされている。
15	手捏形土器	口径7.3cm 器高3.4cm	底部が僅かに平担で，口縁が外反する。	胴部と内面は指ナデされている。体部下端から底部はヘラケズリされている。
16	土師器 坏形土器	口径10.4cm 器高5.5cm	胴部下半は球形を呈し、体部上端で直立気味になり、口縁で外反する。底部は肥厚している。	胴部上半をナデしあげ。胴部下半を横方向のヘラケズリしている。

（松本富雄）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴
17	土師器 坏形土器	口径11.7cm 器高6.3cm	椀状を呈する。胴部から底部への移行部で器肉を増す。	口縁部は横方向のナデ。体部はヘラケズリ。下端を斜方向のヘラケズリをしたのちに上縦方向のヘラケズリしている。内面はヘラナデしあげ。
18	土師器 坏形土器	口径11.7cm 器高4.1cm	底部は丸底気味で、胴部中位に陵を有する。口縁部は垂直に立ちあがるが、口唇付近で僅かに内彎する。	陵より上半をナデしあげ。陵より下半をていねいなヘラケズリでしあげている。内面口唇下に浅い一条の沈線が走る。内外面ともに丹彩が施されている。
19	土師器 坏形土器	口径13.4cm 器高7.1cm	胴部下端は半球状を呈しふくらみをもつ。胴部中位に陵を有する。体部上半はやや内傾気味に立ちあがり、2縁付近で僅かに外反する。	陵より上半を横ナデしあげ。陵より下半をていねいなヘラズケリでしあげている。内面口唇下に浅い円形の一条の沈線が走る。内面と外面胴部下端まで丹彩されている。
20	土師器 高坏形土器	底形11cm	器台部のみの破片である。器台部はやや丸味をもつが、底面に向かい外開きの僅かにふんばる形態をしている。	屈極部から下方に軽いヘラケズリが施され底面付近では横方向の指ナデが施されている。内面もまた中位までがヘラケズリされ、下位が横方向の指ナデである。外面および坏部内面には丹彩が施されている。
21	須恵器 甕形土器		胴部小破片。	内面には叩て具の跡が、外面にはていねいなたたきが施されている。
22	支柱	上端径6.5cm 下端径7.5cm 高さ16.5cm	円柱状を呈す。	全面ナデ仕上げされているが、部分的に棒状の圧痕がつく。
23	支柱	上端径4.7cm 下端径6.5cm 高さ21.0cm	やや陵をもつ円柱状を呈す。	全面ナデ仕上げされているが、部分的に棒状の圧痕がつく。
24	支柱	下端径	やや陵をもつ円柱状を呈す。	全面ナデ仕上げされているが、部分的に棒状の圧痕がつく。

（松本富雄）

1号住居跡出土土器観察表

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴
1	土師器 甑形土器	口径推20.5cm	口縁部は強く外反する。	内面、口縁部外面を横ナデ。胴部外面を縦方向のヘラケズリ。
2	〃	口径推21.2cm	胴部は僅かに張りをもち、口縁部は強く外反する。	内面、口縁部外面を横方向のナデ。胴部外面を縦方向のヘラケズリ。
3	〃	口径推24.2cm	胴部は僅かに張りをもち、口縁部は強く外反する。	内面、外面ともに口縁部は横方向のナデ。外面胴部は縦方向のヘラケヅリ。胴部内面には軽くヘラナデが観察される。
4	土師器 長甕形土器	口径22.1cm	若干張りをもつ胴部から、「く」の字状に口縁は外反する。	内面、口縁部外面ともに横方向のナデ。胴部は縦方向のヘラケヅリ。
5	〃	口径24.6cm	若干張りをもつ胴部から、「く」の字状に強く口縁は外反する。	内面、口縁外面ともに横方向のナデ。外面胴部は縦方向のヘラケヅリ。
6	土師器 丸甕形土器	口径19.6cm	胴部は球状を呈すると思われる。口縁部は短く外反する。	口縁部内外面を指ナデ。胴部外面をヘラケヅリ。
7	〃	口径推26.0cm	胴部は球状を呈し、口縁部は短いが強く外反する。	口縁部内外面を指ナデ。胴部外面をヘラケヅリ。胴部内面をヘラナデ。

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴
8	土師器 丸甕形土器	口径推24.2cm	胴部は球状を呈す。口縁部は「く」の字状に弱く外反する。	口縁部は内外面とも指ナデ。胴部は外面がヘラケズリ。内面がヘラナデ。
9	土師器 甕形土器	底径9.3cm	底部は平底	底部・胴部外面をヘラケズリ。
10	〃	底径7.5cm	底部は平底。	底部・胴部外面をヘラケズリ。内面をヘラナデ。
11	〃	底径推8.2cm	底部は平底	胴部外面ヘラケズリ。
12	土師器 坏形土器	口径11.6cm 底径6.2cm 高さ3.5cm	平底の底部より内彎しながらひろがっていき、口縁付近でほぼ垂直に立ちあがる。	口縁部外面および内面はナデ。胴部・底部外面をヘラケズリ。
13	〃	口径15.0cm 底径7.0cm 高さ3.5cm	平底の底部より内彎しながらひろがっていき、口縁部は直立気味に立ちあがる。口唇内面に面をもち、弱い陵をもつ。	口縁部外面、内面をナデ。胴部・底部外面をヘラケズリ。
14	〃	口径15.2cm 底径5.7cm	高さ4.2cm	平底の底部より内彎しながらひろがっていき、口縁部は直線的に僅かに開く。口唇内面に面をもち、胴部を割するところに弱い陵をもつ。
14	〃	口径15.2cm 底径5.7cm 高さ4.2cm	平底の底部より内彎しながらひろがっていき、口縁部は直線的に僅かに開く。口唇内面に面をもち、胴部を割するところに弱い陵をもつ。	口縁部外面、内面をナデ。胴部・底部外面をヘラケズリ。
15	須恵器 坏形土器	口径16.0cm 底径9.5cm 高さ3.7cm	平底の底部より、若干の丸味をもって開いていく。内面底部と胴部を割する部分にはロクロ調整時に指をたてたと思われる弱い沈線が走る。	胴部・内部ともロクロ調整。底部外面は回転ヘラケズリ。 内・外面とも火だすきが残る。
16	須恵器 坏形土器	底径9.4cm	やや丸味のある底部である。	内面はロクロ調整。底部外面は中央部に僅か糸切痕を残し、他は回転ヘラゾケリ。

（松本富雄）

2号住居跡出土土器観察表

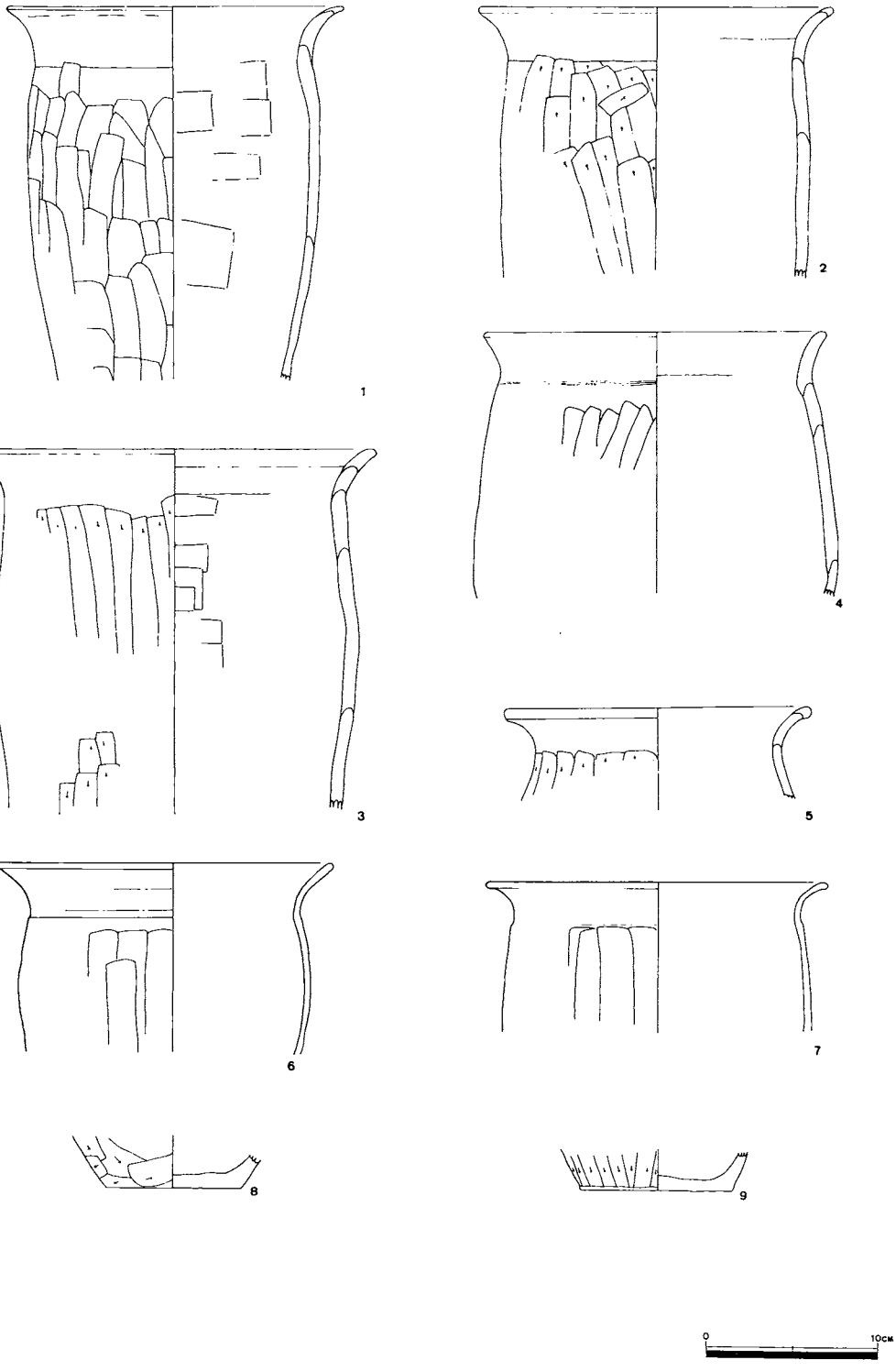
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴
1	須恵器 甕形土器	口径18.0cm	胴部下半に丸味をもつが、口縁に向かい直線的にひろがっていく。口唇は平担面を形成している。	ロクロ調整しあげ。
2	須恵器 坏形土器	底径7.5cm	ややあげ底状の底部である。	ロクロ調整しあげ。底部は回転糸切りのまま。
3	須恵器 坏形土器	底径10.5cm	ややあげ底の底部である。	ロクロ調整しあげ。底部は回転糸切りの後に、周辺の回転ヘラケズリしている。
4	土師質土製品	直径1.2cm	球状を呈し、中央部に1.5cm程の穿孔がある。	
5	土師器 丸甕形土製品	口径21cm 最大径推31cm	球状を呈する胴部から、頸部は直立気味に立ちあがり、口唇に向い開いていく。	口縁から頸部はナデ。胴部外面は横方向のヘラケズリ。胴部外面は横方向のヘラナデ。

（松本富雄）

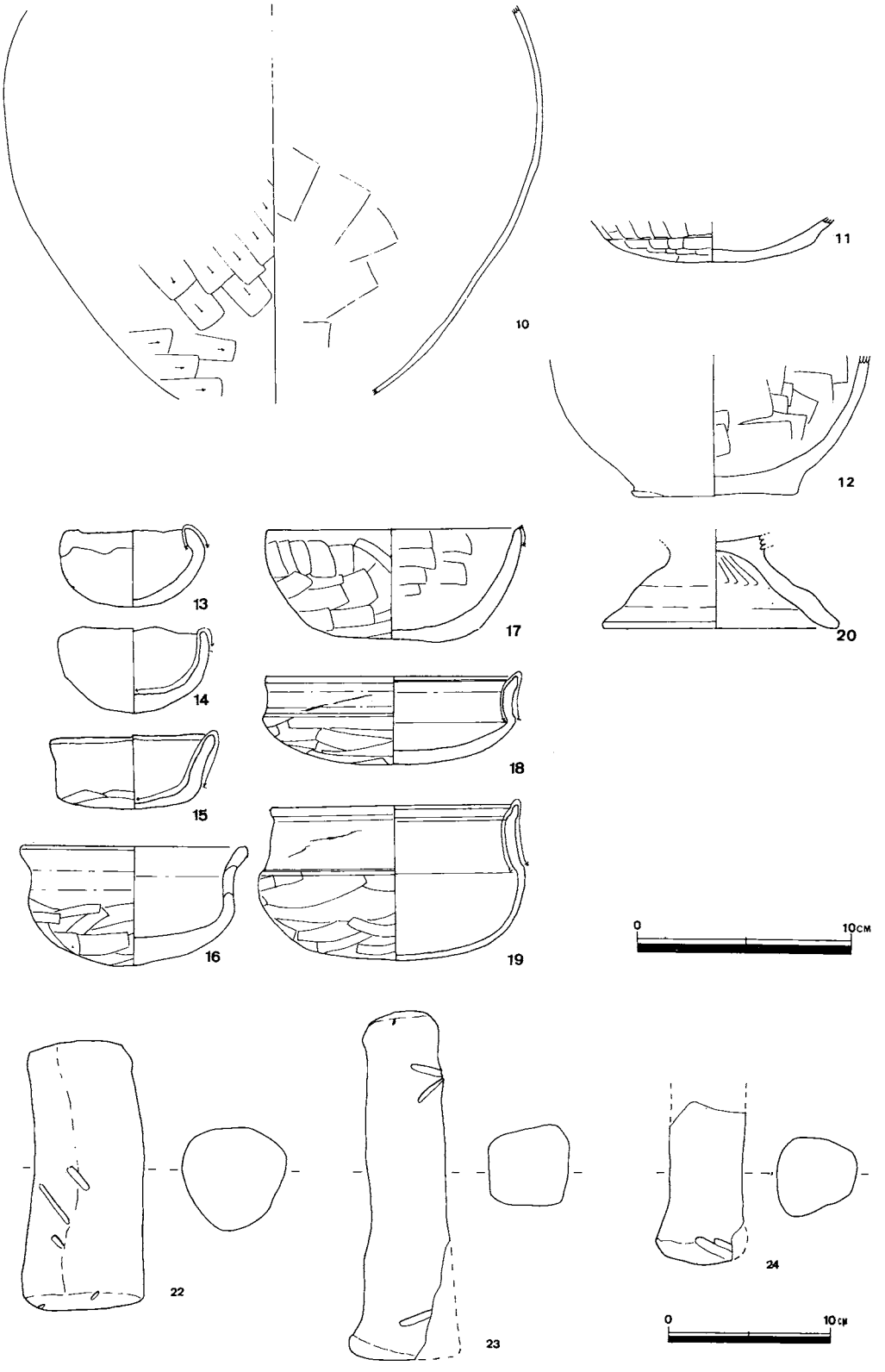
土器焼成遺構出土土器観察表

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴
1	酸化焔坏形土器	口径推14cm 底径5.7cm 器高4.0cm	底部直上に僅かに立ちあがりをもち、丸味をもって開いていく。口縁はなだらかに開く。口唇に僅かに面を形成する。	巻き上げ後、ロクロ調整しあげをしている。底部は回転糸切りのまま。(巻き上げ痕を残す。)
2	〃	口径推13.8cm 底径5.6cm 器高4.2cm	底部から僅かに丸味をもって開いていく。口縁僅かに外反してなだらかに開く。	巻き上げ後、ロクロ調整しあげをしている。底部は回転糸切りのまま。(巻き上げ痕を内面に残す。) 内外面に黒斑。
3	〃	口径推13.4cm 底径5.5cm 器高3.5cm	底部から僅かに丸味をもって開いていく。口縁付近で僅かに外反して、口唇部は器肉を薄くする。	巻き上げ後、ロクロ調整しあげをしている。底部は回転糸切のまま。(巻き上げ痕を内面に残す。)
4	〃	口径推13.0cm 底径推5cm 器高3.5cm	底部直上に2～3㎜ほど立ちあがり、ほぼ直線的に開いていく。口縁付近では器肉を薄くする。口唇外面に僅かにたまりをもつ。	ロクロ調整しあげである。底部は回転糸切のまま。
5	〃	底径5.3cm	底部から僅かに丸味をもって開いていく。	ロクロ調整しあげ。底部は回転糸切のまま。外面に黒斑あり。
6 ・ 7	〃		口縁部破片である。胴部は僅かに丸味をもつが、口縁付近は直線的である。口唇に面をもつ。口唇外面に僅かなたまりがある。	ロクロ調整しあげ。6、7、には外面に黒斑あり。
9 ・ 10	〃		口縁部破片である。10は胴部下半から比較的直線的に立ちあがる。2点とも口唇内面に僅かなたまりをもつ。	ロクロ調整しあげ。
11 ・ 12	〃		口縁部破片である。口唇に面をもつ。	ロクロ調整しあげ。12は内面に黒斑あり。
13 ・ 14		底径13=5.5cm 14=5.5cm	いずれも僅かに垂直に立ちあがり丸味をもって開いていく。	ロクロ調整しあげ。
15 ・ 16	〃		内面が剥離しており、剥離面にも糸切りの痕が観察される。	
17	酸化焔高台坏形土器		高台部は外開きで、僅かに反る。面を有する。	
18	酸化焔甕		底部付近の破片である。	内外面ともロクロ調整のまま。

(松本富雄)



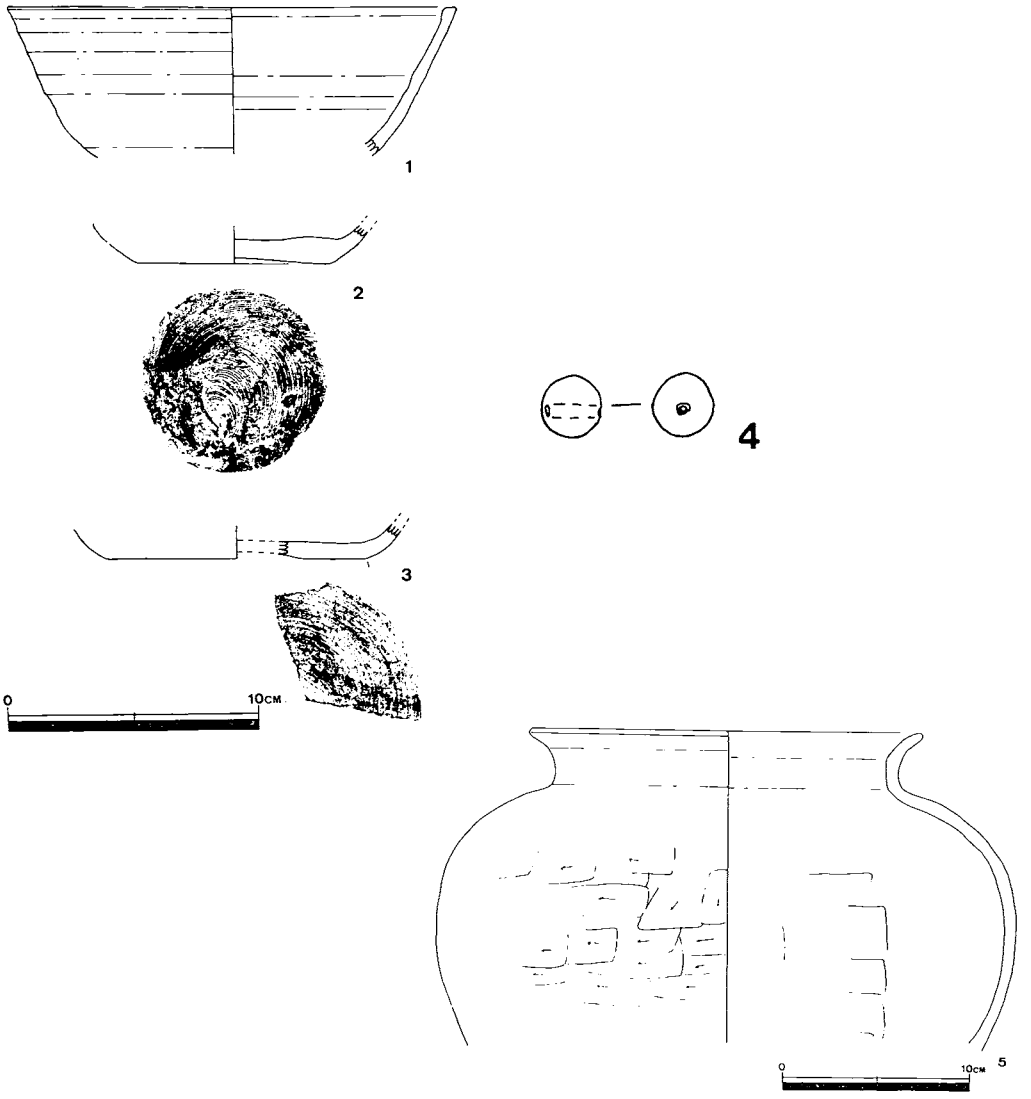
第68図　本村北遺跡３号住居跡出土遺物実測図(1)(1/4)



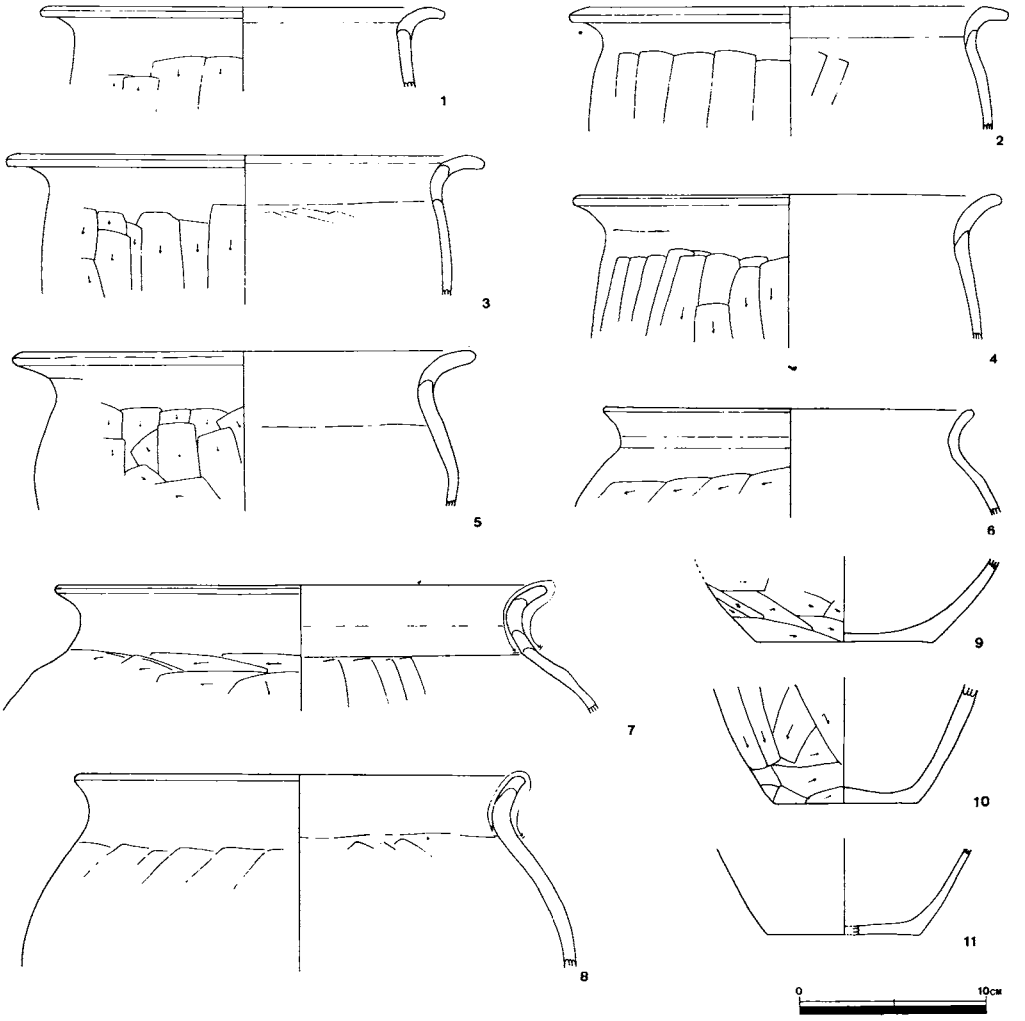
第69図　本村北遺跡３号住居跡出土遺物実測図(2)(1/3・1/4)

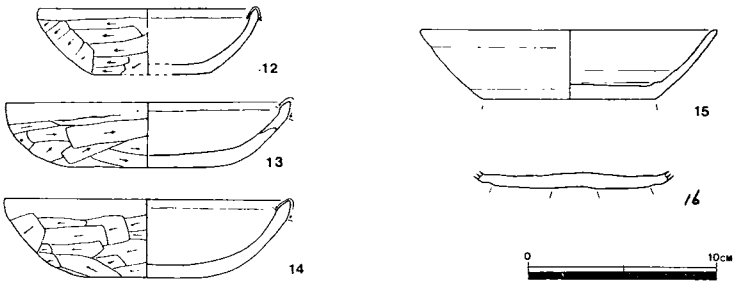
ところどころに輪積み痕の跡が観察される。また、16・17の底部片で観察されるように内外面に糸切りをもつことから、底部円柱糸切技法によった製作が理解される。

高台坏は高台が比較的スマートなしっかりしたつくりである。甕は須恵器甕が2次的に火を受け酸化したものと思われ焼きしまりもよくない。この2者については1片ずつの出土だけであり、本窯で焼成されたとは判断できない。（松本富雄）

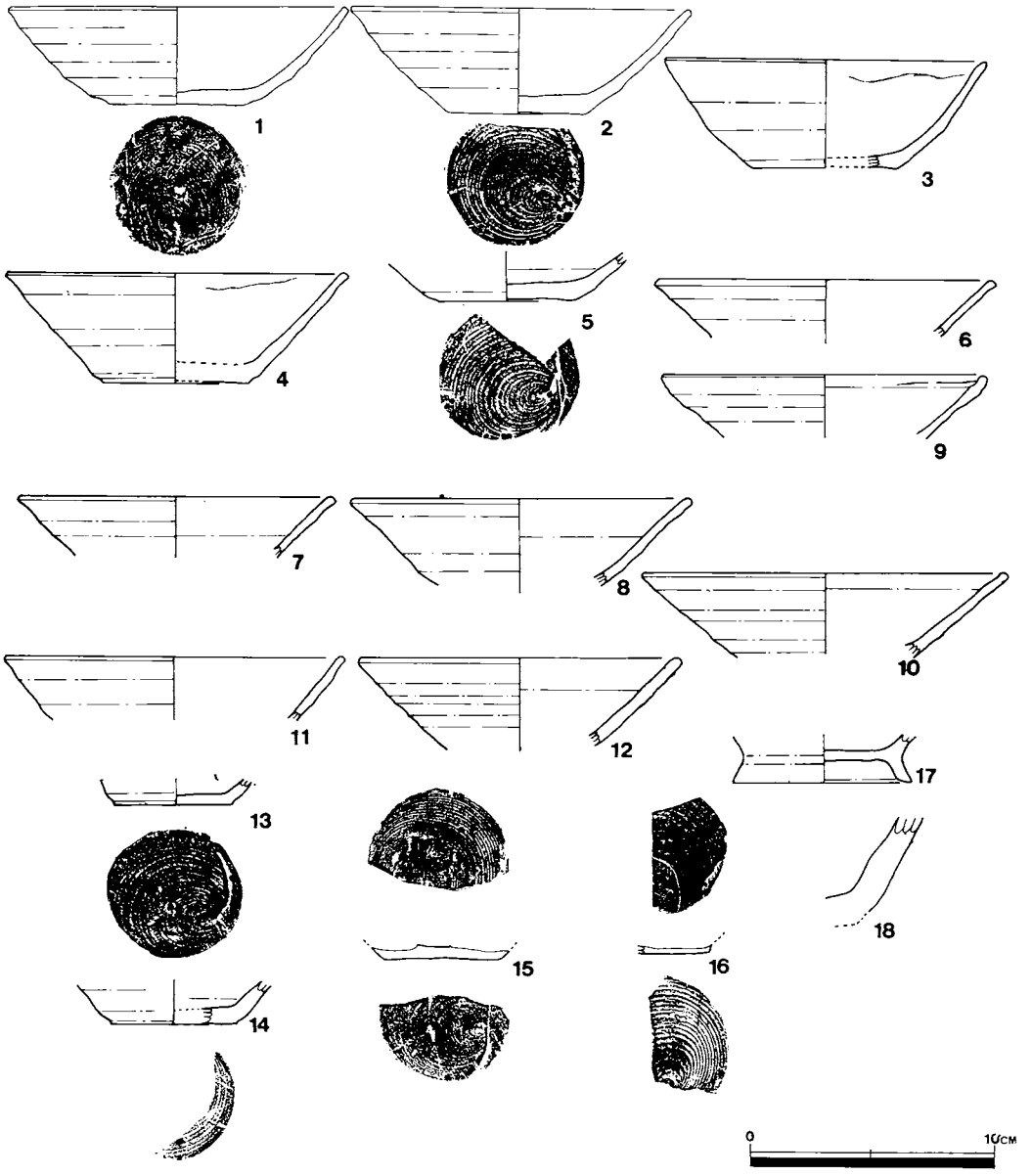


第70図　本村北遺跡2号住居跡出土遺物実測図（1/3・1/4）





第71図　本村北遺跡１号住居跡出土遺物実測図(1)(1/3・1/4)



第72図　本村北遺跡土器焼成窯(L.N.04)出土遺物実測図(⅓)

9．俣埜第２遺跡の調査

遺跡は埼玉県遺跡地名表による14の遺跡である。江川の上流域に形成された谷を南側にもつ遺跡である。この付近は行政上で三芳町藤久保字俣埜とされる付近である。遺跡名はその小字を冠して付けたのであるが、この谷津の対岸にも遺跡が存在し、昭和52年その遺跡の一部を調査し俣埜遺跡と命名しているため、今回調査した遺跡を俣埜第２遺跡と命名した。

発掘調査は、以下のような経過により実施された。発掘調査の発端は　　家業である電気店の倉庫を建設するため、都市開発課に建築申請事前協議書を提出したことによる。この協議書について、都市計画課から照会を受けた教育委員会では遺跡地図等で遺跡分布地内における開発であることを確かめ、「やむを得ず開発する場合記録保存を目的として発掘調査は必要である。」と回答した。その後、県文化財保護課の助言・指導を受け、　　協義の結果、三芳町東部遺跡群の一環として発掘調査することとなった。

1)　発掘調査

発掘調査は昭和56年７月23日から７月30日まで実施された。発掘調査地区の面積は66.49㎡と極めて少なかった上に、発掘区の北西側はかつて近辺の共同井戸があった場所であり、今もコンクリート貯水槽が埋設されているため調査は不可能であった。従って発掘調査地区は２ｍ×２ｍのグリットが９ケ所に設置できたにすぎない。

発掘調査区はすでに駐車場として久しく使用されており、道路面との高さを整えるべく、ローム層より10cm程上まで表土を削平してしまっていた。

表土は第１、３、５、７、９グリットの５ケ所開掘した。すでに駐車場となっていたために、表土は堅くしまっており、僅か10cm程であったが開掘するのに難行した。縄文土器片と思われる破片が、第１・５・７・９グリットより１片ずつ出土した。第１・７グリットに溝状の落ち込みを検出したが西山氏の話によれば共同給水をした際のパイプ埋設のためのものであるとのことであった。

ローム層上面での確認精査では遺構の検出はなく、その後ローム層へ先土器時代の遺構確認のため第１・３・５・７・９グリットで開掘を進めたが、10層に至っても遺物の検出はなかった。４層から６層にかけて炭化物片を数片確認したが、集中するという状況ではなかった。

2)　遺　物

写真図版　に示す４点の土器片が出土した。いずれも器面が荒れており、時期を判別し易いが、焼成・胎土等から考えて縄文時代の土器と考えられよう。　　（松本富雄）

第73図　俣埜第２遺跡全測図(1/200)

10. 俣埜遺跡C地点の調査

本遺跡は東方の富士見市から武蔵野台地を開析して入り込む江川を流す谷戸に面している。江川の湧水源は三芳町藤久保俣埜に存在するが、俣埜遺跡はこの谷の南側台地部に拡がりをもつ。本地区調査以前に過去2回の発掘調査が実施されているが、これまでに先土器時代の石器、縄文時代の住居跡、平安時代の竪穴・炭窯等が検出されている。

今回の発掘区はそれらの成果をおさめた地区よりも南西方に約300m程隔り、遺物分布範囲の南西限付近であった。地番は三芳町藤久保700－1番地である。

発掘調査は992.20㎡を対象とし、その結果先土器時代の石器ユニット、炭化物ユニット、縄文時代の土壙、近世の溝状遺構等を検出した。

今回の発掘調査地区は、遺物の散布状態から見る限り、遺跡の南西限に当たると考えられた。当初遺跡の分布調査の一環として遺跡の限界を知る目的で試掘調査が実施された。その結果、縄文時代と推定される土壙が検出され、遺跡範囲内であることが確かめられた。当地区は地主　　により住宅建設が予定されていた地区でもあった。試掘調査によって遺構の存在が確認されたため、その後記録保存を目的として発掘調査が実施されることとなった。以下に発掘の経過を日誌抄で付しておく。

9月2・3日（木・金）試掘調査を実施する。試掘調査は約5m間隔に2m×2mのグリットを設定して行なった。その結果、縄文土器片数片と、縄文期の土層と思われる覆土をもつ土壙が1基検出された。

9月13日(月)発掘調査に入る。試掘調査の結果、縄文時代の土壙が検出されたため、地主江原勝司氏の要請により三芳町教育委員会が主体者となって実施することとなった。すでに発掘区の北側約3分の2の表土は地主の協力により重機で削平されていた。調査協力員は今回は三芳町高齢者事業団が中心であった。発掘区内への杭打ちと、重機削平後の遺構確認調査を実施し始めた。

9月18日（土）試掘調査で検出された縄文時代の土壙周辺の全面精査を終え、西側地区に2m×2mのトレンチを設定し遺構確認に入る。

9月27日（月）遺構の発掘調査に入る。近世の溝状遺構（L.N.03, L.N.04）と縄文時代の土壙（L.N.05）以外は現在の農耕に関連する遺構であった。

9月28日(火)遺構の発掘を終え、測量に入る。

9月29日(水)発掘北側付近に、先土器時代の遺構確認のための試掘グリット（2m×2m）を4ケ所に入れる。そのうち1ケ所より黒曜石製の縦長剝片を使用したナイフ形石器がハードローム層より出土する。

9月30日(木)先土器時代の発掘地区は発掘区の北端に当たっているため、この部分を調査している間に、発掘区南側の表土剝ぎを重機で実施してもらうこととする。ナイフ形石器の出土したグリットを約4.5m×約6.5m程拡張し、ローム層の発掘に入る。

10月１日(金)先土器時代の遺構検出のため、拡張したグリットの、ナイフ形石器を出土した西半分を４層上面でおさえ、東半分を５層まで下げた。西半分には炭化物（木炭）片が多く確認された。東半分では赤化した礫小破片・剥片が検出された。

10月４日(月)先土器時代・拡張グリットの西半分には５寸釘で50m×50mの方眼を組み炭化物を図化し終える。東半分ではほぼ６層まで発掘し終える。

10月５日(火)発掘区の南側の重機による表土剥ぎが終了したので杭打ちに入る。先土器時代の拡張グリットでは東半分の６層下げ作業と、西半分の約２分の１の地区の４層下げ作業が行なわれた。いずれも遺物を包含している層であるため慎重な調査となった。

10月７日(木)今日より南側地区の遺構確認に入る。しかし、朝10時30分雨が降りはじめたため、高齢者事業団から派遣された作業員には帰ってもらう。残り２名で先土器時代の炭化物の図化を小雨の中続行。

10月12日(火)作業再開。先土器時代拡張区の西半分に拡がる炭化物の図化は６層上面まで終了。東半分は７層上面まで下げる。南側地区の遺構確認では、北側地区の延長上に溝(L. N. 04, L. N. 05)のプランが確認された。

10月15日(金)炭化物層の図化を終え、先土器時代の拡張グリットを全面的に８層上面まで下げる。炭化物の集中の見られた西半分では黒曜石製のグレイバー・剥片等を９点を検出。図面を取り終え、さらに壁周辺を９層まで下げる。南側地区の調査は終了する。溝状遺構以外になにも検出されなかった。高齢者事業団から派遣されていた協力員は本日で参加終了。

10月16日(土)本日で調査を終了する。昨日終えていなかった９層下までの下げを行ない、その後図化に入り、午後５時なんとかすべての作業工程を終える。

1) 遺　構

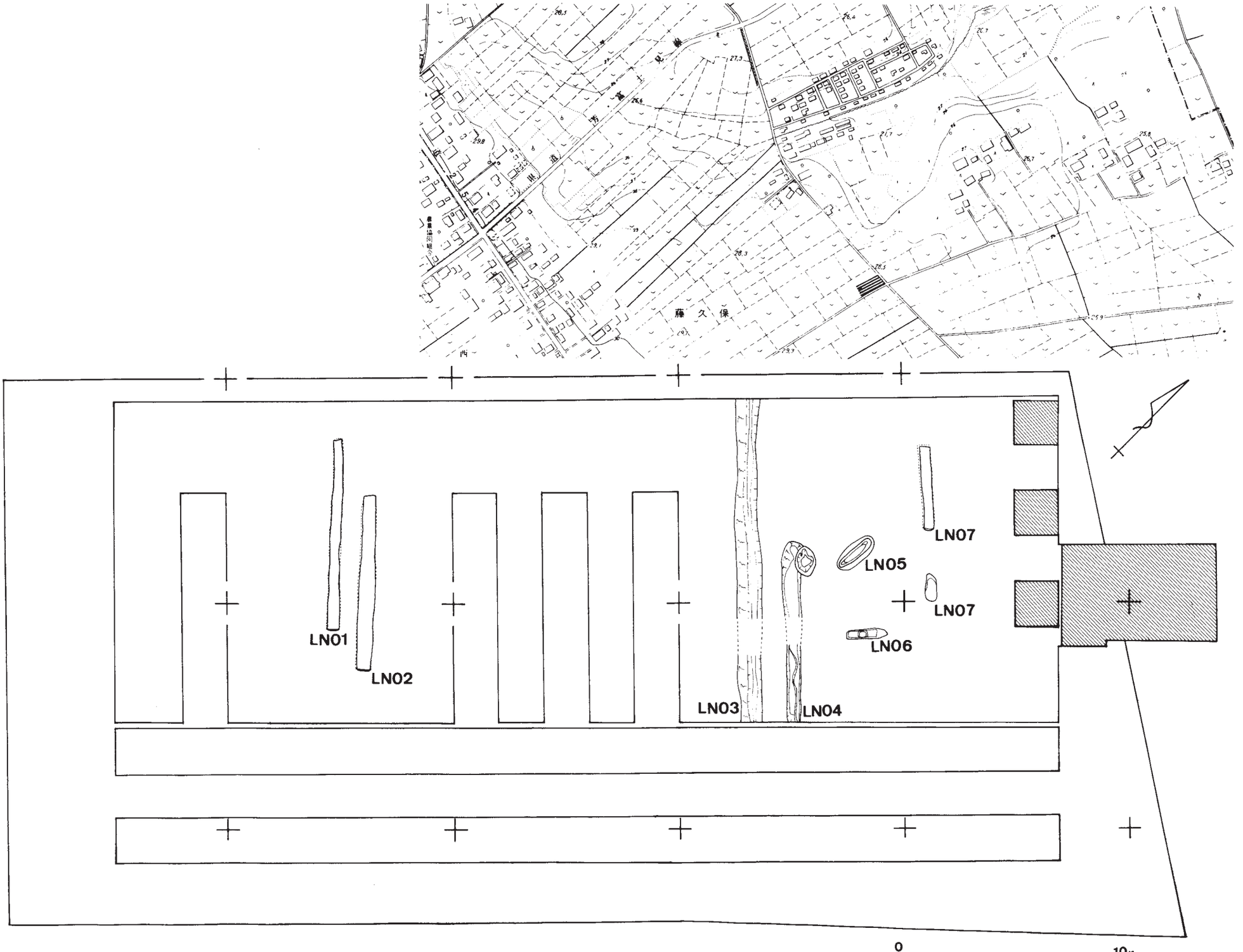
a．土壙（L. N. 05）（第75図）

発掘区の東寄りの中央部に検出された遺構であり、主軸方向をほぼ北に測る。確認面での平面形は長楕円形を呈す。確認面の長径約194cm、短径約80cmを計った。断面形は壙底面にいくにしたがい幅を狭くしていき、ロート状を呈する。壙底面はほぼ平坦であるが、幅狭で短径約10cm～約20cmを計った。覆土は上層の１・２層が暗茶褐色を呈し、４～５層の下層にかけてはロームブロックを含むものであった。全体的にしまりが良かった。出土遺物は全く無かったが、覆土のしまりぐあいや土色から考えて縄文時代の所産と考えられる遺構である。

b．溝状遺構（L. N. 03, L. N. 04）（第76図）

発掘区の東寄りを横断するように２本の溝が検出された。

L. N. 03とした遺構は溝幅約50cm～約60cmであり、横断面形は片薬研を呈し、南西壁の方がゆるやかに立ち上っていた。深さは確認面から約55cm～約65cmであったが、南東方に向かい徐々に深さを増

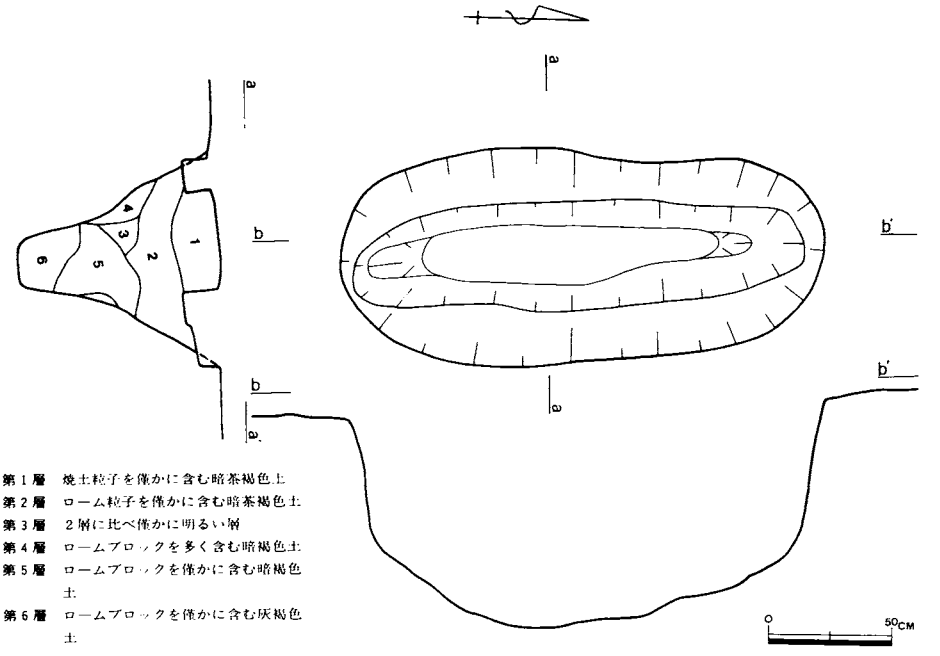


第74図　俣埜遺跡 C 地点全測図(1/200)

していた。覆土は土層の１層が粘性味の強くしまりのある灰黒褐色土で、中層の２・３層はしまりがあるがサクサクした暗黒褐色土で、下層の４層は水分を多く含む黒褐色土であった。

L. N. 04とした溝はL. N. 03に平行して存在するが、発掘区北西壁までは至っていない。遺構のプランは途中で消えているが、消える付近に向かうに従って、徐々に浅くなるので消えた北西側にも溝は続いたが、ローム面（確認面）まで遺構底が達していなかったものと思われる。溝幅は約80cm～約60cmを計り、深さは約10cm～約15cmと浅い。覆土はL. N. 03溝の上層と同様の粘性味の強い灰黒褐色土であった。

さて、この２つの溝からは遺物の検出はなく、時代を決定付けられる資料はない。しかし溝の形成された方位と畑の地割の方位が一致することから考えて、それほど古くない時代のものと思われる。しかし、他の確実に農耕用の遺構とされるもの（L. N. 01, L. N. 02, L. N. 06, L. N. 07, L. N. 08）は覆土の様相が異なってしまりがない。このことと、地主　　も溝の存在を知らなかったこと等から考えて、比較的古い時期の溝と考えて良さそうである。　　（松本富雄）



第75図　俣埜遺跡Ｃ地点土壙全測図(1/30)

C．先土器時代の遺構（第77図）

ローム層面での調査の終了後、発掘区内の北東部すなわち台地肩部に近い部分に数ヶ所の先土器時代の遺構確認のためのグリット(2×2m）を設定し開掘した。

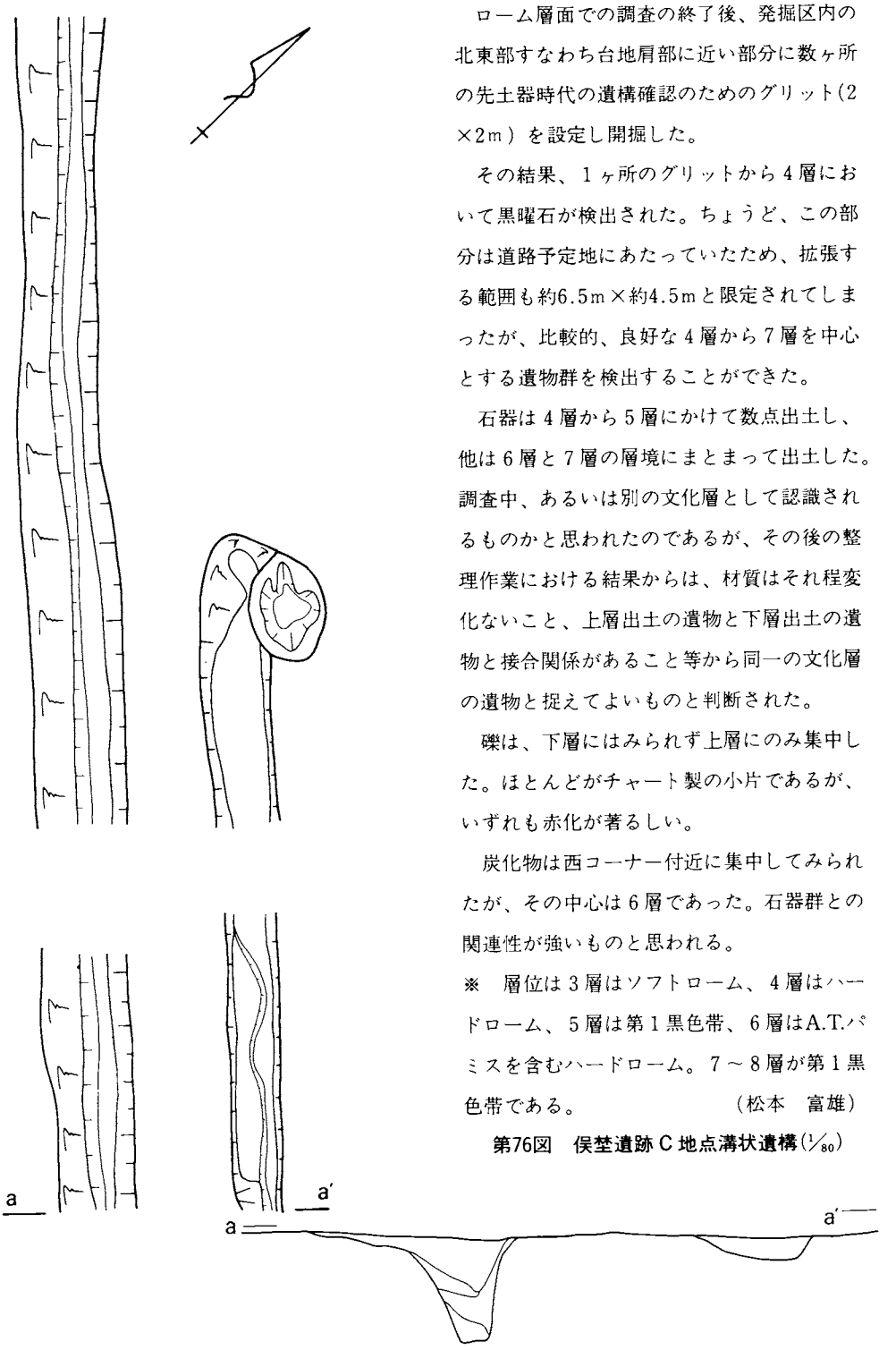
その結果、1ヶ所のグリットから4層において黒曜石が検出された。ちょうど、この部分は道路予定地にあたっていたため、拡張する範囲も約6.5m×約4.5mと限定されてしまったが、比較的、良好な4層から7層を中心とする遺物群を検出することができた。

石器は4層から5層にかけて数点出土し、他は6層と7層の層境にまとまって出土した。調査中、あるいは別の文化層として認識されるものかと思われたのであるが、その後の整理作業における結果からは、材質はそれ程変化ないこと、上層出土の遺物と下層出土の遺物と接合関係があること等から同一の文化層の遺物と捉えてよいものと判断された。

礫は、下層にはみられず上層にのみ集中した。ほとんどがチャート製の小片であるが、いずれも赤化が著るしい。

炭化物は西コーナー付近に集中してみられたが、その中心は6層であった。石器群との関連性が強いものと思われる。

※　層位は3層はソフトローム、4層はハードローム、5層は第1黒色帯、6層はA.T.パミスを含むハードローム。7～8層が第1黒色帯である。　　（松本　富雄）



第76図　俣埜遺跡C地点溝状遺構(1/80)

2） 遺　物

a　先土器時代の石器

ナイフ形石器(1)

縦長剥片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器であるが、素材自体のもつ形状を殆んどそのまま活用している。主要剥離面は裏面右半部で、打面は基端に残置される。裏面左半部はネガティブな面であることから、即ち、15のような扁平な両設打面石核の側縁部に相当するものと考えられる。また、両者は、同一個体であった可能性もある。黒曜石

彫器（2～4）

2は、縦長剥片の一側縁に上下両端より彫刀面を作出した所謂角形の彫器である。末端側から施された彫刀面は二条認められ、打面の形成には、主軸とほぼ直交するか或いは若干斜交するように急斜な調整を施こして作出している。一方、この二条の彫刀面に先行する打面側からの彫刀面は、主軸と斜交する折断面に、さらに抉り込む急斜な調整を施こした後、作出されている。また、この打面部に彫刀面からの微細な剥離痕が認められる。彫刀面の傾斜は、若干表面へ傾くが、ほぼ表裏と90°に近く接する。ただし、上下とも、加撃点を剥片表面と接する角部に求めているため、加撃点近くでは、表面側への傾斜は大きくなる。使用痕は、裏面と接する彫刀面縁辺に、微細な刃こぼれとして認められる。黒曜石

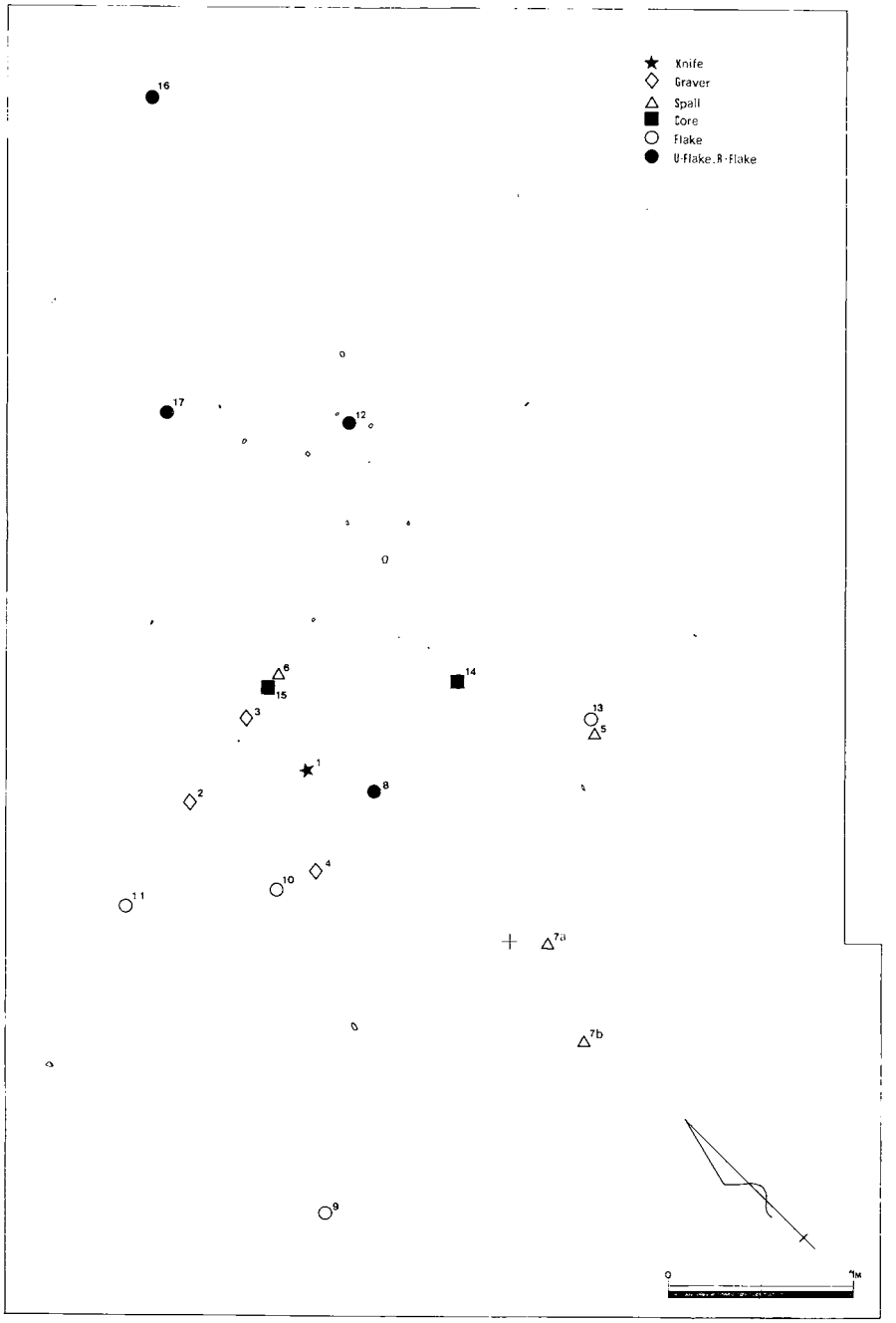
3は、縦長剥片の二側縁に彫刀面を作出したものである。右側縁は、打面側からの二条のファシットが認められるが、その上半部は、折断により失なわれている。後出のファシット末端が作り出した稜線部に、剥片表面からの微細な剥離痕（使用痕）が認められる。右側縁の彫刀面は、剥片末端部に存する、素材自体のもつ平坦面を打面として作出されており、潰れ状の執拗な剥離が、裏面方向へ、若干孤状を呈して及んでいる。それらの剥離に先行して、裏面へ数回の大きな調整剥離が施されており、恐らく、素材を薄くする意図を含んでいると考えられる。右側縁上部の微細な連続する剥離痕は使用痕としては若干異質で、着装等に関連する調整とも考えられる。表面稜線部に認められる僅かな磨滅、左側縁彫刀面に於ける微細な剥離痕とも、対応関係にあるのかもしれない。黒曜石

4は、右側縁に於ける打面側からの一条の斜傾する剥離痕をファシットとして認めたものであるが、実際には、主要剥離面を薄く剥取する大きな剥離痕との切合い、及び加撃点付近の状態は判然としない。この打面部からの大きな剥離痕も、ファシットに類する一連のものとして理解されるのか、その性格は不明である。剥片末端から主要剥離面に施こされる執拗な剥離痕に関しては、3と同様、素材を薄くする意図を含んでいると考えたい。左側縁縁辺に微細な刃こぼれが顕著である。黒曜石

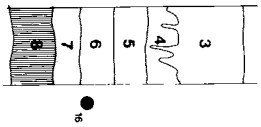
スポール（5～7a・b）

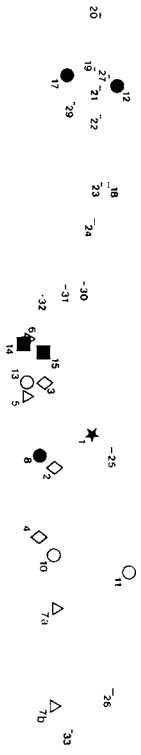
5は、極めて小形のもので、打面部及び表面に比較的細かい調整痕を持つが、両側面共に非常に平坦であるため、どのような彫器のどの部位より剥取されたものか把握しにくい。黒曜石

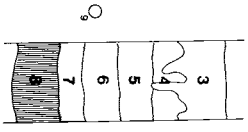
6は、主要剥離面以外にポジティブな面は認められないため、剥片より、彫刀面作出のために剥取されたとは決定できず、従って、グレイバースポールとして認定できないかもしれない。打面は小さく、微細な打面調整痕が観察される。黒曜石



第77図　俣埜遺跡Ｃ地点先土器時代の石器分布図(左)と土層図(右)(1/60)


3
4
5
6
7
8
16


20
27
19
12
21
22
17
29
18
23
24
30
31
32
6
15
14
13
3
5
1
25
8
2
4
10
11
7a
26
7b
33
9


3
4
5
6
7
8

7は、断面三角形の見事なグレイバースポールである。左側面に彫器素材の主要剥離面が、縦にほぼ半割されたかたちで残されており、素材の末端側より剥取し、角形の彫器を製作したことが理解される。スポール末端部には、素材となった剥片の打面調整痕が残される。スポール自体の打面は、発掘時の損傷を受け、点的に残存するにすぎないが、非常に小さかったようである。黒曜石

使用痕・加工痕を有する剥片（8・12a・b・16）

8は、比較的大形の縦長剥片で、末端にかけて先細りとなるが、厚さは若干肥厚する。表面には、主要剥離面と同一方向からの縦長剥片剥離痕が数条認められ、末端部両側面には、石核整形段階のものと思われる平坦な剥離面が残存する。頭部調整及び打面調整は認められない。使用痕は、両側縁共に刃こぼれ状の微細剥離痕である。ただし、表面末端部の破線で示した部位に磨滅痕が観察される。裏面左側縁上部の剥離痕は、直接的な使用痕ではなく、着装或いはそれに類する付随的な加工痕とも考えられる。黒曜石

12a・bは、両者が接合した段階で完成品と考えるか、折断を意図的なものとして扱うべきか難しい。12aの右側縁には、抉り込む加工が施こされているが、その一部は、発掘時の損傷を受けている。離面右側にも一回の加工痕が認められるが、12bと折断される以前のものである。ただし、12bの斜走する折断面との切合いは判然としない。使用痕は特に、12bの表面右側縁及び裏面末端の折断面と接する縁辺に、微細な刃こぼれ状の剥離痕として観察される。チャート

16は、石核15と接合するもので、末端部に使用痕及び極めて細かい加工痕？が認められる。黒曜石

剥片（9～11・13）

9は、石核調整剥片と考えられるが、目的的な剥片としても、最も初期のものと考えられる。左側縁に、末端からの極めて細い樋状の剥離痕が認められるが、偶発的なものと考えたい。

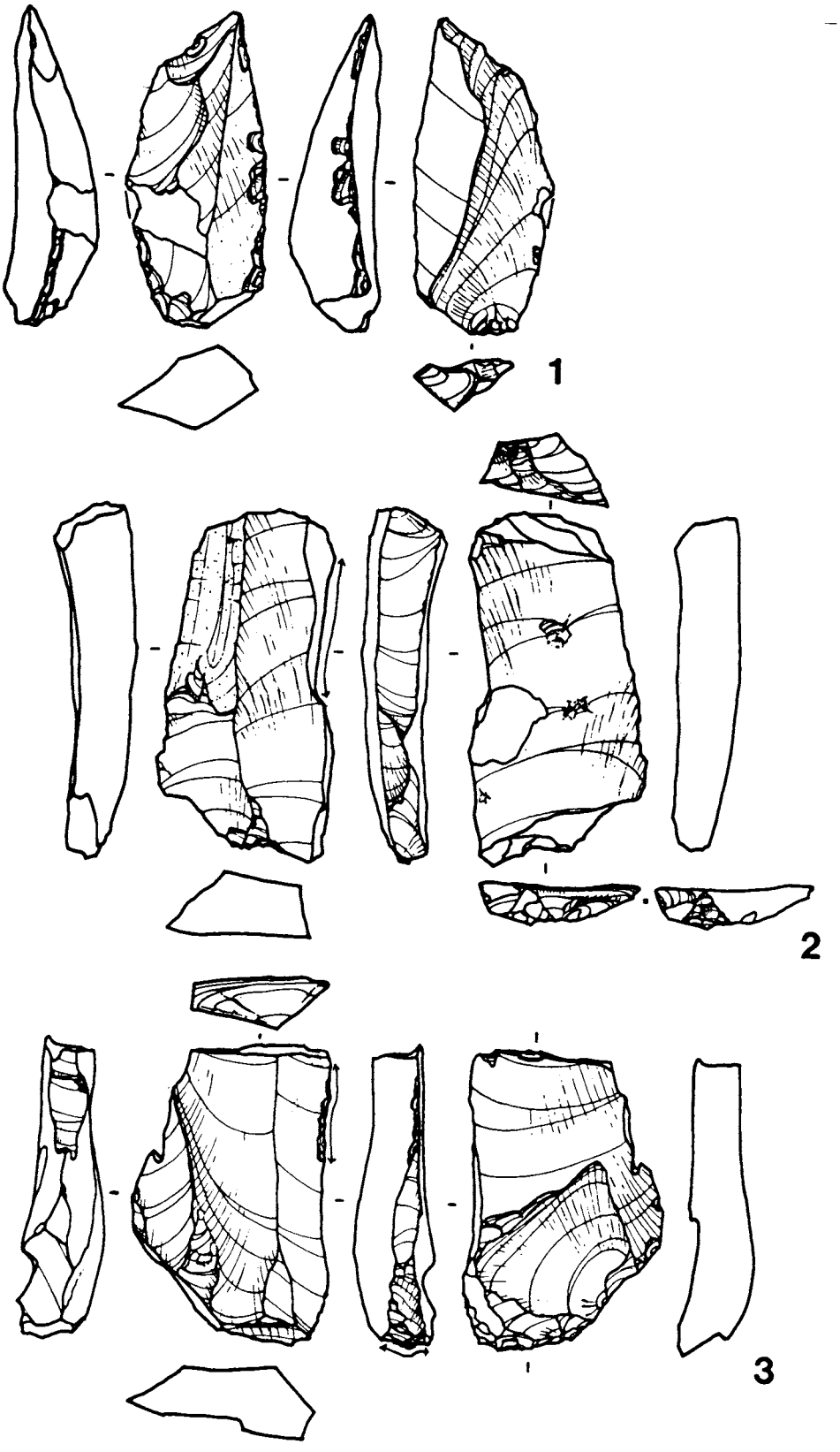
10・11は、それぞれ頭部・末端部の折断剥片で、もともとの形状は共に同様なものであったろう。幅に比して厚く、表面に残される剥離痕は、主要剥離面の方向と一致する。10の打面及び頭部における調整は顕著ではなく、11は、末端面をもつ。黒曜石

13は、少なくとも二度目の折断行為により、剥取された折断剥片である。このような剥片の存在は、剥片に残される折断面が、単なる分割により生じたものだけではなく、折断された「面」或いは、それによって生じる縁辺の獲得を意図した行為を示すものと考えられよう。黒曜石

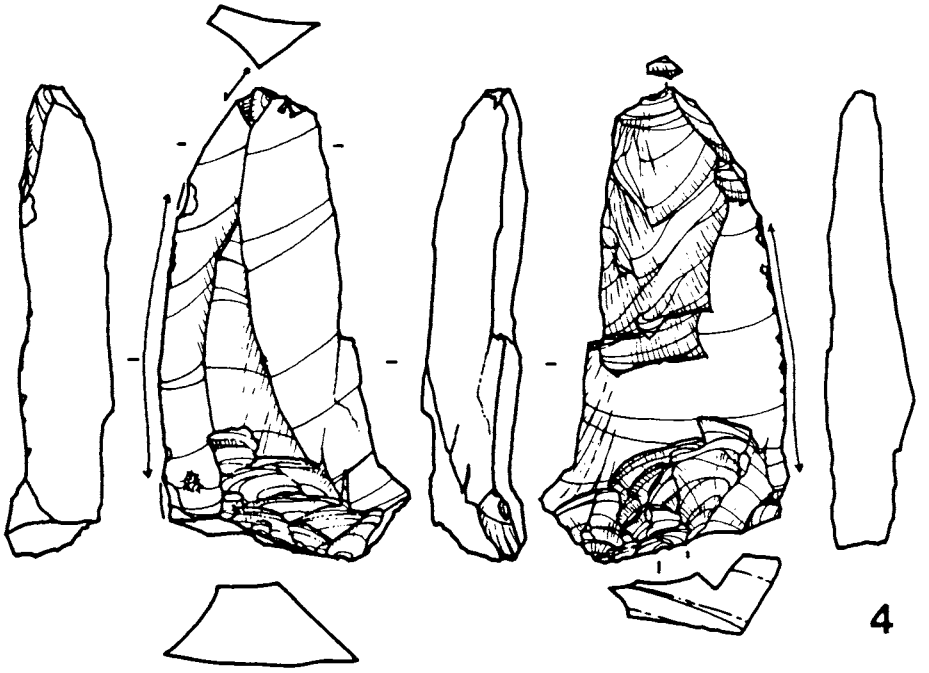
石核（14・15）

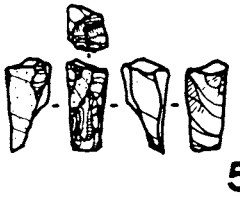
14は、石核とすれば、最も末期的なものとなろうが、両側面の平坦な剥離面から推すると、図上の表面を一定の作業面とした石核の最終段階とは考え難い。特徴としては、裏面の調整痕があり、四方からの細かい加工が施こされる。これらの加工は、表面の大きな縦長剥片剥離痕に先行するもので、微細な潰し状の剥離から、狭長なファシット状のものまで様々である。何らかの製作途上を示すものかもしれない。黒曜石

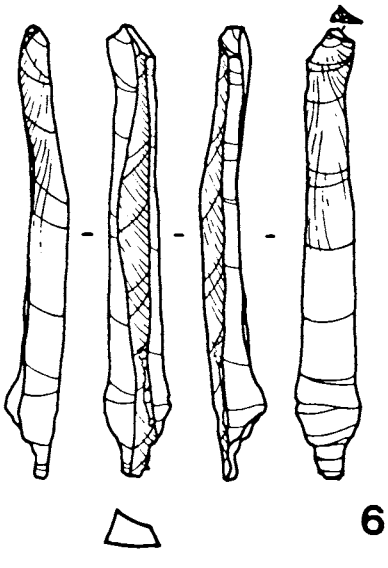
15は、楔形石器とも呼べるような扁平な両設打面石核である。頭部に於ける調整は極めて顕著である。裏面の大半を占める大きな剥離痕はヒンジ・フラクチャーを形成して、下端にまわりこみ、その面が16の打面となっている。このような末端部に於けるヒンジ・フラクチャーの発達は、1のナイフ形石器でも確認され、同一個体の可能性は強い。黒曜石　　（樫田　誠）

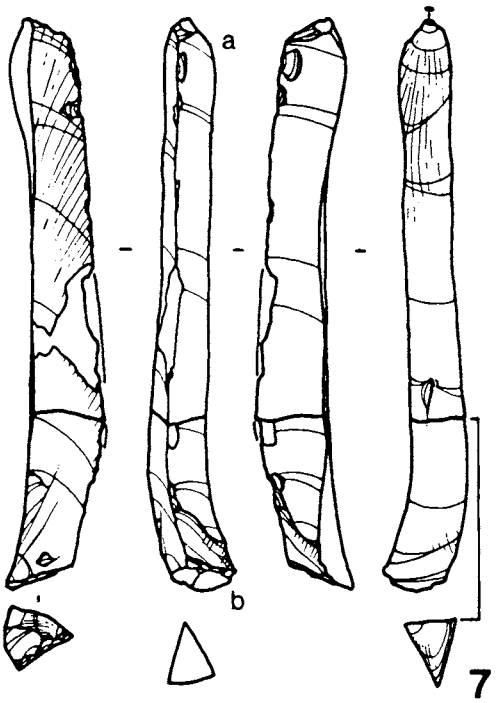


第78図　俣埜遺跡Ｃ地点先土器時代の石器実測図(1)(1/1)

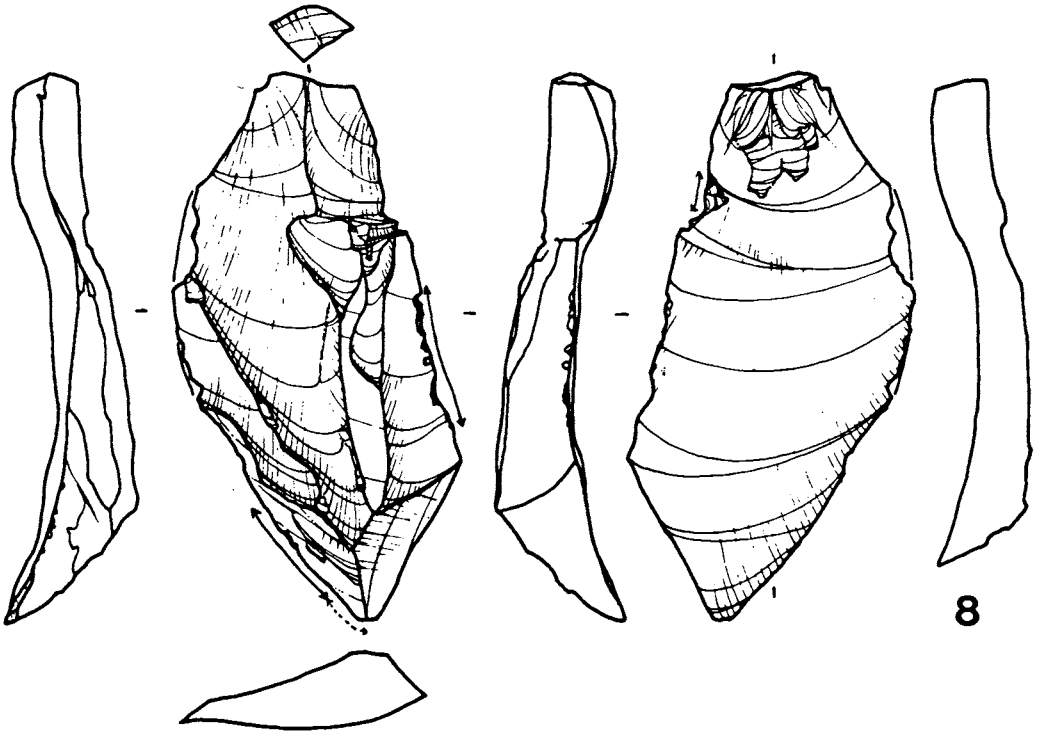


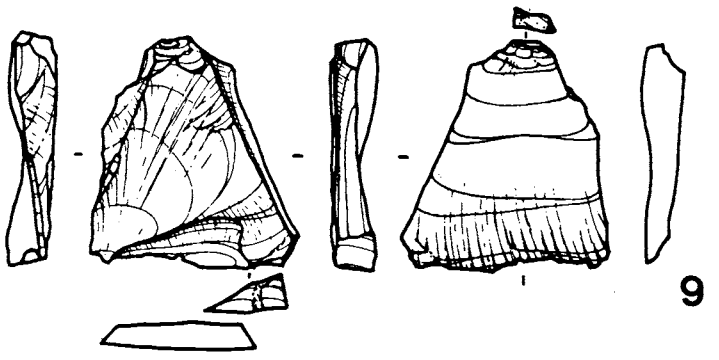


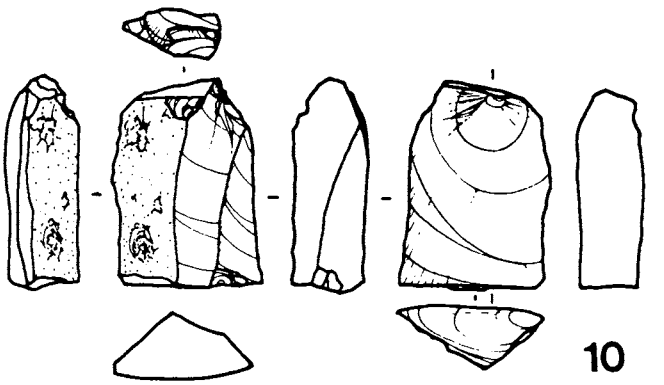




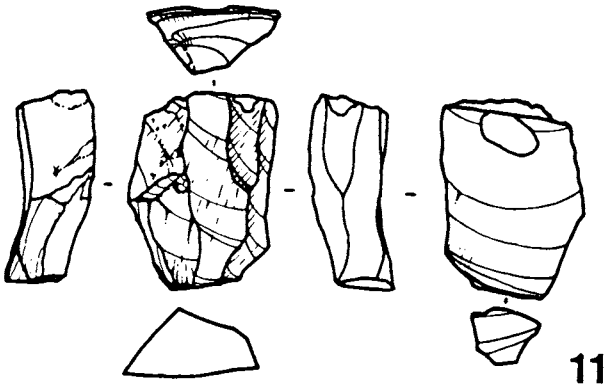
第79図　俣埜遺跡C地点先土器時代の石器実測図(2)(1/1)



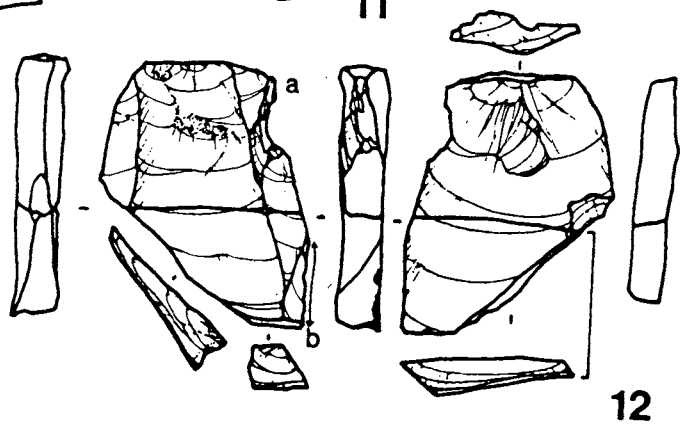




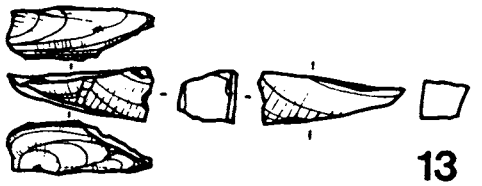
第80図　俣埜遺跡Ｃ地点先土器時代の石器実測図(3)(1/1)



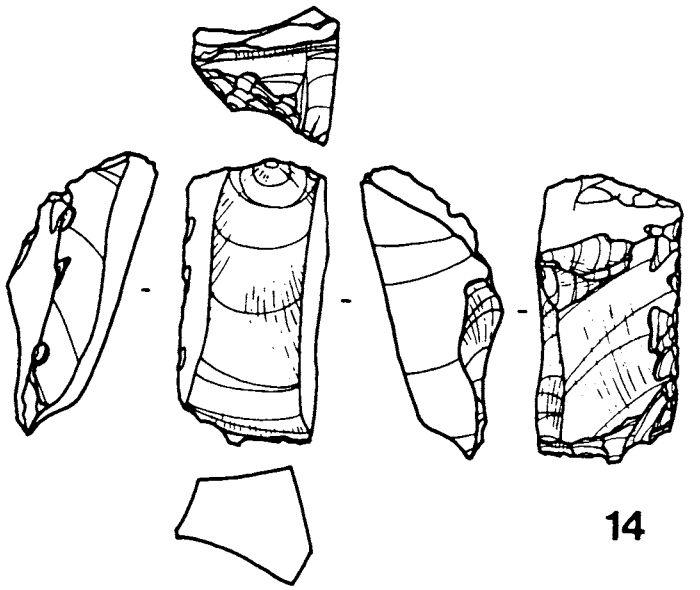
11



12

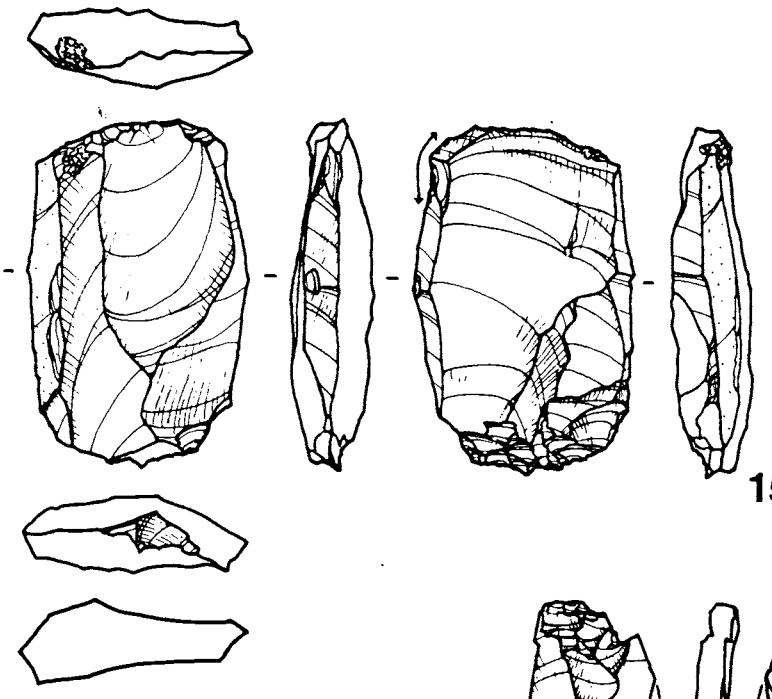


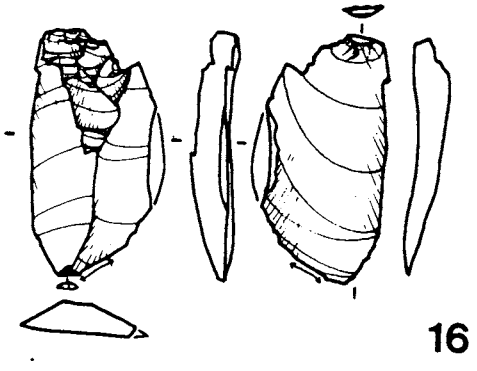
13

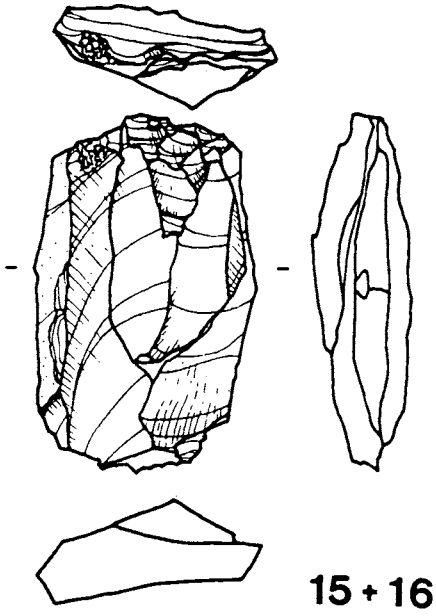


14

第81図　俣埜遺跡C地点先土器時代の石器実測図(4)(1/1)







第82図　俣埜遺跡Ｃ地点先土器時代の石器実測図(5)(1/1)

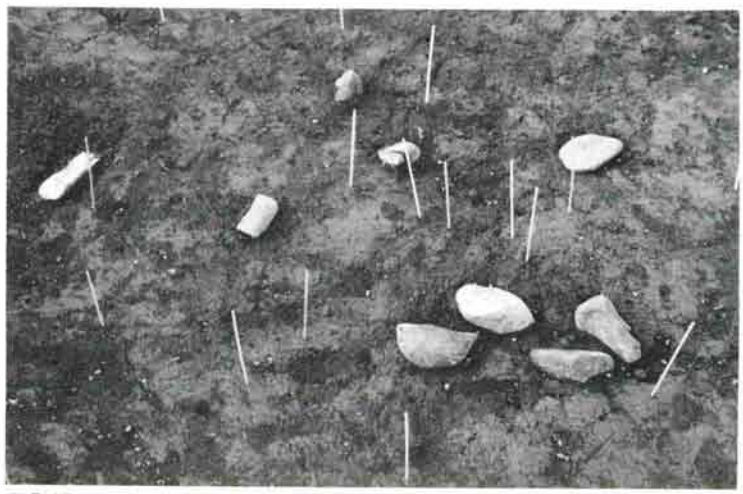
三芳町町東部遺跡群発掘調査報告書

発　行　昭和58年 3 月30日
編　集
発　行　三芳町教育委員会
印　刷　とらや事務株式会社

市街化の著しい町東部地区（新開遺跡付近）

柳瀬川より竹間沢の台地を眺む（本村北遺跡付近）

PL. 2.



新開遺跡 Fb 区発掘区と出土石器

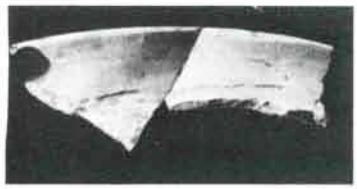
新開遺跡 Gd 区発掘風景

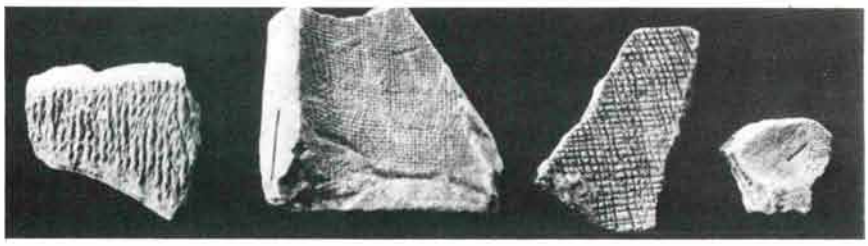
新開遺跡 Gd 区L.N.38土壙と土壙内須恵器坏出土状況

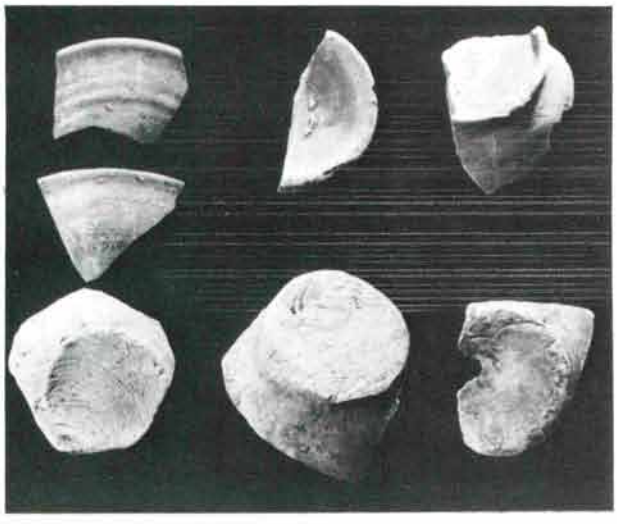
PL. 4.

新開遺跡 Gd 区検出のピット

PL. 5.

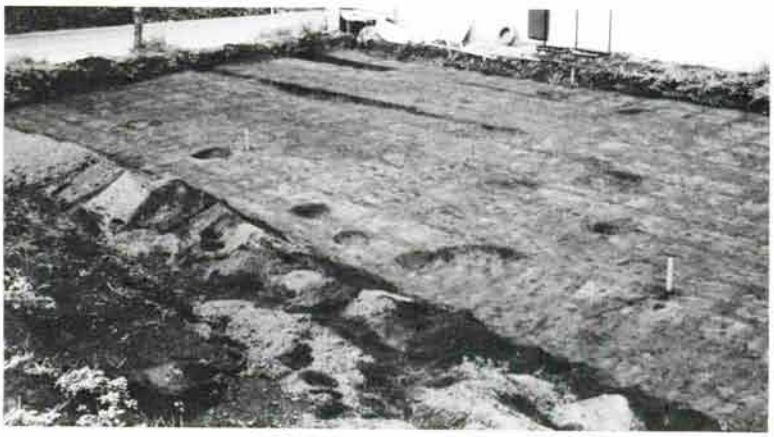




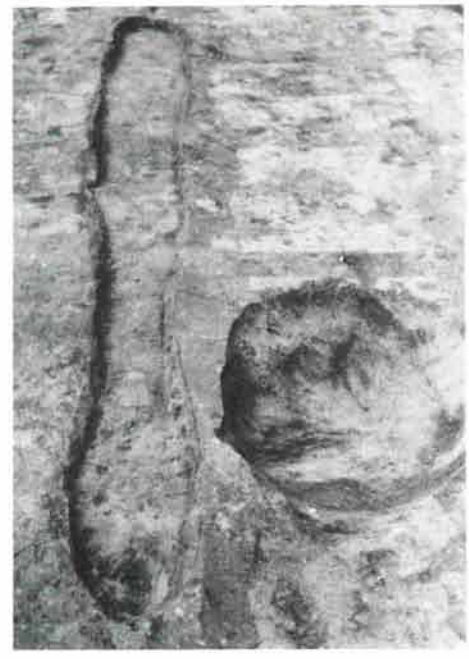


新開遺跡 Gd 区出土の遺物

PL. 6.

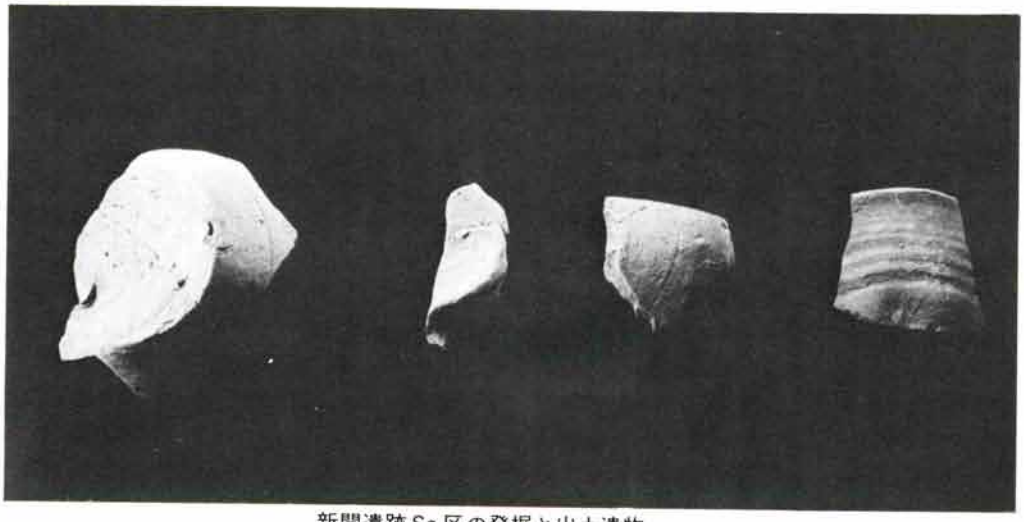


新開遺跡 Ra 区発掘区



新開遺跡 Ra 区検出の遺構と遺物

PL. 8.

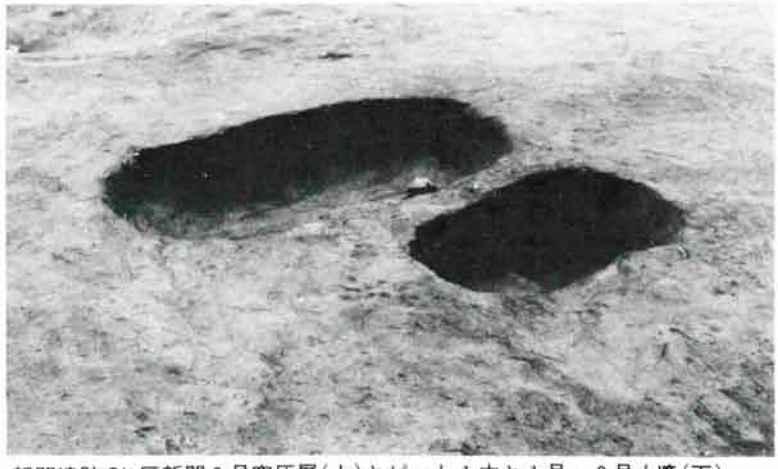


新開遺跡 Sa 区の発掘と出土遺物

新開遺跡 Sb 区新開 3 号窯

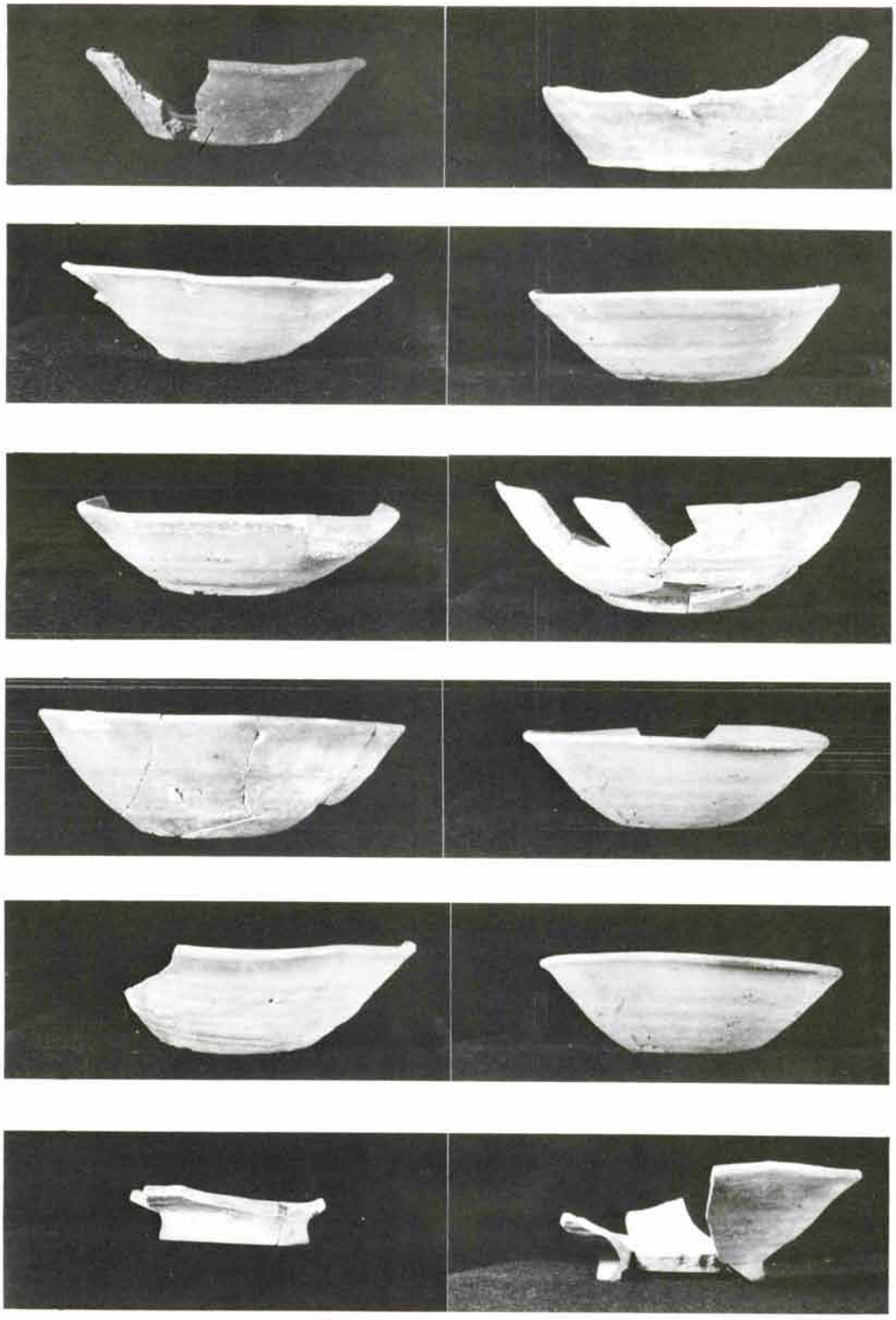
PL.10.

新開遺跡 Sb 区新開 3 号窯遺物出土状況

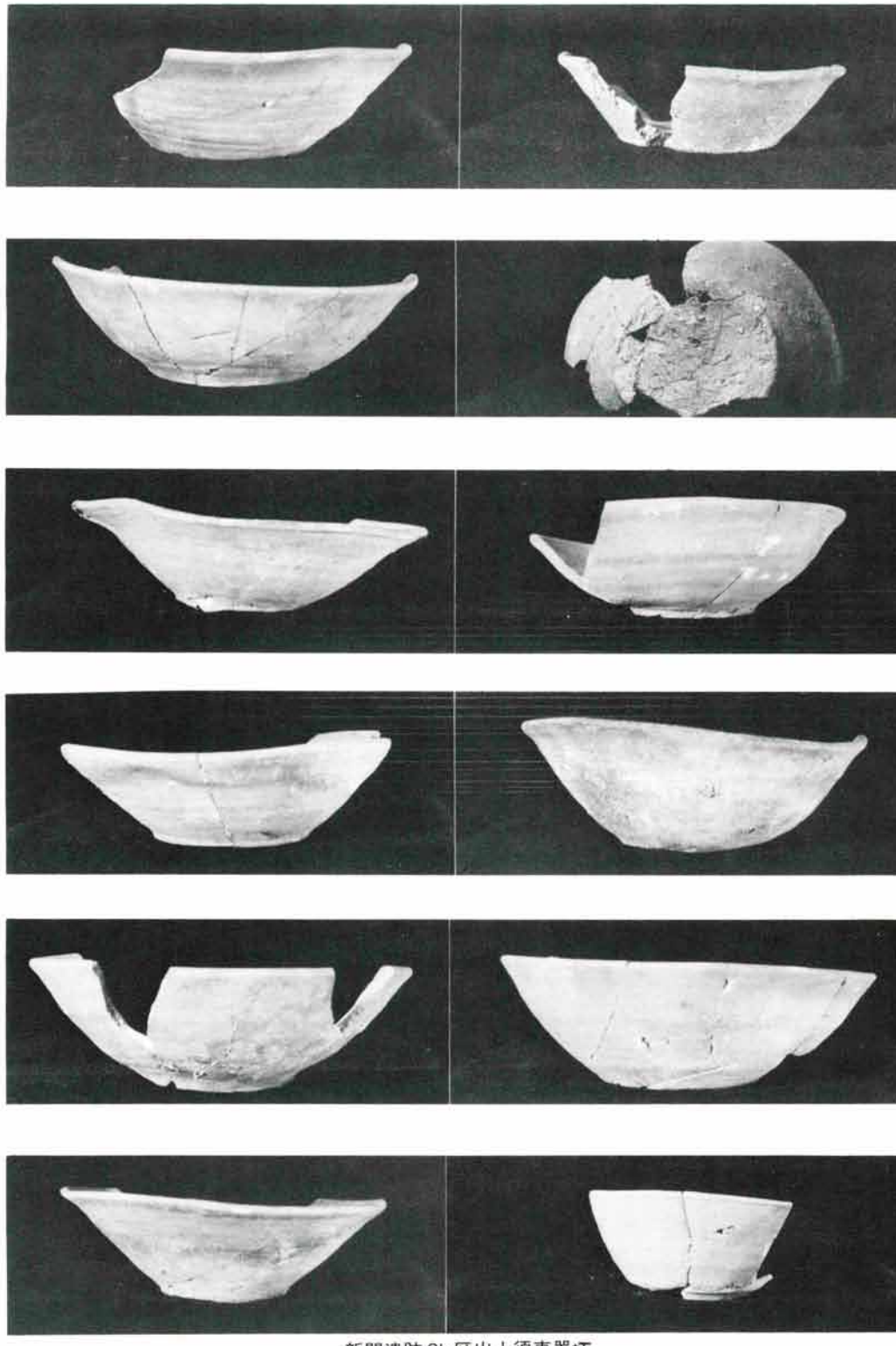


新開遺跡 Sb 区新開 3 号窯灰層(上)とピット 1 中と 1 号・2 号土壙(下)

PL.12.

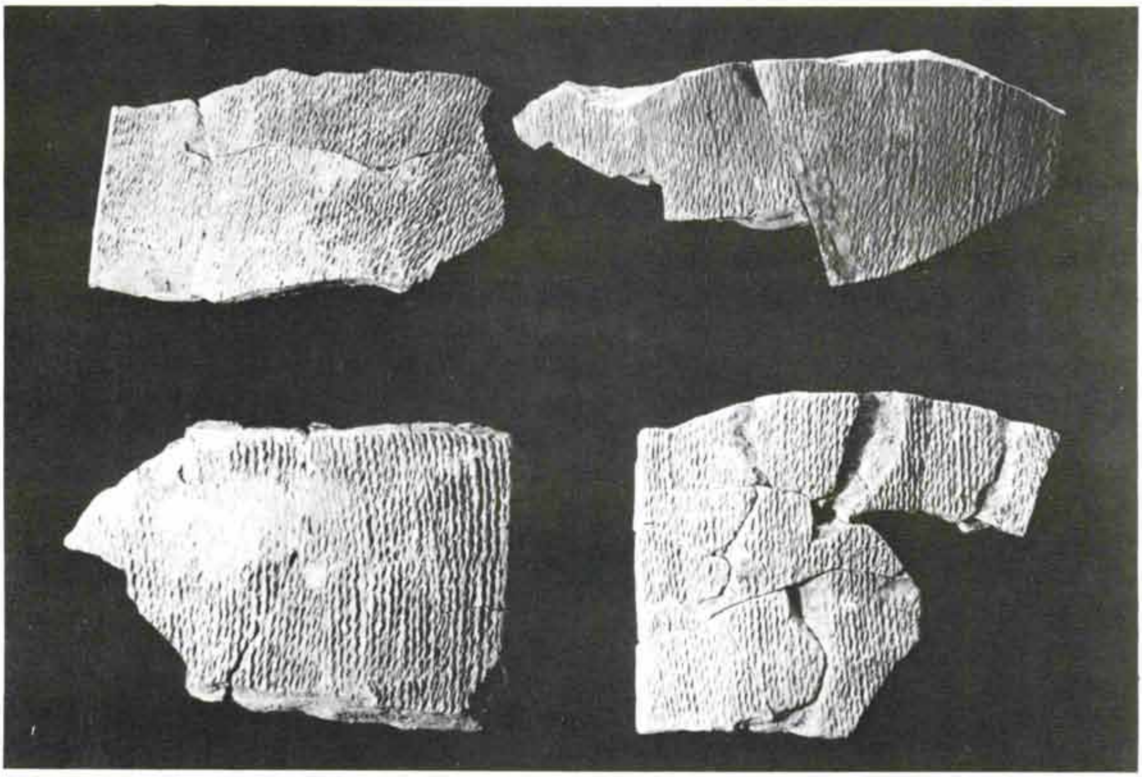


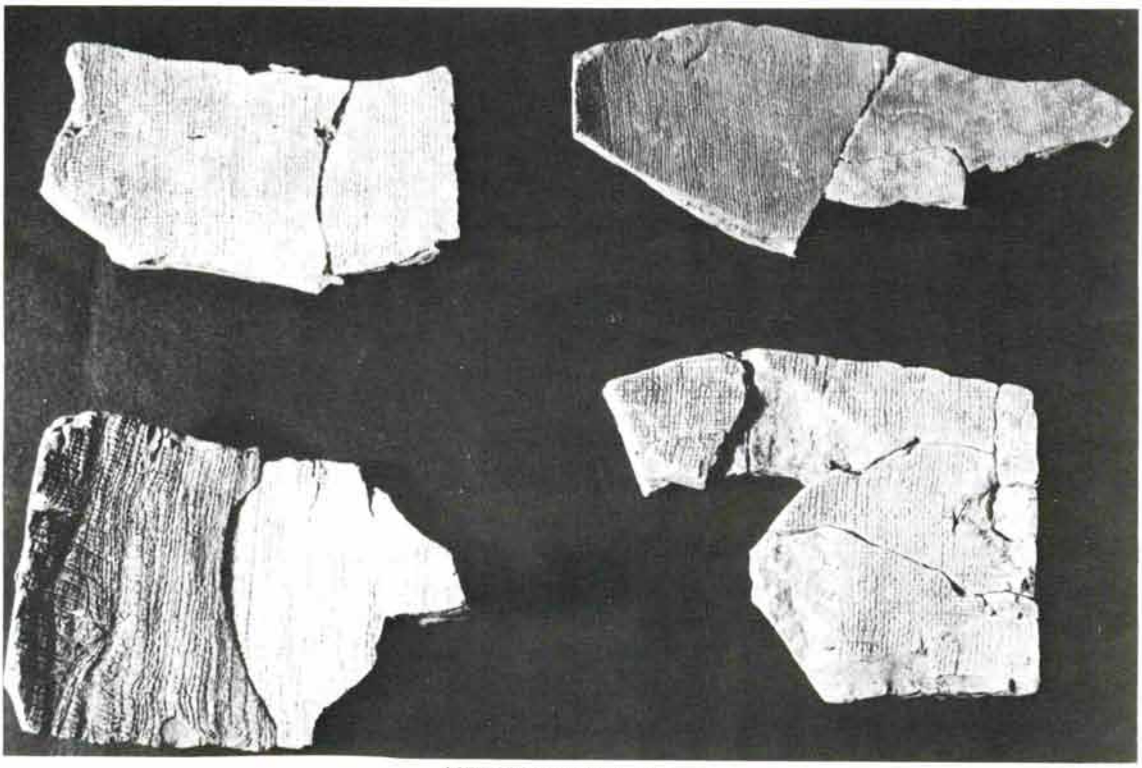
新開遺跡 Sb 区出土須恵器坏



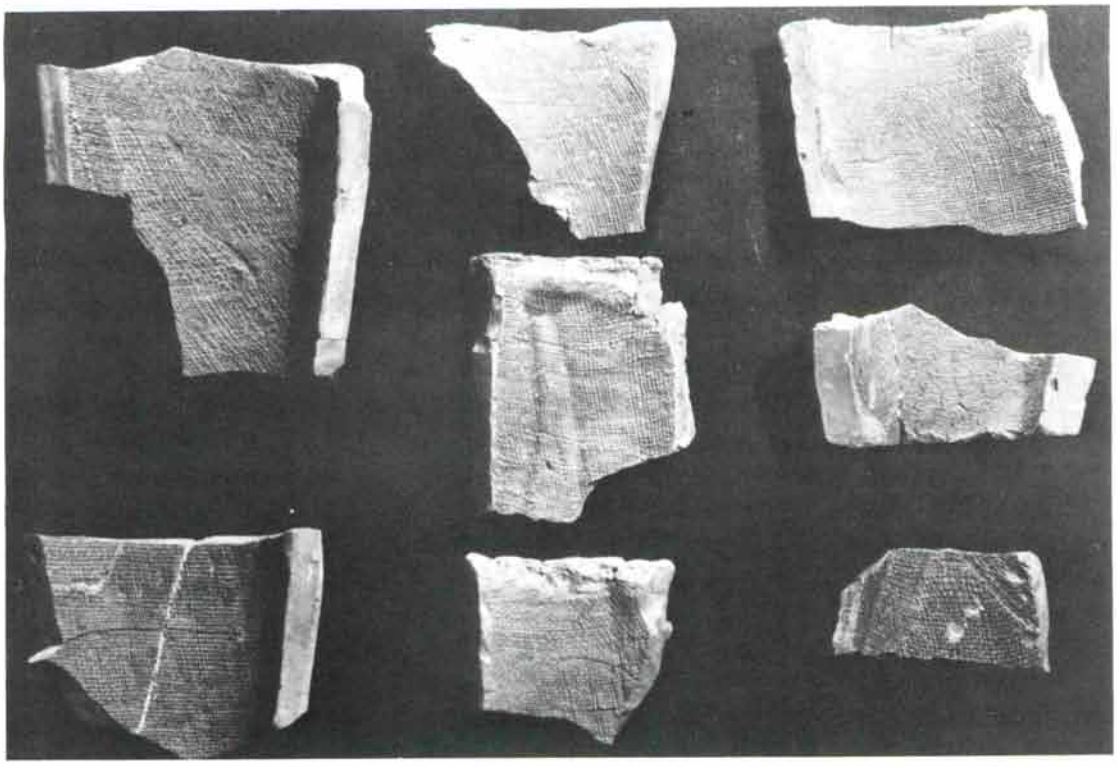
新開遺跡 Sb 区出土須恵器坏

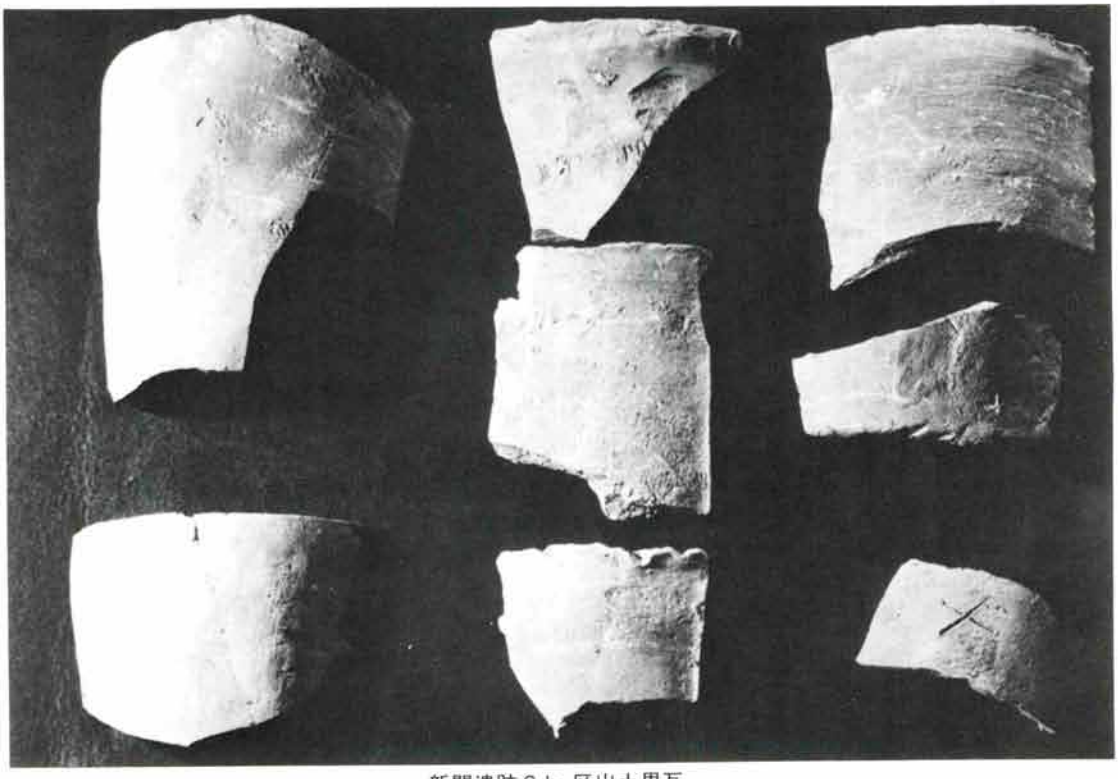
PL.14.





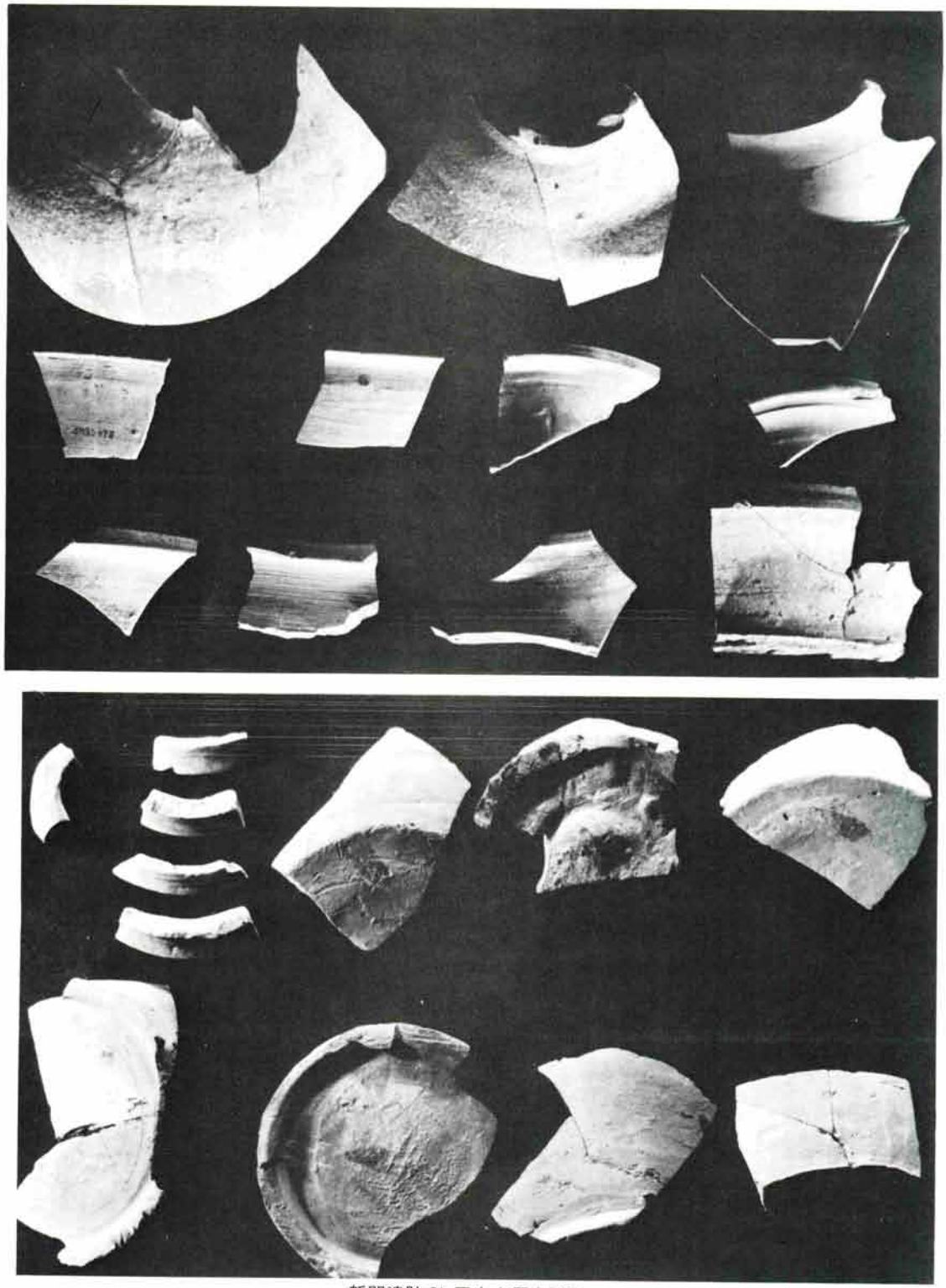
新開遺跡 Sb 区出土女瓦



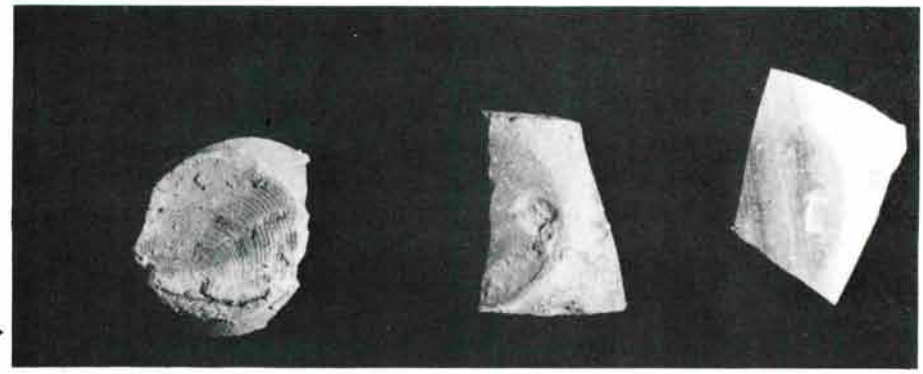


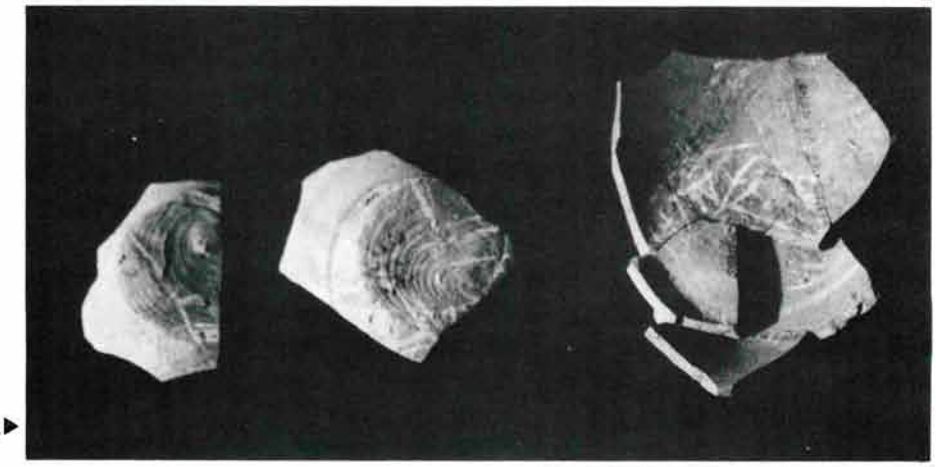
新開遺跡Ｓｂ 区出土男瓦

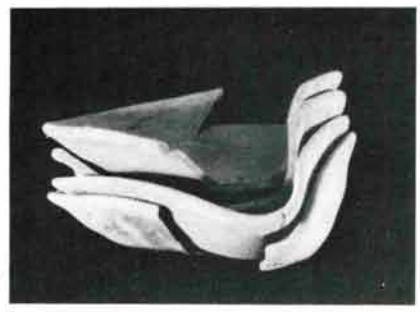
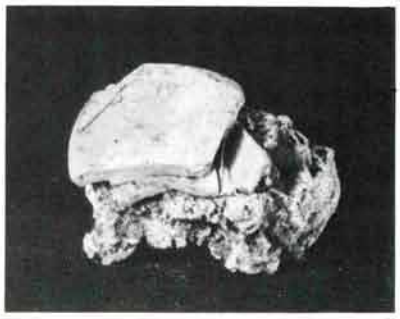
PL.16.

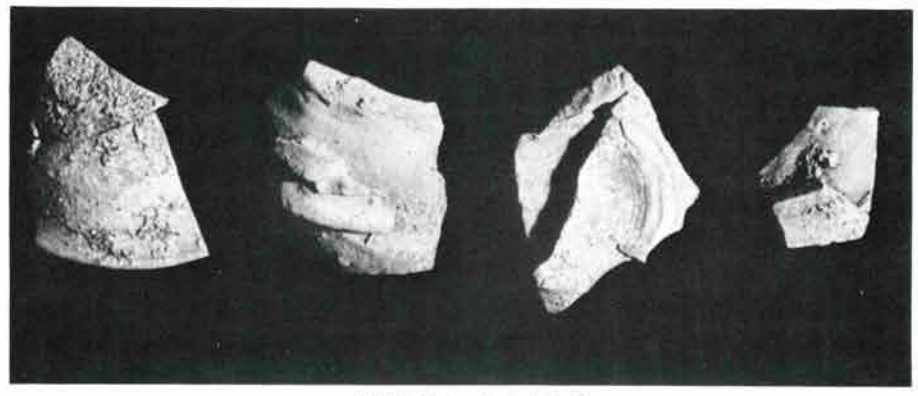


新開遺跡 Sb 区出土須恵器甕


焼台▶

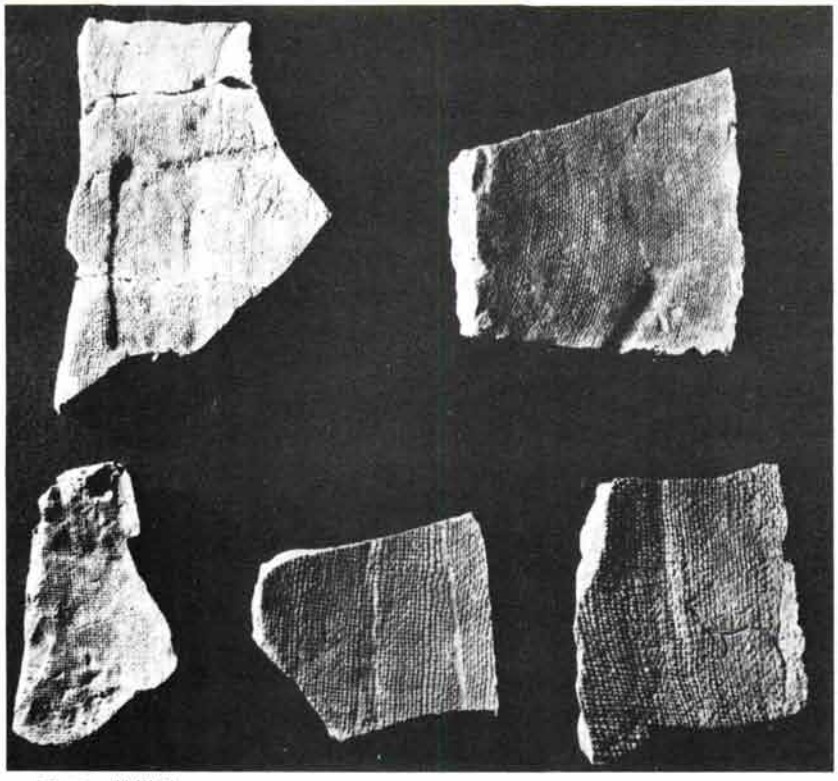

重ね焼▶



釉着▶

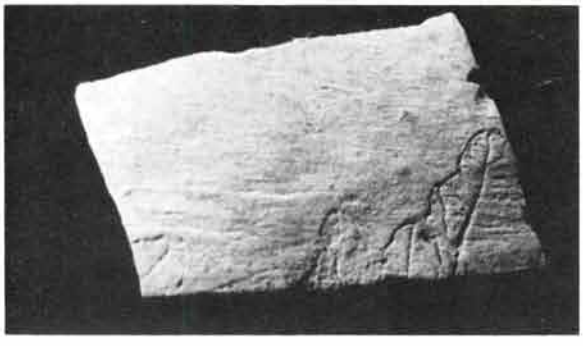


新開遺跡 Sb 区出土遺物

PL.18.

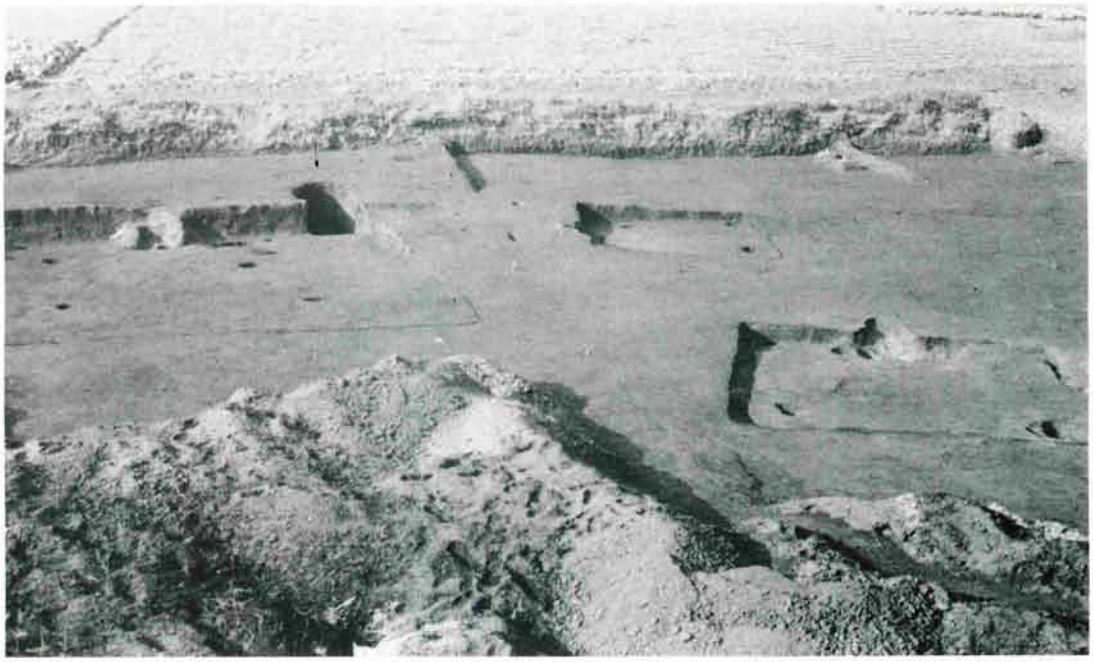


▲Sb区に特徴的な瓦



▲▶木葉痕をもつ甕

新開遺跡 Sb 区出土遺物



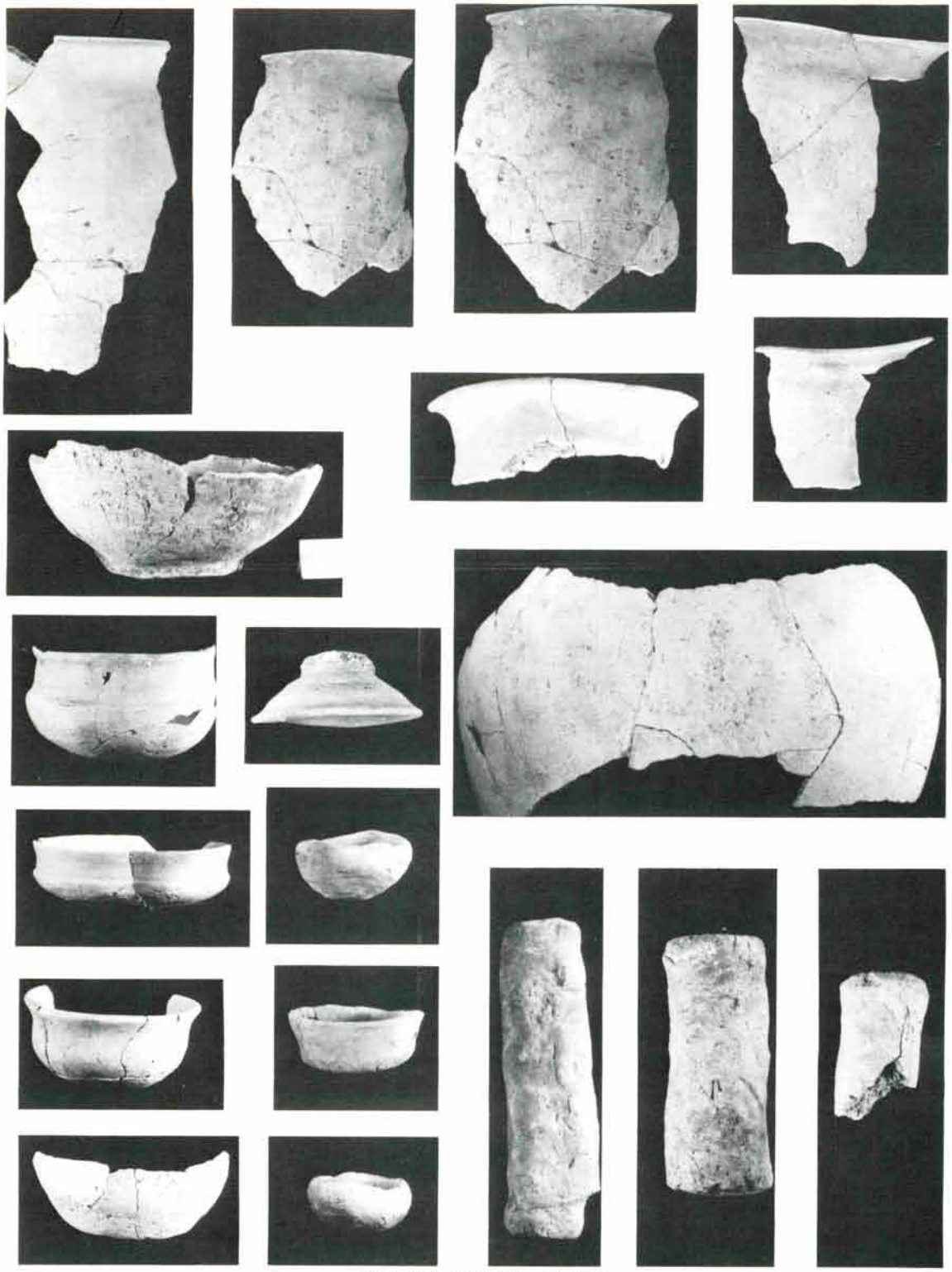
本村北遺跡全景と発掘風景

PL.20.

炭化材出土状況▶

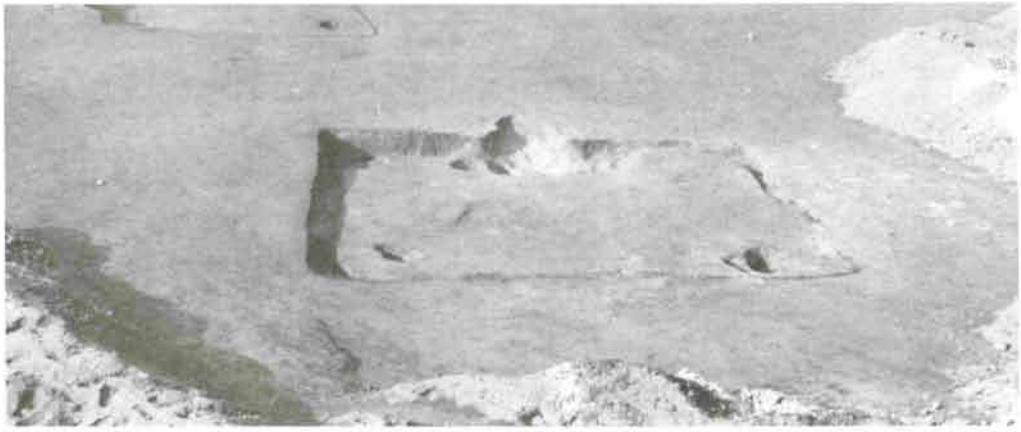
カマドのソデに支▶
柱が置かれていた。

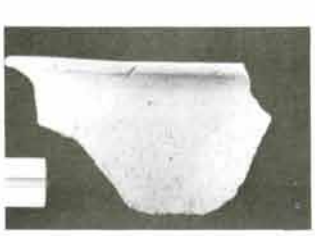
本村北遺跡 3 号住居跡

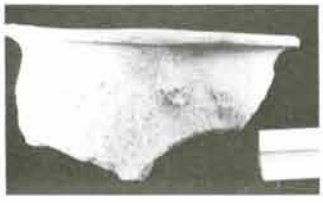


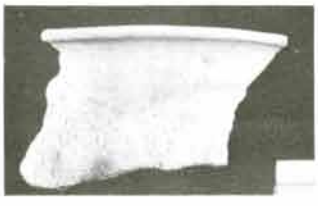
本村北遺跡 3 号住居跡出土遺物

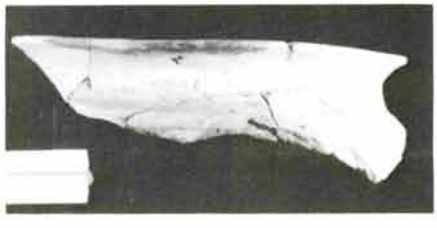
PL.22.



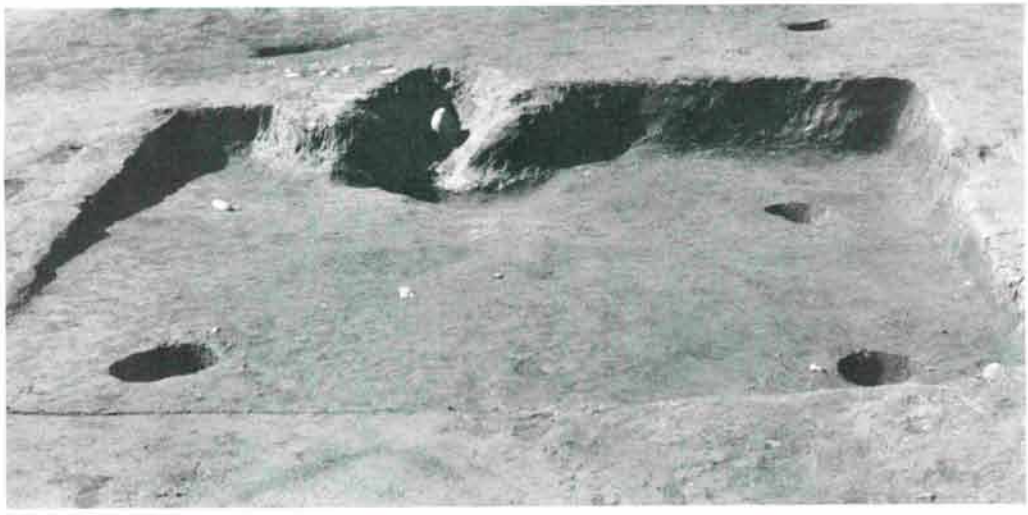


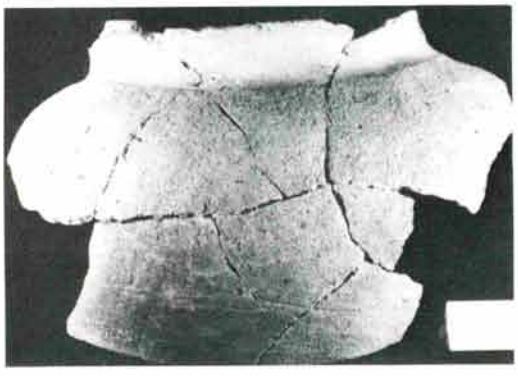


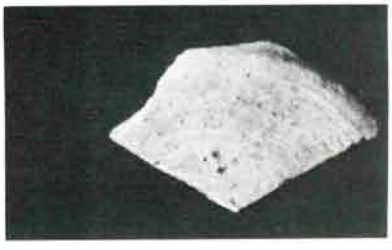


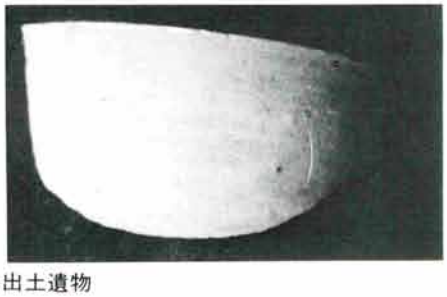


本村北遺跡１号住居跡と出土遺物



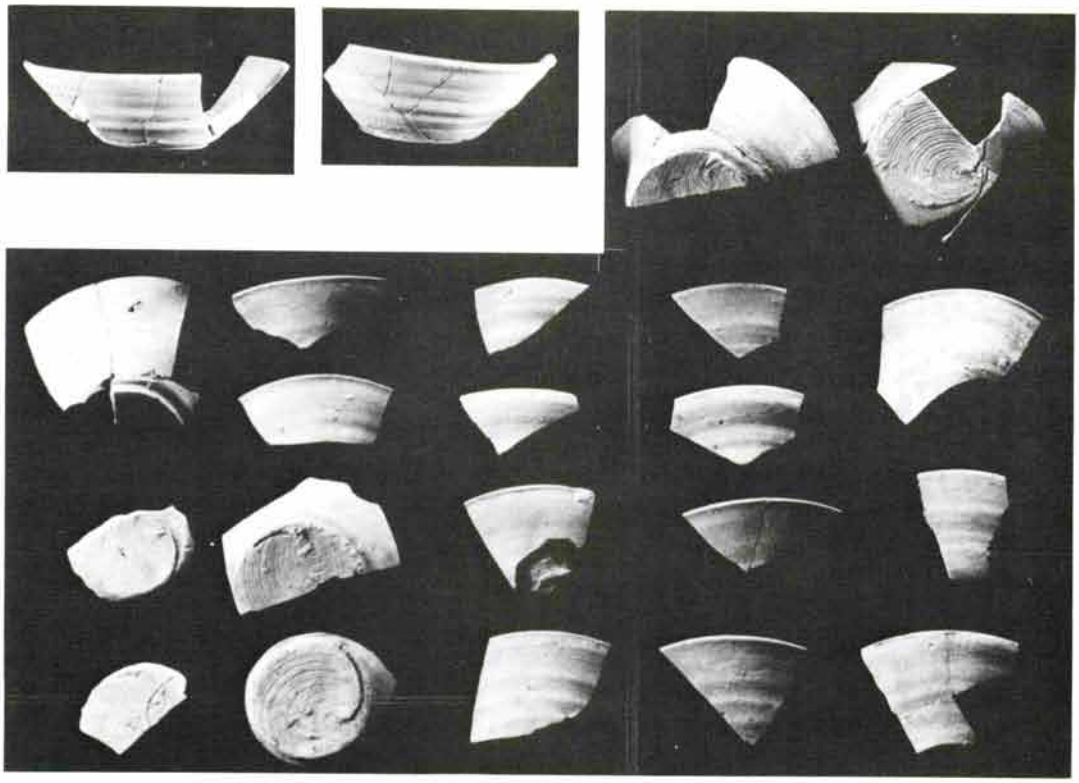






本村北遺跡２号住居跡と出土遺物

PL.24.



本村北遺跡土器焼成遺構出土遺物

本村北遺跡包含層縄文式土器出土状況とその復元図

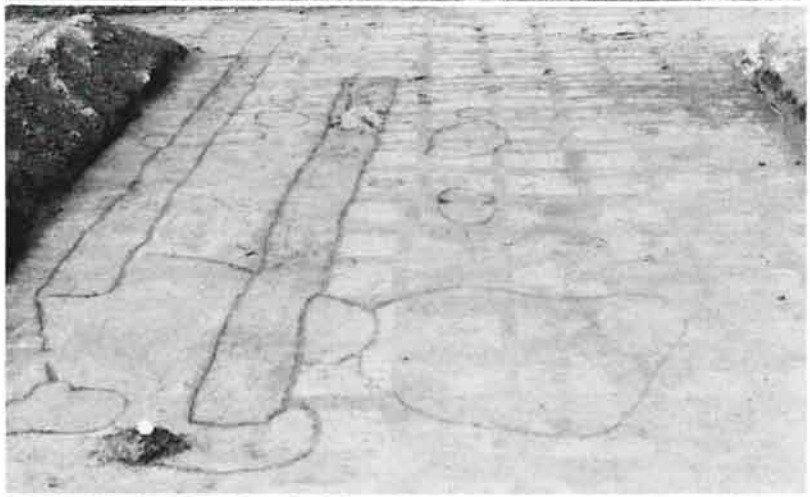
本村北遺跡縄文式土器

PL.26.

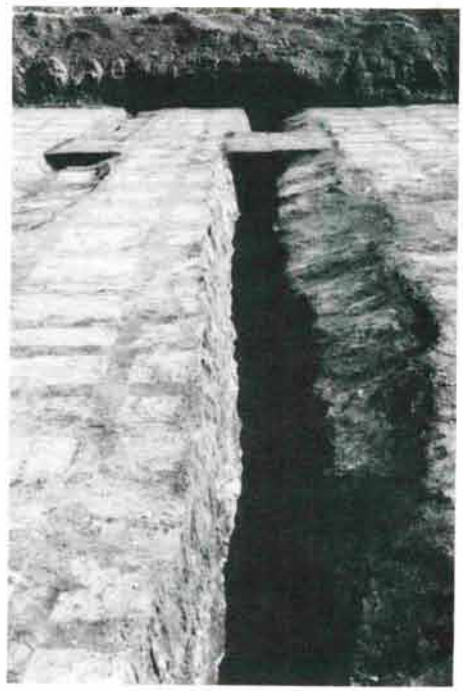
浅間後遺跡遠景とグリット

俣埜第２遺跡の発掘風景と出土遺物

PL.28.



俣埜遺跡C地点発掘調査



俣埜遺跡C地点溝状遺構と縄文時代土壙

PL.30.

俣埜遺跡Ｃ地点先土器時代の調査と出土石器